

平安京左京六条三坊五町跡

平安京左京六条三坊五町跡

2005 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京六条三坊五町跡

2005 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび中学校建設に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 17 年 12 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京六条三坊五町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区楊梅通新町東入上柳町 224 (旧尚徳中学校・楊梅幼稚園跡地)
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼
- 4 調査期間 2004年9月7日～2005年7月8日
- 5 調査面積 2,250 m²
- 6 調査担当者 丸川義広・卜田健司・能芝 勉・尾藤徳行・モンペティ恭代
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「島原」「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系(改正前)平面直角座標系VI(ただし、単位(m)を省略した)。調査地の改正前と改正後の数値は以下である。
- | | | |
|-----|----------------|---------------|
| 改正前 | X=-111,800.000 | Y=-21,900.000 |
| 改正後 | X=-111,453.345 | Y=-21,160.710 |
- 9 使用標高 T.P.:東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点(一級基準点)を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 図示したものは、図版・挿図ごとに番号を付し、図版は「○-○」、挿図は「図○-○」と表し、写真番号も同一とした。
写真のみを掲載したものは、図版・挿図写真ごとに番号を付し、図版は「○-○」、挿図写真は「写真○-○」と表した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 丸川義広・能芝 勉・尾藤徳行・卜田健司
- 18 執筆分担 丸川義広:第1章、第2章、第3章の1～7、第4章の1～3・5-(5)・(7)、第5章
尾藤徳行:第3章の8、第4章の5-(1)・6
卜田健司:第3章の8
能芝 勉:第4章の4・5-(2)～(6)
付章1:丸山真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)、北野信彦(くらしき作陽大学)、竜子正彦
付章2:丸山真史、松井 章(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)

付章3：北野信彦、竜子正彦

付章4：丸川義広

付章5：株式会社 古環境研究所

19 編集・調整

児玉光世・山口 眞・吉本健吾・モンペティ恭代

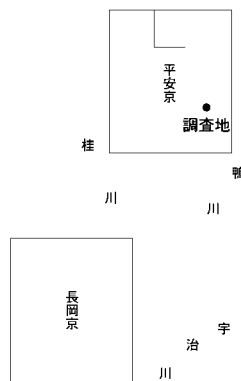
20 協力者

赤松和佳（大手前大学大学院）、石田志朗、伊藤淳史（京都大学埋蔵文化財センター）、宇野日出夫（京都市歴史資料館）、大岩英雄（尚徳自治連合会）、岡 佳子（大手前大学）、木立雅朗（立命館大学）、葛原秀雄（高島市教育委員会）、國下多美樹（財団法人向日市埋蔵文化財センター）、近藤 広（財団法人栗東市文化体育振興事業団）、佐藤浩司（北九州市芸術文科振興財団埋蔵文化財調査室）、白井忠雄（高島市民俗資料館）、嶋谷和彦（堺市埋蔵文化財センター）、鈴木裕子（株式会社四門）、千葉 豊（京都大学）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、西田宏子（根津美術館）、西山良平（京都大学）、橋本清一（京都府立山城郷土資料館）、長谷川真（兵庫陶芸美術館）、宮田伊津美（岩国徴古館）、吉水真彦（大津市埋蔵文化財調査センター）、渡辺晴香（大阪府教育委員会）

（五十音順、敬称略）

21 自然遺物の分析

株式会社 古環境研究所に依頼した。



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

第1章 調査経過	1
1. 調査経過	1
2. 報告書作成	3
第2章 調査地の位置と環境	4
1. 位置と環境	4
2. 周辺の調査	7
第3章 遺 構	12
1. 基本層序	12
2. 平安京前の遺構（第6面）	15
3. 平安時代の遺構（第5面）	15
4. 鎌倉・室町時代の遺構（第4面）	19
5. 桃山・江戸時代前期の遺構（第3面）	26
6. 江戸時代中期の遺構（第2面）	29
7. 江戸時代後期・幕末期の遺構（第1面）	35
8. 西1区～西4区の遺構	45
(1) 西1区の遺構	45
(2) 西2区の遺構	46
(3) 西3区の遺構	48
(4) 西4区の遺構	50
第4章 遺 物	51
1. 平安京前の土器類	52
2. 平安時代の土器類	54
3. 鎌倉・室町時代の土器類	58
4. 桃山・江戸時代の土器・陶磁器類	65
5. その他の遺物	80
(1) 瓦類	80
(2) 銭貨	82
(3) 金属製品	82
(4) 鑄造関係遺物	85
(5) 石製品	87
(6) 骨角製品・ガラス製品	92
(7) 土製品・その他	93

6. 西1区～西4区の遺物	94
(1) 西1区の遺物	94
(2) 西2区の遺物	95
(3) 西3区の遺物	96
(4) 西4区の遺物	96
第5章 まとめ	99
1. 遺構の変遷	99
(1) 平安京成立前の様相	99
(2) 平安京条坊と宅地割	101
(3) 室町時代の埋襲遺構	104
(4) 江戸時代の町家遺構	107
2. 井戸の配置について	112
(1) 平面配置	112
(2) 垂直位置	114
付章1 出土した軟体動物遺存体	118
付章2 出土した脊椎動物遺存体	126
付章3 出土したガラス製品の理化学的分析	138
付章4 動物遺存体が出土した遺構について	147
付章5 自然科学分析	152

図 版 目 次

巻頭図版1 遺跡 調査地遠景（東上空から、2005年4月18日撮影）
巻頭図版2 遺構 空中写真（第4面 左が北、2005年4月18日撮影）
巻頭図版3 遺構
1 第4面糞群1（北から）
2 第1面町家の遺構（北から）
巻頭図版4 遺構
1 楊梅小路路面（北壁2地点、南から）
2 西2区 町尻小路と楊梅小路の交差点北東部（北から）
図版1 遺構 調査区配置図（1：600）
図版2 遺構 北壁・東壁断面図（概略図は1：200、土層図は1：40）
図版3 遺構 南壁・西壁断面図（概略図は1：200、土層図は1：40）
図版4 遺構 第6面西半実測図（1：200）
図版5 遺構 第6面東半実測図（1：200）
図版6 遺構 第5面西半実測図（1：200）

- 図版 7 遺構 第 5 面東半実測図 (1 : 200)
- 図版 8 遺構 第 4 面西半実測図 (1 : 200)
- 図版 9 遺構 第 4 面東半実測図 (1 : 200)
- 図版 10 遺構 第 3 面西半実測図 (1 : 200)
- 図版 11 遺構 第 3 面東半実測図 (1 : 200)
- 図版 12 遺構 第 2 面西半実測図 (1 : 200)
- 図版 13 遺構 第 2 面東半実測図 (1 : 200)
- 図版 14 遺構 第 1 面西半実測図 (1 : 200)
- 図版 15 遺構 第 1 面東半実測図 (1 : 200)
- 図版 16 遺構 井戸 1982・3325・2745・2617・1385 実測図 (1 : 50)
- 図版 17 遺構 井戸 2075・3221・2542・2398・1306・2751・302・287・132 実測図 (1 : 50)
- 図版 18 遺構 礎石列 1002A・B・556・554B・554A、石垣 555 実測図 (1 : 50)
- 図版 19 遺構 石垣 1214、礎石列 3649、漆喰列 3631、石垣 3647、礎石列 3634、石垣 3630、
石垣・礎石列 3646B、礎石列 3632 実測図 (1 : 50)
- 図版 20 遺構 甕群 1 平面図 (1 : 100)
- 図版 21 遺構 門 3650、建物 3651、集石 1544 実測図 (1 : 50)
- 図版 22 遺構 土蔵 190・448・170、穴蔵 365 (1 : 80)、土蔵 1414、石室 1500 実測図 (1 : 50)
- 図版 23 遺構 集石 931・932・1735・924・1240・1289・1568・1316・1449、池 1020・
275・651 実測図 (1 : 50)
- 図版 24 遺構 埋甕 6・95・115・149・175・749・855・933 (1 : 50)、胞衣壺 320・
495・608・791、埋納 1413・2729・2813 実測図 (1 : 20)
- 図版 25 遺構 流路 3514、土壇 1845・2286・2950・3198 (1 : 50)、土壇 1260、瓦組 760
(1 : 30)、溝 1209・1208・505 実測図 (1 : 50)
- 図版 26 遺構 土壇 817・1159・1232・1304・1313・1970・1105 断面図 (1 : 50)
- 図版 27 遺構 西 1 区～西 4 区北壁断面図 (1 : 80)
- 図版 28 遺構 西 1 区～西 4 区西壁断面図 (1 : 80)
- 図版 29 遺構 西 1 区平面図 (1 : 100)
- 図版 30 遺構 西 2 区平面図 1 (1 : 100)
- 図版 31 遺構 西 2 区平面図 2 (1 : 100)
- 図版 32 遺構 西 3 区平面図 (1 : 100)
- 図版 33 遺構 西 4 区平面図 (1 : 100)
- 図版 34 遺物 流路 3514 出土遺物実測図 (1 : 4)

- 図版 35 遺物 その他遺構、土壙 3300 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 36 遺物 溝 3250、土壙 2950 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 37 遺物 土壙 2801・2802・3198 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 38 遺物 土壙 2444、井戸 2345、埋納 2813 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 39 遺物 土壙 2735、溝 2753、土壙 2338・2672 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 40 遺物 土壙 2672・2312・1315・1754、井戸 2768、埋納 1864・1697 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 41 遺物 陶器甕実測図（1：8）
- 図版 42 遺物 陶器甕口縁部実測図（1：4）
- 図版 43 遺物 楊梅小路路面形成層出土遺物実測図（1：4）
- 図版 44 遺物 土壙 1666 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 45 遺物 土壙 1666・1269 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 46 遺物 土壙 1027 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 47 遺物 土壙 1477 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 48 遺物 土壙 1477・1469、石室 1500 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 49 遺物 土壙 1122 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 50 遺物 土壙 1122 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 51 遺物 土壙 1122 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 52 遺物 土壙 1234 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 53 遺物 土壙 1234 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 54 遺物 土壙 820 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 55 遺物 土壙 820 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 56 遺物 土壙 820 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 57 遺物 土壙 820 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 58 遺物 土壙 489・771 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 59 遺物 土壙 403 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 60 遺物 土壙 403 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 61 遺物 土壙 403 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 62 遺物 土壙 403 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 63 遺物 土壙 494 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 64 遺物 土壙 494 出土遺物実測図（1：4）
- 図版 65 遺物 埋甕実測図（1：10）
- 図版 66 遺物 その他遺構出土遺物実測図（1：4）
- 図版 67 遺物 その他遺構出土遺物実測図（1：4）
- 図版 68 遺物 その他遺構出土遺物実測図（1：4）

- 図版 69 遺物 その他遺構出土遺物実測図（1：4）
- 図版 70 遺物 平安時代から室町時代の軒丸瓦拓影・実測図（1：4）
- 図版 71 遺物 平安時代から室町時代の軒平瓦拓影・実測図（1：4）
- 図版 72 遺物 江戸時代の軒丸瓦拓影・実測図（1：4）
- 図版 73 遺物 江戸時代の軒平瓦・軒棧瓦拓影・実測図（1：4）
- 図版 74 遺物 道具瓦拓影・実測図（1：4、74- 9の拓影・実測図は1：5、74- 9の銘の拓影は1：3）
- 図版 75 遺物 井戸椀瓦拓影・実測図（1：4）
- 図版 76 遺物 刻印瓦拓影（1：2）
- 図版 77 遺物 銭貨拓影（1：1）
- 図版 78 遺物 銭貨拓影（1：1）
- 図版 79 遺物 金属製品実測図（1：4）
- 図版 80 遺物 金属製品実測図（1：3）
- 図版 81 遺物 鑄造関係遺物実測図（1：4）
- 図版 82 遺物 鑄造関係遺物実測図（1：4）
- 図版 83 遺物 鑄造関係遺物実測図（1：4）
- 図版 84 遺物 鑄造関係遺物実測図（1：4）
- 図版 85 遺物 石製品実測図（1：4）
- 図版 86 遺物 石製品実測図（1：4）
- 図版 87 遺物 石製品実測図（1：8）
- 図版 88 遺物 骨角製品・ガラス製品実測図（1：3、88-18～20のみ1：1.5）
- 図版 89 遺物 西1区～西4区出土遺物拓影・実測図（1：4）
- 図版 90 遺構 調査区周辺の空中写真（第2面、右が北、2005年1月21日撮影）
- 図版 91 遺構
- 1 調査前全景（北西から）
 - 2 重機掘削（東から）
 - 3 調査風景（南から）
 - 4 調査風景（西から）
 - 5 現地説明会（南東から）
 - 6 小学生の見学（南東から）
 - 7 牛骨の取り上げ（南から）
 - 8 西3区調査風景（東から）
- 図版 92 遺構
- 1 流路3514の弥生土器出土状態（北西から）
 - 2 楊梅小路上での牛・馬骨の出土状態（落込み3313、北西から）
- 図版 93 遺構 第5面全景（西から）
- 図版 94 遺構
- 1 楊梅小路路面の轍（北西から）

- 2 楊梅小路の南側溝（溝 3250、西から）
- 3 土壙 2950 の土器出土状態（東から）
- 図版 95 遺構
 - 1 井戸 3325（北から）
 - 2 井戸 1982（西から）
 - 3 井戸 2745（北から）
 - 4 井戸 3600（北から）
- 図版 96 遺構 第4面全景（西から）
- 図版 97 遺構
 - 1 甕群 2（東から）
 - 2 土壙 2662（北から）
 - 3 土壙 2639（北から）
- 図版 98 遺構
 - 1 井戸 1385（西から）
 - 2 井戸 2721（西から）
 - 3 井戸 2768（北から）
 - 4 井戸 1751（北東から）
- 図版 99 遺構
 - 1 第3面全景（西から）
 - 2 門 3650（北から）
- 図版 100 遺構
 - 1 土蔵 1414 と集石 1449（西から）
 - 2 集石 1544 と建物 3651（北から）
 - 3 石室 1500（東から）
- 図版 101 遺構 第2面全景（西から）
- 図版 102 遺構
 - 1 池 651（北西から）
 - 2 池 275（西から）
 - 3 土壙 1260（北西から）
- 図版 103 遺構
 - 1 第1面全景（北から）
 - 2 町家の遺構（北西から）
- 図版 104 遺構
 - 1 路地 3654（北から）
 - 2 石垣 555（東から）
 - 3 礎石列 3634（左）と溝 505（中央、北から）
 - 4 炉 605（左下）と炉 316（中央、北西から）
- 図版 105 遺構
 - 1 井戸 1644 鹿骨出土状態（北から）
 - 2 井戸 2542 断割状況（北から）
 - 3 井戸 383 断割状況（北東から）
 - 4 井戸 302（南西から）
 - 5 井戸 378（西から）
 - 6 井戸 287（東から）

- 7 井戸 73 (北東から)
- 8 井戸 347 漆喰内面の軒丸瓦 (北東から)
- 図版 106 遺構
 - 1 瓦組 166 (東から)
 - 2 瓦組 760 (西から)
 - 3 胞衣壺 495 (南から)
 - 4 胞衣壺 791 (北から)
 - 5 埋甕 6 (南から)
 - 6 埋甕 95 (南から)
 - 7 埋甕 115 (北から)
 - 8 埋甕 149 (東から)
- 図版 107 遺構
 - 1 西 1 区第 2 面全景 (北から)
 - 2 西 1 区第 1 面全景 (北から)
- 図版 108 遺構
 - 1 西 2 区第 4 面全景 (北から)
 - 2 西 2 区第 2 面全景 (東から)
- 図版 109 遺構
 - 1 西 2 区井戸 82 (南東から)
 - 2 西 2 区溝 119 (東から)
 - 3 西 2 区西壁断面 (東から)
- 図版 110 遺構
 - 1 西 3 区第 2 面全景 (東から)
 - 2 西 3 区第 1 面全景 (東から)
- 図版 111 遺構
 - 1 西 4 区第 3 面全景 (東から)
 - 2 西 4 区第 1 面全景 (東から)
- 図版 112 遺物 流路 3514 出土遺物
- 図版 113 遺物 土壙 3300、溝 3250 出土遺物
- 図版 114 遺物 溝 3250、土壙 2950 出土遺物
- 図版 115 遺物 土壙 2801・2802・3198 出土遺物
- 図版 116 遺物 土壙 2444、井戸 2345、埋納 2813 出土遺物
- 図版 117 遺物 土壙 2735、溝 2753、土壙 2338・2672 出土遺物
- 図版 118 遺物 土壙 2672・2312・1315、井戸 2768、埋納 1864・1697 出土遺物
- 図版 119 遺物 陶器甕
- 図版 120 遺物 陶器甕口縁部
- 図版 121 遺物 陶器甕口縁部
- 図版 122 遺物 埋甕 2369、土壙 2579・2057、埋甕 2851、土壙 2795、埋甕 340・749・855A 出土陶器甕
- 図版 123 遺物 土壙 1027 出土遺物
- 図版 124 遺物 土壙 1477 出土遺物

- 図版 125 遺物 土壙 1122 出土遺物
- 図版 126 遺物 土壙 820 出土遺物
- 図版 127 遺物 土壙 820 出土遺物
- 図版 128 遺物 土壙 403・494 出土遺物
- 図版 129 遺物 その他遺構出土遺物
- 図版 130 遺物 その他遺構出土遺物
- 図版 131 遺物 平安時代から室町時代の軒丸瓦
- 図版 132 遺物 平安時代から室町時代の軒丸瓦・軒平瓦
- 図版 133 遺物 平安時代から室町時代の軒平瓦
- 図版 134 遺物 江戸時代の軒丸瓦
- 図版 135 遺物 江戸時代の軒平瓦・軒棧瓦
- 図版 136 遺物 道具瓦・刻印瓦
- 図版 137 遺物 井戸粹瓦
- 図版 138 遺物 刻印瓦、壁土
- 図版 139 遺物 銭貨
- 図版 140 遺物 銭貨
- 図版 141 遺物 金属製品
- 図版 142 遺物 金属製品
- 図版 143 遺物 金属製品
- 図版 144 遺物 金属製品
- 図版 145 遺物 鑄造関係遺物
- 図版 146 遺物 鑄造関係遺物
- 図版 147 遺物 鑄造関係遺物
- 図版 148 遺物 鑄造関係遺物
- 図版 149 遺物 石製品
- 図版 150 遺物 垢擦石
- 図版 151 遺物 温石
- 図版 152 遺物 硯
- 図版 153 遺物 硯・砥石転用品の銘文・文様
- 図版 154 遺物 砥石
- 図版 155 遺物 石製品、骨角製品、ガラス製品
- 図版 156 遺物 石製品
- 図版 157 遺物 骨角製品、ガラス製品
- 図版 158 遺物 骨角製品
- 図版 159 遺物 硯、土製品、石製品

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	左京六条三坊・七条三坊復元図 (1 : 4,000)	4
図 3	周辺調査位置図 (1 : 4,000)	7
図 4	楊梅小路断面図 (1 : 50)	16
図 5	溝 3250 断面図 (1 : 40)	18
図 6	溝 2888 断面図 (1 : 30)	18
図 7	落込 3313 牛・馬骨の出土状態 (1 : 50)	19
図 8	甕群 1 断面図 (1 : 100)	20
図 9	甕群 1 埋甕の出土状態 (1 : 30)	21
図 10	甕群 2 実測図 (1 : 50)	23
図 11	甕群 2 埋甕・甕の出土状態 (1 : 30)	24
図 12	井戸 1644 鹿骨出土状態 (1 : 20)	28
図 13	土蔵基礎断面図 (1 : 40)	32
図 14	土壇 1122 断面図 (1 : 50)	35
図 15	礎石建物 3657 実測図 (1 : 100)	38
図 16	炉 295 実測図 (1 : 30)	43
図 17	炉 316・606・605 実測図 (1 : 30)	43
図 18	竈 725・735 実測図 (1 : 50)	43
図 19	西 1 区柵 73 A・B 実測図 (1 : 50)	45
図 20	西 2 区集石 91 実測図 (1 : 50)	47
図 21	西 2 区柱穴 89・129 実測図 (1 : 50)	48
図 22	西 2 区井戸 82 実測図 (1 : 50)	48
図 23	流路 3514 出土遺物実測図 (1 : 4)	53
図 24	陶器甕拓影・実測図 (1 : 4)	64
図 25	土壇 1027 出土遺物の産地組成	66
図 26	土壇 1477 出土遺物の産地組成	67
図 27	土壇 1122 出土遺物の産地組成	69
図 28	土壇 820 出土遺物の産地組成	71
図 29	土壇 650 出土遺物実測図 (1 : 4)	72
図 30	内窯の類例	73

図 31	土壌 403 出土遺物の産地組成	74
図 32	土壌 494 出土遺物の産地組成	76
図 33	陶器ニ粘土ヲ塗リテ小吹所ノ鎔壺ヲ造ル図	86
図 34	石製品実測図 (1 は 1 : 2、2・3 は 1 : 4)	87
図 35	硯の銘文・文様拓影 (1 : 2)	89
図 36	石製品実測図 (1 : 3)	90
図 37	硯実測図 (1 : 3)	94
図 38	土製品実測図 (1 : 3)	94
図 39	西 2 区出土石製品実測図 (1 : 4)	95
図 40	調査地周辺の地形環境 (1 : 4,000)	100
図 41	遺構の変遷 (1 : 750)	102
図 42	埋葬の出土地点と店屋の位置 (1 : 10,000)	105
図 43	鑄造遺構配置図 (1 : 50)	111
図 44	井戸の配置図 (1 : 500)	113
図 45	井戸断面の比較 (1 : 100)	114
図 46	シジミ類の計測分布 (mm)	119
図 47	ハマグリ類の計測分布 (mm)	119
図 48	貝類組成 (NISP)	120
図 49	貝類組成 (MNI)	120
図 50	「包丁里山海見立角力」	122
図 51	ウシ・ウマ体高分布 (cm)	134
図 52	ニホンジカの出土部位	134
図 53	ニホンジカの出土状況	134
図 54	ガラス製品の定性分析 - 1	144
図 55	ガラス製品の定性分析 - 2	145
図 56	ガラス製品の定性分析 - 3	146
図 57	動物遺存体出土遺構配置図 (1 : 300)	151
図 58	植物珪酸体ダイアグラム	154
図 59	花粉ダイアグラム	158
図 60	主要珪藻ダイアグラム	163

写真目次

写真1	試掘調査風景（左は調査前の状態、南西から、右は掘削風景、南東から）	2
写真2	土壙 1712 甕の出土状態（西から）	22
写真3	埋納 1697（左は南東から、右は取り上げ後）	26
写真4	町屋の境界施設	31
写真5	路面 1160（西から）	32
写真6	路地 3654 漆喰面の叩き痕跡（東から）	36
写真7	炭化材の出土状態（東から）	39
写真8	穴蔵 308 の階段（南西から）	39
写真9	室町時代の砥石	91
写真10	植物珪酸体	155
写真11	花粉・孢子	159
写真12	珪藻	164

表目次

表1	周辺調査地点一覧表	8
表2	遺構概要表	13
表3	遺物概要表	51
表4	出土銭貨一覧表	83
表5	種名表	119
表6	遺構の分類	120
表7	出土貝類集計表	124
表8	種名表	133
表9	ウシ・ウマ集計表	134
表10	ウシ計測値（mm）	134
表11	ウマ計測値（mm）	134

表 12	ウマ年齢査定 (mm)	134
表 13	ニホンジカ計測値 (mm)	134
表 14	井戸 1644 出土ニホンジカ集計表	134
表 15	魚類集計表	135
表 16	鳥類集計表	137
表 17	哺乳類集計表	137
表 18	ガラス分析結果表 (ワインボトル)	141
表 19	ガラス分析結果表 (一般ガラス)	142
表 20	動物遺存体出土遺構一覧表	150
表 21	植物珪酸体分析結果	154
表 22	花粉分析結果	157
表 23	珪藻分析結果	162

観 察 表 目 次

観察表 1	井戸一覧表	166
観察表 2	埋甕一覧表	172
観察表 3	胞衣壺一覧表	174
観察表 4	陶器甕口縁部一覧表	175
観察表 5	楊梅小路路面形成層出土遺物一覧表	175
観察表 6	土壙 1666 出土遺物一覧表	176
観察表 7	土壙 1269 出土遺物一覧表	177
観察表 8	土壙 1027 出土遺物一覧表	177
観察表 9	土壙 1477 出土遺物一覧表	178
観察表 10	土壙 1469 出土遺物一覧表	179
観察表 11	石室 1500 出土遺物一覧表	180
観察表 12	土壙 1122 出土遺物一覧表	180
観察表 13	土壙 1234 出土遺物一覧表	182
観察表 14	土壙 820 出土遺物一覧表	183
観察表 15	土壙 489 出土遺物一覧表	185
観察表 16	土壙 771 出土遺物一覧表	185
観察表 17	土壙 403 出土遺物一覧表	185
観察表 18	土壙 494 出土遺物一覧表	186
観察表 19	陶器甕一覧表	187

観察表 20	その他遺構出土桃山・江戸時代前期の遺物一覧表	188
観察表 21	その他遺構出土江戸時代中・後期の遺物一覧表	188
観察表 22	平安時代から室町時代の軒丸瓦一覧表	190
観察表 23	平安時代から室町時代の軒平瓦一覧表	192
観察表 24	江戸時代の軒丸瓦一覧表	194
観察表 25	江戸時代の軒平瓦・軒棧瓦一覧表	195
観察表 26	江戸時代の道具瓦一覧表	196
観察表 27	江戸時代の井戸椀瓦一覧表	196
観察表 28	江戸時代の刻印瓦一覧表	197
観察表 29	銭貨一覧表	198
観察表 30	金属製品一覧表	199
観察表 31	鑄造関係遺物一覧表	200
観察表 32	石製品一覧表	201
観察表 33	碁石一覧表	202
観察表 34	温石一覧表	202
観察表 35	垢擦石一覧表	203
観察表 36	火打石一覧表	203
観察表 37	骨角製品一覧表	204
観察表 38	ガラス製品一覧表	204
観察表 39	壁土一覧表	205

平安京左京六条三坊五町跡

第1章 調査経過

1. 調査経過

京都市下京区楊梅通新町東入上柳町に所在する尚徳中学校は、5学区が統合し、仮称下京中学校として建設されることになった。当地は平安京左京六条三坊五町の北端、六町の南端、ならびに楊梅小路と町尻小路に当たる。平安時代から江戸時代に至る遺構・遺物の出土が予想されたため、発掘調査を実施する運びとなった。

本調査に先立つ2003年8月20日から8月29日までの8日間、同校内で試掘調査を実施した。調査トレンチ3箇所を設定し、それぞれ堆積層序、遺構面の枚数と遺構の密度、地山面の高さなどを確認し、調査計画策定のための資料収集を行った。調査面積は45㎡である。

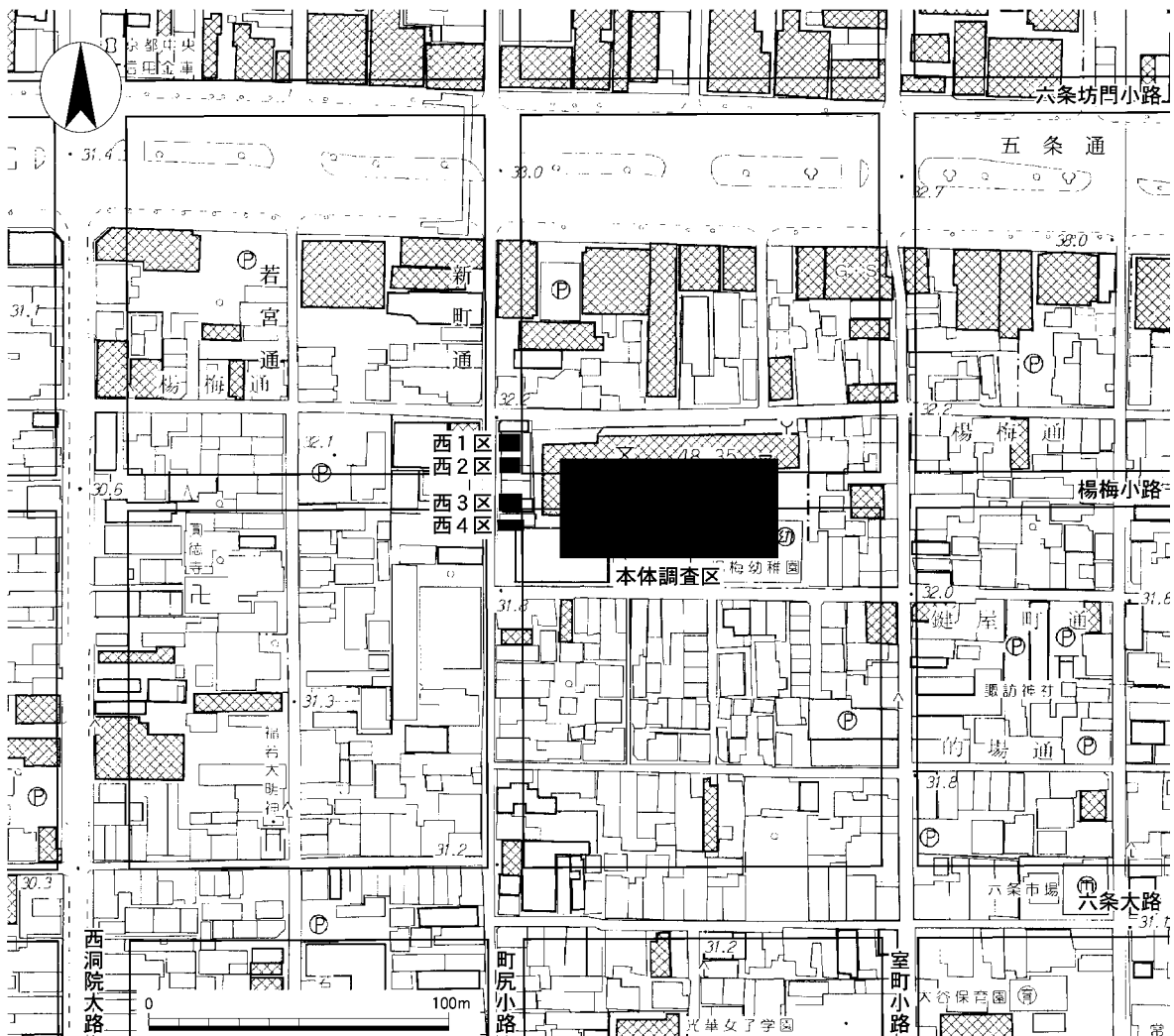


図1 調査位置図 (1:2,500)



写真1 試掘調査風景（左は調査前の状態、南西から、右は掘削風景、南東から）

本体部分の調査は、2004年9月7日より開始した。重機掘削は9月13日より開始し、排土は場外搬出とした。校庭に調査区を設定したため、近・現代の攪乱は少なく、幕末期の町家遺構が良好に残存していた。これを第1面とし、12月8日にやぐらによる全景写真を撮影し、15日にセスナによる1回目の空中写真測量を実施した。12月9日には、遺構と盛土から手榴弾の模擬弾が出土したため、警察・自衛隊に処理を依頼した。12月11日には地元を対象とした説明会を開催し、75名の参加者があった（配布資料：『平安京左京六条三坊五町』尚徳中学校跡地発掘調査地元説明会資料 ーその1ー）。

第2面として江戸時代中期の町家の遺構を調査した。2005年1月21日にクレーンによる1回目の全景写真撮影と2回目の空中写真測量を実施した。

第3面として桃山時代から江戸時代前期の遺構群を調査した。遊里から町家へと変遷する時期にあたるが、それらの遺構は明確でなく、大規模な土壇（ゴミ穴）が各所に掘られる状況が判明した。3月9日にクレーンによる2回目の全景写真撮影と3回目の空中写真測量を実施した。

第4面として鎌倉・室町時代の遺構を調査した。遺構面上には後世の整地層（盛土）が堆積しており、厚い部分は小型油圧シャベルで排除した。地山の砂礫層と平安時代整地層の上面で、窠掘付穴を多数検出した。室町時代の下京は、各所に酒屋・麴室が所在したことが史料にみえ、今回検出した遺構はそれに該当する可能性が高いと判断できたため、現地説明会を開催することとした。4月16日にはクレーンによる3回目の全景写真撮影、4月18日には4回目の空中写真測量を実施し、4月21日に記者発表、4月23日に現地説明会を開催した（配布資料：『平安京左京六条三坊五町跡』発掘調査現地説明会資料）。現地説明会には約700名の見学者があり、きわめて盛況であった。また、当日午後から、地元の方々を対象に体験発掘会を開催し、約20名の参加があった。

第5面として平安時代の遺構を調査した。楊梅小路の路面上では土器を廃棄した土壇などを検出した。路面はそれらを覆うかたちで厚く堆積することを確認した。南側溝は想定位置で検出できたが、北側溝は明確にできなかった。5月31日にクレーンによる4回目の全景写真撮影、6月1日に5回目の空中写真測量を実施した。

第6面として平安京の下層遺構を調査した。南東部で流路1条、北西部でも流路2条を検出した。

北西部は流路上に平安時代の整地層が厚く堆積しており、重機を用いて排除した。流路のひとつからは、弥生時代後期の土器がまとまって出土した。6月中頃より調査区四方の壁面の土層断面図を作成し、6月後半には調査を終了した。

上記本体調査の後半には調査地西端の民家が立ち退いたため、跡地に西1区～西4区を設定した。西4区は2月1日から2月28日にかけて実施し、町尻小路の路面が良好に残存することを確認した。西2区は3月9日から5月11日にかけて実施し、町尻小路と楊梅小路の交差点北東部の状況を明らかにした。西3区は6月20日から7月6日にかけて実施し、町尻小路と楊梅小路の交差点南東部の状況を明らかにした。西1区は調査地の北西隅、左京六条三坊六町の南西隅に設定した調査区で、6月22日から7月7日にかけて実施し、町尻小路路面と東側溝、東築地を想定通りに検出した。

調査期間中、京都市考古資料館によるチャレンジ体験発掘を7回受け入れた（2004年10月26日、11月10日、11月17日、2005年1月26日、2月3日、2月9日、6月7日）。また、4月5日には岩手県下の中学生の体験発掘、5月10日と17日には尚徳中学校生徒の見学・体験発掘、6月7日には醒泉小学校6年生、6月15日には植柳小学校6年生の見学があった。

2. 報告書作成

調査終了後、速やかに報告書作成作業に入った。作業内容としては、1. 現場で作成した図面類の整理、2. 出土遺物の整理作業に大別できる。

図面類の整理

遺構の平面測量については、全景写真撮影後に空中写真測量を実施し、その成果を図化したので、本報告ではそのまま引用することとした。第1面から第5面までを撮影、図化し、下層遺構は第6面として手測りで作成した。時代的に矛盾がないように、同時代の遺構を図面上で調整する作業も行った。個別遺構の実測については、オルソ測量を実施した。報告書では、その成果をそのまま引用した。

手書きで作成した平面図、遺構実測図については、図版のレイアウトと版下作成までを行い、トレースについてはデジタルトレースを外部に委託した。

出土遺物の整理

出土遺物は1600箱を超えるため、洗浄については発掘調査中から外部に委託した。報告の収録に際しては、主要遺構を選定し、接合、破片数の点数計測を行った。接合が済んだ遺物は実測し、レイアウト・版下作成まで行った。トレースについては、遺構実測図と同様にデジタルトレースとして外部に委託した。

第2章 調査地の位置と環境

1. 位置と環境 (図2)

京都市立尚徳中学校が所在する京都市下京区下柳町一帯は、京都盆地中央部の南東寄りに位置する。この付近は、鴨川が形成した扇状地にあたり、北東側が高く南西側に傾斜する地形である。巨視的というなら、水流は北東側から南西側に流れることが想定されるが、微細な高低差があり、傾斜が読みとりにくい箇所にあたる。特に東西方向に関しては、ほぼ平坦となっている。このこ

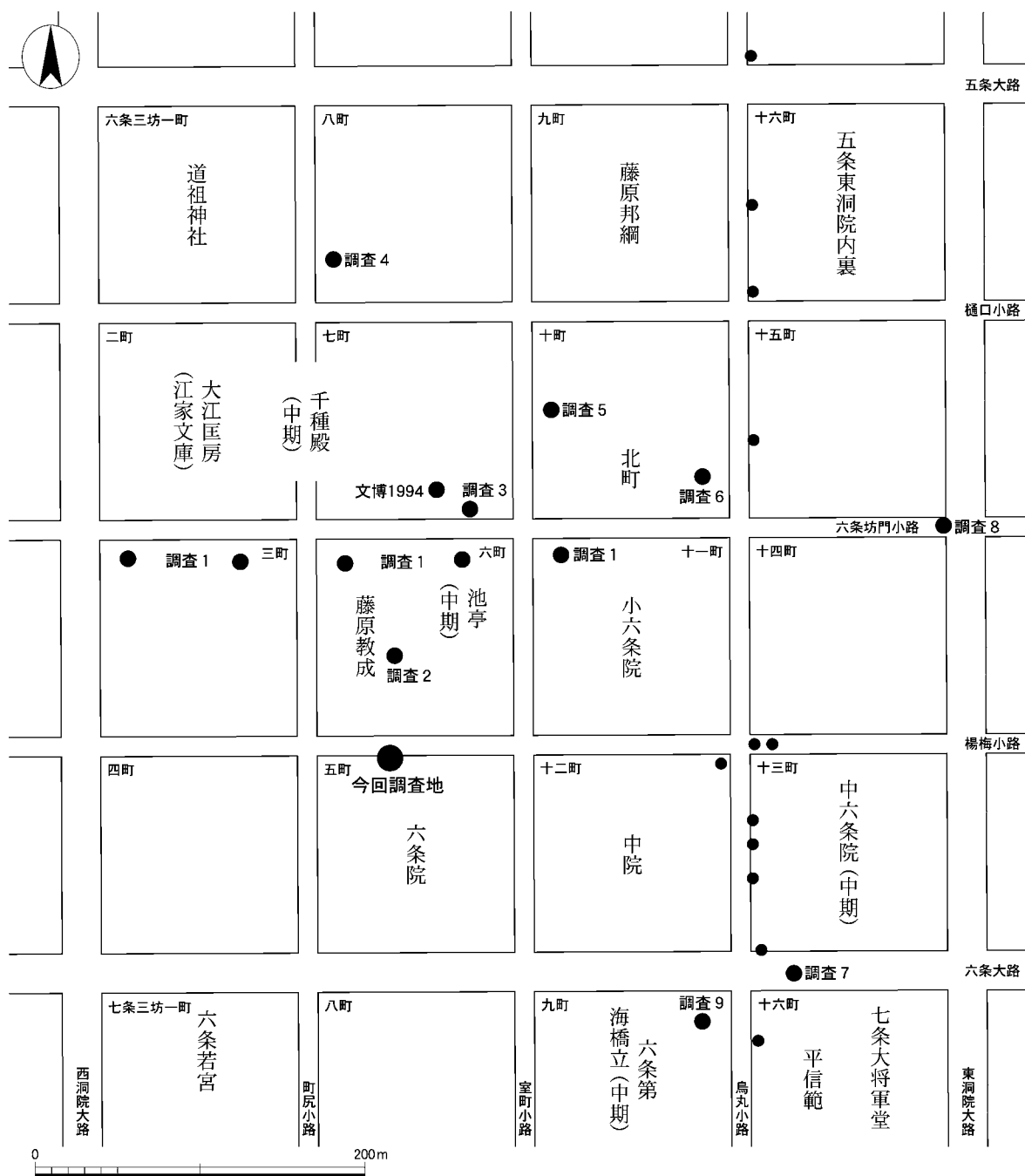


図2 左京六条三坊・七条三坊復元図 (1 : 4,000)

とは、どのような自然環境の下で遺跡が形成されたのかを知る上で重要である。詳細は第5章第1節で解説するが、弥生時代の自然流路が存在すること、楊梅小路・町尻小路の路面層が非常に厚いことなども、こうした自然条件が要因となったと理解できる。

調査地は、平安京左京六条三坊五町の北部と楊梅小路、六町の南部にあたる。左京六条三坊五町は、北を楊梅小路、東を室町小路、西を町尻小路、南を六条大路に囲まれた町である。平安時代前期・中期の様相はよくわからないが、後期には右大臣源顕房の「六条殿」が置かれたことが史料から確認できる。¹⁾源顕房(1037～94)は源師房(具平親王の子)の子で、母は藤原尊子(道長娘)である。六条殿は庭内に名泉が湧き出たことから「六条池亭」とも呼ばれた。寛治元年(1087)に火災に遭い²⁾、その後、御堂が建てられたが、永久5年(1117)の火災で焼失した。再建後も久安元年(1145)の火災で焼亡³⁾し、また建仁3年(1203)にも火災に遭っているが⁴⁾、この時はすでに六条殿はなくなっていたようである。

次に、調査地周辺で宅地利用が判明している箇所について述べる⁵⁾。六条三坊一町には道祖神社があった。二町と東隣の七町には具平親王(964～1009、村上天皇の第7皇子)の「千種殿」があった。二町は11世紀後半には大江匡房の邸宅となり、「江家文庫」と呼ばれたが、仁平3年(1153)の火災で焼亡した。三町・四町は宅地に関する記載がない。六町の北東4分の1には慶滋保胤の「池亭」があった。慶滋保胤(?～1002)は平安時代中期の儒学者・詩人で、土御門大路付近からここに移り住み、北東4分の1町に邸宅を構えた。邸宅は四方に垣をめぐらせ、門を開き、邸内には池と築山を造り、池の北には寝殿、西には阿弥陀堂、東には書庫を置き、菜園や芹田があった。慶滋保胤の著した『池亭記』は、天元5年(982)の成立で、六町の様子を記したこと以上に、平安京の移りゆく様を活写したことで有名である。この六町は鎌倉時代には藤原教成の邸宅となったが、元久2年(1205)の火災で焼亡した。七町は二町と同じく具平親王の千種殿に含まれる。八町は記載が不明。九町は12世紀後半に藤原邦綱の所有地であり、鎌倉時代には点々と譲渡された。十町南半部は小六条院に取り込まれ、その北町となった。九条家本『延喜式』「平安京図」には、この部分を含め「小六角」と表記されている⁶⁾。十一町には白河・鳥羽・近衛各天皇の里内裏「小六条院(小六条殿)」が置かれた。この里内裏も鎌倉時代には荒廃する。十二町は白河上皇の御所「中院(六条中院)」の推定地である。藤原敦家の所有地であったものを白河上皇が院御所とし、その後は、藤原顕季、源雅定へと受け継がれた。十三町は中期には宇多上皇の「中六条院(六条院)」があった。園池の見事さが著名で、醍醐天皇もしばしば行幸した。延長8年(930)に焼亡した。十四町の北辺部と十五町の南辺部は、鎌倉時代前期には安嘉門院邦子内親王の御領があった。十六町は六条・高倉・安徳天皇の「五条東洞院内裏」があった。この内裏は仁安2年(1167)に火災で焼亡し、その後、藤原邦綱が邸宅を建てたが、これも安元3年(1177)の太郎焼亡で焼失した。安徳天皇が福原新京の前後に滞在したのも、この内裏である。12世紀末には藤原基通の邸宅となる。

七条三坊一町には八幡宮があり「六条若宮」と呼ばれた。天喜元年(1053)に創建された源氏ゆかりの土地である。七条三坊八町は平安時代末期の買地券が残されており、所有者が移動した

ことが見える。七条三坊九町は中期には大中臣輔親の邸宅があり「海橋立」と呼ばれた。邸内の庭園が丹後の天橋立をまねたため、この名で呼ばれた。後期には白河法皇の御所「六条第」となった。また12世紀前半には藤原顕季の六条第となった。七条三坊十六町は12世紀後半、北東部に「七条大將軍堂」、北西部に平信範の邸宅があった。

以上のように、調査地周辺は史料からみると、平安時代後期から鎌倉時代初め頃に活況を呈したが、それ以後は次第に衰退していったようである。再び史料から活動がうかがわれるのが、室町時代以降で、この頃の下京には様々な店が配置されていたことが記されている。こうした状況が復元できるのは、北野神社文書に酒屋名簿などの史料が存在するためである。これを元に作成された分布図では、洛中の各所に酒屋があったことがわかる。しかし酒・麴の製造と販売は神人の特権であったため、応永26年(1419)9月には、他所での酒麴室を停止する下知状が出された。⁸⁾これに応じるかたちで、洛中の酒屋、土倉、酒麴室は証文を提出することになるが、その1つに「楊梅室町西南類之倉」と記した史料があり、今回の調査地点に合致する点は大いに注目できる。⁹⁾

ところで、現在の地図に平安京条坊を重ねると、南北通は平安京の通りを踏襲するのに対して、東西通は若干ずれた位置にあることがわかる。たとえば六条通は、新町通の西側では大路の北端、東側では大路の南端に現行通が位置し、大路の片方が境界として生き続けたことを示している。現在の五条通は北端が六条坊門小路に当たる。これは天正年間(1570～80年代)に五条橋がこの通りに移され、当初は「五条橋通」と呼ばれたものが、天保年間(1830～40年代)より五条通と呼ばれたためである。¹⁰⁾五条通は戦時中に南側の宅地が強制疎開で撤去され、道幅が広がった。新町通は町尻小路の西端に位置し、烏丸通も烏丸小路の西端に位置する。ただ烏丸通の場合は、東側が強制疎開で拡幅され、宅地側に道路が及んでいる。

現在の楊梅通は元の楊梅小路より北に約20mずれている。これは、東限が東洞院通、西限が中筋通(西洞院通と油小路の間)の間に限定されたものである。また、南側の鍵屋町通、的場通も平安京条坊にはなかった道路であり、この2本も、東限を東洞院通、西限を新町通とする。これら3本の東西通は、江戸時代初期に開かれた公許の遊里「六条三筋町(六条柳町)」に伴い開かれた通りである。¹¹⁾公許の遊里は当初、二条柳町に置かれ、慶長7年(1602)から寛永17年(1640)までここにあり、その後、島原に移転する。調査地が遊里の移転先に選ばれたことは、江戸時代初期にはまだ田圃景観が広がっていたためであろう。

遊里退去後、調査地周辺には町家が形成され、町組編成では川西九町組に属した。江戸時代を通じて、ここには多くの商工業者が住み、生産活動に従事していた。調査地の東隣りにあたる大黒町では、「釜屋」「魚屋」「屋根屋」「俵屋」「壁屋」「竹皮屋」「茶屋」「扇屋」、南西側の上錫屋町でも「念珠屋」「仏具屋」「真鍮屋」などの名前が知られる。¹²⁾今回の調査では、手工場に関連する様々な遺構・遺物が出土しており、上の史料を裏付けるものとなった。

明治2年(1869)の学校設立に際しては、当地は下京第16番組となり、「下京第16番組小学校」となった。明治5年(1872)の番組改正では下京第24学区と改め、「下京第24学区小学校」となっ

た。明治8年(1875)の校名変更では「新楊小学校」と称したが、明治11年(1878)新揚を廃し「尚徳」と改めた¹³⁾。明治25年(1892)の学令改正で「尚徳尋常小学校」と称した¹⁴⁾。開校当時の学校は現在よりかなり狭いものであったことは、地籍図によって知ることができた¹⁵⁾。校地は次第に周囲を加えつつ、現在の規模となった。戦後は尚徳中学校となって現在に至った。¹⁶⁾

2. 周辺の調査(図3、表1)

左京六条三坊は、北を五条大路、南を六条大路、西を西洞院大路、東を東洞院大路に囲まれた

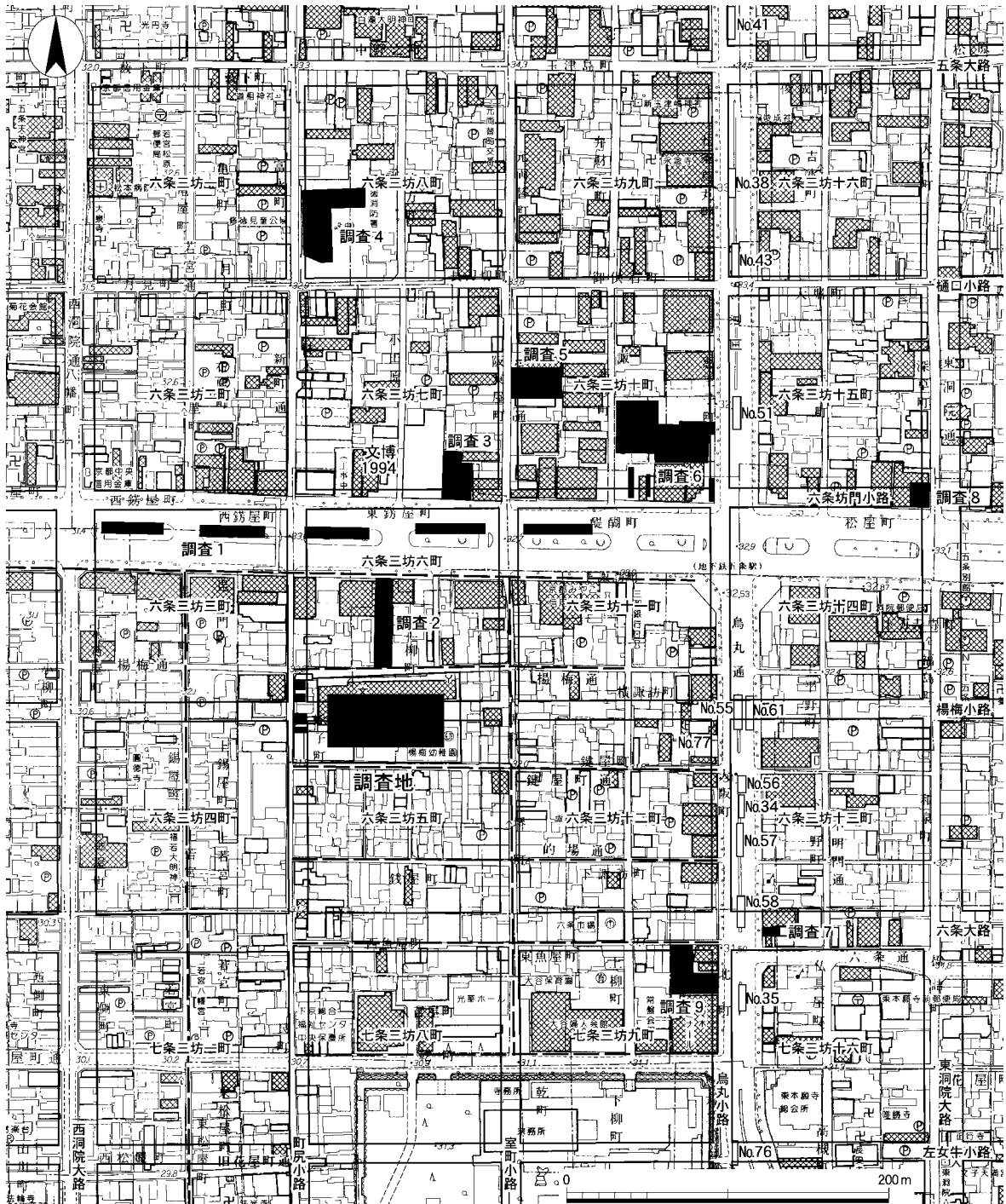


図3 周辺調査位置図(1:4,000) Noは烏丸線内の調査、道路上の太い破線は立会調査

表1 周辺調査地点一覧表

調査番号	所在地	調査期間	面積(m ²)	調査内容	文献
調査1	下京区金東横町、西鋸屋町、東鋸屋町 下京区東鋸屋町～醍醐町	1983.7.4 ～9.3	790	古墳時代の溝、奈良時代～平安時代前期の川跡、後期の柱穴・土壌、室町・江戸時代の遺構・遺物を検出。	『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1985年、 『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1987年
		1984.7.12 ～9.27	462		
調査2	下京区楊梅通新町東入上柳町222、222-6、222-7	1990.5.21 ～7.21	269	平安時代中期の井戸、平安時代後期・鎌倉時代の整地層・井戸、江戸時代の井戸・土壌・柱穴などを検出。	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994年
調査3	下京区五条室町西入東鋸屋町186	1990.9.25 ～12.21	277	六条坊門小路路面と北側溝は平安時代中期と後期がある。平安時代中期・後期、鎌倉時代、江戸時代の井戸・土壌・溝・柱穴などを検出。	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994年
調査4	下京区新町通松原下る富永町110-1	1998.9.29 ～1999.10.1	1,310	古墳時代の川跡・住居跡、平安時代の町尻小路路面と東側溝・樋口小路側の内溝・掘立柱建物・井戸・柱穴、桃山・江戸時代の井戸・溝・土壌・柱穴・鑄造関係遺構を検出。	『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2002年
調査5	下京区室町通五条上る阪東屋町	1982.12.9 ～1983.1.8	130	古墳時代の土壌、平安時代の井戸・土壌、鎌倉時代の溝、室町時代の土壌などを検出。	『平安京跡発掘調査概報 昭和57年度』埋文研・文観局 1983年
調査6	下京区烏丸通五条上る悪王子町426 下京区烏丸通五条上る悪王子町他地内	1990.2.27 ～1991.6.12	1,364	飛鳥・奈良時代の川跡、平安時代中期の池・橋脚・六条坊門小路の路面と北側溝、後期の整地層・付替え道路の路面と側溝・烏丸小路西側溝、鎌倉・室町時代の濠・柵・井戸・柱穴・土壌、江戸時代の井戸・土壌・柱穴などを検出。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994年、 『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2000年、 『リーフレット京都 No.44号』埋文研・資料館 1992年
		1998.5.11 ～1998.7.14	350		
調査7	下京区烏丸通六条上る北町181	1981.10.12 ～10.24	44	六条大路路面と北側溝、平安時代～江戸時代の溝・井戸・土壌・柱穴などを検出。	『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』埋文研・文観局 1982年
調査8	下京区東洞院通五条上る松屋町	1987.7.10 ～9.22	250	六条坊門小路路面と北・南側溝、東洞院大路路面と西側溝、室町時代の濠、桃山・江戸時代の土間・土壌・柱穴・室などを検出。	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1991年
調査9	下京区烏丸通六条上る北町185	1988.10.11 ～1989.1.13	294	平安時代の建物・井戸、鎌倉・室町時代の井戸・土壌・柱穴・溝・土器溜め・柱列などを検出。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1993年
文博1994	下京区小田原町・東鋸屋町	1994.4.18 ～9.30	545	奈良時代の溝、六条坊門小路と北側溝、平安時代後期・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の井戸・柱穴・土壌などを検出。	『平安京左京六条三坊七町』京都文化博物館調査研究報告 第11集 文博 1995年

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所、文観局→京都市文化観光局、文博→京都府京都文化博物館、資料館→京都市考古資料館

十六の町からなる。すでに多くの調査が実施されており、それらの成果は今回の調査成果と関連し重要である。以下、左京六条三坊内で実施された調査を、条坊呼称に従って解説する。また、必要に応じて、左京七条三坊北端での調査成果も紹介する。

六条三坊三町 調査1は、五条通中央分離帯内で1983・84年に実施した調査である。三町内では1983年調査の2箇所が該当し、古墳時代の溝、平安時代から鎌倉時代、室町時代から江戸時代の遺構・遺物が出土した。

六条三坊五町 五町北半から楊梅小路にかけてと、北西端の楊梅小路・町尻小路交差点にあたる部分が今回の調査地に該当する。条坊遺構に関しては、それぞれ所定の成果を得た。

六条三坊六町 この町の北東4分の1町には慶滋保胤の邸宅「池亭」が置かれたことが史料から判明する。調査2は、六町中央部を南北方向に調査したもので、江戸時代、平安時代後期から

鎌倉時代、平安時代中期の遺構・遺物が出土したが、池亭に関する時期の遺構・遺物は少量であった。先述した調査1では、1983年調査の東端区、1984年調査の西区（1区）が該当し、後者では奈良時代から平安時代前期の川跡が出土した。

六条三坊七町 調査3は七町の南東部と六条坊門小路に該当する。南端で六条坊門小路路面と北側溝を検出し、宅地内では平安時代中期・後期、鎌倉時代、江戸時代の遺構・遺物が出土した。調査区の中央では南北方向の宅地境界も確認した。

六条三坊八町 調査4は京都市立修徳小学校跡地の調査である。古墳時代の川跡や住居跡、平安時代の町尻小路路面と東側溝、建物・井戸など、平安時代、鎌倉・室町時代、桃山・江戸時代にわたる各種遺構を検出し、整理箱で1300箱に及ぶ遺物が出土した。室町時代の室と推定される方形の土壌は、酒屋の分布との関連で注目される。

六条三坊十町 西端中央部で調査5、南東部で調査6を実施した。調査5では古墳時代の土器、平安・鎌倉・室町時代の井戸・土壌・溝などが出土した。古墳時代初めの一括土器群は保存が良好で注目される。調査6は1989年と1998年の2度実施し、飛鳥・奈良時代の川跡、平安中期の池と六条坊門小路路面・北側溝、後期に付替えられた道路路面と側溝、烏丸小路の西側溝、鎌倉・室町時代、江戸時代の井戸・土壌・柱穴などが出土した。付替え道路は、「小六条殿」が北に拡幅された際、六条坊門小路が町内に迂回したもので、『延喜式』『平安京図』にこの状況が描かれている。

六条三坊十一町 調査1とした1984年調査の東区（2区）が該当する。明確な遺構はなく、砂礫層から古墳時代の遺物が出土した。

六条大路 調査7は六条三坊十三町と七条三坊十六町間の六条大路に設定した調査区である。六条大路路面と北側溝、平安時代から江戸時代の遺構・遺物が出土した。

六条三坊十四町 調査8は十四町の北東隅から六条坊門小路に該当する。六条坊門小路は路面と北・南側溝、東洞院大路では路面と西側溝を検出し、室町時代から桃山・江戸時代の遺構・遺物が出土した。

七条三坊九町 調査9は九町の北東隅に該当する。古墳時代の流れ堆積、平安時代の建物・井戸、鎌倉・室町時代の井戸・土壌・柱穴・溝・土器溜め・柱列などを検出した。

この他、六条三坊七町の調査3に西接する場所では、京都府京都文化博物館が1994年に調査を実施している（文博1994）。六条坊門小路路面と北側溝、平安時代後期から鎌倉・室町・江戸時代にわたる遺構・遺物が出土した。

烏丸通については、地下鉄烏丸線建設に伴う発掘調査を実施している。図3に示した範囲では、五条三坊十三町でNo.41、六条三坊十六町でNo.38・43、十五町でNo.51、楊梅小路に該当する箇所No.55・61、十二町でNo.77、十三町でNo.56・34・57、六条大路に該当する箇所No.58、七条三坊十六町でNo.35、左女牛小路に該当する箇所No.76を調査している。楊梅小路については路面と南側溝が良好な状態で出土している¹⁷⁾。

また、周辺の道路部分では、1985・1988・1994年に水道管敷設替え工事に伴う立会調査を実施している。東西通では、五条通の南歩道部分・楊梅通・鍵屋町通・的場通・六条通・花屋町通

であり、南北通では若宮通・室町通などである。それぞれ、平安時代から江戸時代にわたる遺構・遺物が出土している。

以上の調査成果を概括しておく。条坊遺構については、東西通として樋口小路（烏丸線No.43）、六条坊門小路（調査3・6・8、文博1994）、楊梅小路（今回調査地、烏丸線No.55・61）、六条大路（調査7、烏丸線No.58）、左女牛小路（烏丸線No.76）、南北通として町尻小路（今回調査地、調査4）、室町小路（調査5）を、それぞれ所定位置で確認している。今回の調査地との関連でいえば、楊梅小路は烏丸線No.55・61の調査所見、町尻小路は調査4の調査所見と共通性が高い。六条坊門小路が北側の町内に迂回する様相が解明できた点も特記できる。里内裏造営で六条三坊十一町が北に拡張されたためであるが、今回の調査地でも現在の楊梅通は北側に移動しており、道路の付替えを伴う街路区画の変更例としては共通するものといえる。

各調査地点は層位・遺構が複雑に重なっており、遺構の重複性は非常に高い。平安時代では後期が盛期であり、里内裏や邸宅が集中する時期と合致する。これらの遺構群は、鎌倉・室町時代に継続し、江戸時代に入って町家となり現在に至る。室町時代の酒屋に関連する遺構の検出例は少ないが、調査4の室と想定できる方形土壇の検出が注目される。江戸時代では鑄造関連の遺構・遺物が出土している。平安京造営前の遺構として、弥生時代後期の住居跡（調査4）、古墳時代、飛鳥・奈良時代の流路（調査1・6）がある。今回の調査成果と共通しており、遺構の広がりを理解する上でも重要な知見である。

註

- 1) 六条殿については、山田邦和「第2部第3章 左京全町の概要 左京六条三坊」『平安京提要』角川書店 1994年 を引用した。
- 2) 『中右記』寛治元年六月二十日条「午剋許右大臣之六條亭焼亡、齋宮俄還御六條内裏、」
- 3) 『百練抄』久安元年三月二十三日条「六条右大臣（源顕房）旧第炎上す。六条北室町西」
- 4) 『明月記』建仁三年十二月五日条「夜半許、南に火あり、楊梅南、室町西一町を焼く」
- 5) 邸宅配置とその内容についても、註1を引用した。
- 6) 内田好昭「小六条殿と街路のつけかえ」『リーフレット京都』No.44 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1992年
- 7) 『京都の歴史』第3巻 近世の始動 別添地図 学芸書林 1968年
- 8) 北野天満宮文書 応永26年（1419）9月12日「北野宮神人等申す酒麴の事。西京の所業として、彼の得利を以て神役に相従うの処、近年洛中辺土室を構うるに依て、神人等牢籠せしむるの間、神役闕怠に及ぶべきの条、甚だ然るべからざる。所詮往古の例に任せ、他所の室に於ては永く停止せしむる所なり。何ぞ成業の族に非ずして異儀に及ばん哉。然らば早く社家此の旨を守り、神役を専らにすべき者なり。仍て亀鏡に備えんが為に、下知件の如し。』『史料京都の歴史4』市街・生業 平凡社 1981年 P255 による
- 9) 北野天満宮文書 応永26年（1419）10月2日「公方より仰被し出候かうしの事、向後仕候ましく候。楊梅室町西南頬之倉。』『史料京都の歴史12』下京区 平凡社 1981年 P299

- 10) 「五條通 街名起源 天正中五條橋（今の松原を云ふ）を此街に移築す。伏見への交通に便せん為なり。爾来五條橋通と呼びしが、正保の頃より橋の字を徹し、五條通と称するに至れり。」『京都坊目誌1』新修京都叢書 第17巻 臨川書店 1967年 P302 による
- 11) 「上柳町 この地元六条柳町と称する遊郭あり、新屋敷と称し。柳町また六条三筋町ともいう。北は六条坊門、南は六条、東は室町、西は西洞院に至る。慶長7年に板倉勝重京都所司代たる時、柳馬場二条南北の地よりここに移し、公許の遊里とす。寛永17年7月13日、所司板倉宗重命じて朱雀野に移転せしむ。市中居民稠密し、商工日に発達するに際し、遊里を市中に置くを許さざる事情あり。今の雪踏屋町（楊梅）、鍵屋町、的場の三街は三筋町の址にして伝地後新地の号あり」などある。『京都坊目誌5』新修京都叢書 第21巻 臨川書店 1970年 P245 による
- 12) 『史料京都の歴史12』下京区 平凡社 1981年 P303・304
- 13) 「新揚」は新町通と楊梅通の両方から1字をとったもの。「尚徳」は『論語』憲問篇に「尚徳哉若人」とあるのに基づく。註12のP314による。
- 14) 「学区域及校名」註12のP313による。
- 15) 地籍図については、明治9年（1876）作成のものが地元保存されており、大岩英雄氏より拝見させていただいた。
- 16) 「尚徳尋常小学校 明治2年7月26日に開校式。同7年に上柳町の敷地を買いさらに講堂教室以下を建築す。同10年6月28日に明治天皇の親臨あり、同11年尚徳校とする。同20年8月敷地を広げまた附属幼稚園を設置、大正2年に南教室を新築する」などある。『京都坊目誌5』新修京都叢書 第21巻 臨川書店 1970年 P239 による
- 17) 地下鉄烏丸線建設に伴う発掘調査の実施地点については、『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報3 1977～1981年』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年 を参照した。

第3章 遺 構

1. 基本層序（巻頭図版4-1、図版2・3）

本体調査区は東西約66m、南北約32mあるため、壁面の土層を図示するには規模が大きい。そのため、壁面土層の概略を示した上に要点を柱状図のかたちで各壁2箇所ずつ、合計8箇所掲示することにした。

北壁1 調査区北西隅にあたるY=-21,918付近の層序を示す。上部は校舎による攪乱であったが、G.L-2m以下には堆積層序が保存されていた。(1～3)は平安時代後期の整地層である。聚楽土に類似するオリブ褐色から暗灰黄色を呈する泥土層であり、調査区全域に分布する。作図箇所では厚さ0.65m以上にわたり堆積しており、下層に湿地があったため、特に厚くなったとみられる。(4)と(6・8)は、ともに湿地堆積を示す泥土・粘土層である。(4)は平安時代後期の遺物を含む。(6・8)は弥生時代後期の遺物を含む流路3508埋土に該当する。(6・8)では間に細砂層(7)を挟み、流水があったことがわかる。(9)も流路3508内の堆積層とみられる。この場所での地山は確認できていない。なお、この場所は、楊梅小路の路面形成層がみられる位置にあるが、作図箇所ではそれらは確認できなかった。

北壁2 北壁中央部、Y=-21,891付近の層序を示す。上から、校舎による攪乱、楊梅小路路面形成層、平安時代後期整地層、流路堆積層があり、G.L-2.7mで地山となる。路面形成層は作図箇所では厚さ0.7mあり、11層に分層できた。このうちの(8)は砂礫層で、洪水起源とみられる。砂礫層は(5)の一部にもみられた。各層の上面は堅く締まった礫敷面で、路面として使用されている。(13)下面が最初の路面である。その下の(15・16)は平安時代後期整地層である。最初の路面上、ならびに整地層内から牛骨・馬骨が多数出土した。また、(9)の泥土層上面には轍が形成されており、その上は(8)の砂礫で覆われていた。なお、作図箇所は楊梅小路の北築地が推定される位置にある。(18)は流路堆積層であり、弥生時代後期の堆積とみられるが、作図箇所では弥生土器は出土していない。(19)は砂礫層で、ここでの地山と考えられる。

東壁1 調査区北東隅にあたるX=-111,780付近の層序を示す。上から、現代盛土層、江戸時代の町家形成に伴う整地層、焼瓦などの廃棄土壌、江戸時代前期から戦国期の土壌や整地層、楊梅小路の路面形成層があり、G.L-1.75mで地山となる。(5～9)は江戸時代の町家形成層である。各々は厚さ0.05m程度で、焼土を含む砂泥層が薄く重なっている。(10)は焼瓦を廃棄した土壌で、幕末期の堆積とみられる。上部にある町家形成層は、それ以後の堆積と判明する。(10)以前の焼土を含む整地層も周辺にはみられる。(13・14)は土壌997埋土で、18世紀中頃に埋没している。(16)は土壌993埋土で、こちらも18世紀に属する。(19～22)は楊梅小路の路面を形成した層である。それらの下層にある(23)は、土壌3300とした遺構の埋土であり、ここでは細片となった11世紀代の土師器皿が最初の路面上に堆積していた。路面の形成年代を知る上での重要な所見である。(24)は平安時代後期の整地層の底部が残存したものである。(25・26)は砂礫層で、地

表2 遺構概要表

時 代	本 区	西1区～西4区
弥生時代～ 古墳時代 (第6面)	流路3431・3508・3514	
平安時代 (第5面)	楊梅小路路面、溝3250・2888、 井戸3325・3330・2857・3120・3144・3321・3403・3429・3497・ 3516、埋納2813、 土壙2444・2801・2802・2950・3198・3333・3304・3300、 落込3313、埋甕3211	西1～4区：町尻小路路面、 西2・3区：楊梅小路路面、 西1区：溝47、西2区：溝 136・137・111・119、 西3区：溝40
鎌倉時代・ 室町時代 (第4面)	楊梅小路路面、甕群1・甕群2、溝2678・3217、 井戸1982・2745・3600・1385・2721・1751・2617・2075・2290・ 2335・2345・2543・2650・2670・2680・2700・2712・2746・2768・ 3127・3221・3312・3520、 集石2252・2273・2311・2568・3058・3060・3200、 埋甕2851、埋納1697・1864・2729、土壙2286、塀3238	西1～4区：町尻小路路面、 西2区：楊梅小路路面、 西1区：溝36、柵73A・B、 西2区：溝77、集石91、柱 穴89・129、西3区：溝48、 柱穴46、井戸35
桃山時代・ 江戸時代前期 (第3面)	門3650、建物3651、土蔵1414、井戸2542・2398・1306・2751・ 1644・553・992・1117・1300・1417・1420・1422・1513・ 1533・1872・2130・2300・2313・2500・2666・3016・3513、 石室1500・1365、集石931・932・1735・1289・1568・1316・1449・ 1279・1544・1601・1612・1640・1643・1645、埋甕377、埋納1413、 土壙1845・1159・1232・1304・1313・1970・1027・1198・1258・ 1269・1336・1400・1418・1458・1469・1477・1485・1545・1666・ 1845、瓦組1263	西2区：土壙9・15・18・ 28・33、 西4区：土壙7・10・14
江戸時代中期 (第2面)	石垣555・1214・3630・3646B・3647、礎石列1002・3645、 漆喰列3631、路面1160、土蔵536・1217・1230A・B、溝1208・1209、 井戸383・2317・940・946・1021・1022・1370・2786、 集石924・1240・359・1086・1348、 埋甕749・855・933・453・789・862・887・1095、胞衣壺741・791、 炉514・600・601・602・605・606・832、竈1065、瓦組760、 土壙1105・1122・1234・1260・309・790・842・869・871・885・ 888・889・903・908・951・955・956・987・1000・1207・1216・ 1233・1270・1271・1312・1319・1340・1373・1470・1520	西2区：土壙35、 西4区：土壙6・11
江戸時代後期 ・幕末期 (第1面)	礎石列554A・554B・556・3632・3634・3646A・3649・3642・3643A、 路地3654・3655・3656、瓦列289・537・539、礎石建物3657、 土蔵190・170・448、穴蔵308・365、溝505・41・75・230、 漆喰槽15・16・17・25・36・180・188・233・265・584、 井戸73・132・287・302・378・12・65・101・105・108・154・157・ 210・255・279・285・297・318・319・343・386・412・454・506・ 520・523・528・550・552・557・567・568・575・593・595・701・ 722・723・1299・1688・3652・3653、集石296、 埋甕6・95・115・175・72・93・98・99・118・127・133・135・ 149・189・322・340・341・358・360・384・395・446・465・475・ 477・487・596・696・715・721・743・756・757・797・806、 胞衣壺320・495・608・55・213・284・324・481・495・532・578・ 603・613・623A・B・674・675・676・688・758・765・809・984、 炉295・310・316・612・755、竈724・725・726・735、 池275・651・1020、瓦組166、 土壙817・1・2・3・4・11・150・160・248・291・299・300・ 304・305・326・329・344・349・400・402・403・435・445・450・ 479・489・494・524・771・807・820	西2区：土壙10・25、 西4区：井戸1・2、 土壙3・5

山とみられる。

東壁 2 東壁中央部、X=-111,789 付近の層序を示す。上から、現代盛土層、江戸時代の町家形成に伴う整地層、焼瓦廃棄土層、江戸時代前期から戦国期の土層・整地層などがあり、G.L-1.9 m で地山となる。基本的な層序は東壁 1 と同じである。(5～9)は江戸時代の町家形成層で、厚さ 0.7 m ある。東壁 1 の町家形成層に比べると各層は平均して厚い。(14)層以下では土層の掘込みが重複する状況がみられる。(17)は土層 1513 埋土で、17 世紀の埋没とみられる。(20・21)も同時期の遺構埋土とみられる。(23)は砂泥・砂礫層で、弥生土器などは出土しておらず、地山とみられる。

南壁 1 南壁の中央東寄り、Y=-21,888 付近の層序を示す。上から、江戸時代の町家形成に伴う整地層、中位には戦国期とみられる整地層、その下に甕群 1 に伴う甕据付穴、平安時代後期の整地層が堆積し、G.L-2.1 m 以下は地山となる。江戸時代の町家形成層は、Y=-21,881～21,906 間にかけて良好に遺存していた。厚さ 0.4 m 程度の間、焼土を含む薄い層が数層堆積している。東壁 1・2 として図示した範囲でも同じ状況がみられた。(2・4)は土間の面であり、上面は焼けている。その上には焼土層も残存しており、江戸時代後期の火災面が良好に遺存していた。江戸時代の整地層では、(10)が最も下の層であった。(7)は土層 894 埋土で 18 世紀代、(8)は井戸 1021 埋土で、こちらも 18 世紀前半とみられる。(13・14)は褐色系の砂泥層で、楊梅小路以南の全域を覆い、戦国期頃に調査地一帯を平均化する目的で入れられた盛土層とみられる。今回は重機(小型ショベル)によって大部分を排除したが、その際には陶器甕の破片が多く出土した。(14)下では、幅 0.8 m、深さ 0.5 m ほどの掘込みが観察できた。図示した地点は甕群 1 の南端に該当するため、甕据付穴の断面を観察したものといえる。(22)は平安時代後期の整地層である。この整地層は甕群 1 の範囲では削平を受けていたが、南壁断面では堆積がみられた。甕群 1 の南端に近いことを示すものであろう。(24・25)は地山の砂礫層であり、堅く締まっている。弥生・古墳時代の遺物はこの地点では出土していない。

南壁 2 南壁 1 から西へ約 10 m、Y=-21,898 付近の層序を示す。上から、江戸時代後期以後の町家形成層、江戸時代中期以後の整地層、戦国期とみられる整地層、室町・鎌倉時代の遺構埋土、平安時代後期の整地層が堆積し、G.L-1.7 m 以下は地山の粗砂・砂礫層となる。この層序は南壁 1 と基本的に同じである。(11)は土層 1045 埋土で 18 世紀とみられ、(7・8)はそれ以後に整地目的で入れられた層と判明する。(13)は南壁 1 での(13・14)に該当するが、この範囲ではやや薄くなっている。(14)は土層 2464 埋土で 14 世紀に属する。(16・17)は土層 2288 埋土で 14 世紀である。(19)は平安時代後期の整地層であるが、この箇所ではやや薄い。

西壁 1 調査区南西隅にあたる X=-111,803 付近の層序を示す。室町時代以降の遺構埋土が掘り込まれる状況がみられる。(9)は土層 2603 埋土で 15 世紀に属する。(10)も同時期の遺構埋土ないし整地層とみられる。(11・12)は平安時代後期の整地層である。作図箇所では G.L-1.5 m 以下に堆積するが、この検出位置は最も浅い位置である。作図箇所では地山は確認できていないが、西壁 2 の層序を参考にすると、G.L-2 m 付近まで同整地層が及ぶと考えられる。

西壁 2 X=-111,793 付近の層序を示す。弥生時代後期の遺物を包含した流路 3514 が下半に位置する箇所断面である。上から、江戸時代の盛土、桃山・室町時代の遺構埋土、平安時代後期の整地層、流路 3514 埋土となる。流路 3514 底まで G.L-3.2 m ある。(7・8) は土壌 1532・2777 に該当する遺構埋土で、室町・桃山時代の遺物を含む。(2～5) もほぼ同時期の遺構ないし整地層とみられる。(9・11・12) は平安時代後期の整地層である。この箇所では流路 3514 を覆う状態で厚さ 0.8 m にわたり堆積するが、中間に砂礫層 (10) を挟んでおり、洪水などがあつた後、再度整地されたことがわかる。(13～21) は流路 3514 内の堆積層で、作図箇所での規模は幅 4.4 m、深さ 0.8 m ある。埋土は砂礫層を主体とし、その間に泥土層が挟まれる。弥生土器は底部の泥土層から多くが出土した。(22～24) は流路底部・南肩の砂礫層である。この層にも弥生土器が包含しており、流路 3514 との境界は不明瞭であった。流路 3514 は最後の主流と理解するのが良いであろう。

2. 平安京前の遺構 (第 6 面、図版 4・5)

流路 平安時代後期の整地層を排除し、地山の砂礫面上で検出した遺構群である。流路 3431・3508・3514 がある。3 条とも東北東から西南西方向に流れる自然流路で、流路 3508・3514 は弥生時代後期、流路 3431 も弥生時代と想定される。

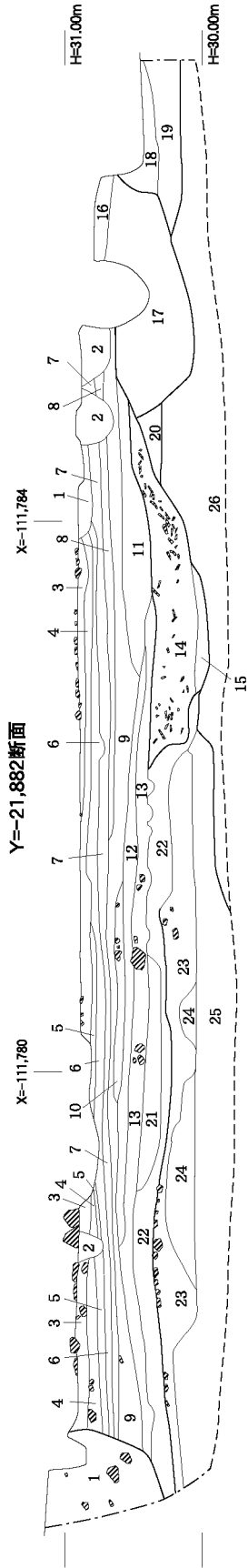
流路 3431 南東部で検出した。北肩は明瞭であるが、南肩は調査区外に延びる。深さ 0.5 m ほどあり、埋土には泥土と砂礫が堆積する。埋土からは弥生土器とみられる小片が 1 片出土した。埋土上には平安時代後期の整地層が堆積し、流路北肩の外側にまで整地層が及んでいた。

流路 3508 北西部で、その南肩のみを検出した。北肩は確認できておらず、北側へ落ちる湿地状の南肩の可能性もある。東端は流路 3514 と合流しており、延長部は明確でない。堆積層は粘土・泥土層を主とし、厚さ 0.5 m 以上ある。図版 2 で北壁 1 として図示した箇所では、黒褐色粘質土層間に細砂層が間層として挟まっている。下の粘質土層下は黄褐色細砂層であるが、この層も流路内堆積層とみられる。粘土・泥土層からは弥生土器が出土した。

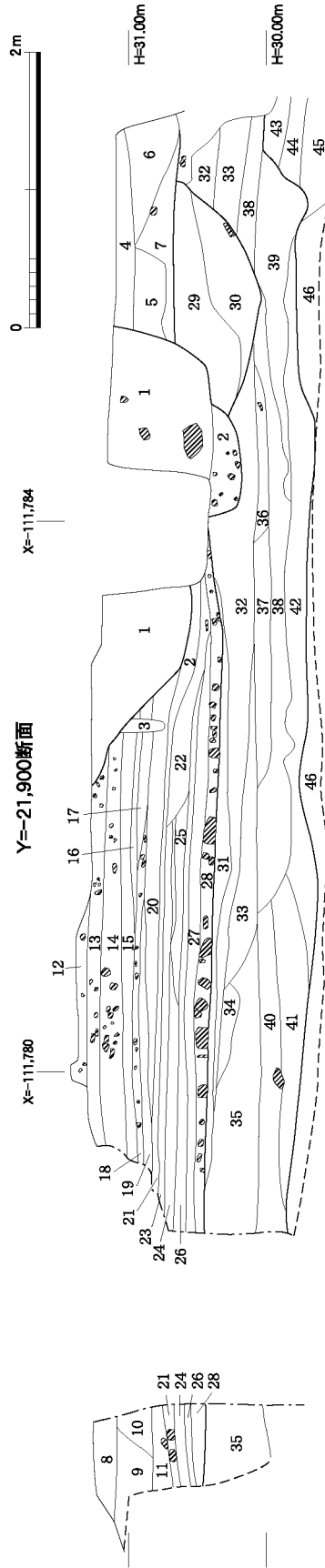
流路 3514 (図版 25・92-1) 中央部北端から西壁の中央部に至る。東端は不明瞭である。幅 4.5～6 m、深さ 0.8 m 程度あり、埋土は泥土と砂礫が互層を呈し、流水があつたことを示す。底部には泥土が堆積し、滞水状態であつたことがわかる。西壁中央部では幅 4.4 m、深さ 0.8 m あり、埋土は砂礫層が優勢であつた (図版 3 の西壁 2)。図版 25 に示した土器群は、弥生土器 (後期) 甕数個体と高杯 1 個体が流れの淀んだ箇所で出土したもので、一括性の高い土器群といえる (図版 34)。また、流路内では、ここ以外でも弥生土器が散発的に出土している (図 23)。

3. 平安時代の遺構 (第 5 面、図版 6・7・93)

平安時代後期の整地層上面で検出した。11 世紀、12 世紀に属する遺構を中心に構成される。層位的には第 4 面と同じであるが、整地層を若干掘り下げて検出した。楊梅小路路面・南側溝 3250、溝 2888、井戸 10 基、埋納遺構、路面上に掘られた土壌 3300、土器を廃棄した土壌



- | | | |
|----------------------|---------------------------|---------------------|
| 1 検査標尺 | 11 灰黄色砂泥 (粗砂入) | 21 暗灰黄色砂泥 (上面が路面) |
| 2 柱穴・小土構埋土 | 12 にぶい黄色砂泥 (礫入) | 22 黄褐色砂泥 (上面が路面・礫) |
| 3 灰黄褐色砂泥 (礫) | 13 にぶい黄色粗砂 (礫入) | 23 暗灰黄色砂泥 (上面が路上段面) |
| 4 にぶい黄色砂泥 (礫入) | 14 暗灰黄色砂泥 (土壌3300、土師器・炭入) | 24 オリーブ褐色粗砂 (湿地整地層) |
| 5 にぶい黄色砂泥 (礫入、上面が路面) | 15 灰黄褐色粗砂 (土壌3300) | 25 オリーブ褐色粗砂 (湿地整地層) |
| | | 26 黄褐色砂泥 (地山) |



- | | | |
|-------------|----------------------|--------------------------|
| 1 土構埋土 | 19 暗オリーブ褐色砂泥 | 37 灰黄色砂泥～粘土 (流路3470) |
| 2 土構埋土 | 20 オリーブ褐色砂泥 (上面が路面) | 38 暗オリーブ色粘土 (流路3514整地層) |
| 3 杭穴埋土 | 21 暗灰黄色砂泥 (礫入) | 39 暗灰黄色粘土 (流路3514整地層) |
| 4 暗オリーブ褐色砂泥 | 22 暗灰黄色砂泥 (礫入、上面が路面) | 40 暗灰黄色粗砂～粘土 (流路3508整地層) |
| 5 灰黄褐色砂泥 | 23 オリーブ褐色砂泥 | 41 黄灰色粘土 (流路3508) |
| 6 暗オリーブ褐色砂泥 | 24 暗オリーブ褐色砂泥 (上面が路面) | 42 暗灰黄色粗砂 (流路3514) |
| 7 灰黄褐色砂泥 | 25 暗オリーブ色砂泥 (上面が路面) | 43 にぶい黄褐色粗砂 (地山) |
| 8 灰黄褐色砂泥 | 26 オリーブ褐色砂泥 (上面が路面) | 44 暗灰黄色砂泥 (地山) |
| 9 黒褐色砂泥～粘土 | 27 暗オリーブ褐色砂泥 (上面が路面) | 45 にぶい黄褐色粗砂 (地山) |
| | | 46 明褐色砂泥 (地山) |

図4 楊梅小路断面図 (1:50)

2950・3198、その他にも土壌と柱穴が多数ある。楊梅小路路面上では轍の痕跡を検出し、また路面下の整地層からは牛骨・馬骨が出土した。図版6・7では10世紀に属するものを青色に、11世紀に属するものを赤色に、12世紀に属するものを黒色で示した。

楊梅小路路面（図版94-1、図4）全域で東西にわたり検出した。路面形成層は厚さ0.6～0.95mあり、厚い箇所では10数層、平均で8層程度重なっている。下から2層目の上面で、轍の痕跡を検出した。轍の上部には砂礫層が覆う。ここでは、Y=-21,882、Y=-21,900で作図した南北断面図を、図示し解説する。

Y=-21,882断面図では、路面形成層は厚さ0.6mある。最初の路面は(23)上面である。ただしこの路面は小路の北半のみであり、また北側に下がっている。これを覆う(22・21)も、上面は路面であり、ここには轍とみられる窪みが形成されている。(22・21)上には洪水起源とみられる粗砂(12・13)が覆う。轍はこの粗砂・礫に覆われたため、保存された。土壌3300(14・15)は(22)を掘り込み、(13)に覆われる。粗砂・礫が堆積した後、砂泥(9)が堆積する。この上面も路面である。その上には、粗砂(8)が薄く堆積する。さらに上は(7)で整地される。(7)の上面、および(5・6)上面も路面である。路面最上部に堆積した(4・3)は、礫が多く入り、路面というより整地のために入られた層とみられる。

Y=-21,900断面図では、路面は厚さ0.95mある。最初の路面は(31)上面にある。(31)は下の湿地を整地した層の最上部でもある。(31)上面には轍がある。(31)を覆う(28)には大き目の礫が多数含まれ、先述したY=-21,882断面の(12・13)に該当する層とみられる。これより上部には路面を形成する層が10数層ある。各々厚さ0.05～0.15m程度あり、(26・24・23・20・18・16・15・13)上は路面と認識できた。(14・13・12)には礫が多く含まれ、Y=-21,882断面の(3・4)に該当する層であった。また北端は、X=-111,777付近まで路面が続くことを確認した。

路面形成層の掘り下げに際しては、掘削時の標高を記録しながら進めた。その結果、路面の形成時期については大まかな復元が可能となった。まず、最初の路面形成層に含まれる遺物は11世紀代である。破片が大きいものもあるが、これは周辺に掘られた遺構の遺物が入った可能性がある。最初の路面の下部は、湿地を埋めた整地層であるが、この中にも11世紀代の土器、瓦が含まれていた。瓦は整地のために持ち込まれたものとみられる。轍を覆う粗砂・礫は、11世紀代の遺物に混じって12世紀代の遺物が含まれる。路面形成層より出土する遺物は、圧倒的に11世紀代が多いが、標高30.50m付近より上部には12世紀代、30.60m付近より上部には13世紀代、30.70m付近より上部には14世紀代、検出面である31.00m付近では17世紀代までの遺物が含まれていた。ただし、路面上には土壌・井戸などが掘られるため、遺構内の遺物が掘削時に混入した可能性も残る。

轍の痕跡は、Y=-21,872付近からY=-21,904付近にかけて、東西およそ32mにわたり検出した。深さは0.1m以内の東西方向の小溝が無数にあり、溝内には粗砂・砂礫が堆積していた。牛車などの轍であるなら、平行する溝が2本以上みられるはずであるが、確実なものは認められなかった。

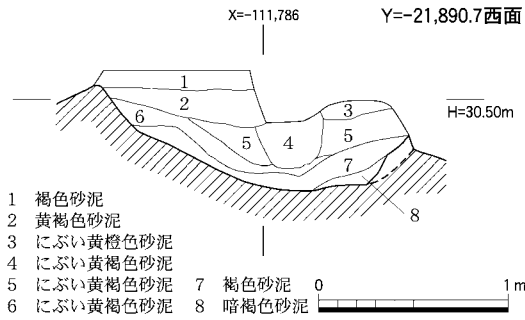


図5 溝 3250 断面図 (1 : 40)

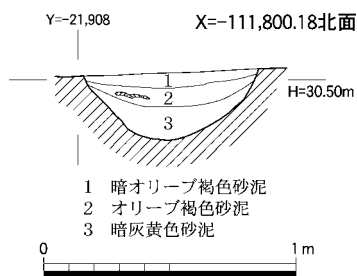


図6 溝 2888 断面図 (1 : 30)

また、人の足跡や牛の蹄のような痕跡も認められなかった。小溝は道路に平行するものだけではなく、若干斜め方向に振れるものも認められた。

溝 3250 (図版 94- 2、図 5) 楊梅小路南側溝であり、想定位置よりやや北側で検出した。幅 2.2 m、深さ 0.9 m あり、埋土は均質の泥土層が堆積し、人為的に埋められた層と判断できた。底部に凹凸はみられず、水の流れた形跡もみられなかつた。

11 世紀後半の遺物が出土した (図版 36)。

溝 2888 (図 6) 南西部で検出した。南北方向の溝であるが、X=-111,798 付近より北側では検出できなかった。断面作図箇所での規模は、幅 0.7 m、深さ 0.3 m あり。埋土は均質な砂泥層で、水の流れた形跡はみられない。四行八門制の西一門・西二門境界線より東 2.6 m に位置し、12 世紀末頃の遺物が出土した。

井戸 10 基が該当する。内訳は、11 世紀に属する 6 基 (北西より、井戸 3120・3144・3330・3429・3497・3516) と、12 世紀に属する 4 基 (井戸 3325・3321・3403・2857) である。このうち井戸 3321・3330・3516 は楊梅小路北築地想定位置に、井戸 3325 は楊梅小路路面中央に、井戸 3497 は楊梅小路南側溝上に掘られている。井戸掘形は、隅丸方形と円形があり、内部は方形の木枠組みであるが、地山が砂礫質であるため、木枠の遺存状況は極めて悪い。木枠の痕跡が部分的に残るもの (井戸 2857・3321・3325・3330)、底部の中央に曲物 (痕跡) が残存するもの (井戸 3403・3429・3497) がある。掘形のみで素掘り状態のもの (井戸 3144・3516) もある。

井戸 3325 (図版 16・95- 1) 方形木枠組みの井戸であるが、木枠の残りは悪く、最下段の横椽と縦板の一部が残存するのみであった。12 世紀末とみられる。

埋納 2813 (図版 24) 検出面での規模は、直径は 0.25 m、深さ 0.3 m あり、さらに底部には直径 0.1 m で深さ 0.35 m の部分が杭状の掘り込みとなっていた。瓦器椀 (図版 38) が 4 個体、重ねられた状態で出土した。

土壌 3300 楊梅小路の路面推定位置に掘られた土壌である。南側溝 3250 が埋没して以後に、溝端を南肩として、南北約 6 m で東西 30 m あり。北肩は非常になだらかで、土壌の中心は南半にある。土壌内には土師器が多量に廃棄されており、焼土・炭も含まれていた。宅地利用、ならびに火災の時期を考える上での興味深い遺構である。11 世紀代の遺物が出土した (図版 35)。

土壌 2950 (図版 25・94- 3) 土器を廃棄した東西方向の浅い窪みである。東西 4.5 m、南北 2 m、深さ 0.15 m あり、11 世紀末葉の土師器皿が出土した (図版 36)。

土壌 3198 (図版 25) 土器を廃棄した浅い窪みである。南北 3 m、南北 1.5 m あり、西半分は削平されている。深さは 0.1 m で、土壌 2950 より浅い。12 世紀初め頃の土師器皿が出土した (図



図7 落込 3313 牛・馬骨の出土状態 (1 : 50)

版 37)。

土壌 3304・3333 とともに楊梅小路の西端路面下で検出した、東西方向に細長く、溝状を呈する遺構である。土壌 3304 は南側溝 3250 の北側にあり、長さ 5.4 m、幅 1 m ある。南側溝 3250 の北側にも同様の遺構として、土壌 3078・3286・3277 などがある。土器が大量に廃棄されていた土壌 3300 も、一連の遺構といえる。土壌 3333 は長さ 6.2 m、幅 0.7 m ある。楊梅小路の北側溝の推定位置にあるが、東端はやや北側に弯曲し、それより東には延長しない。

落込 3313 (図版 92- 2、図 7) 楊梅小路の路面とその下の整地層から牛・馬骨が集中的に出土した。特に Y=-21,874 付近では、長さ 4.4 m、幅 0.8 ~ 1.6 m の範囲に集中しており、この範囲を「落込 3313」とした。当初は最初の路面上に廃棄されたものと判断したが、路面下の整地層にも骨が含まれており、大半は整地層中に含まれた骨であると判断した。骨は各部位が揃っているが、他所より集められた骨がここに廃棄されたとみられる。整地層中からの骨の出土は、Y=-21,900 から西へ約 10 m の範囲にも分布していた。なお、これらの牛・馬骨については付章 2 の第 1 節で検討を加えている。

4. 鎌倉・室町時代の遺構 (第 4 面、図版 8・9・96)

平安時代後期の整地層の上面で検出した遺構群で、鎌倉時代 (13 世紀を中心とする)、室町時代 (14・15 世紀を中心に 16 世紀前半までとする) に属する。楊梅小路路面、南築地施設、甕掘付穴多数からなる甕群 1、より小規模な甕群 2、井戸 24 基、集石 7 基、埋甕 1 基、埋納遺構 3 基、

柱穴多数、土壌多数などがある。図版8・9では、13世紀に属するものを赤色、14世紀に属するものを黒色、15世紀から16世紀前半のものを青色で示した。

楊梅小路路面 路面層が厚いこと、路面層中に鎌倉・室町時代の遺物が含まれること、路面上には当該期の遺構が極めて少ないことなどから、室町時代まで機能していたことは確実である。しかし、南側溝に該当する溝は検出できていない。北築地想定位置に井戸 3312・1982・3600が掘られ、平安時代後期と同じ様相がみられた。

楊梅小路と南側の宅地境については、東西溝と柱列の位置が留意される。東端で塀 3238 とし

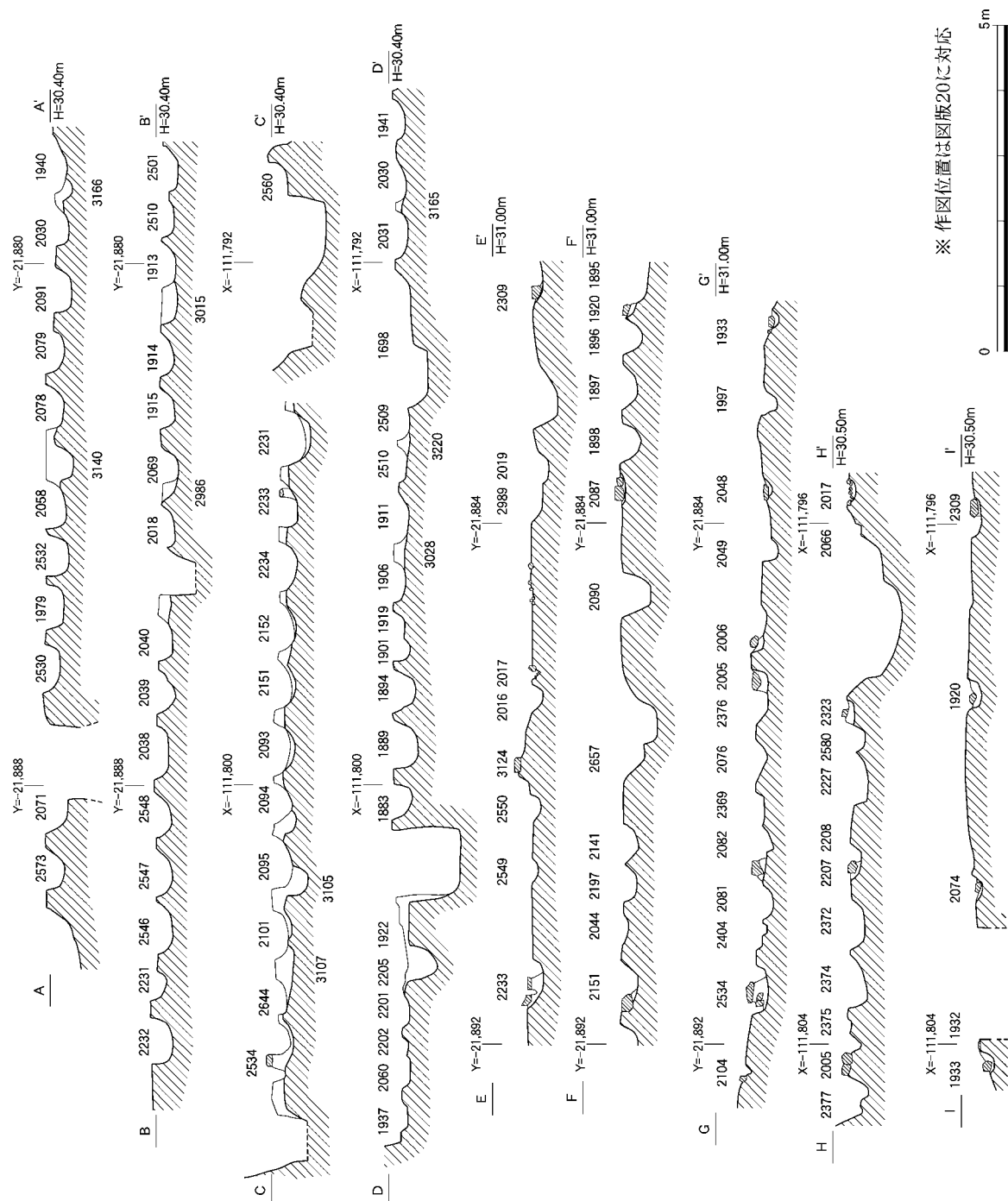


図8 糞群1断面図 (1 : 100)

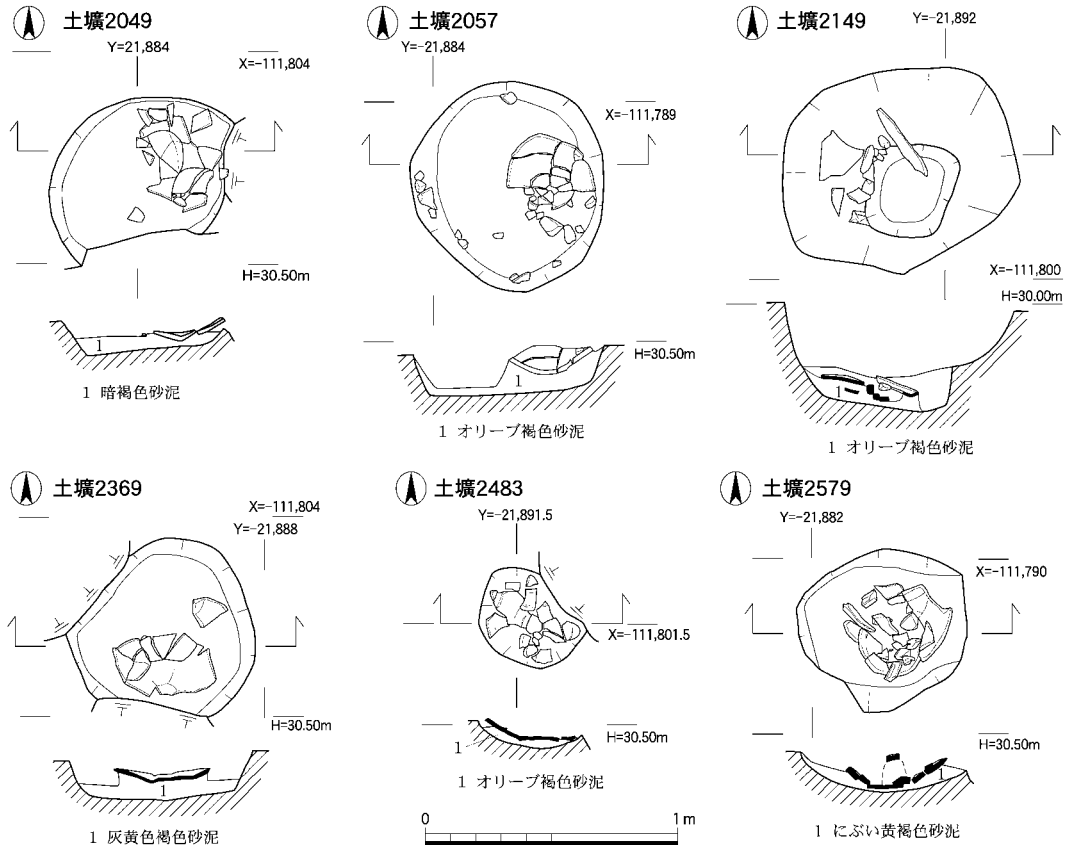


図9 甕群1埋甕の出土状態（1：30）

たものは、溝底に礎石が据えられた布掘柱列である。その南にも柱列があるため、ここが道路と宅地の境界施設であったと考えられる。溝の掘られた位置は、かつての南側溝のほぼ中央にあたる。中央の西寄りでは、X=-111,784 付近に東西方向の溝 3217 がある。平安時代後期の南側溝（溝 3250）の北肩に掘られており、鎌倉時代の楊梅小路南側溝に該当する可能性がある。この場合、宅地はさらに道路側に拡張されたことになる。

甕群1（巻頭図版3-1、図版20、図8・9）中央部の南半、東西約13m、南北16m以上の範囲で甕据付穴を多数検出した。穴はいずれも円形で、直径は約0.75m、深さ0.35mほどあり、0.9m前後ではほぼ等間隔に並ぶ。穴の並びは、心が通るものと通らないものがある。直線的な配置でないことから、甕据付穴には複数の単位があり、この場所で据付けを繰り返した可能性も残るが、明確なまとまりは見出せない。ここでは全ての据付穴が同時に存在したと仮定して解説する。

甕据付穴は、東西方向に16列、南北方向に19列が復元できる。単純にかけ算すると、総数304基となる。また、穴の底部・肩部下には別の甕据付穴が重複しており、これらを約60基検出した。この結果、甕据付穴として認識できた穴は364基である。

甕据付穴の底部には陶器甕の底部・体部片が残存するものが12基みられた。北端列で5基（土壙1977・2056・2057・2416・2579）、西端列で3基（土壙2559・2149・2483）、南壁沿いで4基（土壙2369・2377・2394・2049）である。北端列・西端列に甕が残存することは、建物の壁付近に据えられていた甕が残存したことを想定させる。また、このことは調査区の南壁付



写真2 土壙 1712 甕の出土状態（西から）

近に建物の南壁があったことも想定させる。現地に残存した甕はすべて常滑甕であり、操業が停止される直前まで据えられていた甕である。図9では、このうちの6基（土壙 2049・2057・2149・2369・2483・2579）の甕出土状態を図示した。ほとんどが底部周辺のみであり、穴底からやや浮いた状態で出土している。

甕群を覆う上屋構造については、中央部から南半部にかけて礎石が約 2.8 m 間隔で並んでお

り、建物に伴う礎石列と判断できた。このうち柱筋として復元できたものは、東西方向が5列（図版 20 の列 1～列 5）、南北方向が6列（同列 6～列 11）である。これらの礎石列は、列 2 と列 3、列 6 と列 7・列 8 が近接するように、すべて同時期の礎石列とは思われない。また、甕据付穴が埋まった上に据えられた礎石もみられ、甕据付穴との間に重複関係があったことも確かである。

残存する甕底部は穿孔されており、人為的に破碎されたことが推定できた。このことは、甕群の終焉を考える上で重要な所見である。これらは、北東隅で甕体部がまとまって出土した土壙 1712、北辺部で残存していた土壙 1977・2056・2057・2416・2579、南西部で残存していた土壙 2369・2483 など観察された。また、土壙 2054・2077・2085・3271・3373・3390 から出土した甕においても、破片状態ながら同様の穿孔跡が観察できた。穿孔は、先端が鋭利な器具で内面側から打撃が加えられている。建物の壁付近の甕が残存したことを先述したが、それらの甕はほとんどが打撃を受けて壊されていたことになる。壁に近かったため掘り出すことができず、そのため穴を穿つことで破棄したのであろう。土壙 1712 では口縁部を下にした状態で常滑甕が出土した（写真 2）。この個体には体部に穿孔があり、掘り起こされた後に破壊された例と考えられる。

以上の甕据付穴からは、平安時代から戦国期までの土師器・瓦器・陶器が出土した。

甕群 2（図版 97、図 10・11）甕群 1 の北西部に位置する。東西 3.8 m、南北 5.5 m の範囲に甕据付穴が集中することから想定した。北西隅を土壙 2633、南西隅を土壙 2280、東端列を土壙 2662 として範囲を復元した。甕据付穴は、南北方向に 6 基、東西方向に 4 基ないし 5 基あったとみられるが、中央部は江戸時代の井戸などで攪乱され、東半も室町時代の井戸 3221 が掘られている。甕据付穴は甕群 1 ほど整然と並んでいない。元位置をとどめる甕は 2 基ある。土壙 2157 には備前甕の底部が、土壙 2662 には備前甕の体部下半・底部が残存する。土壙 2639 からは常滑甕の体部片が廃棄された状態で出土したが、これは甕据付穴でなく甕を廃棄した穴と判断できた。甕群の所属時期については、土壙 2662・2157 の備前甕が 14 世紀後半と推定できるが、土壙 2639 の常滑甕は、12 世紀代に遡る可能性があり、甕群 2 で使用された甕であったか疑問が残る。土壙 2716 の下部で井戸 3221 を検出した。この井戸は 14 世紀中頃には埋没しており、甕群 2 はその後設置されたことになる。その他、甕据付穴の規模が大きく間隔が広いこと、甕群 1 にみられた底部穿孔がここでは認められなかった点も、違いとして指摘できる。

以上、甕群1・2について説明したが、この2箇所以外にも甕据付穴らしき遺構が存在することを指摘しておく（図版8・9のA・B・C）。（A）は甕群2の真南2.5mに北端があり、東西5基、南北4基の穴からなる。西半は比較的整然と穴が並んでいるが、東半は列が揃わない。穴の規模・形状は甕群1・2に類似するが、甕自体は残存しない。穴からの出土遺物は14世紀代のものが多い。（B）は（A）の南西側、Y=-21,904の南壁にかかる範囲で検出したもので、東西4基分、南北3基以上の穴が並んでいた。穴から甕の破片は出土していない。出土遺物は13世紀代のものが多い。

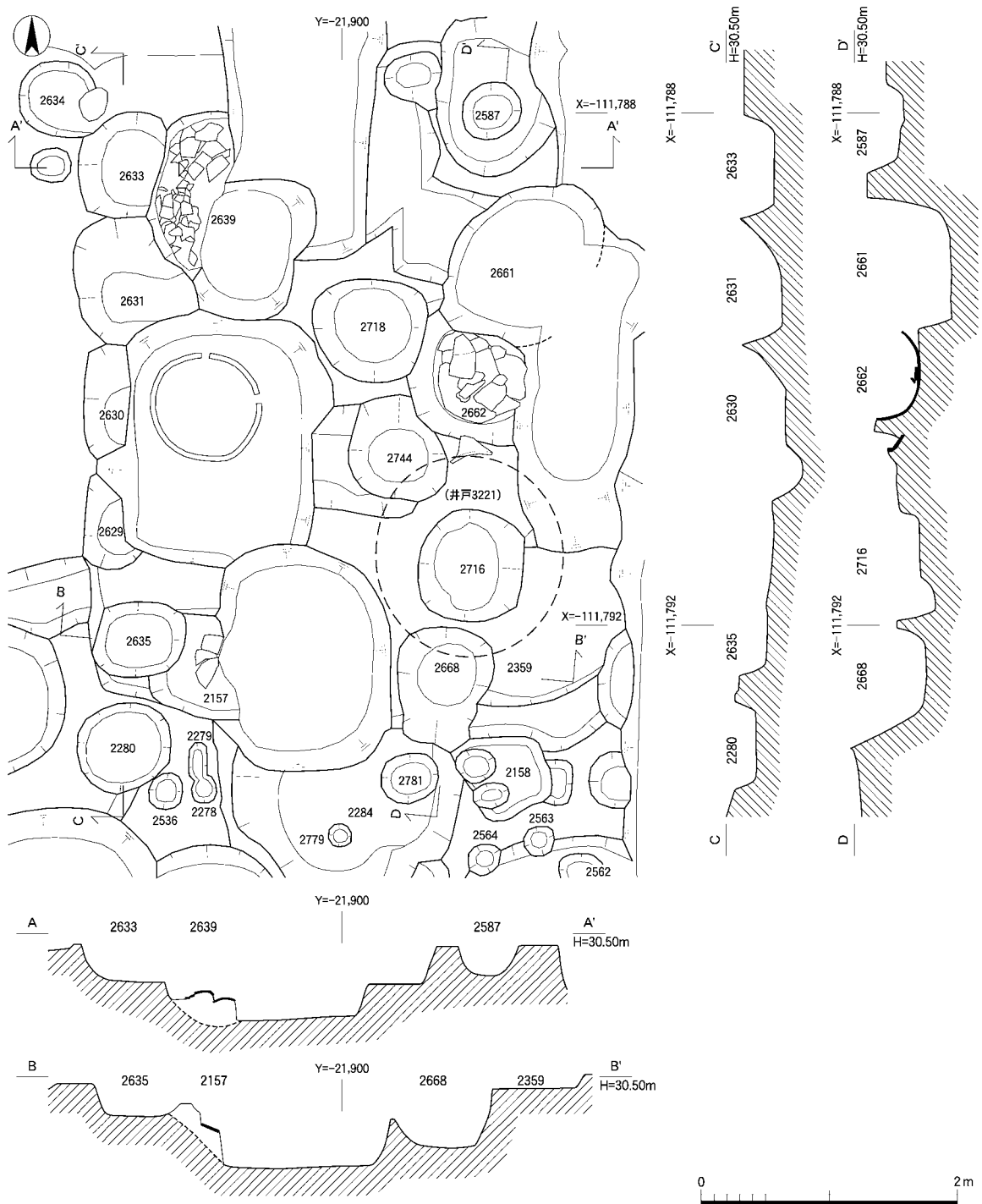


図10 甕群2実測図（1：50）

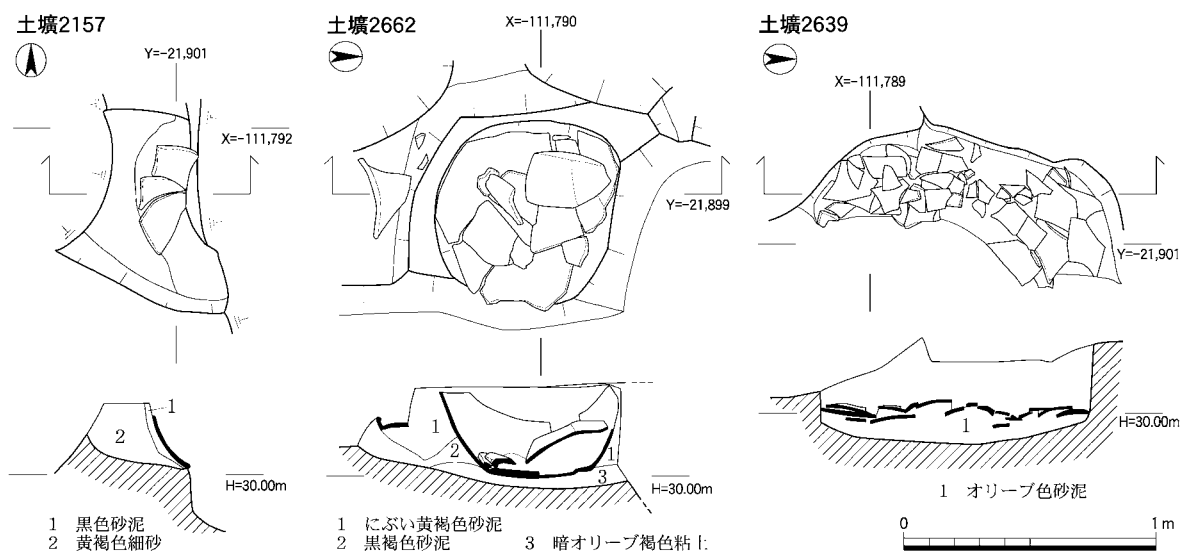


図 11 甕群 2 埋甕・甕の出土状態 (1 : 30)

(C) は甕群 1 の真東約 5 m に小土壌が集まる箇所である。東西方向に穴が連続するが、まとまりを欠いている。なお、ここより北々東約 5 m の地点には、常滑甕が 1 基据わっていたが、関連性は不明である (埋甕 2851)。

井戸 23 基が該当する。時期別の内訳は、13 世紀に属するものが 8 基 (北西より、井戸 2680・3127・2745・2650・3520・2345・3312・1982)、14 世紀に属するものが 5 基 (井戸 2617・2712・2543・3221・3600)、15 世紀に属するものが 7 基 (井戸 2768・2700・2746・2721・2670・2335・2075)、16 世紀に属するものが 3 基 (井戸 1385・2290・1751) である。

楊梅小路では、北築地想定線の南側に 3 基、南築地想定線上に井戸 2768 が掘られるが、路面中央部には井戸は掘られない。また全体の分布は、南西端に密集し、中央から東半部はまばらである。四行八門制の関係では、西一行・西二行境界、西二行・西三行境界と楊梅小路南築地想定線の交点付近には、井戸がほとんど掘られないことが指摘できる。

井戸掘形は方形・隅丸方形・不整円形・円形を呈するものがある。方形・隅丸方形のものは木枠組み、円形のもの石組みの井筒をもつ。掘形の規模が大きいものは直径 2.5 m 程度、小さいものは直径 1.5 m 程度である。井戸底はすべて砂礫層に達しており、このため木枠の残りは良くない。

石組み井戸は 6 基 (井戸 2768・1385・2075・3600・1751) ある。このうち、底部に木枠を組むものが 3 基 (井戸 2768・1385・3600)、曲物 (痕跡) を入れるものが 1 基 (井戸 1751) ある。方形の木枠組み (痕跡) をもつものは 6 基 (井戸 2680・2670・2745・2617・2650・1982) ある。また縦板を円形・多角形に組むものが 2 基 (井戸 2721・3221) ある。その他、素掘り状態で井筒の内容が判明しないもの (井戸 2786・2700・2746・3127・2712・3520・2543・2335・2345・2290・3312) もみられた。井筒の変遷についていうと、13 世紀代の井戸は方形木枠組みであり、14 世紀代になると石組み下部に木枠を据えたものが登場し、15 世紀にかけて一般化するようである。

井戸 1982 (図版 16・95- 2) 北壁にかかり検出した。方形の横棧縦板組の木枠をもつ。横棧は下から 3 段目まで残存する。掘形は隅丸方形であるが、木枠は中心をはずれて構築される。

井戸 2745 (図版 16・95- 3) 南西隅で検出した。掘形は隅丸方形で、底部には方形の木枠が残存する。木枠は最下段の横棧、ならびにその外側の縦板が高さ 0.3 m 程残存する。

井戸 3600 (図版 95- 4) 北壁にかかり検出した石組み井戸である。石組みの内径は 0.8 m である。底部には横棧が方形に据えられる。

井戸 1385 (図版 16・98- 1) 南西隅で検出した石組み井戸である。石組み底部には方形の木枠を埋め込み、水溜めとしている。

井戸 2721 (図版 98- 2) 西端で検出した。掘形は隅丸方形で、底部中央には縦板を桶状に組んだ痕跡がみられた。

井戸 2768 (図版 98- 3) 西壁沿いで検出した石組み井戸で、底部には幅 0.3 m の横板を方形に組み、水溜めとする。石組み内から 15 世紀代の遺物が出土した (図版 40)。

井戸 1751 (図版 98- 4) 東半で検出した石組み井戸で、底部には曲物の痕跡が残る。

井戸 2617 (図版 16) 南西隅で検出した木枠組み井戸である。掘形は隅丸方形で、底部には縦板が 0.3 m ほど残存する。

井戸 2075 (図版 17) 中央部の南半で検出した石組み井戸である。小さ目の河原石を乱雑に積み上げる。底部には曲物などの水溜め施設はない。

井戸 3221 (図版 17) ほぼ中央部で検出した木枠組み井戸であり、先述した糞群 2 の下部に位置する。掘形は円形で、検出面から 0.7 m 下で縦板の木枠を検出した。縦板は痕跡のみであるが、幅 0.2 m、長さ 0.5 m まで残存する。全体は 14 枚で構成され平面形は多角形を呈する。

集石 土壌内に礫が詰められた遺構で、7 基ある。北西部より、集石 2568・3200・2311・2273・3058・3060・2252 である。これらは、柱穴程度の規模をもつもの (集石 2311・2273)、小土壌の内部に礫が入れられたもの (集石 2568)、長さ 2～3 m の土壌内部に礫が入れられたもの (集石 3058・3060)、広範囲に礫が広がったもの (集石 3200)、井戸状の穴の内部に礫が入るもの (集石 2252) などに分類できる。また、溝 2678 としたものの内部にも礫が詰められていた。

埋納 1697 (写真 3) 中央部の南壁沿いで検出した。瓦器羽釜を据えた上には口縁部を覆うかたちで石材を乗せる。羽釜内部中位には土師器皿を蓋状におく。江戸時代後期に盛行する胞衣壺の古い形態であろう (図版 40)。

埋納 1864 中央部の南壁沿いで、先述した埋納 1697 より 1.4 m 南東で検出した。瓦器羽釜内に土師器皿を蓋として伏せており、埋納 1697 と同じ状況がみられた (図版 40)。

埋納 2729 (図版 24) 南西部で検出した。径 0.35 m の不整円形を呈する。深さ 0.15 m あり、底には 13 世紀に属する土師器皿が内面を上にして 8 枚以上、置かれた状態で出土した。

柱穴群 糞群 1 の西側と東側で検出した。小規模な柱穴が密集しており、掘立柱建物が存在したことは確かである。柱穴は直径 0.4 m、深さ 0.3 m ほどであり、底に礎石を据えたものもみられた。



写真3 埋納 1697 (左は南東から、右は取り上げ後)

柱筋として数筋が復元できるが、建物の規模・構造までは復元できない。

土壇 各所に掘られるが、比較的規模の大きなものは、甕群 1・2 や柱穴群の外側で掘られている。土壇の規模は、後述する桃山・江戸時代の土壇に比べると小規模である。土壇 2286・2672・2753 などから、鎌倉・室町時代の土器類がまとまって出土した。(図版 39)

土壇 2286 (図版 25) 南北 2.5 m、東西 1.0 m の楕円形を呈する。検出面から 0.25 m 下で 13 世紀に属する土器類が廃棄された状態で出土した。

整地層 この第 4 面上には厚さ約 1 m に及ぶ整地層が、楊梅小路以南のほぼ全域に堆積していた。今回は小型ショベルで掘り下げたが、整地層中からは 15 世紀から 16 世紀までと、江戸時代の遺物が含まれていた。江戸時代の遺物については、遺構中の遺物と判断できたが、15・16 世紀の遺物は、整地層の下限を考える上で指標となる遺物と考えられる。また整地層からは甕の破片が非常に多く出土した。常滑甕と備前甕があり、常滑甕が圧倒的に多い。甕群 1 に設置されていた甕が破壊された後、層中に混在したものと考えられる (図版 42)。

5. 桃山・江戸時代前期の遺構 (第 3 面、図版 10・11・99)

第 4 面を覆う整地層上面で検出した遺構群である。桃山時代から江戸時代前期に属する。実年代では 16 世紀末から 17 世紀代の遺構を中心とする。門 3650、建物 3651、土蔵 1 基、井戸 22 基、石室 2 基、集石 14 基、埋甕 1 基、埋納遺構 1 基、柱穴多数、土壇多数などがある。図版 10・11 では桃山時代のものを赤色、江戸時代前期のものを黒色で示した。

楊梅小路は現在の場所に移動しており、調査地は町家内部となっている。町家境については、後述する第 2 面、第 1 面の復元案を参考にしつつ、合致しない箇所については、遺構の重複をもとに新たな復元案を提示した (第 5 章第 1 節第 4 項で解説)。たとえば、X=-111,784 にあったかつての背割り線上では、土壇 1477・1418・1400・1336 などが掘られているため、当時の背割りは若干南にあったと考えた。

門 3650 (図版 21・99-2) 中央北東寄りで検出したもので、穴底には長さ 0.5 m ほどの礎石が 3 個 (北西は残存せず) 据えられていた。礎石間は東西 4.15 m、南北 1.95 m あり、北柱筋が想定される背割りと一致すること、北側の町家 G の範囲は攪乱が少ないことから、この範囲を南北

に出入りしたものと考えられる。

建物 3651 (図版 21・100- 2) 東端で検出した。東西 1 間以上、南北 4 間以上あり、南端・東端は未確認である。柱材は残されていないが、柱の周囲に石を巡らせており、柱部分は明瞭に判別できた。柱間は南北方向が 1.12 m から 1.25 m まで、東西方向は北が 1.2 m、南が 1.1 m ある。南北方向と東西方向は直交せず、東西方向は東で北に振れる。

土蔵 1414 (図版 22・100- 1) 南西隅で検出した。方形で一辺 2.4 m とやや小型である。基礎の溝には河原石が詰められていたが、内側にも堆積していた。

井戸 22 基が該当する。北西方向から、井戸 2751・1533・2666・2542・2398・2313・2500・2300・1420・2130・1117・1872・3016・553・1644・1422・1300・1417・1306・992・3513・1513 である。掘形はすべて円形で、井筒の構造が判明したものは、すべて石組み井戸 (井戸 2751・1533・2666・2542・2398・2500・553・1306) である。底部に方形に木柵をもつもの (井戸 2751・1533・2542・2398・2500・1644) もみられた。これらには、横棧を方形に組んだだけのもの (井戸 2751・2398・1644) と、横板を方形に組んで水溜めとしたもの (井戸 1533・2542・2500) がみられた。また、井戸 2751・2500 の木柵は方位が座標に対して斜めであった。素掘り状態の井戸 (井戸 2313・2300・1420・2130・1117・1872・3016・1422・1300・1417・992・3513・1513) も、石組み井戸の石が抜かれた例と判断できる。

井戸の分布状況を列挙する。南西隅には石組みをとどめた井戸、中央の南半には石が抜かれた井戸が、それぞれ集合する傾向が指摘できる。また東西に一定間隔で並んでいる点も指摘できる。X=-111,797 付近では、西から井戸 1533・2666、2313・2500、1420、2130、1117・1872 の 8 基が掘られ、これは 5 グループに区分できる。X=-111,804 付近でも、井戸 2542・2300・553 の 3 基が掘られている。北壁に沿っては、井戸 2751・1422・1300・1306・3513 が掘られており、同じ傾向といえる。南半部に掘られた井戸は、鍵屋町通に間口を向けた町家の井戸、北壁沿いに掘られた井戸は、楊梅通に間口を向けた町家の井戸とみられる。

井戸 2542 (図版 17・図版 105- 2) 西半の南壁沿いで検出した石組み井戸である。石組みの底部には横板を方形に組んで水溜めとしている。石組みの積み方は乱雑であり、壁は上方でやや開く。

井戸 2398 (図版 17) 南西部で検出した石組み井戸である。底部は比較的浅く、木柵の横棧を方形に組んだものが残存する。

井戸 1306 (図版 17) 東半の北壁沿いで検出した石組み井戸である。底部に木柵の施設はみられなかった。

井戸 2751 (図版 17) 北西隅で検出した石組み井戸である。石組みの底部には板を、座標に対して斜め方向に敷いている。掘形は底部付近が膨らみ、袋状を呈する。

井戸 1644 (図版 105- 1、図 12) 南東部で検出した井戸であるが、石組みは完全に抜き取られていた。井戸埋土の中位付近から鹿骨が廃棄された状態で出土した。鹿骨は前肢・後肢・その他の部位があるが、一頭分は揃わない。井戸底部には方形に組まれた横棧が残存していた (付章 2 の第 2 節参照)。

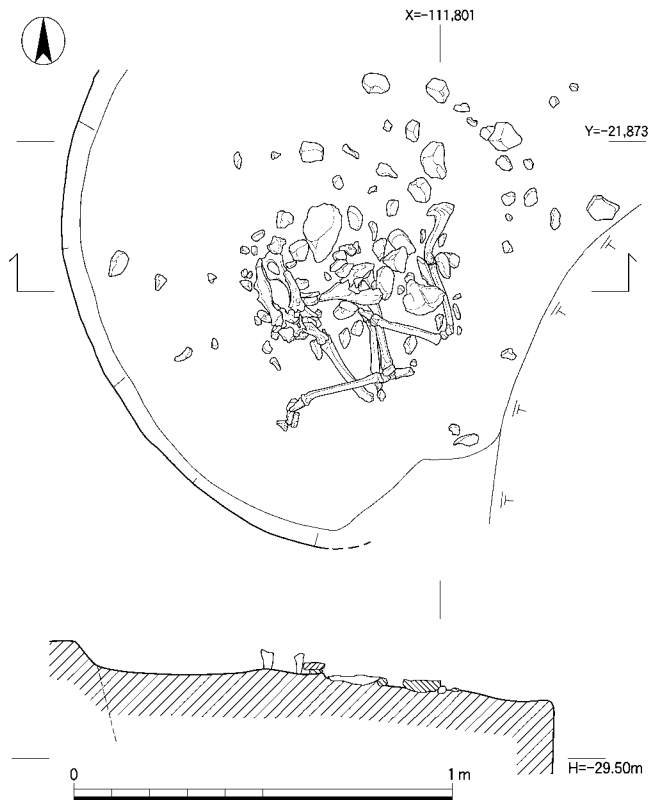


図12 井戸1644 鹿骨出土状態 (1:20)

石室1500 (図版22・100-3) 河原石を長方形に積み上げたもので、内法長1.5m、幅0.9m、深さ1.4mある。明確な石室はこの1基のみであった。17世紀代の遺物が出土した (図版48)。

石室1365 南東部で検出した。北辺と南辺の石が一段のみ残存する。南辺の方が残り良く、長さ1.4mある。南北幅1.65mあり、東の攪乱肩から約2mで掘形を検出したため、方形であったと考えられる。

集石 14基が該当すると考えられる。北西から、集石1279・931・932・1449・1289・1601・1568・1640・1612・1645・1643・1735・1316・1544である。掘形内部に河原石を詰め

たものであり、規模・形状で分類すると、長方形で深さがあり、礫が厚く入れられるもの (集石931・932・1449・1289・1568・1735・1544) と、不定形の土壌内部に礫を入れたもの (集石1279・1601・1640・1612・1645・1643・1316) がある。長方形を呈するものは、長軸を東西方向に揃えるもの (集石931・932・1289・1735・1544) と南北方向に揃えるもの (集石1449・1568) がある。これらは町家内での配置によるためであろう。

集石931・932 (図版23) 西端で検出した。北側に集石931、南側に集石932が東西方向に並列する。両方とも長方形を呈する。集石931は長さ1.65m、幅1.2m、深さ0.6mあり、内部の礫は大小のものが混じる。集石932は長さ2.1m、幅1.15m、深さ0.35mあり、内部にはやや大型の礫を入れる。底部は集石932の方が浅い。

集石1735 (図版23) 南東隅部で検出した。東西方向に長軸をもつ。長方形で、長さ1.7m、幅0.9mある。深さ0.9mあり、検出した集石では最も深い。底部は断面U字形を呈し、礫は底部まで詰まる。

集石1289 (図版23) 中央の南西寄りで検出した。東西方向に長軸をもち、長方形であったとみられる。長さ1.8m以上、幅1.1m、深さ0.3mあり、底までぎっしり礫が入る。

集石1568 (図版23) 中央の東寄りで検出した。南北に長い楕円形を呈する。長さ1.5m、幅0.95mある。深さは0.6mあり、集石1735に次いで深い。底部は断面U字形を呈し、底まで礫が詰まる点も集石1735に類似する。

集石1316 (図版23) 北東部で検出した。径1.2m前後の不整形円形を呈する。深さ0.3mあり、

礫は底部からやや浮いた状態でまばらに入れられる。

集石 1449(図版 23・100- 1) 南西隅で検出した。南北方向の長方形を呈し、長さ 1.65 m、幅 0.85 m、深さ 0.25 mある。平面形は集石 1735 に類似するが、それよりやや浅い。

埋甕 377 南西隅に検出した備前甕の底部であるが、口縁部は欠損している(図版 65-5)。

埋納 1413(図版 24) 中央部の南東寄り、集石 1640 の南東で検出した。径 0.4 m、深さ 0.12 mあり、底には礫が敷かれている。内部より備前壺 1 個と瀬戸・美濃系の菊皿 2 枚が重なった状態で出土した。

土壙 全域で多数検出した。以下では主に、断面図を作成したものを中心に解説する。

土壙 1845(図版 25) 東半で検出した。南北に長い楕円形を呈する。長さ 1.75 m、幅 1.2 m、深さ 0.3 mあり、底部よりやや浮いた位置で土師器皿が多数出土した。

土壙 1159(図版 26) 中央やや南で検出した。不整円形を呈する。断面図作成箇所幅 3.0 m、深さ 1.6 mある。底部はU字形を呈する。埋土は 10 層に分層できた。上部の 4 層は土壙を整地した層であり、下部は黒褐色を呈する泥・砂層がレンズ状に堆積していた。

土壙 1232(図版 26) 北西隅で検出した。南北に長い楕円形で、長さ 4.2 m、断面図作成箇所幅 2.9 m、深さ 1.5 mある。底部はほぼ平坦である。埋土は 11 層に分層でき、中央が凹んだレンズ状堆積がみられた。上部の 3 層には炭が少量、下部の(8・9)には炭が多く含まれていた。

土壙 1304(図版 26) 西半の北壁寄りで検出した。一辺 2.7 m程の正方形を呈し、断面図作成箇所幅 2.9 m、深さ 1.1 mある。底部は東半が深く掘られる。埋土は 11 層に分層でき、各層ともほぼ水平堆積であった。

土壙 1313(図版 26) 中央の北東寄りで検出した。東西方向の堀状の遺構で、長さ 4 m以上ある。断面図作成箇所幅 2.9 m、深さ 1.7 mあり、底部はV字形を呈する。埋土は 9 層に分層できた。上部の 3 層は土壙を整地した層、底の(9)には泥土が多く堆積していた。

土壙 1970(図版 26) 中央の北東寄りで検出した。南北に長い不整円形を呈し、長さ 2.8 m、断面図作成箇所幅 1.75 m、深さ 1.4 mある。底部は平坦である。埋土は 8 層に分層でき、レンズ状堆積がみられた。上部の 3 層は土壙を整地した層、下部の(7・8)は粘質土であった。

以上の断面図を掲載した土壙については、規模と埋没状況に共通性があることが指摘できる。規模は幅 2.9 m、深さ 1.7 m前後であり、埋土は 10 層程度であること、埋土は上半部が整地のために入れられた層であり、土壙の埋土はレンズ状に堆積することである。その他、門 3650 の南東部には土壙 1313・1545 があるが、これらは底部がV字形に掘られた堀状の遺構であり、門の南東部に掘られている点も留意される。

6. 江戸時代中期の遺構(第2面、図版 12・13・101)

焼土などを排除した後に検出した遺構群で、江戸時代中期、実年代では 18 世紀を中心とする。町家境の施設である石垣・礎石列、町家内部では、小礫敷きの路面、土蔵 3 基、石組み・瓦組みの溝、井戸 9 基、集石 5 基、埋甕 8 基、胞衣壺 2 基、炉 7 基、竈 1 基、瓦組 1 基、柱穴多数、土壙多数

などがある。

町家の範囲については、明治9年(1876)に作成された地籍図と遺構の状況から、町家Aから町家Iまでを設定した。ただし、地籍図作成段階では尚徳小学校が開校していたため、小学校の範囲を町家A・Bとし、遺構の状況から、町家Aを3区画、町家Bを4区画に細分した。地籍図に近い状況が示されるのは第1面であるが、この第2面も基本的な差異はない。ただし町家A-1、町家A-2境界については、第1面で想定した位置より東に約3.5m移動させ、町家Hも、H-1・H-2に二分するのが妥当と考えた。

町家境界施設 町家を区画する施設には、石垣・礎石列・漆喰列がある。方向は、東西方向と南北方向であるが、大部分は後述する第1面と同じ位置にある。この面で検出したものは、第1面で検出したものの下部とすることができる。北西から、礎石列1002A・B(南北方向)、石垣555(東西方向)、石垣1214(東西方向)、石垣3630(南北方向)、礎石列3645(南北方向)、石垣3647(東西方向)、漆喰列3631(東西方向)、石垣・礎石列3646B(南北方向)がある。

礎石列1002A・B(図版18、写真4-5) 町家Cと町家A-1の境界にある礎石列である。2列あり、西側をA、東側をBとした。Aは長さ7.9mある。南端より1.5m分は石垣となる。石の面は東を揃える。また北端より2m以南は礎石の間隔が密となり、礎石の配置換えがあったことが想定できる。Bは礎石3基からなり、長さ5.3mある。Aは町家C、Bは町家A-1に伴う施設で、同時に存在したとみられる。第1面ではこの上部に礎石列556が構築される。

石垣555(図版18・104-2) 町家B-2の南(裏)側に築かれた石垣である。南に石の面を揃えており、東端は町家A-1と町家A-2の両方にまたがる。長さ7.8mあり、3段積みで、高さ0.55mまで残存する。石垣上部は第1面で検出している。

石垣1214(図版19) 町家A-2と町家B-3の境界に築かれた石垣である。長さ3.25mあり、石は1段のみ残存する。石の面は北に揃えられており、町家A-2側から築かれた石垣といえる。

石垣3630(図版19、写真4-8) 町家B-3と町家B-4の境界に築かれた石垣である。石の面を東に揃えており、町家B-3に伴う石垣である。長さ5.7mあり、石は1段のみ残存する。

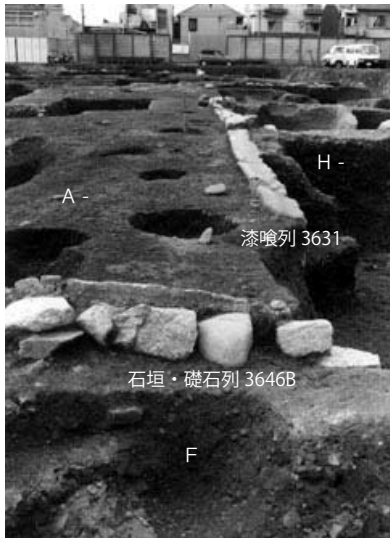
礎石列3645 町家Gと町家H-1の境界に築かれた礎石列である。大きめの礎石が3基あり、礎石間の距離は北が0.65m、南が0.85mである。

石垣3647(図版19、写真4-3) 町家H-1と町家A-3の境界に築かれた石垣である。南に石の面を揃えており、町家H-1に伴う石垣とみてよい。長さ3.7mあり、石は2段目まで残存するが西半は残りが悪い。

漆喰列3631(図版19、写真4-1・4-2) 町家H-2と町家A-3の境界施設であり、漆喰を塗り固めて壁状とする。南に面を向けており、町家H-2に伴う施設とみてよい。長さ4.8m、高さ0.25mまで残存する。上部構造は不明である。

石垣・礎石列3646B(図版19、写真4-1・4-9) 町家Fの西端を区画する施設である。上部をA、下部をBとした。長さ5.4mあり、北端と南端は礎石列、中央部は石垣の西面を漆喰で固めている。

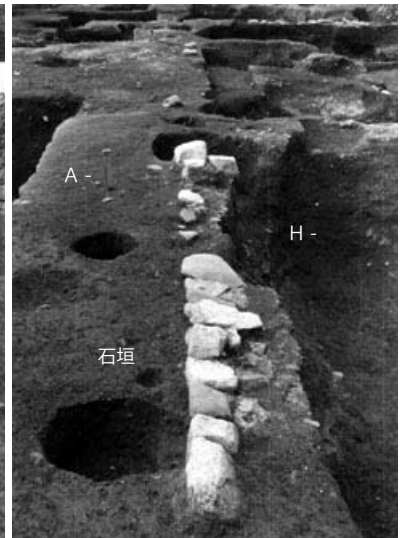
この他、町家B-2と町家B-3間には礎石が南北方向に2基、町家Gと町家A-3間には礎石



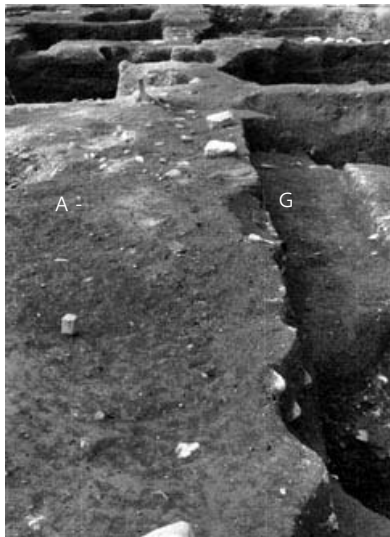
1 町家F・A-3・H-2の境界（東から）



2 町家A-3・H-2の境界（東から）



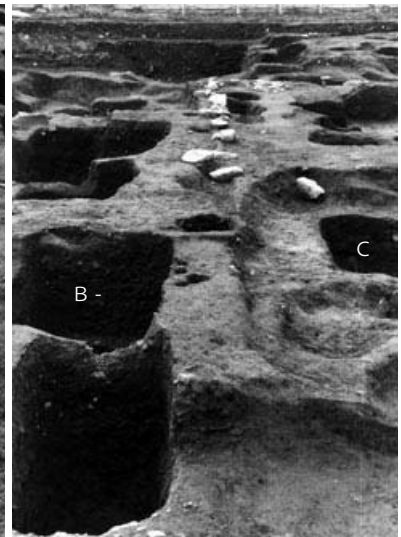
3 町家A-3・H-1の境界（東から）



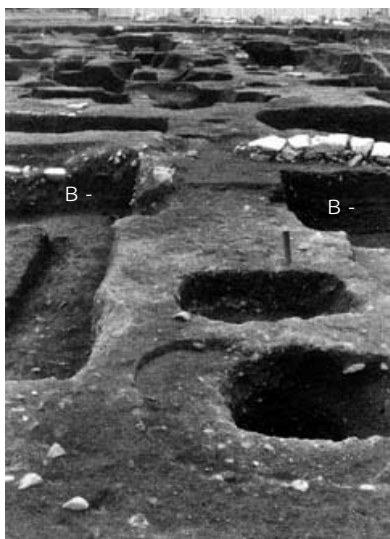
4 町家A-3・Gの境界（東から）



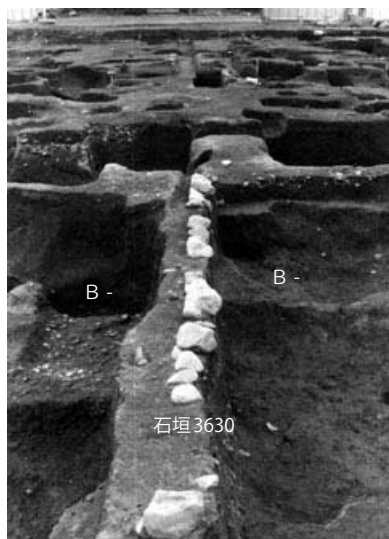
5 町家A-1・Cの境界（北から）



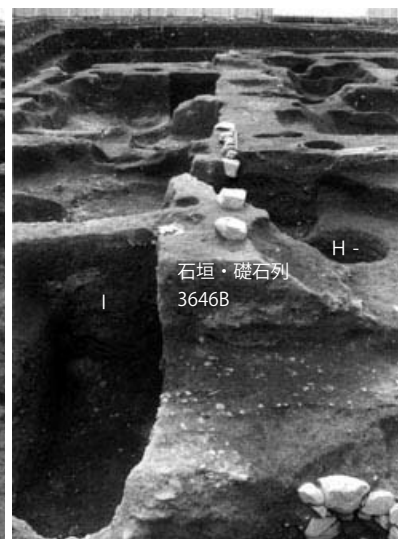
6 町家B-1・Cの境界（北から）



7 町家B-3・B-2の境界（北から）



8 町家B-4・B-3の境界（北から）



9 町家I・H-2の境界（北から）

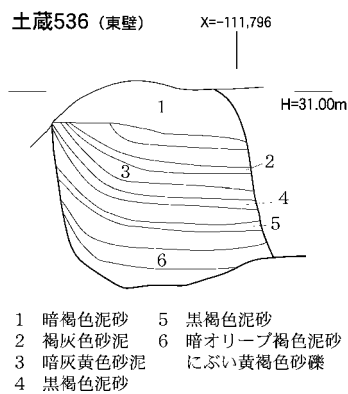
写真4 町家の境界施設



写真5 路面1160(西から)

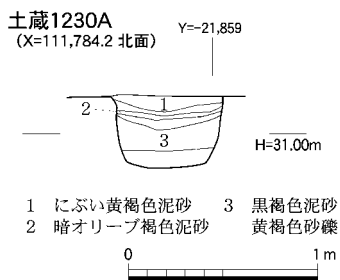
が東西方向に2基、町家H-1と町家H-2間には礎石が1基存在していた。

路面1160(写真5)小礫を薄く敷き詰めた路面状の遺構である。町家A-3の西端付近から始まり、東端は町家F内に及び、さらに北東方向に広がる。西端で幅約2mある。路面形成層から出土した遺物は17世紀代であるが、路面直上に掘られた遺構が19世紀代に属すること、町家A-3北東部の利用状況を考慮して、この



面に該当すると考えた。

土蔵536(図13)X=-111,796付近の東壁にかかり検出した。土蔵の基礎とみられる溝は、幅1.1m以上、深さ0.8mあり、粗砂と泥土層が交互に堆積し、11層以上に分層できた。土蔵基礎としては最も丁寧な仕事を施している。全体の規模・形状は復元できない。



土蔵1217 中央の北西寄りで検出した。町家A-1の北東隅で南北方向に建てられた土蔵である。南北6.1m、東西4.8mの規模をもち、四周に基礎部分の溝がめぐる。溝は幅0.7m、深さ0.45mあり、内部には泥土層と礫層が交互に入れられる。土蔵1234の東に沿う位置にある。

図13 土蔵基礎断面図(1:40)

土蔵1230A・B(図13)東壁のやや北寄りで検出した。土蔵基礎とみられる溝は、西辺で南北長約4mある。断面図作成箇所、幅0.6m、深さ0.4mあり、内部は砂礫・泥土が互層状を呈する(土蔵1230A)。また、西辺と考えた溝はさらに南約4mまで延長する。この付近に南辺を想定し、Aより先行する土蔵(土蔵1230B)を想定した。

溝1208(図版25)町家Gの南端で検出した石組み溝である。全長約2mで、溝幅は内法0.15mある。石は1段のみで両側に数個ずつ残る。町家Gから町家A-3に達していたと考えられるが、A-3側では削平されていた。

溝1209(図版25)町家A-3の北端、石垣3647の南側で検出した瓦組み溝である。全長約1.5mあり、うち1m分には瓦組み部分が残存していた。瓦組み部分の幅は内法0.11mあり、溝底には瓦を1列に敷く。両側にも瓦が1列立てられた状態で出土した。町家H-1から町家A-3に達する溝で、石垣3647の下は暗渠となっていたと考えられる。

井戸9基が該当する。北西から、井戸2786・1370・940・2317・1021・1022・946・383・1244である。分布状態はまばらであるが、北壁沿いと南壁沿いに集中するようにみえる。掘形はすべて円形で、石組み井戸であったと推定されるが、井戸2317・383以外は石が抜かれ

ている。井戸 1021 は縦抜の痕跡が残り、桶を積み上げた構造であった。

井戸 383 (図版 105- 3) 北東隅で検出した石組み井戸である。石組みは南西部の 5 段目まで残存する。

井戸 2317 北壁沿いの中央部で検出した。掘形の西側は破壊されるが、石組みは完存する。石組みは高さ 1.1 m まで残存し、乱雑に積まれている。底部には横板を方形に組んで枳としたものが据えられる。

集石 不定形の土壌内部に河原石を詰め込んだもので、この面では 5 基が該当する。北西から、集石 1348・1240・924・1086・359 である。

集石 924 (図版 23) 西半で検出した。南北に長い楕円形を呈し、長さ 1.5 m、幅 1.0 m、深さ 0.15 m あり、底部よりやや上に小礫が入れられる。

集石 1240 (図版 23) 西半で検出した。南北に長い楕円形を呈し、長さ 1.0 m、幅 0.6 m、深さ 0.3 m ある。全体に小礫が入れられる。

埋甕 信楽産の大甕を直接地面に据え付けたもので、用途としては便所が推定できる。この面では 8 基が該当する。北西から埋甕 933・887・453・855・749・789・1095・862 である。中央から西半に多く分布し、すべて単独で据えられている。

埋甕 749 (図版 24) 中央の西寄りで検出した。深さ 0.6 m あり、口縁部まで残存する。内面に白色の残溶物が付着する。

埋甕 855 (図版 24) 中央の南西寄りで検出した。深さ 0.7 m あり、甕は 2 基が重複する。新しい甕 (A) の底部は、古い甕 (B) の底部より 0.14 m 浮いた位置にある。

埋甕 933 (図版 24) 北西隅で検出した。深さ 0.65 m あり、甕は口縁部が欠損する。

胞衣壺 土師質土器などの壺を直接地面に据え付けたものである。壺は蓋付きであるが、蓋の残存状態は悪い。この面では 2 基が該当する。

胞衣壺 741 中央の南西寄りで検出した。土師質土器壺が据えられるが、蓋を含む体部上半は完全に欠損している。

胞衣壺 791 (図版 24・106- 4) 中央のやや西寄りで検出した。信楽鉄釉壺を胞衣壺に転用したもので、体部径 0.2 m あり、胞衣壺としては大型品である。

炉 7 基が該当する。町家 A - 1 の西端に炉 514、北端に炉 600・601・602、町家 A - 2 の中央南東寄りに炉 832、町家 A - 3 の北東部隅に炉 605・606 がある。

炉 514 上半部は削平されており、底部がわずかに残存したものである。直径 0.36 m の円形の範囲が熱で赤く変質しており、中央の直径 0.2 m、深さ 0.05 m の範囲が浅い窪みとなって残存するが、壁面は存在しない。

炉 600～602 3 基とも残存状態は上記の炉 514 と同様である。円形を呈し、熱で変質した範囲の中央部が浅い窪みとして残存する。炉 600 が直径 0.25 m で深さ 0.05 m、炉 601 が直径 0.45 m で深さ 0.1 m、炉 602 が直径 0.3 m で深さ 0.1 m ある。この 3 基はきわめて近接するため、本来は単独で操業していたとみられる。ただし操業順序は不明である。

炉 832 西側は壊されており、底部が残存する。直径 0.5 m の範囲が赤く焼けており、その内側の直径 0.4 m で深さ 0.15 m の部分が炉本体とみられるが、壁面は残存しない。

炉 605・606 (図版 104- 4、図 17) 北西の炉 605 が南東の炉 606 を壊して造られている。2 基とも底部が残存するのみであった。炉 605 は直径 0.65 m の範囲が熱で赤変する。本体は、中心部の直径 0.4 m 程とみられるが、内壁自体は残存せず、底には壁面が破碎されて粒状となったものが堆積していた。炉 606 はさらに残りが悪く、炉本体の外側部分が残存する程度であった。

竈 1065 町家 A - 2 の南半で検出した。西端は壊されているが、南北約 3 m で、東西 2.6 m 以上の範囲に焼土面が広がる。竈本体は北端と南端に 2 基ある。ともに基底部分のみで残存し、それぞれ南北 0.9 m、東西 0.8 m 以上あり、西側に焚口をもつ。中央は土壌で破壊されているが、ここに 1 基を想定すると三連竈であった可能性もある。基底部分の北と南、ならびに東に柱穴が合計 5 基あり、竈を覆う上屋の可能性が留意される。

瓦組 760 (図版 25・106- 2) 町家 A - 2 の中央部で検出した、平瓦を縦方向に並べて地中に埋め込んだ施設である。南北約 2 m、東西 0.8 m の広がりがあり、北端と南端は平瓦を東西方向に、東端は平瓦を南北方向に埋める。建物の縁か、あるいは庭の意匠として造られたものであろう。

土壌 不定型なものが各所に掘られている。後述する第 1 面 (江戸時代後期) の土壌に比べると、大型のものは少ない。しかし、各町家ごとに格別規模の大きな土壌が掘られる点に注意される。町家 A - 1 での土壌 885・888・1234、町家 A - 3 での土壌 1105、町家 B - 3 での土壌 903 などである。また、X=-111.784 の背割り付近では、その北側に多くの土壌が掘られる。後期になると、南側には長方形を呈する土壌が連続して掘られており、対称的である。

土壌 1105 (図版 26) 町家 A - 3 の北東隅に掘られた大規模な土壌である。南北に長い隅丸長方形で敷地の隅に収まるかたちで掘られている。長さ 7.0 m、幅 4.5 m あり、底はほぼ平坦で、底面は長 4.5 m、幅 3.5 m の長方形に成形されている。東西方向の断面図作成箇所では、幅 6.0 m、深さ 1.85 m あり。土壌中央部は土壌 650 と完全に重複する。土壌 1105 の層序も、中窪みのレンズ状堆積がみられた。東壁に沿って杭の痕跡が残存する。(12) までは人工的に埋めた層序、それ以下は土壌内の埋土である。東西断面による観察では、東側から土砂が流れ込んで堆積したことがわかる。底面には杭穴が並ぶ。北辺で約 8 本、東辺で約 12 本確認した。間隔は、北辺で 0.3 ~ 0.5 m、東辺では 0.2 ~ 0.3 m 程で、ともに不揃いであるが、東辺の方が狭い。この杭穴は、壁面の崩落を防ぐ目的で施工された杭穴とみられる。南に階段が付設される。石積みであり、下から 3 段目まで残存する。石材の下には丸太が横に寝かされており、本体はこの丸太が横板を固定することで、階段が崩れるのを防いでいたと考えられる。この土壌は穴蔵 (地下室) として掘られ、その後ゴミ廃棄土壌 (土壌 650) となった。そして上面が整地され、上には炉が設置されたことが判明した。

土壌 1122 (図 14) 町家 B - 3 の南端に掘られた大規模な土壌である。検出面では不定形であったが、下部では南北に長い楕円形の土壌となった。図面作成箇所南北幅 5.1 m、深さ 1.7 m あり、埋土は 15 層に分層できた。上から 2 層目までは土壌を埋めた整地層であり、以下、砂泥層を中心

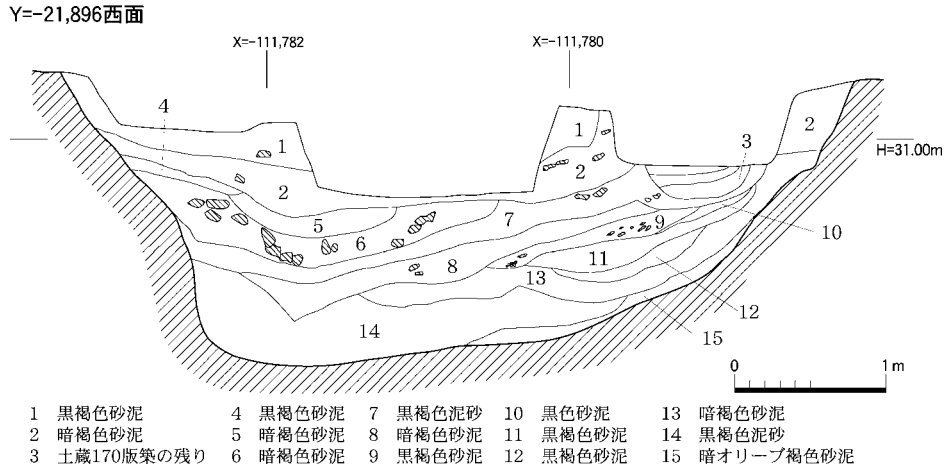


図14 土壌1122断面図(1:50)

に礫や粗砂が含まれる。南北方向の断面では、主に北から土砂が入られた様子が観察できた。

土壌1234 町家A-1の北西隅に掘られた大規模な土壌である。南北方向に細長い隅丸長方形を呈する。南北約7m、東西約4m、深さ約1.5mある。埋土は10層ほどに分層でき、上の3層は土壌を埋めた層、下半は土壌内堆積層で、南北断面では南に傾斜する層序がみられた。土壌埋没後、上には土壌885・888などが掘り込まれる。掘られた位置や規模から、町家A-3の土壌1105に該当するが、階段が付設されていないこと、底部に杭穴がないことなどから、当初からゴミ廃棄土壌として掘られた穴といえる。

土壌1260(図版25・102-3) 町家Cのほぼ中央部で検出した。南北に長い長方形土壌で、長さ1.6m、幅0.8m、深さ1.1mある。検出面より0.4m付近で石材とともに土師器皿、楕円形の曲物、瓦片、針金、釘などが面的な広がりをもち出土した。土壌の輪郭が二重であること、釘がその周囲にめぐることなどから、当初は木棺墓の可能性も考慮しつつ精査したが、墓としての確証は得られなかった。南東隅に置かれた土師器皿は口径20cmに達する大型品が半截され、完全に重ねられていた。

この他、東半ではアワビやサザエの貝殻が詰まった土壌(土壌908・1000・1271・1270・987・1340)を検出した。貝殻は腐食が進み非常に脆くなっている。土壌908を除くと、すべて町家Fの範囲内で検出している。北に接する町家Iでは第1面の土壌403から「小中居」と墨書した陶器皿が出土しており、貝殻が詰まった穴が集中することも調理に関連した施設を想定させる。

7. 江戸時代後期・幕末期の遺構(第1面、図版14・15・103)

中央部の南半では幕末期の焼土面が良好に保存されており、その上面で検出した遺構群を第1面とした。第2面で報告した町家遺構の後身であり、19世紀代を中心とする。ただし、中央部では第2面の調査時にも19世紀の遺構が残存しており、図版14・15では、第1面で検出したものを黒色、第2面で検出したものを赤色で示した。町家の境界では石垣・礎石列、路地の遺構、町

家内部では礎石建物、土蔵3基、穴蔵2基、石組みの溝、漆喰組みの溝・枅・槽、井戸42基、埋甕35基、胞衣壺22基、炉5基、竈4基、池3基、瓦組1基、土壇多数などがある。特に漆喰を用いた遺構が多い点が特徴である。

町家境界施設 検出した石垣・礎石列は、第2面で検出したものの上部に該当する。西端から、礎石列556(南北方向)、礎石列554B(南北方向)、礎石列554A(東西方向)、石垣555(東西方向)、礎石列3632(東西方向)、礎石列3649(東西方向)、礎石列3646A(南北方向)、礎石列3642(東西方向)がある。

礎石列556・554B(図版18) 町家Cと町家A-1の境界にある礎石列で、第2面の礎石列1002の上部にあたる。長さ8.0mあり、北端から1.7mまでは石垣状を呈する。この部分では石は2段まで積まれ、東に面を揃える。礎石の間隔は、北半では1m前後であるが、中央より南では0.8m前後とやや狭くなる。礎石列554Bは礎石列556の東に接する。長さ2.7mあり、礎石は4基からなり、北側の2基はやや大きい。北端の石から東に折れて礎石列554Aに連続する。

礎石列554A(図版18) 町家B-1と町家A-1の境界にある礎石列である。長さ6.0mあり、礎石8基からなる。礎石の間隔は0.9～1.0mある。西端で南に直角に折れ、礎石列554Bに連続する。

石垣555(図版18・104-2) 町家B-2の背後に築かれた石垣で、南は町家A-1と町家A-2の両方にまたがる。石の面は南に揃う。石垣は3段まで積まれるが、上部2段がこの江戸時代末期に積まれたと推定できる。

礎石列3632(図版19) 町家B-4・Gと町家A-3の境界施設である。礎石4基からなり、長さ4.0mある。礎石の間隔は約1mである。

礎石列3649(図版19) 町家H-1・H-2と町家A-3の境界施設である。礎石8基からなり、長さ9.4mある。礎石の間隔は1mから1.5mまでである。なお、この礎石列の下部は、西半が礎石列3647、東半が漆喰列3631であり、かつては町家の外壁が接していたことが想定される。

礎石列3646A 町家Fの西側を区画する施設で、上部をA、下部をBに区分した。Aは礎石4基以上からなり、長さ5.4mある。中央には礎石がない。北端1間と南端1間の間隔は約1mである。

この他、町家B-2と町家B-3間には礎石が南北に2基、町家Gと町家H-1間にも礎石が南北に3基存在する。これらも境界施設の残存部であろう。



写真6 路地3654漆喰面の叩き痕跡(東から)

路地 遺構としては以下の3筋が想定できる。

路地3654(図版104-1、写真6) 町家A-2と町家A-3の境界にあり、東端は漆喰組みの溝230に接する。幅約1mあり、河原石を敷き詰めて舗装した面が部分的に残存する。舗装面の下で漆喰の面を検出した。上面は火災を受けて硬化しており、叩き痕跡が明瞭に残されて

いた。

路地 3655 町家A - 1 と町家A - 2 の境界にある。先述の路地ほど遺構としては明瞭でないが、井戸 132・285・279 の3基が一直線に並ぶこと、礎石列があること、遺構面が高まりとして残ることなどから、幅約 0.8 m の路地が推定できた。想定位置には井戸 1299 が掘られるが、路地はそれを埋めて形成されたとみられる。

路地 3656 東西方向の背割りラインの南には、幅 6 m にわたる空閑地がある。北半では西から、土壙 817・841・708・753・614・407 などの比較的大きな土壙が掘られるが、町家A - 2 の北端、X=111,788 付近では東西の石垣があり、その北では、西に瓦列 537、東に瓦列 539 があることから、この部分が暗渠となって上が通行できたと考えられる。また、町家A - 3 の北東端でも東西の礎石列があり、南には瓦列 289 があるため、この上も通行できたと考えられる。

町家建物に伴う礎石 主に中央部に残存していた。特に町家A - 3 の北西寄りでは東西棟 1 棟分の礎石が残存し、礎石建物 3657 として復元した。それ以外では、東西方向と南北方向の礎石列が復元できただけで、建物としてまとめることはできなかった。これらの礎石列については、町家境の礎石列と区別する意味で、礎石列ア～カと呼称する。

礎石建物 3657 (図 15) 町家A - 3 の北西隅、漆喰組みの溝 230 に北と西が囲まれるかたちで建てられている。東西棟とみられ、東西 10.2 m、南北 4.3 m ある。1 間は 1.0 m 前後であるが、ばらつきもある。北端の 1 間は 1.0 m で、庇状に見えるが、その北(外)側には、石敷面、井戸 210、漆喰槽 36、埋喪 115、胞衣壺 284 が東西に並び、さらに北東隅にも石敷面があるため、ここまで屋根がかかっていたと判断できる。建物の南半には、井戸 157、漆喰槽 188・265 などがある。井戸 157 は同時に存在したかは判断できない。井戸 157 の西側には炭化した木材や瓦などが落下した状態でみられた。この建物は町家A - 3 の奥まった位置にあり、母屋とは離れた建物であったと考えられる。

礎石列ア 町家A - 1 の東端にあり、路地 3655 の西端をなす。南北方向の礎石列で、礎石 5 基からなる。全長 9.0 m で、礎石間は 1.0 ～ 1.2 m 前後である。路地の西端を画する塀の基礎と考えられる。

礎石列イ 町家A - 2 の北西部にある。東西方向の礎石列で、礎石 4 基からなる。全長 2.65 m あり、礎石間は 0.85 m から 1.1 m までである。西延長は礎石列アの北端と一致する。

礎石列ウ 町家A - 2 の西半にある。大きめの礎石 3 基が正三角形に残存する。このうちの東西 1 間を礎石列ウとした。礎石間は 1.1 m である。

礎石列エ 町家A - 2 の北半にある。東西方向の礎石列で、礎石 3 基からなる。全長 2.0 m で、礎石間は西が 0.9 m、東が 1.1 m である。

なお上記した礎石列イ・ウ・エは町家A - 3 の礎石建物 3657 と東西に並ぶ位置にあるため、町家A - 2 内での建物であった可能性もある。

礎石列オ 町家A - 2 の西半にある。南北方向の礎石列で、礎石 3 基からなる。全長 2.0 m で、礎石間は北が 0.9 m、東が 1.1 m である。

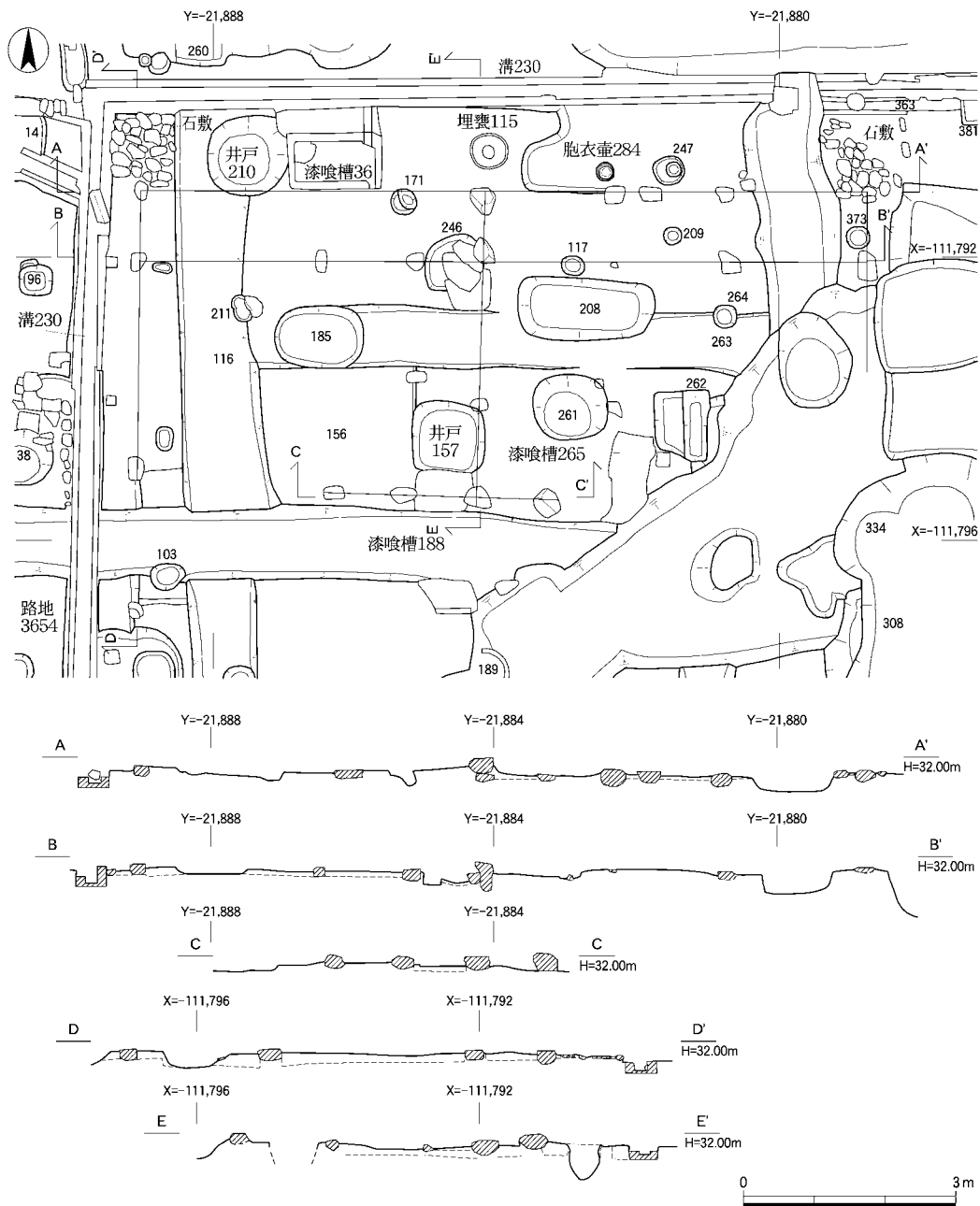


図 15 礎石建物 3657 実測図 (1 : 100)

礎石列力 町家 A - 3 の南西隅にある。南北 2 間以上、東西 1 間以上で、礎石 4 基からなる。礎石間は南北・東西とも 1.0 m である。礎石の規模が類似し、直角に折れることから、町家 A - 3 に伴う礎石建物の北西端とみられる。また東延長では、やや南に礎石 2 基が東西に並んでいるが、同じ建物のものか判断できない。

礎石列 3634 (図版 19・104- 3) 町家 F 内部にある。南北方向の礎石列で、礎石 7 基からなり、礎石の間隔は約 1 m である。礎石建物の一部とみられるが、町家境界の礎石列の可能性もある。

土間 礎石が残存する周辺には土間が残存していた。土間は泥土層からなる整地面で、堅く叩き締められており、火災を受けた部分は特に硬くなっていた。また、南壁沿いの中央部では炭化材が落下した状態で出土した。炭化材には木舞の骨組みがあり、火災で倒壊した建物の一部とみ



写真7 炭化材の出土状態（東から）



写真8 穴蔵 308 の階段（南西から）

られる（写真7）。

土蔵 3基（170・190・448）ある。長方形を呈し、すべて東西方向に長軸を置く。

土蔵 190（図版 22）町家B - 3の南端に位置する。地業の溝が周囲を長方形にめぐる。溝の外側で東西約6 m、南北約5 mある。一辺の溝は幅1.1～1.3 m、深さ0.6 mあり、内部には粗砂と砂泥が交互に入れられる。溝内の地業は各辺とも10層程度に分層できた。3基中最も規模が大きく、地業の仕事も丁寧である。

土蔵 170（図版 22）町家A - 2の北半に位置する。基礎の溝は外側で東西4.7 m、南北3.7 mある。一辺の溝は幅0.7 m、深さ0.35 mで、内部には粗砂と砂泥が交互に入れられる。溝内の地業は4層程度で、土蔵 190ほど丁寧でない。北辺には漆喰組みの溝と石垣が接し、その北側は路地3656と想定できるため、町家A - 2では最奥部にこの土蔵が設置されたことになる。

土蔵 448（図版 22）町家G - 3の南端に位置する。溝の外側で東西5.2 m、南北4.4 mある。一辺の溝は幅0.7 m、深さ0.3 m程であるが、溝内の地業は泥砂層が主体で、互層状の堆積はみられなかった。

穴蔵 365（図版 22）町家Cの南東部に位置する。一辺3.6 mの正方形を呈する。深さ0.7 mあり、埋土は6層に分層できた。南北断面でみると、北側から埋められたことがわかる。底部に礎石を据える。礎石は北辺を除く3辺にそれぞれ2基ずつある。礎石間の間隔は、西辺が1.8 m、東辺が1.7 m、南辺は半分の0.85 mである。

穴蔵 308（写真8）町家A - 3のほぼ中央部で検出した。南北約4 m、東西約3 mの不定形な土壙で、深さは約1.6 mある。東・西辺はともに弧状をなすが、特に東辺には階段が付設されており、階段の段差を緩やかにするための仕事と考えられる。階段は、高低差1.2 mを7段以上に削り込んで造り出している。また、この南に掘られた土壙 351の北東端にも、南に下る階段が造り出されていたが、遺構の大半は校舎による攪乱で破壊されていた。

溝 505（図版 25・104- 3）町家Fの北東部で検出した石組み溝である。全長約4 m、幅は内法0.2 mあり、石は1段目のみが残存する。溝底には漆喰を敷く。北半には泥溜め用の漆喰枡を設ける。枡は正方形で、内法は一辺0.45 m、深さ0.2 mあり、枡以南は真南に延び、井戸 506に流れ込むかたちで終了する。

漆喰組み溝・枅・槽 町家A - 2と町家A - 3の西半に残存していた。漆喰組みの溝230は、調査区中央で鉤型に東に折れ、町家A - 3の西と北を囲む。この溝は、町家A - 3の北東隅に造られた炉の施設からの排水を目的に造られた溝である（図43では溝609）。溝の東端には暗渠（瓦列289）が設置される。漆喰枅は溝の接続部に設置されており、現在のコンクリート製枅と同じ性格のものといえる。

漆喰槽は水溜め施設であり、町家A - 3の西半に多く残存していた。漆喰槽16・17は溝230の北側にあり、漆喰槽36は礎石建物3657の北で井戸210の東に接する。この3基は箱形を呈し、規模と形状が類似する。漆喰槽188・265は礎石建物内に位置する。町家A - 2内では漆喰槽180・184があるが、残存状態は良好でない。背割りの北にある漆喰槽25・233は、円形を呈する。

井戸 42基が該当する。第2面の8基に比べると、圧倒的に数が多いが、これは19世紀代の井戸をすべてこの面で扱ったためである。北西から町家ごとに示す。町家Cは2基（井戸3653・343）、町家Dは2基（井戸412・454）、町家Eは2基（井戸378・386）、町家A - 1は5基（井戸297・1299・132・285・279）、町家A - 2は9基（井戸154・723・105・1688・73・70・12・1722・595）、町家A - 3は15基（井戸65・210・157・575・108・101・552・568・557・523・567・593・318・319・287）、町家B - 1はなし、町家B - 2は1基（井戸255）、町家B - 3はなし、町家B - 4は1基（井戸3652）、町家Gはなし、町家H - 1は1基（井戸302）、町家H - 2はなし、町家Iはなし、町家Fは4基（井戸506・520・550・528）である。

掘形はすべて円形である。内部の井筒は、石組み、瓦積み、漆喰、縦板組みがある。石組み以外は新しく出現する形態である。瓦積み井戸は、井戸用に製作された平瓦を井筒としたもので15基ある（井戸1299・132・279・154・105・73・12・595・210・287・575・319・3652・378・528）。漆喰井戸は1基のみ（井戸3653）、縦板組み井戸は、板材を桶状に組んだもので5基（井戸108・552・523・567・593）ある。石組み井戸は1基（井戸302）のみであった。素掘り状態で検出した井戸も、いずれかの井筒をもっていたとみてよい。

井戸の配置には規則性が認められた。東西方向に並ぶものが多いが、これは町家内で井戸の掘られる位置が決められていたためと考えられる。南壁沿いのX=-111,806付近では、東西に井戸が3基並ぶ。西から井戸279—（5.8m=次の井戸中心までの距離）—井戸105—（4.4m）—井戸73である。町家Eの井戸386、町家A - 2の井戸595もほぼ同じ並びといえる。井戸595は路地3654を壊すかたちで掘られている。

X=-111,803付近にも井戸が東西に10基並ぶ。町家A - 1の井戸297から始めると—（4.5m）—井戸285—（4.5m）—井戸723である。さらに町家A - 3内でも井戸575—（4.5m）—井戸108・（557まで5.2m）—井戸568と井戸557—（557から3.7m）—井戸567—（4.4m）—井戸593が規則的に並ぶ。この他、X=-111,799付近で東西に4基（井戸132・101・318・319）、X=-111,790付近でも東西に5基（井戸154・701・210・287・520）が並ぶ。南北方向では、町家A - 1の東端に井戸279—（3.1m）—井戸285—（4.0m）—井戸132の3基が並ん

でいる。井戸列の東には路地 3655 があるため、敷地端に井戸が掘られたことになる。

井戸 302 (図版 17・105- 4) 町家H - 1 の東端で検出した石組み井戸である。掘形・石組みとも楕円形を呈する。井筒には、石とともに漆喰の破片が多用されている。また底部付近には石臼の破損品も利用されていた。底部は小礫を敷き、中央は一段低くなり、曲物を据えた形跡が残る。

井戸 287 (図版 17・105- 6) 町家A - 3 の北半中央部で検出した瓦積み井戸である。瓦は一周 10 枚で構成される。4 段以上残存するが、底は未確認である。

井戸 132 (図版 17) 町家A - 1 の東端で検出した瓦積み井戸である。瓦は一周 9 枚で構成される。5 段以上残存し、検出面から 1.75 m まで掘り下げたが、底は未確認である。

井戸 378 (図版 105- 5) 町家E の西端で検出した瓦積み井戸である。瓦は一周 10 枚で構成される。5 段以上残存するが、底は未確認である。

井戸 73 (図版 105- 7) 町家A - 2 の南壁沿いで検出した瓦積み井戸である。瓦は一周 9 枚で構成される。幅は同じながら、長さは 0.31 m と 0.14 m の 2 種類が用いられ、それぞれ目地が交互になるように積まれる。5 段以上残存し、検出面から 1.5 m まで掘り下げたが、底は未確認である。

井戸 347 (図版 105- 8) 町家C で検出した漆喰井戸である。廃棄が明治時代以後であるため、第 1 面では扱いを除外したが、漆喰井筒の内面に軒丸瓦 (実物) が塗り込められており、ここで報告しておく。

埋嚢 35 基が該当する。信楽産の嚢を据え付けたもので、2 基が近接するものもあるが、基本的には単独で据えられている。

北西から町家ごとに示す。町家C は 1 基 (埋嚢 340)、町家D は 1 基 (埋嚢 6)、町家E はなし、町家A - 1 は 3 基 (埋嚢 341・322・133)、町家A - 2 は 10 基 (埋嚢 756・757・806・149・487・72・715・95・696・175)、町家A - 3 は 14 基 (埋嚢 115・721・189・93・127・118・743・99・98・135・596・358・395・477)、町家B - 1・B - 2・B - 3・B - 4・G はなし、町家H - 1 は 2 基 (埋嚢 797・360)、町家H - 2 はなし、町家I は 1 基 (埋嚢 446)、町家F は 3 基 (埋嚢 384・465・475) である。

内部は白色の残滓物が付着し、便所として使用された形跡をとどめるものがある (埋嚢 6・93・175・756・806 など)。埋土には焼土・炭層が入るものが多い (埋嚢 72・95・133・149・175・189・340 など)。埋土については顕微鏡観察を実施したが、寄生虫卵などの遺物は検出できなかった。埋嚢 95・115・149 は口縁部まで残存し、口縁部の回りには漆喰が巻かれていた。

配置に注目すると、X=-111,800 付近では東西方向に 4～5 m の間隔で並んでいる (西から、133・72・696・93・127 と 118・99 と 98・596・395)。これらの南約 2.7 m には井戸が並んでおり、井戸と埋嚢も南北方向に並ぶことになる。この井戸と埋嚢のセットは、町家A - 1・A - 2・A - 3 で共通して認められた。この他に、X=-111,790 付近でも埋嚢が東西に並ぶ (西から、埋嚢 340・341・149・115・721)。ここは町家A - 2・A - 3 の北端にあたり、屋敷側と路地 3656 の境界付近に位置する。南北方向についてみると、町家A - 1 で埋嚢 322・133、町家A - 2 で埋

甕 487・72 と埋甕 715・95・696 の二筋、町家 F で埋甕 465・475 が並ぶことが指摘できる。これらも町家境に沿って並ぶといえる。

埋甕 6 (図版 24・106- 5) 町家 D の東端で検出した。同位置に甕が重ねられており、内側を A、外側を B とした。ともに底部から 0.3 m ほど残存する。

埋甕 95 (図版 24・106- 6) 町家 A - 2 の中央部で検出した。西半は口縁部まで残存する。

埋甕 115 (図版 24・106- 7) 町家 A - 3 の北西部、礎石建物 3657 の北で検出した。口縁部まで残存し、口の周囲には漆喰が巻かれている。

埋甕 149 (図版 24・106- 8) 町家 A - 2 の北端で検出した。口縁部まで残存し、口の周囲には漆喰が巻かれている。底部中央に埴が 1 個入れられていた。

埋甕 175 (図版 24) 町家 A - 2 の東端、路地 3654 上で検出した。口縁部付近まで残存する。周囲には漆喰が残る。

胞衣壺 22 基が該当する。土師質土器の蓋付壺を据えたものであるが、蓋の残存状態は悪い。第 2 面では 2 基を提示したが、数が少ないため、実際には第 2 面に属するものもあったと考えられる。

北西から町家ごとに示すと、町家 C・D・E はなし、町家 A - 1 は 1 基 (胞衣壺 324)、町家 A - 2 は 7 基 (胞衣壺 578・758・532・809・481・603・55)、町家 A - 3 は 12 基 (胞衣壺 213・623A・284・675・674・688・676・613・623B・765・320・608)、町家 B - 1・B - 2・B - 3・B - 4・G・H - 1・H - 2・I はなし、町家 F は 2 基 (胞衣壺 495・984) となる。町家ごとに差が大きく、町家 A - 2 と A - 3 に大半が集中している。

配置に注目する。X=-111,787 付近では 7 基が東西に並ぶ (西から、胞衣壺 578・758・532・213・623A・320・608)。この 7 基は町家 A - 2・A - 3 間を超えて並んでおり、瓦列 537・539 の北端にあたることから、通路 3656 の北端に沿って並んでいたと考えられる。町家 A - 3 内の礎石建物 3657 では、北東部に 3 基 (胞衣壺 284・674・675) が集中し、南半にも胞衣壺 688・676 が位置する。いずれも建物に伴い設置されたものであろう。

出土位置について改めて整理すると、まず X=-111,784 付近にある東西の背割りの北側、ならびに西側の町家 C・D・E の範囲では、胞衣壺はまったく出土していない点が指摘できる。次に胞衣壺が集中する範囲は、前述した礎石建物 3657 北東部 (胞衣壺 284・674・675)、町家 A - 3 西半 (胞衣壺 613・623B・765)、町家 A - 3 北東部 (胞衣壺 320・608) の 3 箇所である。胞衣壺は人の往来が頻繁な場所に埋められたとされるため、この箇所は往来が頻繁であったことを想定させる。

胞衣壺 320 (図版 24) 町家 A - 3 の北東部で検出した。出土時に蓋は存在したが、図では表現できていない。

胞衣壺 495 (図版 24・106- 3) 町家 F の北東部で検出した。出土時に蓋は存在したが、図では表現できていない。

胞衣壺 608 (図版 24) 町家 A - 3 の北東部、胞衣壺 320 のすぐ南で検出した。蓋の残存状態は

良好であった。

炉 町家 A - 3 の 5 基が該当する。町家 A - 3 では、北西部に炉 755、東半に炉 295・310、北東隅に炉 612・316 がある。

炉 755 東西 1.8 m、南北 0.9 m 以上の範囲に焼土層が分布する。底面は焼けて硬く締まっており、上部には焼土や壁体の破片が堆積する。上部の東寄りには焼土が詰まった凹部がある。長径 0.2 m で深さ 0.1 m あり、内面は焼けているが、溶解するまでには至っていない。

炉 295 (図 16) 東西 1.1 m、南北 0.8 m の範囲に焼土が広がる。炉の本体は円形で、直径 0.6 m、深さ 0.3 m まで残存する。最終面の下にも炉壁が 3 面重複しており、修復されたことがわかる。今回検出した炉では最も規模が大きく、保存状態も良好であった。

炉 310 東西方向に細長い焼土面が残存する。東西に長い炉であったとみられるが、上部は不明である。

炉 612 径 0.3 m、深さ 0.1 m あり、底部が残存するのみである。この炉は、大規模な土壇 1105 (18 世紀後半) → 土壇 650 (19 世紀初め) が埋没した上に形成されている。

炉 316 (図版 104- 4、図 17) 炉 605・606 を壊して構築されている。直径 0.65 m の範囲が熱で変質し、同心円状を呈する。炉の内壁は直径 0.3 m で深さ 0.15 m あり、熱で溶解して硬く締まっている。炉の中心には埴塙が元位置に据わる。埴塙は直径 0.15 m、高さ 0.2 m で口縁部の一部を除き完存する。炉の外側は熱で赤く変色し、炉体と外側との境界は明瞭であった。3 基のうち最も新しい。また、最も深く掘られていたため、保存状態は良好であった。

竈 724・725・735・726 (図 18) 町家 A - 2 の西端、南北 4.5 m の範囲に東西方向に主軸を揃えた竈が 4 基が並ぶ。南から竈 724・725・735・726 である。竈本体の基底部以下が残存したもので、各々楕円

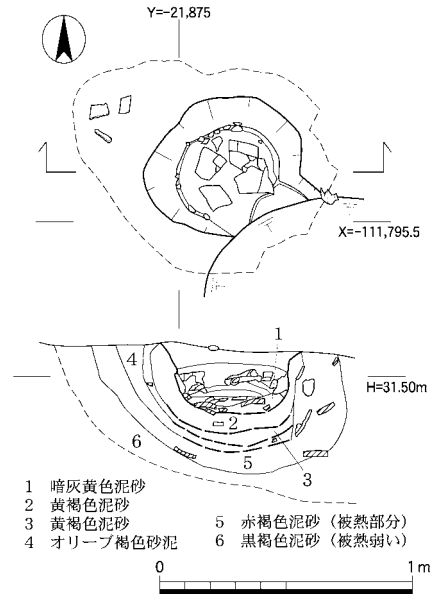


図 16 炉 295 実測図 (1 : 30)

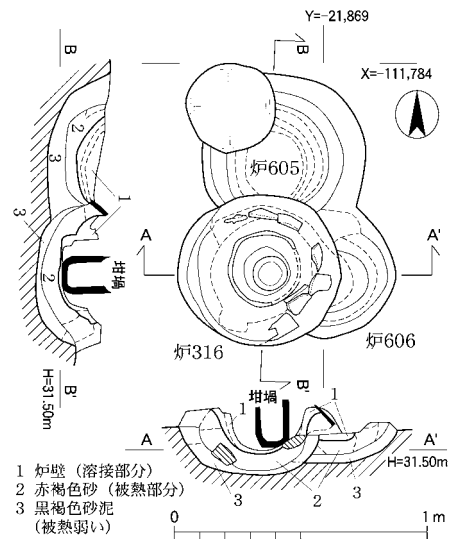


図 17 炉 316・606・605 実測図 (1 :

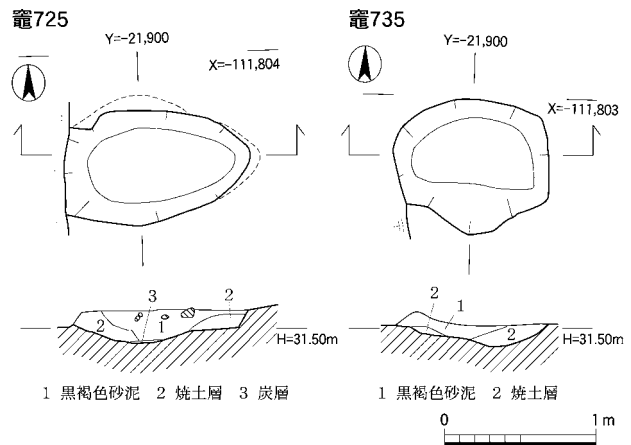


図 18 竈 725・735 実測図 (1 : 50)

形を呈する。最大は竈 725 で東西 1.2 m×南北 0.8 m、最小は竈 726 で東西 0.7 m×南北 0.5 m あり。深さは 0.2 m 程であり、内部には焼土と炭が詰まる。壁面は熱を受け硬化しているが、底は熱を受けていない。

池 町家 A - 3 の西端に 3 基ある。町家内部の庭園施設であり、北から池 275・651・1020 が南北に並んでおり、いずれも漆喰・黄色粘土で固められている。

池 275 (図版 23・102- 2) 瓢箪形を呈し、北東―南西方向に主軸をおく。長さ 2.55 m、幅は最大で 0.9 m あり。底部は平坦で、わずかに北東側に低くなる。北東隅には魚溜りとみられる凹部がある。凹部は直径 0.25 m、深さ 0.2 m あり。北壁の池底には、水を抜くための孔が空けられており、漆喰の栓が詰まった状態で出土した。

池 651 (図版 23・102- 1) 南北約 2.5 m、東西約 1.5 m の規模がある。中央から南の底部は平坦であるが、北東と北西の 2 方向には魚溜りの凹部が付属する。両方の凹部は深さ約 0.5 m あり。北東の凹部以外は漆喰を塗り直して改修している。塗り直し前を古期、塗り直し後を新期とした。相違点は、北西の凹部は古期ではなだらかに落ちていたが、新期には仕切りが設けられて段差が強調されたこと、南西隅も古期では平坦であったが、新期には 0.15 m ほど漆喰と泥が盛り、高まりが形成されたことなどである。平坦部の中央には、漆喰と石で小規模な築山が形成されている。北西凹部の底部中央と、北東凹部の南西壁には、水を抜くための小孔が穿たれている。

池 1020 (図版 23) 黄色粘土で塗り固められた水溜め施設である。南北 0.9 m、東西 0.6 m あり、西壁の 3 石と、北壁の 1 石がわずかに残存する。

瓦組 166 (図版 106- 1) 町家 A - 2 の南西隅で検出した。平瓦を 4 枚縦に組んで拵としたものである。各平瓦は凹面中央に切り込みがあり、熨斗瓦として製作された瓦である。

土壌 全域で検出した。規模・形状は様々であるが、長さ 4 m、幅 2 m、深さ 1.5 m 程度のものが多く、第 2 面で検出した土壌 1105・1234 のような格別規模の大きなものはみられない。長方形を呈するものでは、東西・南北方向に主軸が揃うこと、町家境に沿って掘られる点で共通性がみられた。町家 A - 1 の内部は土壌が非常に多く、住居に伴う遺構は確認できなかった。また東西方向の背割りの南側では、土壌が東西に並んで掘られている。西から、土壌 817・841・708・753・614 である。これらの土壌群に、町家 A - 1 に掘られた土壌群、町家 A - 3 の東端に掘られた土壌などを加えると、町家 A - 2・A - 3 の左右と背後を囲むかたちで土壌が掘られていたことになる。住居域とゴミ捨て場が分離していた様相を示しているのであろう。

土壌の種類として、焼瓦・焼土を廃棄した土壌(火災処理土壌)、鋳型・坩堝を廃棄した土壌、生活ゴミ全般を廃棄した土壌などに分類することができた。焼瓦の廃棄土壌は、町家 A - 1 (土壌 4)、町家 A - 2 (土壌 817・841・624・697)、町家 A - 3 (土壌 2・3・300・穴蔵 308)、町家 B - 1 (土壌 1)、町家 B - 4 (土壌 11)、町家 H - 1 (土壌 299)、町家 I (土壌 524) で検出しており、各町家に点在する状況がみられた。鋳型・坩堝を廃棄した土壌は、町家 A - 2 (土壌 708)、町家 A - 3 (土壌 380・650・710・753)、町家 G (土壌 654)、町家 F (土壌 400) などで検出しており、炉の周辺に掘られたことがわかる。

土壌 817 (図版 26) 町家 A - 2 の北西隅で検出した焼瓦の廃棄土壌である。検出面で長さ 4.5 m あり、断面図作成箇所幅 2.5 m、深さ 1.5 m あり、埋土は 8 層に分層できた。各層とも焼土・焼瓦が多く入っており、南北断面では北下りの層序がみられることから、町家 A - 2 側から廃材が入れられたことが想定できた。

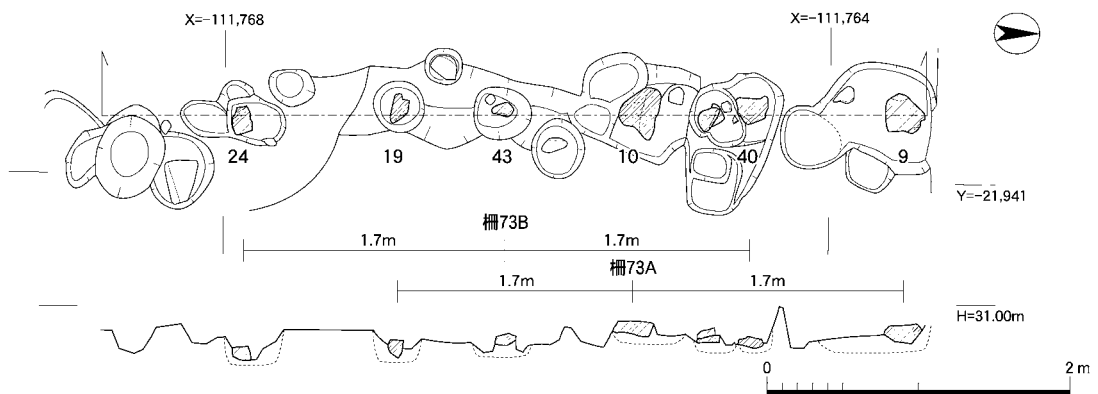


図 19 西 1 区柵 73A・B 実測図 (1 : 50)

8. 西1区～西4区の遺構

(1) 西1区の遺構 (図版 27～29・107)

基本層序

西側3分の1は町尻小路の路面にあたる。G.L-0.6～-1.7 mにて、厚さ約0.1 m前後の堅く締まった路面形成層を8層検出した。路面1の標高は31.7 mで、全体の厚さは1.1 mある。路面下は、西半には平安時代後期の整地層があり、その下は暗灰黄色粘土の地山となる。町尻小路路面と東側溝の関係は、溝47は路面8に、溝36は路面7に対応する。また、溝36上には路面3に対応する溝74があるが、この溝は平面では検出できていない。これら3時期の溝は、新しいものほど西に掘られている。調査区東半は平安時代から室町時代の土壇・柱穴などの遺構埋土が重なり合う状況がみられた。

第2面

平安時代後期を主とする遺構群でG.L-1.4 mで検出した。町尻小路路面・東側溝、土壇などがある。

町尻小路路面(路面8) 礫を敷き詰めた路面で、堅く締まっている。平安時代後期の整地層上に構築されており、調査区北西端では標高30.9 mで検出した。南端では0.2 m低くなるが、西壁断面でみられるように部分的に低い箇所(西壁16層)もある。路面全体は東に向かって低くなり、東側溝である溝47へ至る。

溝47 町尻小路東側溝である。幅1.7～2.2 m、深さ0.25～0.5 mあり、上層(北壁33層)からは平安時代末期の遺物が、下層(北壁35層)からは平安時代後期の遺物が出土した。溝底面は、標高30.3 mで南にやや低い。X=-111,766付近には一段深くなる部分があり、9世紀後半の土師器が出土した。溝中心は東築地想定線から約2.3 m西に位置する。溝47の東側では柱穴を数基検出したが、第1面のような柵としては復元できなかった。

第1面

鎌倉時代を主とする遺構群でG.L-1.3 mで検出した。町尻小路路面、東側溝、柵に伴う柱穴、土壇などがある。

町尻小路路面(路面7) 小礫が多く用いられ、堅く締まる。標高は、北端では約31 mである。路面の高低差は少なく、ほぼ水平である。側溝側には南北方向に礫のない窪んだ部分がある。

溝36 町尻小路の東側溝である。幅1.0～1.4 m、深さ0.3～0.4 mあり、溝底面の標高は30.7 mで、ほぼ水平である。埋土から鎌倉時代の遺物が出土した。東築地想定線から約2.6 m西に位置する。

柵73A・B(図19) 溝36の東側で柱穴を10数基検出した。2時期の重複があり、南北方向の柵を2組復元した。柱穴には長さ0.15～0.3 mの礎石を伴う。柵73Aは柱穴9・10・19、柵73Bは柱穴40・43・24からなり、柱穴間はともに1.7 mである。柱穴9からは鎌倉時代の土器が出土した。柵73Bの礎石は柵73Aより低いため、柵73Bが先行すると考えられる。これらの

柱列は、東築地想定線から 1.1 m西に位置し、道路と東側の宅地を区画する施設と考えられる。

(2) 西2区の遺構 (巻頭図版 4-2・図版 27・28・30・31・108・109)

基本層序

G.L-0.1 ~ -0.8 mまで幕末期の焼土を含む江戸時代の整地層、西側3分の1で町尻小路の路面形成層、南壁で楊梅小路の路面形成層を確認した。路面形成層は北端でG.L-0.8 ~ -1.5 mまで、南端で-2.0 mまで残存しており、路面1から路面7に区分できた。各路面の厚さは0.1 ~ 0.2 mあり、合計0.7 ~ 1.0 m残存する。いずれの層も拳大の礫を多く含み、堅く締まる。町尻小路東側溝である溝136は路面7、溝111は路面5に対応する。溝111の埋没後、路面3が積まれるが、これに対応する東側溝は北壁ではみられず、24・23・25層などが盛られる。これらの層は道路側との高低差を縮小するため盛られたものと考えられる。楊梅小路に伴う北側溝は溝137・119と2時期検出した。西壁では、路面を横切る溝119が路面5から掘り込まれ、路面4に覆われる状況がみられた(図版109-3)。東半では、平安時代から江戸時代の井戸、土壌、集石などの遺構が重なる状況がみられた。北西部ではG.L-1.5 m、南東部ではG.L-2.0 m以下で、オリーブ褐色粗砂の地山となる。

第4面

平安時代後期を主とする遺構群でG.L-1.5 mで検出した。町尻小路路面と東側溝、楊梅小路路面と北側溝、柱穴、土壌などがある。

町尻小路・楊梅小路路面(路面7) 両小路の交差部分を検出した。町尻小路側の路面は小礫が密に堅く締まっていたが、楊梅小路側では礫は少量であった。標高は北西角で30.8 mあり、南西角では0.3 m低くなる。路面は東側溝(溝136)に向かって急激に低くなり、肩部には路面の補修痕と考えられる、堅く締まった整地層がみられた。

溝136 町尻小路東側溝で、幅1.4 m、深さ0.2 mある。楊梅小路との交差点では、曲線的に楊梅小路北側溝(溝137)へ連続する。溝底面の標高は30.3 mで、ほぼ水平であり、西1区で検出した溝47の溝底面とほぼ同じである。埋土から平安時代中期から末期までの遺物が出土した。楊梅小路との交差部では南北方向の溝136A・Bを検出した。ともに幅0.4 m、深さ0.4 mあり、楊梅小路を南北に横断する。溝底面の標高は30.2 mとやや低

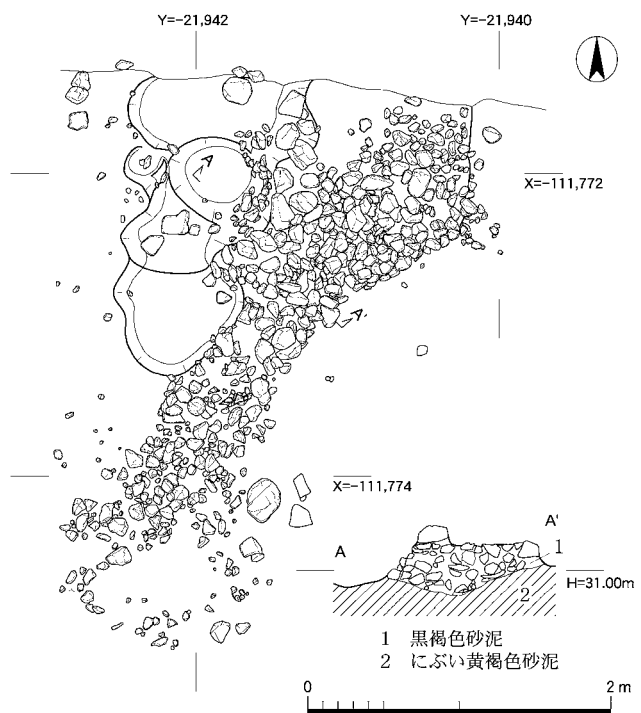


図20 西2区集石91実測図(1:50)

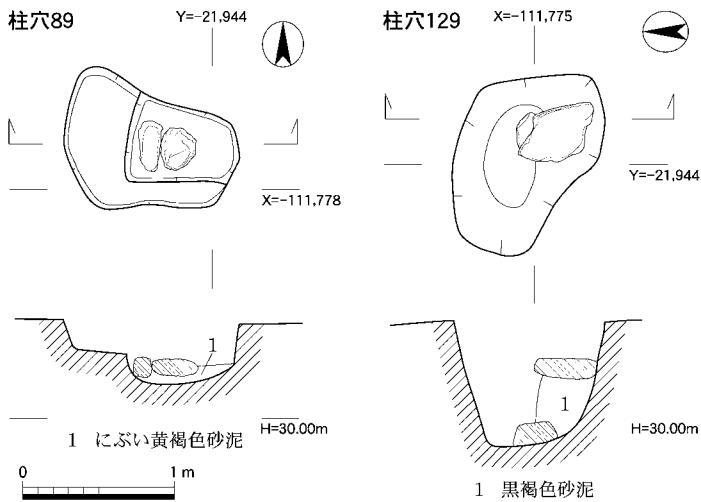


図 21 西 2 区柱穴 89・129 実測図 (1 : 50)

く。溝 136A の西肩部には一辺 0.3 m の石材が飛び飛びにあり、西 3 区で検出した溝 40 にも同じ状況がみられた。西肩の護岸の一部と考えられる。

溝 137 楊梅小路北側溝で、幅 1.0 m 以上、深さ 0.2 m ある。調査では南肩部のみ検出した。埋土から平安時代中期から後期の遺物が出土した。

第 3 面

平安時代末期を主とする遺構群で G.L-1.4 m で検出した。町尻小路路面と東側溝、楊梅小路路面と北側溝、柱穴、土壇などがある。

町尻小路・楊梅小路路面 (路面 5) 町尻小路側の路面は小礫が密に敷かれ、堅く締まっていたが、楊梅小路側の礫は少量であった。町尻小路路面は北西端で標高 31.0 m あり、南西端で約 0.2 m 低い。東に向かって低くなり、東側溝 (溝 111) に至る。

溝 111 町尻小路東側溝で、幅 0.4 ~ 1.5 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m ある。溝底面の標高は北端で 30.8 m ある。南に向かって 0.3 m 低くなり、南端で楊梅小路北側溝 119 に合流する。溝心は東築地想定線から約 2.1 m 西に位置する。埋土から平安時代末期から鎌倉時代の遺物が出土した。

溝 119 (図版 109- 2) 楊梅小路北側溝で、幅 0.5 m、深さ 0.25 m ある。溝 111 との合流点の西側は、そのまま町尻小路路面を横断する。この部分では幅 0.3 ~ 0.6 m、深さ 0.2 m あり、北肩には石材が集中する状況がみられた。溝 119 の底面は標高 30.7 m あり、東西での高低差はほとんどなかった。溝 119 は北築地想定線から約 2.4 m 南に位置する。埋土から平安時代末期の遺物が出土した。

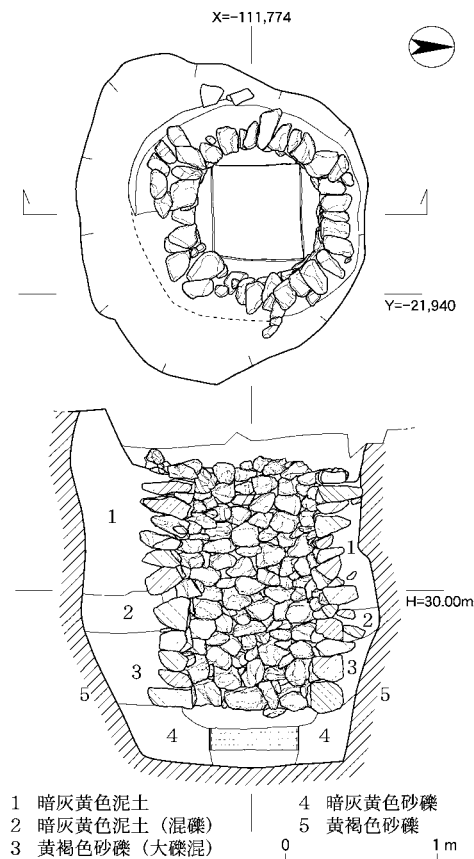


図 22 西 2 区井戸 82 実測図 (1 : 50)

第 2 面

鎌倉時代から室町時代を主とする遺構群で、G.L-0.9 m で検出した。町尻小路路面と東側溝、楊梅小路路面、柱穴、土壇などがある。

町尻小路・楊梅小路路面 (路面 3)

町尻小路路面は標高 31.5 m で検出した。礫が多く入り、堅く締まる。南に向かって緩やかに低くなる。この面でも楊梅小路側の礫は少量であった。

溝 77 町尻小路東側溝に当たる位置で検出した南北溝であるが、楊梅小路との交差点のみで検出した。幅 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.3 m あり、逆台形状の溝である。北側 3 分の 2 では、土壙や集石 91 が構築されるため、交差点以北は当初から掘削されていなかったと考えられる。

集石 91 (図 20) 調査区北端で検出した集石を伴う遺構である。北東から南西へ石が積まれている。全長 4.0 m、幅 1.3 m、高さ 0.2 ～ 0.5 m あり、特に中央部を厚く盛っている。南東側に対する堤防状の施設とみられるが、性格は不明である。埋土から室町時代後期の遺物が出土した。

柱穴 89・129 (図 21) 掘形はともに長辺約 1.2 m、短辺 0.7 m、深さ 0.4 ～ 0.8 m あり。柱穴 89 は底部に人頭大の礎石が据えられる。柱穴 129 は礎石が二重になっており、作り直しがあったと考えられる。礎石上面の標高は 30.4 m でほぼ同じである。2 基の間隔は 2.6 m あり、北でやや東に振れている。ともに室町時代の遺物が出土した。

第 1 面

江戸時代を主とする遺構群で、G.L-0.8 m で検出した。礫の広がり、井戸、土壙などがある。遺構面全体に広がる粗い礫は、北西端で標高 31.6 m あり、南東方向に 0.1 m 低くなる。この面を掘り込む土壙を多数検出し、埋土から桃山時代・江戸時代の遺物が出土した。この粗い礫層は、町尻小路路面の上部であり、江戸時代には町家の地盤であったと考えられる。同様の面は、西 4 区でも検出している。

井戸 82 (図版 109- 1、図 22) 底部に木枠をもつ石組み井戸である。掘形は直径 2.0 m、深さ 2.3 m あり、底面は地山の砂礫層を掘り下げている。底面には一辺 0.6 m、幅 0.15 m の木枠を据え、その上に長さ 0.1 ～ 0.3 m の河原石を円形に積み上げている。石組みの内径は 0.8 m、残存高 1.7 m である。掘形埋土から桃山時代の遺物が出土した。

(3) 西 3 区の遺構 (図版 27・28・32・110)

基本層序

G.L-0.8 m までは幕末期以降の盛土である。G.L-0.8 ～ -1.1 m には、部分的に江戸時代の焼瓦廃棄土壙がある。西壁の南半は、旧建物の基礎撤去による削平を受けていた。西側 3 分の 1 は町尻小路路面にあたり、G.L-0.8 ～ -1.8 m に路面形成層が 6 層ある。町尻小路東側溝 (溝 40) は楊梅小路を横断しており、路面 5 に覆われる。楊梅小路南側溝 (溝 48) も溝 40 と同じ高さで検出した。東半では、平安時代から桃山時代までの土壙や井戸が重なる状況がみられた。G.L-2.0 m 以下は褐色粗砂の地山となる。

第 2 面

平安時代後期を主とする遺構群で、G.L-1.7 m で検出した。町尻小路路面と東側溝、楊梅小路路面と南側溝、柱穴、土壙などがある。

町尻小路路面 (路面 6) 標高 30.6 ～ 30.2 m で検出した。小礫が多く、非常に堅く締まっている。

西壁断面の北半では、路面 6 の下に凹凸があり、路面を補修した跡と考えられる。路面上にて礎石を 2 基検出した（柱穴 46・礎石 53）。

楊梅小路路面 路面の小礫は溝 40 上部でわずかに残存していた。路面の南端は X=-111,784 付近にある。

溝 40 町尻小路東側溝で、幅 0.9 ～ 2.0 m、深さ 0.4 ～ 0.65 m ある。中央以南は断面が V 字形となる。西 2 区の溝 136A・B から連続するもので、楊梅小路を横断する部分は、幅 2.0 m、深さ 0.4 m、中央部は幅 1.0 m、深さ 0.5 m、南端では再び広がり、幅 2.0 m、深さ 0.65 m となる。流量が多かったためと考えられる。北端での溝底面は標高 29.9 m で、南に向かって低くなる。埋土から平安時代後期の遺物が出土した。溝心は東築地想定線から約 1.5 m 西に位置する。

溝 48 楊梅小路南側溝に当たるが、残存状態は良くない。幅 1.0 m、深さ 0.5 m 程で、長さ 2.0 m 検出した。溝底面は標高 30.0 m あり、溝 40 の底面より高いため、溝 40 側に流れ込んでいたと考えられる。溝心は、南築地想定線から約 3 m 北に位置する。溝底内には礎石が 2 基据わるが、これらは溝が埋没した後、上から掘り込まれたものと考えられる。

柱穴 46 溝 40 の西肩に掘り込まれた柱穴である。掘形は方形で 0.6 m あり、底に長さ 0.36 m の礎石が据えられている。西 2 区で検出した柱穴 89・129 に類似した規模・形状をもち、上部から掘り込まれた遺構とみられる。

第 1 面

鎌倉時代から室町時代を主とする遺構群で、G.L-1.6 m で検出した。町尻小路路面、井戸、柱穴、土壙などがある。

町尻小路路面（路面 5 層）標高 30.7 m で検出した。拳大の礫が多く入れられ、堅く締まる。西壁断面では、南端が北端より 0.05 m 高い。

井戸 35 調査区南東隅で検出した石組み井戸である。掘形は円形で、直径 1.5 m、石組みの内径は 0.9 m ある。南壁に焼瓦廃棄土壙が掘り込まれていたため、安全上、平面形を確認するにとどめた。室町時代の遺物が出土した。

この他、北端部では鎌倉・室町時代の小規模な土壙を 20 数基程検出した。

(4) 西4区の遺構 (図版 27・28・33・111)

基本層序

北西部では、G.L-0.4～-1.1 mまで幕末期の焼瓦廃棄土壌を含む江戸時代の整地層、西側3分の1は町尻小路の路面形成層が堆積する。東半では、平安時代から室町時代の遺構が複雑に重複する。G.L-1.9～-2.4 mで黒褐色砂泥の平安時代後期の整地層があり、その下が暗オリーブ褐色の地山となる。路面形成層は6層あり、合計の厚さは約1.1 mある。各路面層は、厚さ0.1～0.2 mで拳大の礫を多く含み、堅く締まっている。路面2と路面3の間には泥土層(北壁30層)が薄く堆積する。路面4～6は断割りで確認したものである。

第3面

平安時代後期から鎌倉時代を主とする遺構群で、G.L-1.2 mで検出した。町尻小路路面と東側溝、土壌などがある。

町尻小路路面(路面3) 標高31.1～31.2 mで検出した。拳大の礫が密に敷かれている。東に向かって0.1～0.2 m低くなる。なお、町尻小路東側溝は、北壁では検出できなかったが、南壁にて溝の痕跡を検出した。標高30.4 mで検出し、幅1.7 m、深さ0.5 mある。溝底面は、標高29.9 mである。東側溝は築地想定線から約1.8 m西に位置する。

路面の東側で検出した6基の土壌からは、平安時代末期から鎌倉時代の遺物が出土した。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代 ～飛鳥時代	土器、石器、土師器、須恵器		縄文土器1点、石器3点、弥生土器29点、土師器3点、須恵器12点	3箱	
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、石製品、土製品、壁土		土師器205点、須恵器18点、灰釉陶器5点、白色土器15点、緑釉陶器4点、瓦器5点、輸入陶磁器18点、瓦類46点、銭貨3点、石製品6点、土製品2点、壁土2点	81箱	
鎌倉時代 ・室町時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦類、銭貨、石製品、壁土		土師器125点、須恵器4点、灰釉陶器1点、白色土器2点、瓦器15点、輸入陶磁器9点、国産陶器51点、瓦類4点、銭貨30点、石製品14点、壁土8点	24箱	
桃山時代 ・江戸時代	土師器、軟質施釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、国産磁器、国産陶器、窯道具、瓦類、土製品、銭貨、金属製品、鋳造関係、石製品、骨角製品、ガラス製品		土師器226点、軟質施釉陶器27点、瓦器10点、輸入陶磁器33点、国産磁器121点、国産陶器292点、窯道具2点、瓦類66点、土製品36点、銭貨22点、金属製品74点、鋳造関係86点、石製品107点、骨角製品32点、ガラス製品4点	245箱	
合計		1765箱	1778点(96箱)	353箱	1316箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より136箱多くなっている。

第2面

室町時代を主とする遺構群で、G.L-1.0 mで検出した。町尻小路路面、土壙などがある。

町尻小路路面（路面2）標高 31.3 mで検出した。路面3と同じく小礫が密に敷かれていた。

路面の東側の5基の土壙からは、室町時代から桃山時代の遺物が出土した。

第1面

G.L-0.8 mで検出した。江戸時代を主とする。礫の広がり、井戸、土壙などがある。調査区西半では拳大の礫を多く含む部分がある。町尻小路路面の推定位置に当たるため路面1としたが、江戸時代には町家範囲に含まれていたことになる。標高 31.4 mで検出した。

井戸1 瓦を円形に巡らせた瓦積み井戸で、幕末から明治期に属する。

井戸2 漆喰製の井筒をもつが、上部は欠損していた。江戸時代の遺物が多く出土した。

井戸の周囲で検出した各土壙からは、江戸時代の遺物が出土した。

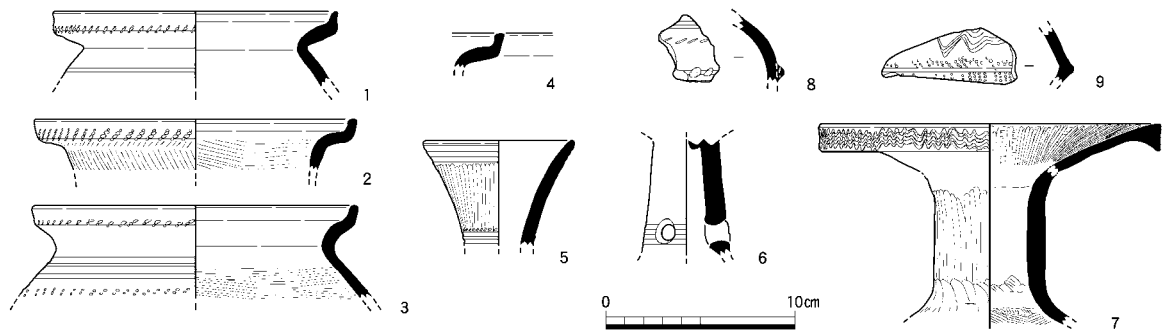


図 23 流路 3514 出土遺物実測図（1：4）

第4章 遺物

今回の調査では整理用コンテナにして、1,629 箱の遺物が出土した。出土遺物には土器陶磁器類・瓦類・石製品・金属製品・铸造関係遺物・骨角製品・木製品・ガラス製品・動植物遺体などの種類がある。遺物の大半は土器陶磁器類が占め、縄文時代晩期から幕末・明治時代初頭まで幅広い年代のものがある。

平安京前の遺物としては、流路 3514 から出土した弥生時代後期の壺・甕・高杯・器台などがある。流路 3514 の滞留部分からは、近江系の甕類を主体に高杯など 10 個体程の一括資料が出土している。また流路上層部や平安時代の整地層を中心に、出土量は少ないが古墳時代の須恵器杯・土師器甕・高杯なども出土した。

平安時代前期・中期のものは量が少なく、楊梅小路路面下の整地層などの後期以降の遺構に混入したものがほとんどである。平安時代後期のものは質量とも豊富となる。楊梅小路路面下の土壌 3300 や土壌 2950・3198 などを中心に土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦器、銭貨、軒瓦などがある。また、楊梅小路路面上、および路面整地層から、牛・馬骨がまとめて出土した。

鎌倉・室町時代のものは土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、滑石製羽釜、軒瓦、銭貨などがある。特に、常滑産、備前産の甕が多数出土したが、これらの甕は酒造りの貯蔵用甕として使用されたとみられ、14 世紀前半から中頃のものが中心であった。

桃山時代から江戸時代にかけての遺物は、土器、陶磁器、瓦類をはじめ石製品・金属製品・骨角製品など多種多様なものが含まれている。全出土遺物の約 7 割を占め、屋敷地内のゴミ穴や井戸などに廃棄された土器・陶磁器類が主体となる。土器類は土師器皿をはじめ土師質土器、瓦質土器、軟質施釉陶器がある。磁器類では中国・朝鮮半島製を含め、肥前系磁器がある。陶器類はタイ・ベトナムの焼締陶器類、中国華南産の施釉陶器などの輸入製品のほかに、肥前、瀬戸・美濃、京都、信楽産の施釉陶器類や丹波、備前、信楽の擂鉢などを含む焼締陶器がある。江戸時代中期以降になると、新たに京・信楽、萩、堺・明石産の擂鉢、瀬戸・美濃、京都、珉平窯産の磁器、伏見深草産の土師質土器や人形などの土製品が加わる。瓦類は棧軒瓦や井戸椀瓦を含め出土量が多くなる。石製品には、硯・砥石・火打石などの小型製品や、茶臼・石塔などの大型製品がある。砥石に未製品、加工品の破片がみられる。銭貨は総数 644 枚のうち、寛永通寶は 317 枚、他に天

保通寶、文久永寶、寶永通寶、キセル銭などが確認できた。金属製品には、釘・鏝・刀子などの鉄製品のほかに、各種の飾り金具や簪類、鏡などの銅製品がある。ガラス製品は髪飾りの他に、特殊なものとしてワインボトルがある。木製品には漆器や漆漉紙などがあるが、出土量は少ない。自然遺物には、ゴミ穴などに廃棄された貝殻や魚骨類が多い。骨角製品では櫛払・棹秤の他、簪類があり、加工痕跡のある鹿角なども含まれる。注目すべき遺物としては、18世紀後半以降の出土遺物に鑄造関係のものがある。坩堝、羽口、炉体片と各種の鑄型が含まれる。また幕末から明治時代の遺物にヨーロッパ産の陶磁器も少量ながら出土している。

以下では、時代の古いものから順に遺物の概要を述べる。

1. 平安京前の土器類

流路 3514 (図版 34・112、図 23) 図版 34 に掲載したものは、流路 3514 の西寄りで一括出土した弥生時代後期の土器群である。

甕を中心に、壺・高杯・器台がある。甕には口縁部がくの字に外反するものと受口状を呈するものがある。34- 1・2 は小型の甕である。34- 1 は口径 11.2 cm、器高 10.4 cm あり、外面はタタキで成形し、上をハケメで調整する。口縁部も叩き出して成形する。34- 2 は口径 13.0 cm、器高 13.0 cm あり、外面はハケメで調整する。34- 3 は口径 16.0 cm、体部最大径 20.1 cm あり。外面はタタキで成形した、畿内第 V 様式に属する甕である。34- 4 は口径 15.0 cm、体部最大径 16.8 cm あり。体部は扁平を呈し、口縁部も内弯気味におさめる。34- 5～10 は受口状口縁をもつ「近江系甕」である。口縁部の形態には差異がある。34- 7 は口径 18.0 cm、34- 8 は口径 16.2 cm、体部最大径 21.6 cm あり、ともに口縁部外面に斜めの列点文、頸部以下に櫛描直線文と斜め方向の列点文を配置する点で、最も近江的な個体といえる。34- 5 は口径 15.6 cm、体部最大径 16.1 cm あり。口縁部は内弯しており、施文の仕方も非常に稚拙である。34- 6 は口径 14.3 cm、器高 19.3 cm あり。外面はタタキで成形し、その上をハケメで調整している。口縁部の弯曲や列点文を垂直に施文することなどは 34- 5 と共通し、近江系甕を真似た在地の甕である。34- 9 は口径 19.4 cm、体部最大径 27.0 cm あり。口縁部は内弯気味におさめ、体部の内外面はハケメで丁寧に調整する。34-10 は口縁部を欠損する。体部最大径 33 cm に達する大型の製品で、甕と推定できる。頸部以下に櫛描直線文と列点文を施す。直線文は 17 条を数えるが、列点文が 8 単位であることから、原体を 2 回分当てて施文したと考えられる。体部は内外面ともハケメで丁寧に調整する。34-11～13 は底部である。34-11 は甕、34-12・13 は壺の底部と考えられる。

34-14・15 は高杯である。34-14 は杯部から脚部まで完存する。杯部径 24.2 cm、器高 14.0 cm、脚部径 14.3 cm あり、全体をヘラミガキで丁寧に調整する。脚の屈曲部には円形透かしが 3 方に穿たれる。34-15 は脚部の破片で、34-14 に類似するが、脚部の開き具合がやや狭い。34-16 は器台であるが、杯部と脚部を欠損する。外面はヘラミガキで調整する。

図 23 では流路 3514 の各所から出土したものを掲載した。図 23- 1～4 は受口状口縁を有する甕である。口縁部の形態は、図 23- 1 が 34- 7、図 23- 3 が 34- 8 に類似する。図 23- 2 は頸部

以下が欠損し、図 23- 4 は口縁部外面に刻み目がない。図 23- 1 は口径 15.0 cm、図 23- 2 は口径 17.0 cm、図 23- 3 は口径 17.2 cm ある。図 23- 5 は細頸壺の口縁部で口径 8.0 cm ある。破片の下端には沈線がめぐらされる。図 23- 6 は高杯の脚部で、下半にはヘラで沈線を数条めぐらせ、この部位に円形透かしを 3 方に穿つ。図 23- 7 は器台で、杯部は残存するが脚部を欠損する。杯部径 18.0 cm、脚部径 5.8 cm ある。口縁端部は下方に拡張させて面をなし、櫛描波状文を施す。図 23- 8・9 は手焙形土器の蓋の破片である。図 23- 8 は刻み目突帯の上位に列点文、櫛描直線文を施し、図 23- 9 は屈曲部から上位に列点文と櫛描波状文を施す。

その他遺構（図版 35）平安時代後期より古い遺物で保存状態の良い個体を図版 35 に掲載した。縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、飛鳥時代の須恵器、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。平安時代以前の遺物は、流路 3508・3514 を覆う整地層から出土したものが多い。

35- 1 は縄文時代晩期の甕の口縁部である。突帯に刻み目を有し、胎土に砂粒を多く含む。小穴 3551 から出土した。小穴からの出土遺物はこれのみであった。35- 2・3 は弥生時代後期の甕の底部で、外面はタタキ成形、内面は右回りにハケメで調整する。ともに楊梅小路路面形成層（中世から江戸時代までの遺物を含む）から出土した。35- 4 は弥生土器器台の脚部で、外面には凹線文を施す。破片の下端には円形透かしがある。3 方として図示したが、4 方の可能性もある。土蔵 190（19 世紀中葉）から出土した。35- 5 は手焙形土器の蓋の破片で、受口状口縁の上に粘土を付加する。突帯上には刻み目をめぐらせ、上位にはヘラで綾杉文を線刻する。楊梅小路路面形成層（11 世紀代の遺物が主体）から出土した。35- 6 は須恵器甕の口縁部である。口径 14.6 cm あり、外面には櫛描波状文を施す。焼成は良好で、断面はセピア色を呈する。南壁付近の掘下げ時に出土した。35- 7 は土師器甕の把手で、体部に差し込んで固定している。把手先端には切り込みが施されていた可能性がある。中央部で掘下げ時に出土した。35- 8 は剥離した須恵質の把手で、土蔵 3360（11 世紀中頃）から出土した。35- 9 は須恵質の破片で、形状から器形は鍋とみられる。把手は体部に差し込んで固定し、体部外面には横方向に沈線がある。ナデで調整している。中央北西寄りの楊梅小路路面形成層（11 世紀中頃の遺物が主体）から出土した。35-10 は須恵器杯蓋で、口縁の一部を欠損する。口径 13.6 cm、器高 4.8 cm あり。天井部はヘラケズリを施し、口縁部との境には段がつく。中央部の北西寄り、流路 3514 上の整地層から出土した。35-11・12 は須恵器杯身である。35-11 は口径 13.0 cm、深さ 4.9 cm あり、底部にはヘラケズリを施す。焼成はやや甘く、灰色を呈する。井戸 3120（11 世紀後葉）から出土した。35-12 は口径 10.2 cm、深さ 3.5 cm あり、底部は未調整のままである。楊梅小路路面形成層（12 世紀の遺物が主体）から出土した。35-13・14 は須恵器の無蓋高杯である。接合部のみ残存し、ともに楊梅小路路面層（11 世紀の遺物が主体）から出土した。35-15 は須恵器甕の体部である。外面下半はヘラケズリを施す。流路 3514 を覆う整地層から出土した。35-16 は土師器甕である。口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げておさめる。黒色を呈する。土蔵 1232（17 世紀前葉）から出土した。35-17 は須恵器器台の脚部である。脚部径 26 cm 前後と推定される。外面には櫛描列点文と波状文

を施すが、櫛目は粗い。土壙 1232（17 世紀前葉）から出土した。35-18 は須恵器杯蓋の破片で、内側にかえりをもつ。楊梅小路路面下の整地層（11 世紀の遺物が主体）から出土した。35-19 は須恵器鉢の口縁部で、鉄鉢形であったと考えられる。無蓋高杯（35-13・14）と同じ地点から出土した。

2. 平安時代の土器類

その他遺構（図版 35）35-20 は土師器高杯の脚部で、外面はヘラケズリで断面七角形に面取りする。土壙 2280（12 世紀）から出土した。35-21 は緑釉陶器香炉蓋で、つまみ部分のみ残存する。つまみの周辺には円形の透かしが配置される。東壁付近の地山面掘下げ時に出土した。35-22 は緑釉陶器皿の底部で、内面には陰刻花文が施される。土壙 885（18 世紀後葉）から出土した。35-23 は須恵器壺で、体部に突帯をもつ。土壙 3295（12 世紀）から出土した。

土壙 3300（図版 35・113）土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、白色土器、輸入陶磁器などがある。京都IV期中～新段階¹⁾に属する。

土師器皿には、皿 A、皿 Ac、皿 N がある。35-24～33 は皿 A で、口径 9.6～10.6 cm、器高 1.5 cm 前後ある。器壁は厚いものと薄いものがあり、口縁部の巻き込は緩い。35-34・35 は皿 Ac で、口径 12～13 cm、器高 1.3 cm 前後ある。器形はコースター形を呈する。口縁端部は薄く、巻き込みは強い。皿 N は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。35-36～41 は小型皿で、口縁端部は外反気味におさめる。35-42 は中型皿で口径 13.0 cm、器高 2.7 cm あり。35-43～49 は大型皿で、口径 15.0～16.2 cm、器高 2.4～3.4 cm あり。口縁端部は外反し、横方向のナデは二段ナデである。35-43 は器高 3.4 cm で最も深い。35-46 は口縁部二段ナデの上半のみが強く外反する。35-50 は白色土器高杯で、接合部から脚部が残存する。接合部には瘤状のふくらみをもち、丁寧にナデで接合されている。脚部はヘラで面取りされるが、断面はほぼ円形である。35-51・52 は須恵器椀で、東海系の山茶椀に属する。35-51 は口径 10.0 cm、器高 3.4 cm あり、ほぼ完形である。底部は糸切りで高台を貼り付ける。内面には見込みを除いて自然釉がかかる。35-52 は底部で、糸切り成形ののち高台を貼り付ける。高台径 8.2 cm あり、内面底部はきわめて平滑である。口径 16 cm 台の椀と考えられる。35-53 は須恵器というより瓦質に近い鉢で、口縁部の上端のみ黒色、それ以外はすべて灰色を呈する。焼成不良で軟質である。底部は糸切りで成形するが軟質のため磨滅している。35-54～57 は輸入陶磁器の華南産白磁椀である。35-54 は口径 14.0 cm、器高 4.4 cm あり、端部は外反しておさめる。内面の中位に段をもつ。底部は削り出し高台で、釉は及ばない。35-55・56 は口縁部が玉縁をなす椀である。35-55 は口径 14.6 cm、器高 6.0 cm、35-56 は口径 15.6 cm、器高 6.1 cm あり、35-55 よりやや大きい。35-57 は口縁部の破片で、口径 13.0 cm あり。内面には櫛で文様を施す。

溝 3250（図版 36・113・114）土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、輸入陶磁器などがある。主体は京都IV期新に属するが、これより古いものを多数含むため、図版 36 では「▲」で示した（以下も同じ）。

土師器皿には、皿 A、皿 N がある。36- 1・2 は皿 A で、口径 10 cm 台、器高 1.1 ～ 1.7 cm ある。36- 1 は口縁部を上方でおさめるが、36- 2 は開き気味でおさめる。皿 N は小型皿と大型皿に区分できる。36- 3 ～ 5 は小型皿で、口径 10 cm 台、器高 1.4 ～ 2.0 cm ある。36- 3・4 は口縁端部が外方に延びるが、36- 5 は上方へ立ち上がり気味におさめており、京都 V 期以後に属する。36- 6 ～ 8 は大型皿で、口径 14.5 ～ 16.0 cm、器高 2.2 ～ 3.2 cm ある。口縁部はすべて二段ナデである。36- 6・7 は端部が外反気味であるが、36- 8 は外上方に延びてそのままおさめる。36- 9 は土師器高杯の脚部で、外面はヘラケズリで面取りするが、さほど丁寧ではない。京都 I 期ないし II 期に属する。36-10 は土師器三足鉢で、口径は約 17 cm、器高 10.0 cm ある。内面は丁寧なナデ調整であるが、外面には粘土紐を巻上げた痕跡がみられる。内面には火を受けた形跡がある。36-11 は土師器甕で、口径 17 cm ある。外面はタタキで成形したのち、粗い縦ハケと横ナデで調整する。京都 I 期ないし II 期に属する。36-12・13 は須恵器杯蓋・杯身である。36-12 は口径 14 cm、36-13 は口径 12.1 cm、器高 4.6 cm、高台径 7.5 cm あり、ともに京都 I 期に属する。36-14 ～ 16 は東海系のいわゆる山茶椀である。口径 10.0 ～ 11.3 cm、器高 3.5 cm 前後、高台径 5.5 cm 前後で、3 個体とも形態が類似する。底部は糸切り後、高台を貼り付ける。36-15・16 は口縁部の四方を指でナデで輪花状に仕上げる。36-17 も東海系山茶椀で、口径 16.5 cm 前後に復元できる。高台径 8.0 cm あり、前 3 者と同じ成形による。36-18 は須恵器鉢で、底部径 9.3 cm ある。底部は糸切り成形であるが、部分的に剥離している。口縁部が玉縁を呈する鉢と推定でき、京都 II 期に属する。36-19・20 は須恵器甕である。36-19 は口縁端部に面をもち、京都 I 期に属すると考えられる。36-20 は口縁端部が外反するもので、口径 29.6 cm あり、外面には口縁部までタタキの痕跡をとどめる。36-21 は白色土器椀で、口径 9.3 cm、器高 3.1 cm、底部径 4.5 cm ある。底部は糸切り成形で、外面には火を受けた痕跡がある。36-22 は土師器椀で、薄手で内外面とも雑なヘラミガキを施す。底部には薄い貼り付け高台をもつ。高台径 7.2 cm ある。白色土器に類似した色調・焼上がりをもつが、瀬戸内系土師器の搬入品とみられる。36-23 は緑釉陶器皿で、口径 12.2 cm、器高 3.0 cm、底部径 6.0 cm ある。口縁部に段をもち、底部は削り出し高台である。山城産で京都 II 期に属する。36-24 は瓦器椀で、口径 17 cm としたが、小片からの復元である。内外面ともヘラミガキで調整する。36-25 は輸入陶磁器の白磁椀である。口縁部は玉縁を有し、釉は内外面の全体に及ぶ。内面の体部・底部の境界には段が形成される。

土壙 2950 (図版 36・114) 土師器、瓦器、須恵器、白色土器、輸入陶磁器などがある。京都 IV 期新～V 期古に属する。

土師器皿には、皿 A、皿 Ac、皿 N がある。36-26 ～ 31 は皿 A で、口径 10 cm 台、器高 1.7 cm 前後ある。口縁端部は巻き込みが鈍くなり、特に 36-31 は屈曲が緩い。36-32・33 は皿 Ac で、口径は 10 cm 台である。口縁端部は内側へ折り返しただけでおさめる。皿 N は小型皿、中型皿、大型皿に区分できる。36-34 ～ 43 は小型皿で、口径 10 cm 台、器高 1.7 ～ 2.1 cm ある。口縁部の調整は二段ナデであるが不明瞭である。36-44 ～ 46 は中型皿で、口径 11 ～ 12 cm、器高 2.3 cm 前後ある。36-47 ～ 58 は大型皿で、口径 14 ～ 17 cm、器高 2.7 ～ 3.8 cm まである。口縁部の調

整は二段ナデをとどめる。36-59は白色土器碗で、底部径5.6cmあり、糸切り成形による平高台をもつ。36-60は東海系山茶碗の底部で、底部径7.8cmあり、口径は16cm前後と推定される。糸切り成形で貼り付け高台をもつ。高台端面には籾殻の圧痕がみられる。

土壙2801(図版37・115)土師器、瓦器、須恵器、白色土器などがある。京都IV期新～V期古に属する。

土師器皿には、皿A、皿Ac、皿Nがある。37-1～4は皿Aで、口径10cm台、器高1.5cm前後あり、口縁部の巻き込みは緩い。37-5～8は皿Acで、口径11cm前後ある。口縁端部は内側へ折り返すが、特に37-7は端部を薄く仕上げる。皿Nは小型皿と大型皿に区分できる。37-9～14は小型皿で、口径10cm台、器高1.7～2.1cmまでである。口縁部は内弯気味のものも含まれ、特に37-14は京都V期新以降に下る製品と考えられる。37-15～24は大型皿で、口径14～17cm、器高2.5～3.8cmまでである。口縁部の調整は二段ナデであるが、37-16は口縁部が内弯気味となり、京都V期中以降の製品と考えられる。37-25は白色土器皿で、口径9.1cm、器高1.7cm、底部径4.1cmある。底部は糸切りによる平高台である。

土壙2802(図版37・115)土師器、須恵器、白色土器、輸入陶磁器などがある。京都IV期新～V期古に属する。

土師器皿には、皿A、皿Ac、皿Nがある。37-26～28は皿Aで、口径10cm台、器高1.5cm前後あり、口縁部の巻き込みは緩い。37-29～32は皿Acで、口径11cm前後ある。口縁端部は内側へ折り返し、丁寧におさめる。皿Nは小型皿と大型皿に区分できる。37-33～40は小型皿で、口径10～11cm、器高1.5～2.5cmまでである。口縁部が内弯気味のものも含まれる。37-34は口縁部の調整が一段ナデとなっている。37-36は皿Aが退化したような形態となる。37-41～48は大型皿で、口径15～17cm、器高2.5～3.8cmまでである。口縁部は外反気味におさめ、調整も二段ナデである。37-49は白色土器皿で、口径10.5cm、器高2.4cm、底部径4.1cmある。底部は糸切りによる平高台である。体部には穿孔(焼成後)がある。

本土器群は、先述した土壙2801出土土器と基本構成は同じであるが、土師器皿Nに京都V期的な要素が少ないこと、白色土器碗が大きいなど、本土器群の方が古い要素が多いといえる。

土壙3198(図版37・115)土師器、須恵器、瓦器、白色土器、輸入陶磁器などがある。京都V期古～中に属する。

土師器皿には、皿A、皿Ac、皿Nがある。37-50～53は皿Aで、口径9.6～10.0cm、器高1.5cm前後あり、口縁部の巻き込みは緩い。底部は調整が雑となり凹凸が顕著となる。37-51は底部が平坦である。37-54～56は皿Acで、口径10cm前後ある。口縁端部は巻き込みが緩くなり、斜め内側に折り曲げておさめる。皿Nは小型皿と大型皿に区分できる。37-57～63は小型皿で、口径9～10cm、器高1.5cm前後である。口縁部は内弯気味のものも半数を占め、口縁部のナデも二段ナデと一段ナデが共存する。37-58は底部中央に穿孔(焼成後)がある。37-59は口縁部が厚く、皿Aが退化した形態に類似する。37-64～68は大型皿で、口径14～15cm、器高2.3～3.4cmまでである。口縁部は内弯気味に立ち上がる。口縁部のナデは二段ナデである。37-66・67は端部

を肥厚気味におさめる。37-69は瓦器椀である。口径14.6cmあり、外面は口縁部付近をヘラミガキ調整、内面はヘラミガキを密に施し、底部にはジグザク文を施す。器壁は厚手で丁寧に仕上げる。37-70は須恵器鉢の底部である。高台径12.0cmあり、底部はヘラ切りの後、高台を貼り付ける。内面は平滑である。東海系の製品と考えられる。37-71は須恵器鉢で、口径31.5cmある。口縁端部は肥厚せず、そのままおさめる。口縁端部を幅5cmほど押さえて片口とする。口縁部のみ焼成良好で、東幡系の製品である。37-72～75は白色土器皿である。37-72のみ内弯する体部をもつ。口径9.0cm、器高2.3cmあり、内面の底部中央は窪みを造る。この窪みは、白色土器高杯の内面中央にみられる窪みと類似する。37-73～75は直線的に外方に延びる体部をもつもので、口径10.5cm前後、器高2.1cmある。37-76は白色土器椀で、口径15.2cm、器高4.2cm、底部径6.4cmある。体部は外上方に延び、端部は外反気味におさめる。37-72～75の底部はすべて糸切りによる平高台である。37-77～79は輸入陶磁器である。37-77はいわゆる口兀の白磁皿で口径10.0cm、器高2.2cmあり、内弯する体部をもつ。37-78は玉縁口縁を有する白磁椀で、口径17.2cmある。37-79は白磁椀の底部である。高台は径4.4cm、高さ2.0cmで不安定な形状を呈する。高台の下半と内側には釉がかからない。

土壇2444(図版38・116)土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、白色土器、輸入陶磁器などがある。京都V期新～VI期古に属する。

土師器皿には、皿A、皿Ac、皿Nがある。38-1～3は皿Aで、口径9.5cm前後、器高1.5cm前後あり、口縁部の巻き込みは緩い。皿Aは古い時期の混入品であろう。38-4は皿Acで、口径10.5cm、器高1.4cmあり、口縁部は斜め内側に折り曲げておさめる。皿Nは小型皿と大型皿に区分できる。38-5～14は小型皿で、口径9.6～11.0cm、器高1.5～2.1cmある。口縁部は内弯気味に立ち上がりおさめる。口縁部のナデは二段ナデと一段ナデがある。38-10は口縁部が厚く、皿Aが退化した形態に類似する。38-15～26は大型皿で、口径は14cm台を主に15cmまで、器高3cm前後である。口縁部は内弯気味に立ち上がる。外反気味におさめるものはみられない。口縁部のナデは二段ナデである。38-18・19は端部を肥厚気味におさめる。38-27・28は須恵器鉢である。38-27は底部で、高台径8.0cmある。38-28は口径28.6cm、器高10.3cm、底部径10.0cmある。体部は外上方に延び、口縁部は肥厚せずにおさめる。東幡系に属す。底部は糸切り成形であるが、内外面とも平滑である。38-29は白色土器蓋で、口径10.0cm、器高2.4cmあり、頂上に扁平なつまみを貼り付ける。天井部はヘラケズリ調整する。皿を反転させた器形である。38-30・31は白色土器皿で、口径10.4cm、器高2.2cmあり、体部は直線的に外に延びる。38-32・33は輸入陶磁器の白磁椀である。玉縁口縁をもち、口径はともに16.0cmある。38-33は器高6cm前後あるが、底部とは接合できない。

3. 鎌倉・室町時代の土器類

井戸2345(図版38・116)土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、白色土器、輸入陶磁器などがある。京都VI期中に属する。

土師器皿は皿 N のみであり、皿 A、皿 Ac はみられない。皿 N は小型皿と大型皿に区分できる。38-34 ~ 44 は小型皿で、口径 8 ~ 9 cm、器高 1.5 cm あり、口縁部はやや内弯気味に立ち上がる。口縁部のナデはすべて一段ナデである。38-45 ~ 54 は大型皿で、口径は 13 cm 台を主に 14 cm まで、器高 2.5 cm 前後である。口縁部のナデは一段ナデと二段ナデが共存するが、口径の小さなものは一段ナデが卓越する。38-55 は須恵器鉢の底部で、底部径 11.4 cm あり。底部内・外面は擦られて平滑となっている。東幡系に属す。38-56 は瓦器碗で、口径 14.4 cm、器高 5.2 cm あり。外面にはヘラミガキはみられないが、内面は粗くヘラミガキ調整し、底部も螺旋状に暗文を施す。38-57・58 は白色土器高杯の脚部である。38-57 は脚部の大半が残存する。外面はヘラケズリで面取りされ、12 角形となる。38-58 も脚部下半の破片で、外面は 12 角形に面取りされている。両方とも芯棒の回りに粘土を巻き付けて成形する。38-58 の内面は熱を受けており、フイゴ羽口などに転用された可能性がある。38-59 ~ 62 は輸入陶磁器である。38-59 は白磁皿で、口径 10.3 cm、器高 2.7 cm、底部 4.2 cm あり。底部の内外面には釉が及ばない部分がある。38-60 は白磁の合子蓋で、口径 4.8 cm、器高 1.5 cm あり。天井には草本の文様を配置する。38-61・62 は青磁皿である。ともに口径 11 cm、器高 2.2 cm 前後あり。内面底部は、38-61 は無文であるが、38-62 には櫛で文様が彫り込まれている。

埋納 2813 (図版 38・116) 瓦器碗が 5 個体出土した。うち 1 個体は破片のため、図からは除外した。京都Ⅳ期新～Ⅴ期古に属する。

4 点ともほぼ同法量で、口径 15 cm 前後、器高 5.7 cm 前後あり。底部径は 38-63・64 が 5.4 cm、38-65・66 は 6.2 cm 前後で先の 2 者よりやや大きい。38-65・66 は底部が広く安定した形態をもつ。外面の調整は、4 点とも粗いヘラミガキ調整を施す。このヘラミガキ調整は、外面を 3 分割し、粗くジグザク状に磨く。38-65 が最も丁寧である。内面もヘラミガキ調整を施す。内面のヘラミガキは器具を周回させ、隙間なく施す。ただし 38-66 はやや粗い。内面の見込み部分は、38-63・64 は文様がないが、38-65 はジグザク状の暗文を施し、38-66 ではさらに粗いジグザク暗文となる。安定した底部の器形をもつこと、見込み暗文があることから、38-65・66 は 38-63・64 より古い形態といえる。

土壙 2735 (図版 39・117) 土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器などがある。京都Ⅶ期古～中に属するが、京都Ⅴ期の遺物も含まれる(「▲」で示した)。土師器皿のみを掲載した。

土師器皿には、皿 Ac、皿 N、皿 S がある。皿 S は白色系の胎土をもち、この段階から加わる器種である。39- 1 は皿 Ac である。口径 9.0 cm、器高 1.2 cm あり、口縁部は内側に折り返しておさめる。口径は大きく、口縁端部の処理も丁寧であるため、古い遺物の混入と考えられる。皿 N には小型皿と大型皿がある。39- 2 ~ 6 は小型皿で、口径 8 ~ 9 cm、器高 1.5 cm 前後あり。口縁部のナデは一段ナデである。39- 5・6 は体部が内弯するが、39- 2 ~ 4 は体部が扁平である。39- 7・8 は皿 S の小型皿と同じ形態をもつが、39- 7 は皿 N の胎土で製作されている。39- 8 も赤味を帯びた色調であるため、皿 N 側に含めた。39- 9 ~ 12 は大型皿である。39- 9・10 は口径 11 ~ 13 cm、器高 2.1 ~ 2.7 cm あり、口縁部は外反気味におさめる。口縁部のナデは一段ナデである。

39-11・12は、口径が大きく古い遺物の混入であろう。皿Sには小型皿と大型皿がある。39-13～16は小型皿で、口径8cm前後、器高2.3cm前後ある。内弯する深めの体部をもち、口縁部はナデ調整し、端部は内側につまみ上げておさめる。39-17は大型皿で、口径10.2cm、器高2.7cmある。体部は内弯し、底部は狭い。器壁は厚手である。39-18は口径12.9cm、器高3.5cmある。白色系の胎土と焼成をもつが、底部が広い点では皿Nの大型皿に類似する。以上では、39-1・5・6・11・12は京都V期の遺物の混入であろう。

溝 2753 (図版 39・117) 土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。京都VII期中に属する。

土師器皿には、皿N、皿Sがある。皿Nには小型皿と大型皿がある。39-19～23は小型皿で、口径8cm台、器高1.5cm前後あり、口縁部のナデは一段ナデである。体部は外に開き気味におさめる。39-24～28は大型皿で、口径11～12cm台、器高2cm前後ある。口縁部は、39-24・28は内弯気味であるが、39-25～27は端部が外反しておさめる。外面のナデはすべて一段ナデである。皿Sには小型皿と大型皿がある。39-29・30は小型皿で、口径7.5cm、器高2.1cmあり、内弯する体部をもつ。39-31～36は大型皿で、口径10.9～12.9cm、器高2.9～3.3cmある。体部は内弯気味におさめる。器壁が厚手の製品が多い中、39-34は薄手の製品である。底部の狭い器形が多い。39-37・38は瓦器皿である。口径9cm前後、器高1.5cm前後あり、土師器皿Nの小型皿とほぼ同法量であるが、口縁部は立ち上がり気味におさめる。内面底部にヘラミガキはみられない。39-39は瓦器羽釜である。口径17.4cmあり、鏝は短く水平に突出する。外面はオサエ調整、内面は目の細かいハケでの調整とみられる。39-40は瓦器の片口鉢である。口径19.3cm、器高7.5cmあり、口縁の一部を押さえ、片口にする。外面はナデ・オサエ調整であるが、雑なため粘土紐の単位が観察できる。内面はナデ調整であるが、目が粗くハケの様にみえる。完形品であり、把手は付かない。口縁部外面と内面は黒色、外面は灰色を呈する。39-41は輸入陶磁器の白磁皿である。口径10.3cm、器高2.8cmあり、釉は底部外面まで口縁部を除くほぼ全面にかけられる。見込みに段をもつ。完形品である。

土壙 2338 (図版 39・117) 土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。京都VII期新に属する。

土師器皿には、皿N、皿Sがある。皿Nには小型皿と大型皿がある。39-42～46は小型皿で、口径は8cm台を主体とし、器高は1.5cm前後である。口縁部は外方に延びておさめ、ナデも一段ナデである。39-47・48は大型皿で、口径11.5cm前後、器高1.5cm前後で、小型化が進行している。口縁部は外反気味におさめ、底部は凹凸がみられる。39-49～52は皿Sの大型皿である。口径12cm台、器高3.2cm前後ある。土壙2753出土の皿S(39-31～36)に比べると、口径は若干小さく、器壁も薄くなっている。39-53は瓦器羽釜である。小片からの復元で口径22.6cmと推定される。鏝は短く突出する。内面は細かい目のハケか、目の粗いナデで調整される。39-54は須恵器鉢の口縁部である。小片からの復元で口径22cm前後ある。口縁部は肥厚し、端部は上方につまみ上げておさめる。口縁端部の外面のみ焼成良好で黒色を呈する。東幡系に属する。39-55は焼締陶器甕である。口縁部は上下方向に拡張する。口縁部はナデ調整するが、体部内面は粘土紐継

ぎ目が観察できる。体部外面と口縁部内面に釉がかかる。常滑産である。39-56 は青磁碗で、完形品である。口径 8.5 cm、器高 3.4 cm、高台径 4.2 cmある。全体に厚手で、重い質感がある。釉は口縁部と高台の畳付を除く全面にかけられる。内面に汚れが付着する。

土壙 2672 (図版 39・40・117・118) 土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。京都Ⅶ期新に属する。

土師器皿には、皿 N、皿 S がある。皿 N には小型皿と大型皿がある。39-57 ～ 61 は小型皿で、口径 7 ～ 8 cm 台、器高 1.5 cm 前後ある。体部は開き気味におさめる。内弯気味のものは含まれない。39-57・59 は体部に歪みが生じている。39-59 は二次的な焼成を受けている。39-62 ～ 65 は大型皿で、口径 10.8 ～ 12.4 cm、器高 2.0 ～ 2.6 cm ある。口縁部は外反気味におさめる。器壁が薄い製品が含まれる。39-66 ～ 70 は皿 S の大型皿である。口径 12 cm 前後、器高 3 cm 前後あり、すべて薄手の製品である。40- 1 は須恵器甕である。口径 29 cm、体部最大径 53.5 cm ある。体部下半を欠損する。口縁部は短く外反し、端部は面をもつ。外面は格子タタキを口縁直下まで密に施す。内面は目の粗いハケを用い、体部上半は横方向に丁寧に、中位以下は斜め方向に施す。下半はナデで消されている。勝間田焼など岡山地方産の須恵質陶器であろう。40- 2 ～ 4 は輸入陶磁器である。40- 2 は白磁皿で口径 9.9 cm、器高 2.7 cm、底部径 6 cm ある。内弯する体部をもち、口縁部内側の一部を除き、全面に釉がかかる。溝 2753 出土例 (39-41) に類似するが、やや小型で白色を呈する点が異なる。40- 3 は白磁碗で、口径 12 cm あり、深めの体部をもち、40- 4 は青磁碗の底部で、高台径 5.0 cm ある。高台の畳付を除く全面に釉がかかる。見込みに文様はない。

土壙 2312 (図版 40・118) 土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器などが出土している。ここでは残存状態が良い須恵器鉢 (40- 5) を報告する。京都Ⅵ期新～Ⅶ期古前後に属する。

須恵器鉢は口径 28.4 cm、器高 10.5 cm、底部 8.0 cm ある。体部はやや内弯気味に外上方に立ち上がる。口縁部は肥厚し、断面は三角形を呈する。口縁部の 1 箇所を押さえて片口とする。底部は糸切りのままで未調整、内面底部は擦り減って平滑である。東播系の製品である。

土壙 1315 (図版 40・118) 土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器などがある。京都Ⅷ期新～Ⅸ期古に属する。

土師器皿には、皿 N、皿 Sh、皿 S がある。皿 N には小型皿と大型皿がある。40- 6 ～ 10 は小型皿で、口径 7.7 ～ 10.6 cm、器高 1.5 ～ 2.2 cm ある。器形全体の歪みが著しい。口縁部は外反し、外側に肥厚する。内面は体部と底部の境界が明瞭となる。40-11 は大型皿で、口径 13.6 cm、器高 2.7 cm ある。器形の特徴は小型皿と同じである。40-12 ～ 14 は皿 Sh である。皿 Sh は内面底部が内側に盛り上がる「ヘソ皿」と通称される器形で、ここでの初現である。口径 6 cm 台、器高 2 cm 前後ある。40-15 は皿 S の大型皿で、口径 16.2 cm、器高 4.1 cm 以上あり、深さがある点では碗といえる器形である。内面のナデは底部に達しない。この皿 S は京都 期以降に出現し、それ以後に盛行する器形である。同時期の皿 N が退化傾向にあるのに対して、非常に丁寧に成形される。40-16 は輸入陶磁器の青磁碗で、高台径 4.5 cm ある。釉は高台の畳付を除く全面にかかる。外面には蓮弁の文様を彫り込む。

土壙 1754 (図版 40) 土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器などがある。京都IX期古に属する。

土師器皿には、皿 N、皿 Sh、皿 S がある。40-17 ~ 28 は皿 N であるが、小型皿、大型皿の区分は明確にできない。口径 7 cm 台から 12 cm 台までである。9 cm 台が主体をなすが、この間を埋める個体もあり、法量面では連続するように見える。すべての個体は、体部と底部の境界が明瞭である。特に 40-20・22・24・26 は、変換点が屈曲する。左右対称でない個体が多い。40-29 は皿 Sh で、口径 7.0 cm、器高 1.8 cm あり、土壙 1315 出土例 (40-12 ~ 14) よりやや浅い。40-30 ~ 39 は皿 S の大型皿である。出土遺物の構成では主体をなす。口径 11.4 ~ 16.5 cm、器高は大半が 3 cm 前後であるが、40-39 のみ 3.8 cm である。体部は直線的に外上方に延びる。底部は狭く、椀的な様相がみられる。40-39 は深い器形で、土壙 1315 出土例 (40-15) に近い個体である。胎土と色調に注目すると、従前で述べてきた白色系の皿 S ほど白さが際だっていない。40-31・32・35 などは灰白色として包括できるが、残りは燈色を呈する。40-38 は浅黄燈色を呈し、皿 N に類似した色調といえる。本土壙出土の皿 S は、数量比が増加すること、口径 11・12 cm 台のものが主体であること、底部が狭く椀的な形態をもつことなど、京都IX期以降に盛行する皿 S の初現的な様相を有している。

井戸 2768 (図版 40・118) 土師器、瓦器、須恵器、施釉陶器、輸入陶磁器などがある。京都IX期中~新に属する。土師器と瓦器羽釜を图示する。

40-40 は土師器皿 S の小型皿で、口径 7.1 cm、器高 1.8 cm である。薄手の製品であり、底部の盛り上がりは低い。40-41 は皿 S の大型皿で、口径 17.0 cm、器高 3.3 cm である。底部はやや丸みを持ち、不安定である。口縁部は外反気味におさめる。土壙 1754 出土の皿 S と比べると、器高は浅くなり、皿的な形態となっている。40-42 は瓦器羽釜で、口径 26.8 cm、器高は 18 cm 程度あり、羽釜としては大型の製品である。体部外面はオサエ調整であるが、不十分であるため粘土紐の単位が観察できる。内面は目の細かいハケで横方向に調整する。外面には煤が付着する。

埋納 1864 (図版 40・118) 瓦器羽釜の内部に土師器皿を蓋として納めたもので、埋納遺構の容器として使用されたものである。京都IX期中~新に属する。

40-43 は土師器皿 S の大型皿で、口径 16.0 cm、器高 3.1 cm である。口縁部は外反気味におさめる。内面の体部と底部の境界はナデによってやや窪む。40-44 は瓦器羽釜で、口径 18.2 cm、器高 10.2 cm である。鏝の突出は鈍い。外面はオサエ調整があるが、不十分であるため粘土紐の単位が観察できる。内面は横方向にハケで丁寧に調整する。ハケの目は非常に細かい。鏝より上は黒色、それ以下は灰色を呈する。色のちがいは重ね焼きの痕跡である。

埋納 1697 (図版 40・118) 前者と同じく、瓦器羽釜の内部に土師器皿を蓋状に納めた埋納遺構の容器である。京都IX期中~新に属する。

40-45 は土師器皿 S の大型皿で、口径 15.7 cm、器高 2.8 cm である。40-43 と同じ特徴をもつが、40-43 よりやや浅く、仕上げは丁寧である。40-46 は瓦器羽釜で、口径 16.6 cm、器高 11.1 cm である。40-44 と同じ特徴をもつが、40-44 より口径が狭く背が高いこと、内面がナデ調整であることなどが異なる。内面は黒色をとどめるが、外面は燈色を呈する。

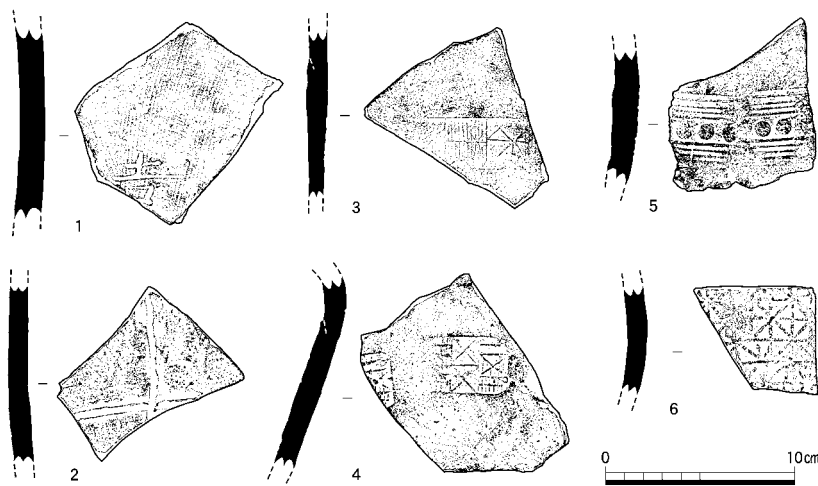


図 24 陶器甕拓影・実測図（1：4）

甕群 1・2、その他遺構（図版 41・119・122）甕群 1・2 から出土した陶器甕で図化できたもの、ならびに単独で出土した陶器甕（埋甕 2851）について解説する。

41- 1～6 は甕群 1 から出土したもので、すべて常滑甕である。41- 1 は甕を廃棄した土壌 1712

から出土したもので、口径 52.4 cm、肩部径 89 cm ある。肩部が張った器形で、外面には自然釉がかかる。口縁端部は上下方向に拡張し、幅 5 cm ある。この甕は口縁部を下にして出土した（写真 2 参照）。また体部の 3 箇所に穿孔があることが確認できた。穿孔は、いずれも内面側が大きく破損しており、外面からの打撃で穿たれたことが推定できた。破損状況は後述する 3～5 の底部にも共通するが、体部が穿たれていること、打撃の方向が逆であることから、掘り出された後で叩き割られたと判断できる。外面はナデ・オサエ調整、内面の口縁部は丁寧な横ナデ、肩部以下は粗雑なナデ調整である。

41- 2～6 は甕据付穴に残存した常滑甕の底部である。41- 2 を除く 41- 3～6 には先述した穿孔がある。41- 3～5 は底部のほぼ中央、41- 6 は底部・体部の境界より 8 cm 上に穿たれている。孔はいずれも直径 2 cm ほどで、外面側に大きく破損しており、据わったままで上から打ち抜かれたことが推定できた。

41- 7 は甕群 2 の土壌 2639 から出土した常滑甕である。この土壌は甕据付穴ではなく、甕が廃棄された土壌である。個体は口縁部、肩部からなり、体部は接合できなかった。口径 51.2 cm あり、口縁部は外反する。口縁部の先端は窪みがめぐる。外面は格子タタキで成形され、肩部の 2 箇所に絵画が描かれている（図版 41- 7 の A・B）。A は杉の葉、B は下部が欠損するが草本などとみられる。体部内面は横ナデ調整である。口縁部の内外面は横ナデ調整である。内面の口縁部と体部境界には接合時の段がそのまま残る。体部内面はナデが雑なため、粘土紐の単位が観察できる。

41- 8 は甕群 2 の土壌 2662 から出土した備前甕で、体部下半は据えられた状態で出土した。唯一全体が復元できた個体である。口径 46 cm、器高 85.4 cm、最大径 75.5 cm、底部径 43.8 cm ある。口縁部は玉縁を呈する。玉縁は長さ 2.2 cm、口頸部は約 5 cm ほどである。底部は緩やかな丸底である。外面はハケ調整、内面はナデあるいは目の細かいハケで調整する。内面にも自然釉が薄くかかる。

41- 9 は埋甕 2851 とした常滑甕で、中央東寄り、甕群 1 の東端から東へ約 8 m で単独出土した。残存する範囲に穿孔はみられない。

41- 2～6、ならびに 41- 9 の常滑甕底部は、41- 3・5 が底部径 25 cm 台、他の 4 点は 21～

23 cm台である。外面はオサエ・ナデの後、底部付近をへら状の工具でナデ上げて調整する。内面は、底部をオサエで成形した後、体部は横方向にナデている。

陶器甕口縁部（図版 42・120・121、図 24、観察表 4） 図版 42 では各遺構から出土した陶器甕の口縁部を示した。破片の大きなものについては口径を復元・図化した。小破片は断面形を示すにとどめた。ただし、破片の残存程度と推定口径については、観察表 4 に示した。

甕口縁には常滑、備前、その他がある。常滑が最も多く、次いで備前、その他となる。

42- 1～5 はその他の製品である。42- 1 は渥美、42- 2・3 は西日本産とみられる須恵器系の陶器、42- 4・5 は須恵器とみてよい製品である。

42- 6～29 は常滑甕の口縁部である。42- 6・7 は外反するだけのもの、42- 8 は端部を内側に折り曲げたものである。42- 9～29 は端部が上・下方向に拡張するもので、端部幅の狭いものから広いものへ配列した。端部幅は 42-12 が幅 2.4 cm で最も狭い。幅 3 cm に満たないものは上・下方向に均等に拡張しているが、幅 3 cm 台からは下方への拡張が顕著となる。幅 4 cm 台では、上方に拡張するもの（42-18・19）もあるが、大半は下方へ拡張し、幅 5 cm 台では下方への拡張が一層顕著となる。42-26 は幅 5.6 cm あり、ここでの最大値であった。またこの個体は下端が頸部と接している。口径が復元できた 42-27～29 では、42-27 は端部幅 2.1 cm で最も狭い個体であった。42-28・29 はともに幅 4 cm 台である。

端部幅と推定口径の関係をみると、外反する 42- 1～5 は口径にまとまりがないが、端部幅 2 cm 台のものは推定口径 20～40 cm 台まであり、小型・中型製品の口縁部といえる。幅 3 cm 台もこの傾向にあるが、幅 4 cm 台では口径 50～60 cm の製品が中心を占め、幅 5 cm 台では口径 70 cm に及ぶものが出現する。このように、端部幅が広いほど口径が大きい関係が指摘できる。

端部幅と出土遺構の年代についてみると、端部が外反するだけのものは 15 世紀の遺構から出土しており、これらは新しい時期の遺構への混入として理解できる。幅 5 cm 台のものも 15 世紀の遺構から出土しており、比較的早い段階で廃棄された製品と考えられる。14 世紀に属する遺構から出土したもので端部幅が広い個体は、42-19・22 と掘削中に出土した 42-23 である。これら以外の場合、製品のもつ年代観と遺構年代は一致しない。このことは、甕が長期にわたり使用され、新しい時期の遺構に埋没したことが原因であったと考えられる。

なお常滑の編年では、端部が外反するだけの 42- 6・7 は 2～3 期、幅 2 cm 台のものは 5～6 a・6 b 期、幅 3 cm 台のものは 6 b～7 期、幅 4 cm 台のものは 7～8 期、幅 5 cm 台のものは 8 期で、端部幅が最大の 42-26 は 9 期に属する。また、41- 1 の個体は 8 期であるが、41- 7 は 1 b 期に遡る可能性がある。41- 2～6 の底部は大型である点から 7～8 期に属すると考えられる。²⁾

42-30～35 は備前甕の口縁部である。端部は折り曲げただけのもの（42-30）、肥厚した端部が外側に巻き込むもの（42-33・34）、外面に貼り付けた状態を呈するもの（42-35）などがある。42-33 は 14 世紀に属しており、遺構年代は製品の年代観に比較的近いといえる。

図 24 に掲載したものは、陶器甕の体部に施された線刻とタタキ文様である。図 24- 1 は備前、図 24- 2～4 と図 24- 6 は常滑、図 24- 5 は東海系の須恵器系陶器とみられる。図 24- 1 はハケ

で調整した外面に「吉」ないし「遠」の様な文字を線刻する。図 24- 2 は「+」か、ヘラ記号（窯記号）とみられる。図 24- 3～6 はタタキ文様である。図 24- 3・4 は長方形の区画内に平行線と斜格子を配したものの、図 24- 5 は横方向の平行線中に円形浮文を配したものの、図 24- 6 は格子を交互に重ねたものである。これらのタタキは、文様として部分的に施されたものである。

楊梅小路路面形成層（図版 43、観察表 5） 楊梅小路の路面層を形成する層から出土した遺物である。古墳時代、平安時代、桃山時代の遺物が出土している。図版 43 では上半に平安時代、下半に桃山時代の遺物を配置した。

43- 1～13 は土師器である。43- 1・2 は皿 A である。京都 IV 期に属す。43- 3・4 は皿 Ac である。京都 VI 期～VII 期であろう。43- 5～8 は皿 N の小型皿である。京都 V 期～VI 期に属す。43- 9～12 は皿 N の大型皿である。43- 9・10 は京都 IV 期、43-11・12 は京都 V 期に属す。43-13 は土師器碗である。白色を呈し、焼成は良好で硬く焼けている。内外面はオサエのみで調整する。溝 3250 出土例（36-22）と同じく瀬戸内系土師器の搬入品とみられるが、高台径 5.0 cm で小型化していること、ヘラミガキ調整がみられないことから、型式化が進行した製品である。43-14 は瓦器火鉢である。外面はヘラケズリ、内面にはヘラミガキを施す。43-15 は瓦器のミニチュア壺である。内外面は灰色を呈する。43-16 は瓦器鍋である。口縁部の製作は丁寧で、蓋を受ける受部は広い面をもつ。43-17～21 は須恵器である。43-17 は小型皿である。底部は糸切り痕跡をとどめ、調整が雑な製品である。43-18 は東海系山茶碗の底部である。底部は糸切りで、内面の中央は極めて平滑である。43-19 は甕の口縁部で、端部は外側に窪む面をもつ。外面はタタキ成形であるが、タタキは口縁部の上端まで達する。くすんだ黒色を呈し、東幡系の製品であろう。43-20 は鉢の底部で、外面下半のみヘラケズリを施す。43-21 は壺の底部である。体部は厚手で高台は三角形を呈する。外面はヘラケズリを施す。東海系の製品であろう。43-22 は褐釉の壺である。釉は、外面と口縁部内面の一部にかかる。肩部には櫛描波状文が施される。43-23 は緑釉陶器の段皿で、内面には陰刻花文が施される。43-24・25 は白色土器皿の底部である。43-24 は糸切り痕跡がみられる。43-25 は削り出し輪高台であり、成形が丁寧な製品である。43-26～31 は輸入陶

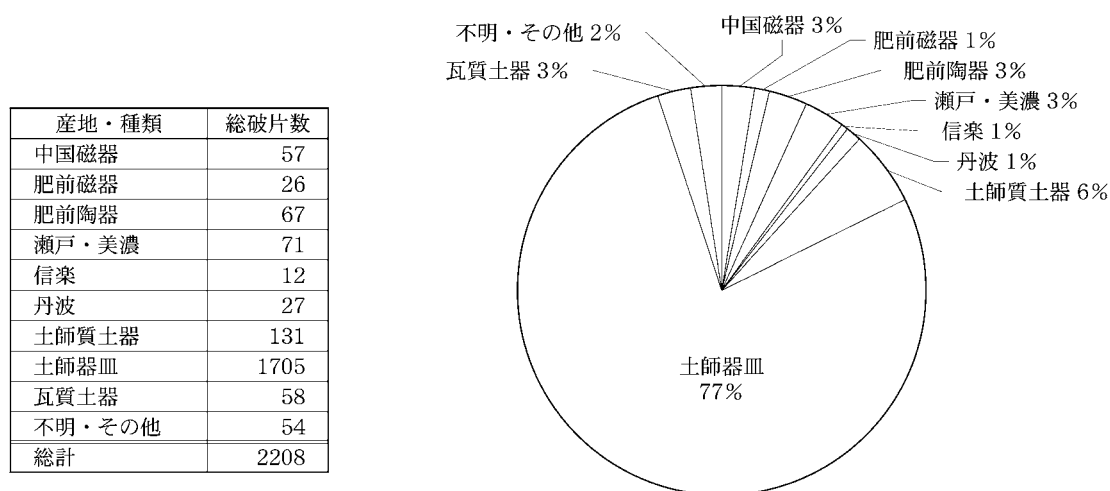


図 25 土壙 1027 出土遺物の産地組成

磁器である。43-26 は白磁皿で、体部は内湾し、内面には段をもつ。43-27 は白磁椀の底部である。43-30 のように玉縁口縁部を有する製品とみられる。43-28 は白磁壺の底部である。底部外面を除く全面に釉がかかる。43-29 は白磁椀で、体部全面に釉がかかる。43-30 は白磁椀で、口縁部は玉縁を有する。43-31 は褐釉壺の底部で、高台の内側も含めた全面に釉がかかる。断面は部分的に赤褐色を呈する。

4. 桃山・江戸時代の土器・陶磁器類

楊梅小路路面形成層（図版 43、観察表 5） 43-32 ～ 36 は桃山時代の土師器皿である。43-32・33 は小型皿、43-34 は中型皿、43-35・36 は内面に圈線をもつ大型皿である。京都XI期古段階のものである。43-37 ～ 40 は土師質土器である。43-37 は口クロ成形で灰白色の胎土をもつ鉢である。43-38・39 は堺系の焼塩壺である。蓋、身とも内面は赤橙色に変色している。43-40 はいわゆる「つぼつぼ」と呼ばれる小壺である。43-41・42 は瓦質土器の火消壺の蓋と火入である。43-43 ～ 53 は陶器類で、43-43 ～ 45 は瀬戸・美濃系、43-46 ～ 51 は肥前系、43-52・53 は丹波産である。43-43 は鉄釉の天目椀。43-44 は碁笥底の鉄釉鉢である。ヘラで草文を彫り、その草文部分のみ灰釉にする。43-45 は黄瀬戸の鉢であるが、釉薬が溶けきらず白濁している。43-46 は高台際まで施釉された丸皿で、残存する範囲では目痕は残らない。43-47 ～ 50 は灰釉の椀類である。43-49 の椀は内野山北窯に代表される、精良な胎土で口縁端部がやや外反する製品である。43-51 は鉄釉の広口壺の口縁部である。43-52 は屈曲した体部の内外面上半に灰釉を掛けた鉢である。残存率が悪く口径復元は推定である。43-53 は口縁端部内面に凹線をもつ播鉢で、下半の播目は使用により磨滅している。43-54 は漳州窯系の青花皿である。小片のため文様などは不明である。前述の 43-49 の椀はやや時代が下がるが、その他の製品は 17 世紀初頭に位置付けられる。

土壌 1666（図版 44・45・129・130、観察表 6） 44- 1 ～ 15 は土師器皿で、44- 1 ～ 5 は小型皿である。44- 6・7 は中型皿、44- 8 ～ 15 は圈線をもつ大型皿である。京都XI期古～中段階のものである。44-16 ～ 23 は土師質土器である。44-16・17 は手捏ねの小壺で、伏見・深草産

産地・種類	総破片数
中国磁器	82
肥前磁器	135
肥前陶器	130
瀬戸・美濃	89
信楽	117
丹波	82
備前	26
京都	19
土師質土器	265
土師器皿	2026
瓦質土器	48
軟質施釉	6
土製品	3
不明・その他	238
総計	3266

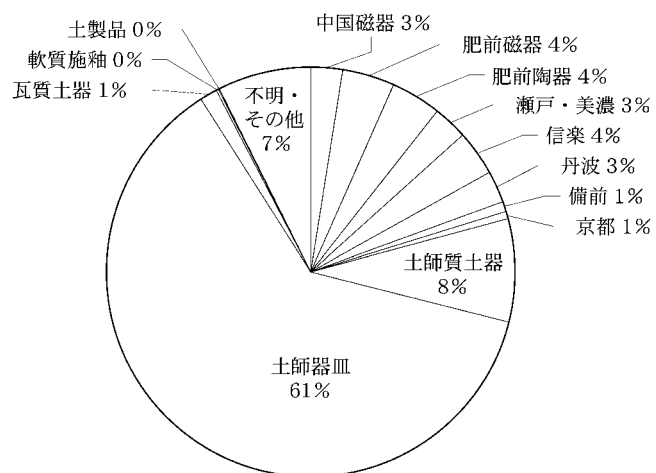


図 26 土壌 1477 出土遺物の産地組成

である。44-18～20はいわゆる大和型の釜と鍋である。44-20は炮烙として使用されたものである。44-21～23は堺系の焼塩壺で、蓋と身の内側は赤橙色に変色している。44-24・25は足付の瓦質土器の火入で、体部外面は雑に磨かれている。44-26・27は瓦質土器の瓦灯である。蓋の体部中央には長方形のスリットが設けられている。44-28～37は陶器類である。44-28～33は瀬戸・美濃系陶器で、44-28は灰釉の皿、44-29は白釉の筒型鉢である。44-30は天目椀、44-31は志野釉の碁笥底の鉢である。44-32・33は鉄釉の広口甕と汁注である。44-34～36は肥前系陶器で、それぞれ灰釉である。44-34は内野山北窯に代表される、精良な胎土をもつ椀である。44-35は砂目、44-36は胎土目の皿である。44-37は丹波産の播鉢である。播目は6本単位の櫛目で、底部内面は円圈を持たない放射状播目である。外面には螺旋状の指頭圧痕が残る。45-1・2は青花の椀と皿で、いずれも中国漳州窯系の製品である。45-2の高台周辺には、多量の砂が付着している。45-3は大型の四耳壺である。ロクロ成形され、器壁は均一で5mm程度である。胎土は褐色で、所々に白土が混じる。外面は刷毛により斑に鉄釉が塗られている。口縁部と肩口の一部が欠けるが、本来は横耳が4箇所付くと考えられる。瀬戸大窯で製作された祖母懐茶壺に酷似する。京都市内では出土例が少ない³⁾。出土遺物の年代は17世紀前半で、肥前磁器を含まない陶磁器や土師器の様相から1620年代頃が主体と考えられる。

土壙1269(図版45、観察表7) 45-4～15は土壙1269出土遺物である。45-4～10は土師器皿で京都XI期のものである。45-11～13は肥前系陶器で、45-11の灰釉輪花皿には胎土目の痕跡が3箇所残る。45-14は赤色胎土の信楽播鉢で、内面の底部から立ち上がり部分に重ね焼きの痕跡がリング状に残る。底部の播目は斜格子である。内外面ともにロクロ痕が顕著である。45-15は備前播鉢で、外面の縁部直下に重ね焼きの痕跡が残る。口縁部は片口が付き、大きく波打っている。出土遺物の年代は17世紀初頭から前半頃である。

土壙1027(図版46・123、観察表8) 46-1～20は土師器皿で、京都XI期のものである。小型皿の46-5をはじめ口縁端部に煤が付着するものが多く、灯明皿として使用されたものが目立つ。46-21～25は土師質土器で、堺系焼塩壺の46-25には「ミなど / 藤左衛門」の印が体部上方に押されている。この刻印は承応三年(1654)が下限とされている⁴⁾。46-26～28は瓦質土器で、46-26は火消壺の蓋と推定されるが、この時期の瓦質製品は比較的珍しい。46-29～35は磁器で、46-29～31・34は中国青花、46-32・33・35は肥前系の染付である。46-36～48は陶器類で、46-36～40は肥前系陶器である。46-36の灰釉椀、46-37～40の砂目の溝縁皿とも17世紀前半の製品である。46-41～47は瀬戸・美濃系陶器類である。46-44の碁笥底の筒椀は、御深井釉に近い透明感のある灰釉が掛けられている。46-45は灰釉に緑釉流しの折縁皿で、見込中央に菊花の陰刻文が押されている。46-46は呉須絵の灰釉菊皿である。46-47は灰釉の鉢で、口縁端部は敲打痕が明瞭で、灰吹として使用されたものと推定される。46-48は見込にクロスパターンの播目が残る丹波播鉢である。出土した土器・陶磁器類の様相は17世紀前半から中頃のものである。出土遺物組成の特徴は、中国磁器が肥前磁器を上回ること、土師器皿が組成比で3/4を超えることなどが挙げられる(図25)。

土壌 1477 (図版 47・48・124、観察表 9) 47-1～16 は土師器皿で、小型皿の 47-1～5 と圏線をもたない中型皿の 47-6～10、圏線をもつ大型皿の 47-11～16 である。47-16 のような京都 XI 期のものと 47-13 の京都 XII 期に属するものが混在している。47-17～22 は土師質土器で、47-17～20 は堺系の焼塩壺である。47-21・22 は大和型の羽釜と焙烙である。47-23 は瓦質の火入で、外面は丁寧に磨かれている。本来は半球形の蓋が付くが、失われている。47-24～30 は磁器で、47-24～28 は肥前系の染付、47-29・30 は中国の青花である。肥前系染付には 47-24・25 のような 17 世紀前半代のものや 47-27 の荒磯文の椀のように 17 世紀後半のものがある。47-31 以下は陶器類である。47-31～44 は肥前系陶器である。47-41 の沓茶椀、47-42 の鉢など鉄絵のものや 47-34 の青緑釉の椀など 17 世紀代の幅広い年代の製品がある。47-45～48、48-1～6 は瀬戸・美濃系の陶器である。47-45 は 3 足の香炉で、ロクロ成形で薄く作られており、鉄釉が掛けられている。47-46・47 は鉄釉の天目椀、47-48 は志野織部の丸椀である。48-1・2 は灰釉の丸皿と菊皿、48-3 は御深井釉の輪花皿、48-4 は平底の絵志野皿である。48-7・8 は信楽産の陶器である。48-7 は石英粒が多く混入し、全面に鉄釉を掛ける火入である。48-8 は浅い鉢形の鉄釉火入で、3 ないし 4 箇所足の付いていた痕跡が残る。48-9～11 は丹波産の陶器類で、48-9 は外面に鉄釉の掛かるいわゆる御歯黒壺である。無釉の内面には錆が付着する。48-10 は焼締の大型盤で、口径 37.2 cm に復元できる。内面に重ね焼きの際に挟み込んだ陶片の痕跡が残る。48-12 は京焼の平椀で、内面に柳の錆絵が描かれ、やや失透した灰釉が高台周辺を除いて掛けられている。高台には楕円内に「清水」の印がある。17 世紀後半の京焼出土資料としては比較的古い製品である。48-13 はロクロ成形の灯明皿で、いわゆる柿釉が全面に掛かる軟質施釉陶器である。出土遺物の年代は土師器皿や陶磁器類の様相から、やや幅はあるものの 17 世紀中頃から後半を主体とする。出土遺物組成の特徴では、肥前磁器が中国磁器を上回ること、肥前陶器が瀬戸・美濃系陶器の組成を上回ること、量は少ないながら京焼が出現することなどが挙げら

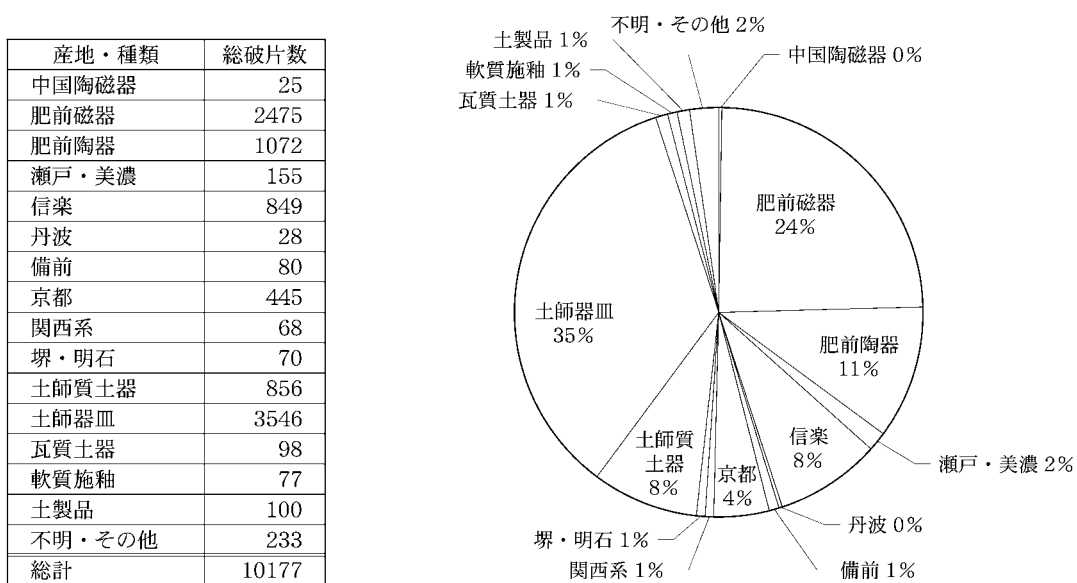


図 27 土壌 1122 出土遺物の産地組成

れよう (図 26)。

土壙 1469 (図版 48、観察表 10) 48-14 ~ 23 は土壙 1469 出土遺物である。48-14 ~ 18 は土師器皿で、48-16・17 の口縁端部には灯明皿として使用された煤の痕跡が付着する。48-19 は肥前系磁器の染付皿で、比較的高台径が小さく、高台の畳付を除いて全面施釉されている。48-20 は肥前系陶器の灰釉溝縁皿で、砂目の痕跡が 4 箇所残る。48-21 は瀬戸・美濃系の鉄釉天目椀である。48-22 は外面高台周辺を除いて内外面に白化粧を施し、その上に鉄絵で唐花文と蔓草文を交互に 3 箇所配した鉢である。鉄絵の上には線刻を施している。見込は幅約 23 mm の比較的幅広い蛇ノ目釉剥ぎがされる。口縁端部内側には鉄絵の 2 本線が付けられている。削り出しの高台はやや外へ開き幅広い。全国の出土資料に類例はないが、伝世品には同じ手法・文様の製品が東京国立博物館と根津美術館にあり、いずれも絵高麗の椀ないし鉢とされる。産地は中国の磁州窯系とされているが定まらない。日本に請来した時期は、16 世紀末から 17 世紀初頭と考えられている⁵⁾。48-23 は信楽産の焼締播鉢である。よく焼締まっており、幅広い縁帯がほぼ真直ぐに立ち上がり、内面底部の播目は斜格子である。外面のロクロ目が顕著で、鉄漿は塗られておらず、このタイプの播鉢としては古相のものである。出土遺物の年代は 17 世紀中頃が主体である。

石室 1500 (図版 48、観察表 11) 48-24 ~ 31 は石室 1500 出土遺物である。48-24 ~ 28 は土師器皿で京都 XI 期のものである。48-29・30 は中国磁器の青花で、どちらも漳州窯系の製品である。48-31 は口縁端部に返りがある大和産の焙烙である。内外面に煤が付着する。図示できた資料は 17 世紀初頭から前半代の遺物のみであるが、石室内埋土には肥前系磁器の小片が含まれており、遺構の廃絶年代は 17 世紀中頃に下る可能性が高い。

土壙 1122 (図版 49 ~ 51・125、観察表 12) 49- 1 ~ 10 は土師器皿で、小型皿の 49- 1 と圈線をもつ大型皿の 49- 8 には口縁端部に煤が付着する。京都 XII 期新段階のものである。49-11 ~ 17 は土師質土器で、49-11・12 はいわゆる「つぼつぼ」と呼ばれる小壺である。49-13 はロクロ成形で灰白色の胎土をもつ小型の鉢である。49-14 は体部外面に稜をもつ丸底の鉢で、底部外面には全面に煤が付着する。本来の用途はよくわからないが、小型の焙烙として使用されたものと考えられる。49-15 は火消壺の蓋、49-16・17 は焙烙である。いずれも深草・伏見産のものと考えられる。49-18 は灰色精良な胎土をもつ手捏ねの人形で、深草・伏見産である。49-19 ~ 42 は肥前系磁器である。49-19・20 は端反の小杯で、49-19 は手描の蕨文にコンニャク文の若松を配する。49-21 は粗製の仏飯器で、波佐見系のものである。49-22 ~ 30 は椀類である。49-22・23 は白磁椀で、49-22 の内面には紅の痕跡が残る。その他はコンニャク文を主体とした粗製の椀で占められる。49-31 ~ 39 は皿類である。49-31 はコンニャク文の稜皿、49-32 は型成形の白磁紅皿である。49-33 は輪花染付皿で、灯明皿として使用されたらしく口縁端部に煤が付着する。高台径が小さく、49-37 の皿とともに 17 世紀後半代の製品である。49-34 は輪花皿で、見込に沢瀉文と手描の五弁花文を描く。49-35・36 は見込蛇ノ目釉剥の粗製皿である。49-38・39 はどちらも高台内にハリ支痕が残る皿で、丁寧な草花文で呉須の発色もよく上質の製品である。49-40・41 は亀甲繫文の足付段重のセットである。49-42 は器壁が薄く、菊を模した捻花文の輪花鉢である。

図版 50・51 は陶器類である。50- 1～12 は京焼で、50- 1 は青・緑・赤彩と金で上絵する椀、50- 2・4 は錆絵染付の椀である。50- 3 は内外面鉄釉の椀で、見込に茶筌ズレの痕が明瞭に観察され、抹茶椀として使用されたことが窺える。50- 4 の椀の見込には目痕が残る。50- 5 はいわゆる小杉椀で残存部分に文様はみられない。比較的大振りでの小杉椀としては、初現期のものに近い。50- 6・7 は白化粧錆絵の半筒椀で、見込に3箇所目痕が残る。50- 8・9 は平椀である。50- 8 は紅葉、50- 9 は文様の残存部が少ないが注連縄文の錆絵である。半筒椀と同様、見込に3箇所目痕がみられる。50-10・11 は鉢類で、50-11 の内面下半は無釉のため香炉として使用されたと考えられる。いずれも錆絵染付で比較的丁寧な作りである。50-12 は灰釉のミニチュア花瓶である。50-13～33 は肥前系陶器である。50-13～18 はいわゆる京焼風陶器で、50-16 の稜皿が山水に鳥文である以外は、いずれも山水楼閣文である。高台内の刻印は、50-14 「中村金」、50-15 「木下弥」、50-17 「清水」で、50-16 が篆書印で判読できない。50-19～25 は刷毛目の椀・鉢類である。50-21・22・24 は見込に蛇ノ目釉剥がみられる。50-27・28 は陶胎染付、50-29 は鉄釉の椀である。50-30・31 は灰・青緑釉の皿で見込に蛇ノ目釉剥がみられる。50-32 は灰釉と鉄釉の掛分皿である。50-33 は半磁胎の呉須絵の皿で、見込中央にコンニャク文の五弁花がある。50-34～37、51- 1・2 は瀬戸・美濃系陶器である。50-34 は灰釉と鉄釉の掛分椀で、体部外面中央に3条の沈線と窪みがあり、下部に5箇所梅花状のスタンプが押される。50-35 は鉄釉の足付香炉で、外面に半菊状の鐫がみられる。50-36 は灰釉の耳付鉢、50-37 は灰釉の片口鉢で見込に大きめの目痕が3箇所残る。51- 1 は摺絵の鬚水入、51- 2 は鉄釉の瘦瓶である。51- 3～5 は信楽産で、51- 3・4 は鉄釉の壺、51- 5 は灰釉の鉢である。51- 6 は鉄釉の壺で、丹波産である。釉薬の掛からない内面に厚く鉄分が付着している。お歯黒壺として使用されたものと推定できる。51- 7 は焼締の備前瓶で、底部の扇形の枠内に「寺見」銘の印がみられる。51- 8 はベトナム産長胴瓶の口縁部である。桃山・江戸時代初頭の遺跡から多く出土する製品であるが、茶道具

産地・種類	総破片数
中国陶磁器	1
肥前磁器	515
肥前陶器	19
瀬戸・美濃	3
信楽	81
丹波	43
備前	19
京都	92
関西系	734
萩	2
堺・明石	19
土師質土器	418
土師器皿	535
瓦質土器	26
軟質施釉	36
土製品	140
不明・その他	88
総計	2771

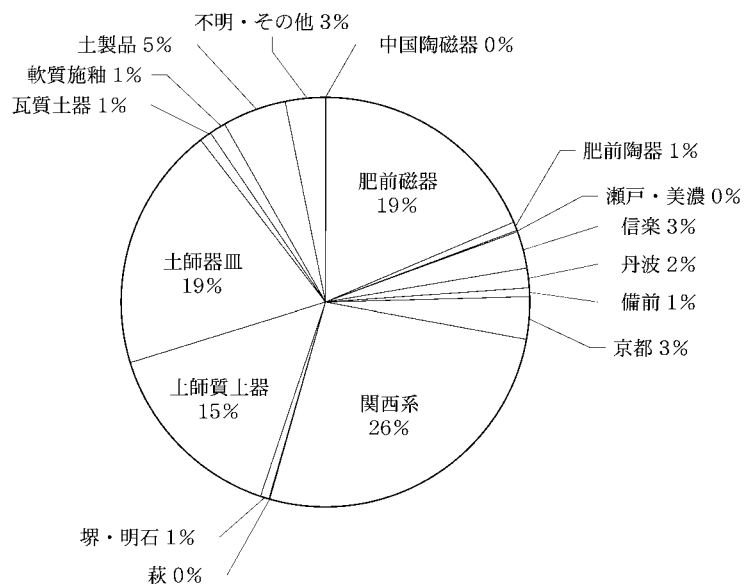


図 28 土壌 820 出土遺物の産地組成

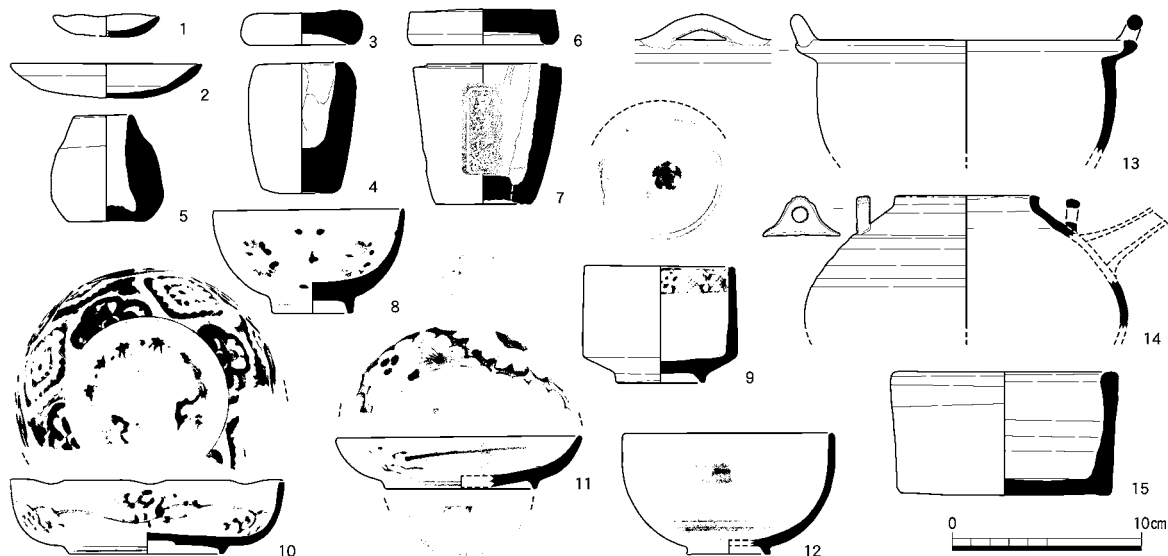


図29 土壙650出土遺物実測図(1:4)

では切溜花入として現在も珍重され伝世しているものが多い。本遺跡出土の製品も遺構年代から、茶道具に転用されたのち廃棄された可能性がある。51-9・10は軟質施釉陶器の鬚水入と灯明皿で、17世紀後半から18世紀前半にかけて比較的よく出土するが、現在のところ具体的な産地を特定できない。51-11・12は信楽産の播鉢で、51-11の高台内には輪違文の窯印がある。信楽播鉢の印は珍しいが、窯跡出土資料の匣鉢と同じ輪違文の窯印が存在する⁶⁾。51-13は備前産の播鉢で、底部の播目は不明であるが、側面の播目は口縁部から底部に向けて付けられている。やや軟質な胎土である。土師器皿や陶磁器類は、18世紀前半代の様相である。出土遺物組成の特徴は、土師器皿の組成比が1/3程度に下がること、関西系とした京都・信楽を中心として生産された陶器類が出現することなどが挙げられる(図27)。粗製の肥前磁器や関西系の陶器類の普及が、日常什器のなかで土師器皿が占めていた部分を、相対的に減少させたものと考えられる。

土壙1234(図版52・53・129、観察表13) 52-1~14は土師器皿で、52-1~4の小型皿の口縁端部には1箇所もしくは2箇所に煤が付着する。52-9~14の圈線をもつ大型皿のうち、52-14はやや古い様相を示すが、その他は京都Ⅻ期のものである。52-15~21は土師質土器である。52-15・16はロクロ成形で灰白色の胎土をもつ小型の鉢である。底部に糸切り痕が残る。52-17は鉄鉢形の手捏ねの鉢である。52-18・19は「泉州麻生」銘の堺系焼塩壺の蓋と身である。52-21は体部外面を丁寧に磨く風炉である。体部が真直ぐ立ち上がり、円筒形の3足が付く。風炉としては比較的古相の製品である⁷⁾。内面上半には煤が付着する。52-22~34は肥前系磁器である。52-22~27は椀で、52-23・27のような薄手の製品もあるが、概ね粗製のもので占められる。52-25の梅樹文椀の見込には蛇ノ目釉剥がみられる。52-33は外面鉄釉で笹文を線刻する鬚水入で、外面底部は無釉である。52-35は中国製と考えられる内型成形の輪花皿で、輪高台の暈付を除いて青磁釉が厚く掛けられている。

図版53は陶器類である。53-1~4は京焼で、53-3の半筒椀の露胎の高台内部には、判読できないが刻印がみられる。53-5~13は肥前系陶器で、53-5・10は陶胎染付、そのほかは刷毛

目の椀・鉢・蓋である。53-14は瀬戸・美濃系の鉢で、口縁端部には敲打痕があり、灰吹として使用されたものと考えられる。53-15は備前産の灯明受皿である。53-16・17は鉄釉の壺と鍋であるが、産地は特定できない。53-18は楽焼系の軟質施釉陶器で、赤褐色の胎土に透明の鉛釉が掛かる。外面は風化が激しく銀化している。また、外面上半には緑釉の部分も残る。53-19・20は鉄釉の掛かる灯火具（ひょうそく）である。土師器皿や陶磁器類の様相から、18世紀前半から中頃のものである。

土壙 820（図版 54～57・126・127、観察表

14）図版 54 は土師器・土師質製品・土製品類である。54-1～17は土師器皿で、圏線をもつ大型皿は口径

10 cm内外のものが多いが、54-17のように口径 11.9 cmのやや大型のものもある。このうち小型皿の 54-3と中型皿の 54-6・8、大型皿の 54-11・16には口縁端部に煤が付着する。京都期のものである。54-18～26は土製品である。このうち 54-23・24のミニチュアと 54-25の雛人形には緑彩の鉛釉が施されている。54-27～32は白色胎土の小型皿・鉢・壺である。54-29には内面に墨書があるが、重ね書きされており判読できない。54-33は土師質土器の鉢である。54-34～40は焼塩壺類で、54-34～37と 54-40は伏見・深草産である。54-34は 54-35・36に伴う蓋である。54-40の花塩壺蓋には二重画枠内に「深草瓦師 / 御焼塩 / 田中良左衛門」銘の刻印がある。この印銘はこれまでの出土例では類品が知られておらず初出の製品で、瓦師の銘があるものとしては 3 例目である。⁸⁾ 表面にはキラと呼ばれる細かい雲母片がみられ、型成形されたものと考えられる。灰白色の比較的緻密な胎土の製品である。今回の出土資料のなかでは同胎土の鉢がなく、鉢の形状などはわからない。54-41～45は土師質土器である。54-43の手あぶり型の火入は外面が丁寧に磨かれており、ドーム状の口縁内面には煤が厚く付着する。肩部に 4 箇所透かしがあり、体部下端には「吉」の角印が押されている。伏見・深草産の製品である。54-45は長方形の足付火入で、口縁端部の中央付近は薄く煤が付着する。底部には推定 4 箇所 2 mm 程度の穿孔がある。「深草□」と読める長方形の印が押されている。

55-1～24、56-1～5は肥前系磁器である。55-2のハの字状高台の椀や 55-5～7の筒形椀、55-16の蛇ノ目釉剥皿、55-23・24、56-1の青磁染付椀・蓋など 18 世紀後半代の製品が主体である。56-6～33、38は京・信楽系の陶器類である。56-6～9の丸椀には、56-6・7の簡略な上絵のものや、56-8・9の錆絵ワンポイントのものなどがある。56-11の小杉椀は若松の錆絵文である。56-20・21の平椀は、やや内弯して立ち上がる体部を持ち器高が低い。赤・緑・青彩で見込全面に草花文などが描かれている。56-34は萩焼の灰釉椀、56-35は肥前系の刷毛目蓋である。56-36は鉄釉の丸椀、56-37は白化粧イッチン描の椀でいずれも京焼である。56-39・

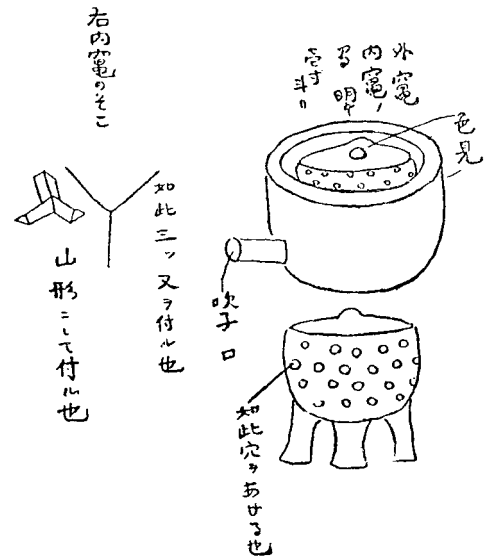


図 30 内窯の類例（鈴木半茶「猪八乾山の作品と陶器密法抄」『陶説』1955年7月号より）

40は軟質施釉陶器の香炉と角皿である。いずれも表面の鉛釉が劣化して、色調などはよくわからない。56-39の香炉の底部には「洛東」の刻印が押されている。本来は3足が付く製品であるが失われている。56-40の角皿には釉下に草花文の鏝絵が残る。いずれも18世紀後半代の製品である。

57-1～5は鉄釉の鍋、爛瓶、土瓶、甕類である。京・信楽系の製品と考えられるが限定できず、関西系の製品としておく。57-6は瀬戸・美濃系の灰釉植木鉢である。57-7～10は信楽産の製品である。57-11は鉄釉に灰釉を流し掛ける丹波産の甕である。57-12の鉢は鉄釉を流し掛けた上に灰釉を掛けたもので、京・信楽系のものである。出土遺物の年代は18世紀後半である。

図28は土壌820の土器・陶磁器の産地組成である。土師器皿の減少傾向は続き、組成比で20%になる。陶器では関西系とした製品が、京都・信楽の製品を含めると30%を超え、磁器を含めた組成比でも最も多くなる。主な理由としては、椀皿類の肥前系陶器が減り、関西系陶器が増えたためと考えられる。瀬戸・美濃系の陶器は、江戸時代を通じて最も出土量が減り、総破片数3片で率としては0%である。

土壌650(図29) 土壌650は鑄造関係遺物が多量に出土した遺構である。この土壌650は埋められたのちに整地され、その整地面に再度炉612などが構築されている。鑄造関係遺物と共伴した遺物は、鑄物工場の成立年代を知る上で重要と考えられ、以下に提示しておく。18世紀後半から末頃の遺物が主体である

図29-1・2は土師器皿である。図29-3～7は焼塩壺類で、図29-3・4は伏見・深草産、図29-5は岩倉産、図29-6・7は堺系の「泉湊伊織」銘がある製品である。図29-8～11は肥前系磁器で、図29-8は唐草文の染付椀、図29-9は青磁染付の筒形椀である。図29-10は蛇ノ目凹形高台の染付輪花皿である。図29-11も皿で、器壁の厚い粗製のものである。図29-12は京・信楽系陶器の椀である。外面に幅広の鏝絵の帯を2本巡らす。滋賀県石塔窯出土資料に類品があ

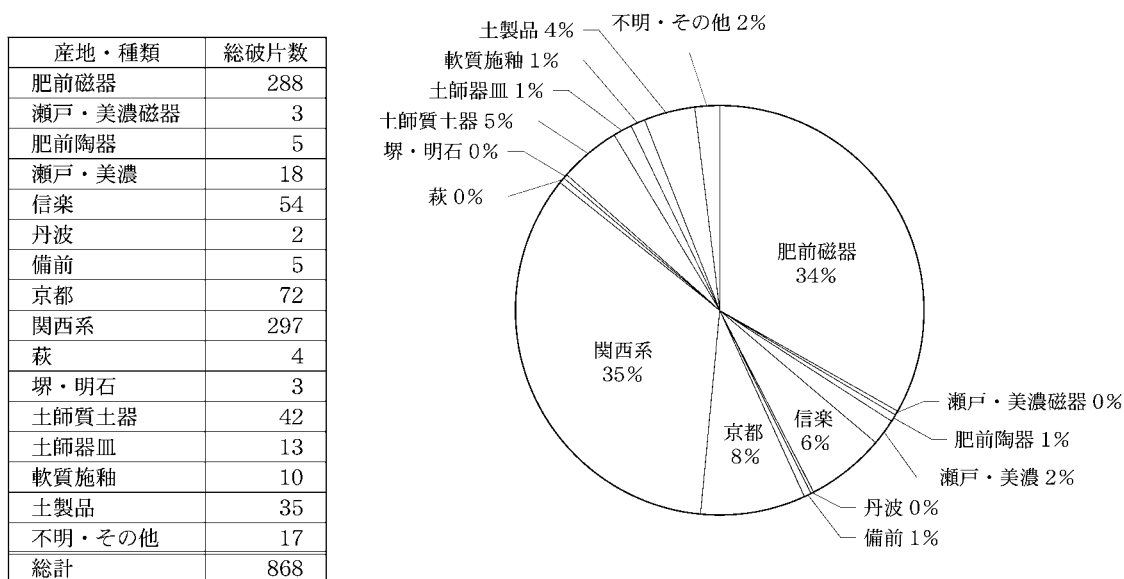


図31 土壌403出土遺物の産地組成

⁹⁾ 図 29-13・14 は鉄釉の鍋と土瓶である。図 29-15 は備前系の筒形鉢である。

土壙 489 (図版 58、観察表 15) 58- 1～3 は土壙 489 から出土した、軟質施釉陶器や陶器類の上絵付などの焼成に使用される窯¹⁰⁾に関連する遺物である。遺構年代は共伴する出土遺物から 19 世紀前半代である。58- 1 は円柱形でトチン状の基底部を、ドーナツ状に (3 本もしくは 4 本) 連結し焼台のような形状にした窯道具である。基底部の形状は不明であるが、円柱形のトチンが 3 本と仮定すれば三角形になり、後述する窯の内側に置くことができる。表面は二次被熱を受け、灰黒色を呈している。58- 2 は低火度焼成に使用される窯である。外壁が二次被熱により暗灰色に変色しているため、二重構造の窯の内窯と推定できる。内側底部の中心には褐色で透明感のある鉛釉系と考えられる釉薬が付着し、その付近には失透した透明釉も点々と付着している。外面底部には 2 本足が付属するが、2 本の位置関係と痕跡から本来は 4 本足であったものである。足を含めて底部付近と口縁の一部しか残存しないため、器高は不明であるが、口径は約 23 cm に復元できる。器壁は口縁付近は約 1.5 cm、底部付近は 2.0 cm ある。底部と体部側面には、径約 1.0 cm の孔が多数穿たれる。低火度焼成に使用される窯には、金炭窯、金薪窯、ファイゴ窯などがあり、出土資料は文献資料を参照すると、ファイゴ窯 (脚一体式) の内窯 (図 30) に似る¹¹⁾。58- 3 は内窯の足と推定される土師質土器である。二次被熱を受けていないため、窯として使用される以前に本体から脱落し廃棄されたものとみられる。本調査では、信楽産の匣鉢や円錐ピンが付く円板形のトチンなどは出土したが、他の窯道具類や焼き損じた未製品などはなく、関連する遺構も見当たらない。調査区内で窯業生産が行われていたとは考えられないが、京焼の生産地であった五条坂にも比較的近く、調査地周辺で何らかの窯業関連の工房があった可能性は残る。

土壙 771 (図版 58・129、観察表 16) 58- 4～7 は土壙 771 出土遺物である。58- 4 は口縁端部から窓を切り込む焜炉で、いわゆる風炉である。外へ開く高い輪高台が付き、球形の体部をもつ。外面は丁寧に磨かれ、器壁は 7 mm 程で均一である。58- 5・6 は一重構造の焜炉で、58- 5 は口径も一致することから 58- 6 の目皿であろう。いずれもロクロ成形で、58- 6 の口縁部には 3 箇所瓶掛用の突起が付けられ、体部下半には楕円形の風口が開けられている。足は円錐形で 3 箇所に貼り付けられている。口縁平坦部を中心に薄く煤が付着している。58- 7 は大型の盤状品で、外面底部は黄釉、その他は緑釉が塗られている。体部内側や口縁周辺に、部材の欠け落ちた痕跡が残り、底裏面には円形の足が 3 箇所以上付けられた痕跡がある。大型の箱庭道具の可能性が高い。小型の製品は京都¹²⁾や江戸遺跡¹³⁾でも出土しており、それによると山や橋、民家や松の木などが背景に造形され、庭園のミニチュアのような形状をしている。58- 7 の盤状品も同じような造形が取り付けられていたと推定できる。出土遺物が少なく年代を決定しづらいが、検出した層位や 58- 4 の焜炉類などから 18 世紀末から 19 世紀前半頃と推定できる。

土壙 403 (図版 59～62・128、観察表 17) 59- 1～20 は磁器で、59- 6・7 の瀬戸・美濃系の端反碗以外は肥前系である。59- 1～4 は筒形碗である。59- 5 は腰の張った丸碗で、焼継されており高台内に「大森」と読めるフリット (焼継材) による書銘がある。59- 9・10 はハの字状高台の碗である。59- 9 の碗は焼継され、欠落した口縁部を土師器皿で呼び継している。59-12

産地・種類	総破片数
中国磁器	3
肥前磁器	310
瀬戸・美濃磁器	28
瀬戸・美濃	11
信楽	54
丹波	9
備前	2
京都	9
関西系	790
萩	3
堺・明石	33
土師質土器	137
土師器皿	113
瓦質土器	2
軟質施釉	34
土製品	142
不明・その他	58
総計	1738

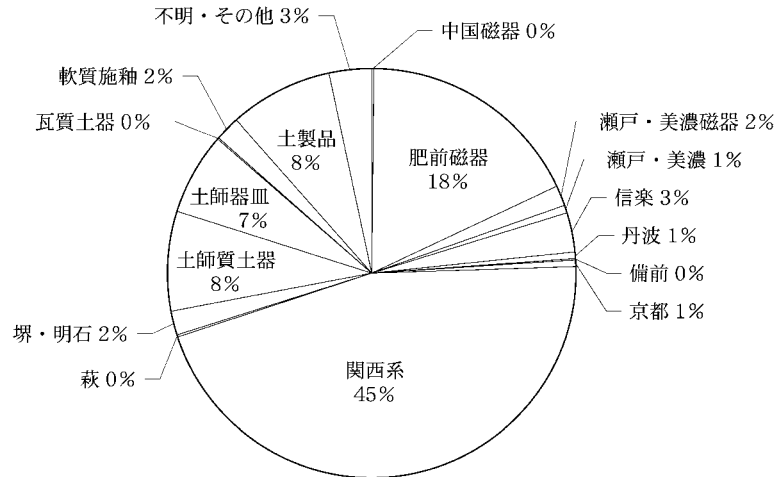


図 32 土壌 494 出土遺物の産地組成

～14・19は広東碗で、59-19の小型のものは上絵の草花文が赤と緑彩で描かれている。59-15は蛇ノ目凹形高台で輪花の鉢である。59-18は白磁に赤絵と金彩で藤原義孝の「きみかため／おしからさりし／□□」の歌（『小倉百人一首』）などを描く。肥前系の白磁に京都で上絵付した紅皿であろう。59-20は上絵の鉢の小片で、わずかに残る上絵から柿右衛門様式の製品と考えられる。59-21～24は陶器の碗類で、59-21は萩焼の灰釉碗、59-22は京焼の緑釉流しの碗、59-23・24は京・信楽系の平碗である。

60-1～15は陶器類である。60-1～4は灰釉の油受皿と灯明皿である。60-5は灰釉の蓋物である。いずれも京・信楽系である。60-6は外面白化粧に透明釉を掛ける火入で京焼である。60-7は鉄釉の丹波産の瓶で、表面にヘラ描き文字があるが判読できない。いわゆる通徳利である。60-8～10は灰釉の片口と土瓶で、60-11・12は鉄釉の鍋である。いずれも関西系の陶器である。60-13は鉄釉の植木鉢で産地を特定できない。60-14は小型の鍋で、底部に煤が付着する。実用のものかミニチュアか判定できない。60-15は匣鉢形の備前産の鉢である。底部にヘラで「伊□」の文字を線刻するが、2字目は異体字である。60-16～23は土製品で、60-17・19・20は緑釉が掛けられている。60-21は白色胎土のミニチュアで、涼炉を模したものである。60-22・23はいわゆる泥面子である。60-22は分銅で、60-23は鍵の意匠である。60-24・25は軟質施釉陶器の小型灯明皿で、いわゆる柿釉と呼ばれる透明釉が薄く掛けられている。60-26・27はタンコロと呼ばれる灯火具で無釉である。60-28～31は土師質土器である。60-28は板作りの焼塩壺で堺系である。60-29は胞衣壺の身である。60-30は大型の風炉底部で、外面はよく磨かれている。60-31は涼炉型の焜炉である。いずれも伏見・深草産である。

61-1～4、62-1は瀬戸・美濃系の馬の目皿である。高台内に「小中い」「小中居」「午十二月」「膳所」などと墨書されている。組物として一括購入された製品と考えられる。62-2～5は信楽産の鉢類である。それぞれ墨書がみられ、62-3・5には「小中居」「小中い 大清」と書かれている。

「小中居」が姓名なのか、会所のような場所を示すのか判断できない。いずれにしても、一括して取り扱われていた什器とみてよい。出土した陶磁器類は 19 世紀前半から中頃のものである。出土遺物の産地組成比では（図 31）、土師器皿が極端に減少し 1 % 台になる。瀬戸・美濃系の陶磁器は、磁器の出現もあって増加する。

土壙 494（図版 63・64・128、観察表 18）63- 1～8 は土師器皿である。63- 1～3 は小型皿、63- 5～8 は圏線をもつ大型皿である。63- 4 は圏線をもつ小型皿で搬入品である。鈍い黄橙色の胎土で、平坦な底部から屈曲して立ち上がる体部をもつ。63- 9～13・20 は土師質土器である。63- 9 は淡黄色の胎土をもつ蓋で、八角のなかに「清」と読める印が押されている。どの様な容器に付く蓋なのか不明である。63-10 は灰白色胎土の伏見・深草産の花塩壺の蓋である。63-11～13 は橙色の胎土をもつ鉢と蓋で、63-12 の蓋には「浪花 / 桃州」の印が押されている。鉢形の花塩壺の容器であるが、産地を特定できない。63-20 は外型成形の焙烙である。外面の鏝から下方に煤が付着している。63-14～19 は土製品で、63-14～17 は泥面子、63-18 はミニチュアの緑彩の壺、63-19 は雀である。63-21 は中国産の端反碗である。赤絵で異体字を描き、口縁端部には口紅がある。景德鎮窯系の製品とみられる。63-22～30 は肥前系磁器である。63-25 は青磁染付の碗で、口縁端部の内側に鋸歯状の波文を描き、見込にはコンニャク文で五弁花を押す。63-27～29 は粗製の皿で、63-28 は見込蛇ノ目釉剥、63-29 は蛇ノ目凹型高台である。63-30 は白磁蓋で、表面に線刻で松竹梅文を描く。63-31～34 は瀬戸・美濃系の磁器で、いずれも端反碗である。63-35～37・39～49 は京・信楽系の陶器である。碗類、灯明皿・灯明受皿はいずれも灰釉である。63-40 の蓋物は、白化粧錆絵で菊花文を描き口縁端部は無釉である。63-49 は内面に鉄と白化粧を掛け分け、イチチンで文様を描く鉢で、高台内に小さく「六」もしくは「十八」と読める墨書がある。63-38 は萩焼の灰釉碗である。

64- 1～7 は京・信楽系の陶器で、64- 1 は灰釉の蓋である。64- 2～6 は同じく灰釉の土瓶・片口鍋類である。64- 7 は鉄釉の仏花瓶である。64- 8・9 は丹波産で、64- 8 は鉄釉の瓶でいわゆる通徳利である。64- 9 は体部外面に横位に灰釉を流し掛ける鉢である。底中央には植木鉢に転用する際に開けられた穴がみられる。64-10 は瀬戸・美濃系の水甕の底部で、64- 9 と同じく植木鉢に転用する際の穿孔が残る。64-11 はタイ産の四耳壺の口縁部で、口縁部の内側には煤が付着している。江戸時代前期からの混入遺物である。64-12 は鉄釉壺の底部である。糸切の平底で底部が異常に厚い特徴をもつ。胎土は赤橙色で外面底部付近を除いて釉が掛けられている。底部のみの出土で全体形は不明であるが、特徴的な器形から九州の小倉で生産され、飴の容器とされる。近年の研究では、北九州を中心に山口県の萩城下、大阪の堺環濠都市遺跡・大坂城関連遺跡などで出土が確認されている¹⁴⁾。京都では初めての確認例である。64-13 は備前産の平底の鉢で、体部外面に「卍」状の窯記号が押されている。64-14 は鉄釉に黒釉を流し掛ける水甕の口縁部で信楽産であろう。64-15 は堺・明石系の播鉢で、内面底部の播目は使用により磨滅している。出土遺物の組成の中心は、19 世紀後半の幕末・明治初頭期のものである。産地組成比では（図 32）肥前系陶磁器が減じ、日常什器では小型の施釉陶器類を関西系の製品が占める様になる。

埋甕（図版 65・122、観察表 19） 図版 65 は江戸時代の埋甕である。65- 1～4 は信楽産、65- 5 は備前産である。いずれも便槽として使用されたものとみられる。65- 1 は焼締の甕で、口縁部を含めて 4 段に分割成形されている。最大径が体部上半にあり、ほぼ直立する縁帯部には 3 条の凹線がめぐる。信楽窯跡出土資料では勅使 43 号窯の製品に近いが、表面に鉄泥は塗られておらず、それよりもやや古相と考えられる。17 世紀前半代のものである。この時期の京都での大甕は、備前産や瓦質製品が多く信楽の製品は比較的珍しい。65- 2～4 は最大径が口縁部にある甕で、底部外面を除いて粗く鉄泥が塗られている。全体形がわかるのは 65- 3 だけであるが、基本的な形状は他の甕も同じである。口縁を L 字状に内側に曲げ、端部に平坦面を作りその下方に 3 条の凹線を施し、くびれ部をもうける。一回り大きい 65- 2 の甕は 6 段、65- 3・4 は 4 段に分割成形される。いずれも 18 世紀後半から 19 世紀前半代の製品である。江戸時代中期以降の便槽は、ほぼこの信楽の甕で占められている。65- 5 は大甕の下半のみ出土したもので、全体形は不明である。外面は縦方向のケズリ、内面は半円形のタタキの痕跡が明瞭である。17 世紀前半代の製品である。

その他遺構出土遺物（図版 66～69、観察表 20・21） 図版 66～69 はその他遺構出土遺物で、桃山・江戸時代初頭から 19 世紀代のものである。

66- 1～8 は土壙 1257 出土遺物で、66- 3 の黒織部の沓茶碗や 66- 4 の志野織部の椀、66- 7 の絵唐津の壺などがある。66- 8 は内面に波状の播目を放射状に付ける土師質の鉢で、あまり類例を見ない。66- 9～13 は土壙 1485 出土遺物である。66- 9 の備前産の壺は底部にヘラ記号がある。66-10～13 は瀬戸・美濃系の陶器で、66-11 の志野釉椀は高台内無釉である。66-12 は浅い碁笥底の黄瀬戸の鉢。66-13 は灰釉の折縁皿である。66-14～16 は土壙 1418 出土遺物である。66-14 は中国の華南系緑釉の合子蓋で、出土遺構は異なるが 66-21 の身と口径が合っておりセットになるものとみられる。66-15 は輪花の青花皿で中国の景德鎮窯系である。66-16 は瀬戸・美濃系の鉄釉の足付香炉で、口縁部には全周に敲打痕が残り、灰吹に転用されたものと考えられる。

66-17 は中国の漳州窯系の五彩皿で、見込に鳳凰文が描かれる。66-18 は景德鎮窯系の製品でいわゆる古染付の青花皿である。高台は削り出しで放射状にカンナ痕が残る。66-19 は漳州窯系の青花皿である。口径は 25 cm とやや大きい。花鳥文と縁帯部の花菱と算木文の組み合わせの製品は、16 世紀末から 17 世紀前半に大量に日本にもたらされており出土量も多い。66-20 は瑠璃釉の小皿で、無釉の高台内に陽刻で「青」の逆字が刻印される。中国華南産である。66-21 は前述の 14 の合子の蓋とセットになると推定される製品である。66-22・23 はベトナム産焼締長銅瓶の口縁部である。17 世紀前半にはかなりの量が南海の産物の容器として輸入されており、東南アジア陶磁器の中では京都でも比較的出土量の多い製品である。66-24 は外へ開く体部をもつ灰釉皿で、朝鮮王朝製である。高台の畳付を含めて全面施釉されており、見込に円環状に砂目が巡る。66-25・26 は軟質施釉陶器である。66-25 は天目形の椀で、内面は緑釉外面は透明釉に緑釉を横位に流し掛ける。66-26 は内面に白化粧を施し、透明釉を全面に掛けた椀で、外面にはロクロ目が顕著である。外面は胎土の橙色が透けている。66-27 の椀は渦状に削り出された高台の左側に繭型「仁清」印が押されている。底部のみの出土であるが、外面にわずかに鏝絵が残る。大振り

の椀で御室窯の製品と考えられる。66-28は「清閑寺」印の平椀で、内面にワンポイントの樹木を錆絵で配している。見込には小さい目痕が3箇所認められる。体部が口縁にかけて外へ開く特徴的な器形である。

67- 1・2は鉄釉の茶入で外面底部周辺は無釉で、底部は糸切痕が明瞭である。産地はよくわからないが瀬戸・美濃系の製品であろう。67- 2の茶入は18世紀から19世紀前半の遺構に混入して出土している。67- 3は碁笥底の絵志野鉢で、見込には簡略な草花文が描かれている。67- 4は瀬戸・美濃系の灰釉折縁鉢で、口径は26.8 cmと大きい。内面の見込中央と側面に櫛描文があり、見込の4箇所の無釉部分に重ね焼きされた痕跡が残る。67- 5は屈曲した胴部をもつ双耳鉢で、口縁周辺の内外面に灰釉が流掛けられている。丹波産である。67- 6は土師質土器の鉢でいわゆる灰器である。よく焼締まっており、体部外面に斜格子のタタキ目を装飾的に施す。67- 7は肥前系の鉄釉壺である。67- 8は三角錐形をした安定感のある備前産の壺で、67- 7とともにいわゆる船徳利と呼ばれる製品である。67- 9は丹波産の壺である。口縁は広口で屈曲し、器壁は均一でロクロ目が目立つ。種籾の貯蔵用に使用されることから、種壺と呼ばれている。出土遺構は17世紀後半から18世紀後半である。67-11は口径約48 cmをこえる大型の盤で丹波産である。67- 9とともにいずれも無釉である。67-10は備前産の筒形容器で、器高39.4 cm、復元口径23.8 cmの大型品である。具体的な用途はわからないが、茶道具の花入として使用されたものと推定する。66-27・28の京焼は17世紀中頃から後半の製品である。また、67- 9の丹波壺は18世紀代の可能性が高い製品である。それ以外の多くは16世紀末から17世紀前半の製品と推定できる。

68- 1～14は江戸時代中期頃のものである。68- 1は花塩壺の蓋で、「なんばん里う / 七度やきしお」の銘が二重角枠の中に押されている。その左側にも篆書の長方形印があるが判読できない。京都の伏見・深草産である。68- 2は「堺本湊焼 / 吉右衛門」銘の焼塩壺である。18世紀前半代の焼塩壺のうちでは、全国的にみても出土量の少ない製品で、これまでに京都市内、山口県の萩城跡¹⁷⁾、江戸城下¹⁸⁾などで数例知られる程度である。68- 3は土師質土器の火入で、外面は丁寧に磨かれている。底部に「松花山」の銘が押されており、伏見・深草産の製品である。68- 4～6は同一遺構（土壙1616）から出土した灯火具類である。68- 4・6は軟質施釉陶器である。いずれの器種も、京都では比較的出土量が少ない製品である。68- 7は土製品で、組紐の錘として使用されるものである。68- 8は白化粧の上に錆絵染付で松を描いた椀で、体部外面下に「乾□」の画銘があり、乾山窯の製品と考えられる。68- 9は高台内の釉下に「寶山」銘のある京焼錆絵染付平椀である。見込に草花文の錆絵染付がある。18世紀前半の製品である。68-10は京焼の筒形椀で、外面に暦文の上絵がある。「安永八」と読めることから、安永八年（1779）の暦椀と推定できる。68-11は丹波産の鉄釉の足付鉢である。焼成後に底部を穿孔し、植木鉢に転用している。68-12は信楽産の匣鉢で、石英粒が多く混入した粗い胎土である。体部外面にヘラ記号がある。68-13は丹波産の桶形灰釉鉢である。底部内外面と口縁の平坦部に重ね焼き痕が残り、焼成時に他の製品の匣鉢として使用されたものと考えられる。68-14は柳文の錆絵が画かれた瀬戸・美濃系の花入で、京域での出土は珍しい製品である。

68-15～36と69-1～31は江戸時代後期から幕末・明治初頭期の遺構出土遺物である。68-15～18は土製品のいわゆる泥面子である。同一遺構（土壙308）から十数個出土している。68-19は銀貨を模した土製品の玩具である。68-20・21は花塩壺の蓋と身である。ロクロ成形で、蓋・身とも底部はヘラで雑に切り離している。京都産と考えられるが、具体的な生産地を特定できない。68-22も花塩壺の蓋である。上面に「のし」の墨書があり、贈答用品であったと推定される。同種の製品が伝世している¹⁹⁾。伏見・深草産である。68-23・24はいずれも人面を墨書した土師質製品で、68-23は鉢の裏面に書かれた「木屋／中左衛門」の人名から、歌舞伎役者の似顔絵とも考えられる。68-24は堺系の焼塩壺蓋の表裏に男女の人面が墨書されている。デフォルメされた表情は、これも歌舞伎役者の似顔絵である可能性が高い。68-25は象形の土製品である。下半身が失われているが、普賢菩薩像の乗物の一部であった可能性もある。68-26～33は軟質施釉陶器類である。68-26は内外面黄釉の鉢で、柚子味噌を販売するための容器である。上下の型合わせで成形されている。本来は柚子の葉の付く蓋とセットとなるが、今回の調査では出土していない。68-27は薄く白化粧した上に錆絵と緑釉、透明釉を掛けた3脚の燭台である。脚の内側に「鶉山」の印が押される。68-28・29はともに「楽」印がある椀と鉢で、68-28は赤楽、68-29は黒楽である。68-30・31は漏斗状の内部構造をもつ涼炉とその付属部品の目皿である。外面は緑釉が掛けられ、内面の漏斗部分にも流れている。二次被熱により釉はほとんどが茶褐色に変色している。足は五角形に整形され、中央に息抜きの穴が穿たれている。底部に「清山」の小判印が押されている。「清山」は伏見・深草系の火入類にもみられる印銘で、この製品も伏見・深草で生産されたものと推定できる。68-32の人形は表面がかなり風化しているが、緑・黄・黒彩が残っている。肩口と裏面に2箇所の息抜き穴があいている。首が欠落しており断定できないが、その形状から柿本人麻呂を模した人形であろう。68-33は壁掛式の灯火具で、上下の型合わせで作られている。全面に薄い透明な鉛釉が掛けられているが、風化が激しく剥落、銀化している。68-34・35は窯道具類である。68-34は足付ハマである。68-35は京都の粟田口焼で使用される色見用のテストピースで、錆絵と呉須で交互に絵付されている。粟田口周辺の立会調査などで採集されることはあるが、京都市中で出土するのは珍しい。68-36は外面に水草文の錆絵がある丸椀で、口縁端部がやや外反する。無釉の細い高台内に「岩國／多田」の扇面印がある。京焼の系統をひく製品であるが、胎土や高台の作り、高台周辺の釉際などが京焼と異なっている。印銘から山口県の岩国多田焼とみられる。同様の刻印がある製品が伝世されており、幕末・明治初年頃とされている²⁰⁾。土壙1094検出中の出土遺物である。

69-1～6は煎茶用の端反椀である。69-1・3は瀬戸・美濃系の染付椀である。型紙摺りのいわゆる染身体文で、69-1の口縁端部には鉄釉が施される。69-2は輪高台の靈芝文椀で、中国景德鎮窯系。69-4・6は中国徳化窯系の上絵椀で、口縁端部と高台内は無釉である。69-5は呉須の発色が鮮やかな青色を呈する椀で、高台内に「玩品」の銘がある。69-7は行平鍋の把手で型成形されており、「音羽」の逆字が刻まれている。69-8はいわゆる薄手酒杯で、見込には錦書の青で波を、金彩で帆掛船が描かれている。帆に「諸荷物／万吉丸」と読める文字が書かれる。69-

9は京焼のオロシ皿で、無釉の持ち手部分に「寶山」の銘がある。オロシ目は褐釉が施される。69-10は焼締の急須把手で、陽刻小判印の「音羽」と陰刻角印の「乾」が押されている。69-11・12は淡路島珉平焼の小判形龍文皿である。龍文は緑釉の正面向（69-11）と黄釉の横向（69-12）の違いはあるが、いずれも型成形で裏面に3箇所目痕が残る。69-13は京焼の皿で、内面に能装束の人物が上絵されている。酸化焼成気味で、やや赤く呈色している。高台内釉下に「美山」銘が押されており、粟田焼の陶工長谷川美山作と推定できるが、²¹⁾出土遺構が19世紀後半代であり、天保年間から続くとされる「美山」の何代目の作か特定できない。69-14は京・信楽系陶器の錆絵の注連縄文椀である。注連縄文の椀は、徳島県下で出土量が多く研究が進んでいる。それによると、今回出土した製品は徳島県常三島遺跡出土のものと酷似しており、19世紀代のものである。²²⁾69-15～19はヨーロッパ陶器類である。69-15は塩釉の手付瓶の口縁部である。塩釉の手付瓶はドイツ製のものが多いとされる。²³⁾69-16～19は銅版転写皿で、69-16は赤色、69-17・19は青色、69-18は黒色を呈している。いずれも小片で具体的なモチーフなどは不明であるが、69-19の段付皿はボーダーにワイルドローズ、中央にウィローパターンがみられる一般的な製品と推定される。日本での出土量も多く、京都市域では3例の報告がある。²⁴⁾69-20の肥前系染付椀は口径26cmを超える大型製品で、見込に帆掛船に山水文、外面には秋草に松や雁が描かれている。文様構成から18世紀後半以降のものである。69-21～26は土師質土器の蓋付壺で、胞衣専用容器である。器形や法量に違いがあるが、検出した層位は同じで、時代差か個体差か判断できない。69-27は橙色と白色粘土の絞胎で作られた手焙形の火入である。外面は丁寧に磨かれ、内面の上半は煤が付着する。底部に「稲荷 / 青山」印があり、伏見・深草産の製品と考えられる。69-28は沖縄壺屋焼の壺（徳利）である。本来は「泡盛酒」の容器であったものが、²⁵⁾江戸時代には「南蛮・島物」と呼ばれて、茶道具の花入などに珍重されている。²⁶⁾近年は全国の近世遺跡からの出土例も多く報告されており、京都市内では2例目となる。²⁷⁾69-29は鉄釉播鉢で丹波産である。19世紀代の丹波産播鉢が京都市内で出土するのは珍しい。69-30・31は植木鉢で、69-30は焼締で稜花口縁を持ち、型押し of 蔓葉文を外面に貼り付ける。足は獣面の3足で、底部に「帯山」の銘がある。従来この種の植木鉢は丹波産とされていたが、京都でも生産されたことが確認できた資料である。69-31は緑釉の植木鉢で瀬戸・美濃系の製品である。外面に流水状の文様と斑状の刺突文を施す。

5. その他の遺物

(1) 瓦類

瓦は、火災時に掘削された焼瓦廃棄土壌などから大量に出土した。調査時には文様のある軒丸瓦・軒平瓦を中心に、刻印や文字を有する瓦を選択的に採集し、さらに整理では対象とする資料を絞り込んで作業を行った。

内容上で分類すると、平安時代から室町時代の軒丸瓦83点、軒平瓦140点で計223点、江戸

時代の軒丸瓦 59 点、軒平瓦か軒棧瓦 405 点、道具瓦など 49 点で計 513 点、総数 736 点となる。この中の瓦には文字瓦・刻印瓦などが 48 点がある。ここでは、平安時代から室町時代の軒丸瓦 25 点、軒平瓦 20 点、江戸時代の軒丸瓦と棟丸瓦 19 点、軒平瓦と軒棧瓦 15 点、道具瓦 9 点、井戸椀瓦 6 点、刻印瓦 18 点（1 点重複）の計 111 点を報告する。

平安時代から室町時代の軒丸瓦（図版 70・131・132、観察表 22）平安時代中期の瓦は 3 点、鎌倉時代の瓦は 3 点、それ以外の大半は平安時代後期の瓦である。軒丸瓦 83 点のうち、42 点が蓮華文、39 点が巴文、2 点が宝相華文である。これらは、平安時代の遺構（楊梅小路南側溝や各土壙）から 15 点、平安時代から室町時代の楊梅小路路面形成層から 10 点出土し、その他は、調査区各所の江戸時代までの遺構に混入して出土した。平安時代中期の瓦 3 点は、いずれも楊梅小路路面形成層から出土した。

蓮華文 42 点のうち、山城栗栖野瓦窯産の同文の複弁六葉蓮華文（70-14）17 点、複弁八葉蓮華文（70-15）6 点など、山城洛北産が多く、播磨産、河内産が少数混じる。70-14 の複弁六葉蓮華文軒丸瓦は同文の瓦 17 点中、13 点が同範で、うち 5 点が平安時代から室町時代の楊梅小路路面形成層やその下の整地層、土壙などから出土している。70-15 の複弁八葉蓮華文軒丸瓦は 6 点出土している。

平安時代から室町時代の軒平瓦（図版 71・132・133、観察表 23）対象とした 140 点のうち、86 点が唐草文、41 点が剣頭文、13 点が格子文である。平安時代の遺構（楊梅小路南側溝や各土壙）から 23 点、平安時代から室町時代の楊梅小路路面形成層から 27 点出土し、その他は、調査区各所の江戸時代までの遺構に混入して出土した。

唐草文 86 点は、中央部北寄りの楊梅小路路面付近の遺構より 30 数点、中央部の西寄りで 10 数点出土している。うち 33 点は栗栖野瓦窯の偏行唐草文（71- 9・10）と同文である。このうちの 17 点は、平安時代から室町時代の楊梅小路路面形成層、12 点は平安時代から室町時代の各遺構よりまとまって出土した。

剣頭文 41 点は、中央部西寄りの平安時代から室町時代の各遺構から半数が出土した。斜格子文 13 点のうち 11 点は同範で、平安時代から室町時代の楊梅小路路面形成層や各遺構から半数以上が出土した。

71- 4 の半截宝相華文軒平瓦は法成寺出土瓦である。71- 9・10 の偏行唐草文軒平瓦は 33 点が同文で、楊梅小路路面形成層から 17 点出土し、楊梅小路南側溝や各土壙からも出土している。特に 71- 9 の偏行唐草文軒平瓦は出土数が多いため、調査地周辺ではこの偏行唐草文軒平瓦と前述した蓮華文軒丸瓦（70-14・15）を使用した建物が存在した可能性がある。71-17 の剣頭文軒平瓦は、平瓦部凹面に縦方向の畳目状の圧痕が残るが、この圧痕は瓦当部を製作する際、平瓦を乗せた台の跡と考えられる。71-18 の剣頭文軒平瓦は出土例は少ない。71-19 の斜格子文 13 点のうち 11 点が同範または同文である。楊梅小路路面形成層から 8 点、それ以外は平安時代の遺構から出土しており、調査地周辺で使用されていた可能性がある。平瓦部凸面には「V」「≡」「＝」「―」「≠」などのヘラ記号がみられるものがある。

江戸時代の軒丸瓦（図版 72・134、観察表 24） 巴文 33 点、棟丸瓦 26 点がある。巴文のうち 72-10 が反時計回りの左巻きに頭部へ巻き込む三巴文で、その他は右巻きである。ほとんどの瓦は 19 世紀代の遺構から出土し、6 点は 18 世紀代の遺構から出土した。棟丸瓦はすべて菊花文である。16 弁が 22 点で最も多く、他には 8 弁・10 弁・12 弁がある。19 世紀代を中心とした遺構から出土した。

江戸時代の軒平瓦・軒棧瓦（図版 73・135、観察表 25） 軒平瓦、ならびに軒棧瓦は 405 点ある。うち、軒平瓦は 12 点、軒棧瓦は 228 点で、残りの 165 点はいずれか明確にできない。瓦当文様は、中心飾りから唐草文が左右に反転するものが主流である。

軒棧瓦と確認できるものでは、小丸なしの軒棧瓦 123 点、小丸付きの軒棧瓦 11 点、軒丸瓦のみ残る軒棧瓦が 94 点ある。軒平瓦・軒棧瓦が判別できない 165 点と軒丸瓦のみ残る軒棧瓦は接合できる可能性があり、個体数はさらに少なかったとみてよい。

江戸時代の道具瓦（図版 74・136、観察表 26） 棟止瓦、丸止瓦、一文字軒瓦、板塀瓦、鬼瓦などがある。棟止瓦には宝珠文がつくものや、軒丸瓦の両側に翼状に熨斗がつくものなどがある。

井戸椀瓦（図版 75・137、観察表 27） 瓦積み井戸 12・73・132・210・287・378・528・557 で井筒に使用されていた中から、押捺の痕跡があるもの、刻印があるものを採集した。同一井戸に使用された瓦でも、押捺痕のあるものとないものがある。押捺痕は凸面にコテ状の工具が強く押しつけられたものである。²⁸⁾ 75- 1 と 75- 2 は押し方の違い、75- 3 は道具の形状に違いがある。また 75- 3 は木口端部を打ち欠いている。

75- 4～6 では井戸椀瓦の凹面を示した。75- 4・5 では縦方向の傷跡が多数みられるが、この傷は井戸から水を汲み上げる際につるべが当たってできた傷と考えられる。75- 1～3 の端面には刻印はないが、75- 5 の端面には「右」の刻印がある。75- 6 は木口端面と側面を打ち欠いている。

刻印瓦（図版 75・76・138、観察表 28） 江戸時代の井戸椀瓦・平瓦ないし棧瓦・棧袖瓦ないし平袖瓦・一文字軒瓦・丸瓦・鬼瓦・軒平瓦・軒棧瓦・軒平角瓦ないし軒棧角瓦の端面に刻印、文字をもつものを掲載した。刻印では、丸や四角の圏線中に「平」「治」「右」「+」「V」などが押印される。「治」は 11 点、「右」は 7 点、「+」は 5 点、「V」は 5 点ある。「治」は軒棧平瓦や棧平瓦に多く、「右」は井戸椀瓦の木口に押印される。76- 6・7 の「ふかくさ九郎右衛門」、76-10 の「大ふつ□□」は瓦の製作者を示す印とみられる。刻印をもつ瓦は、いずれも 19 世紀代の遺構から出土した。76- 8 の平瓦の凸面には「寛文十庚戌年製」の印刻がある。出土遺構も 17 世紀代であり、この「庚戌」は西暦 1670 年を指すと考えられる。

（2） 銭貨（図版 77・78・139・140、観察表 29）

表 4 出土銭貨一覧表

種 類	枚数	種 類	枚数
開元通寶	2	淳熙元寶	1
至道元寶	4	景定元寶	1
咸平元寶	1	洪武通寶	3
慶徳元寶	3	永樂通寶	5
祥符通寶	6	宣徳通寶	1
天聖元寶	5	無文銭	3
景祐元寶	1	富壽神寶	1
皇宋通寶	10	寛平大寶	1
至和通寶	1	貞元大寶	1
嘉祐通寶	3	寛永通寶	317
治平元寶	3	寛永通寶(文)	4
熙寧元寶	5	寛永通寶(波)	1
元豊通寶	10	寶永通寶	2
元祐通寶	10	天保通寶	4
紹聖元寶	4	文久永寶	2
元符通寶	2	キセル銭	7
大觀通寶	1	銭種不明	216
政和通寶	4	合計	645

今回の調査で出土した銭貨は、中国よりの渡来銭をはじめ、平安時代の皇朝十二銭や江戸時代に鑄造された寛永通寶などがある（表4）。総数は645枚にのぼり、その中には無文銭3枚とキセル銭7枚が含まれる。キセル銭については本来銭貨そのものではないが、意識的にキセルの火皿部分を平らに潰したもので、縉銭などに混ぜて使用されたとされる。本来金属製品に分類されるべき性格もあるが、その用途を考慮して、ここでは銭貨に加えた。なお、すべての銭貨についてクリーニングなどの処理を施すことができず、保存状態のよいものや希少なものを優先せざるを得なかった。表4に含まれている銭種不明としたものが、それに該当する。また報告にあたっては、共伴した土器・陶磁器類により、出土年代が確かな資料を主に取り上げている。

図版77は渡来銭である。渡来銭のなかで銭銘が判読できた資料は、開元通寶から宣徳通寶まで86枚があり、そのうち皇宋通寶・元豊通寶・元祐通寶が各10枚で最も多い。図示した銭貨は21種類の銭銘で、同一銭銘のもので書体や法量が異なるものを含めた30枚と無文銭3枚である。このうち裏面に文字があるものは、77-26の淳熙元寶1枚で、鑄造年と推定できる「十四」が読み取れる。出土遺構の年代は17世紀前半代が主体で、その前後に集中しており、この頃まで広く流通していたことが窺われる。渡来銭に関しては、無文銭を含めた模鑄銭についても本来検討すべきであるが、今回は理化学的分析が果たせず、今後の課題としたい。

図版78は国内銭である。平安時代に造られた皇朝十二銭では、富壽神寶、寛平大寶、貞元大寶の3種類各1枚がある。このうち、寛平大寶は13世紀代の遺構（小穴2817）から出土している。その他の2点は楊梅小路の路面掘下げ時に出土したもので出土年代には幅がある。

江戸時代に鑄造された銭貨では、寛永通寶が最も多く322枚あり、そのうち文銭が4枚、波銭が1枚含まれる。図示した寛永通寶の法量では、78-10の波銭が最も大きく、外径27.90mm・重さ4.23gである。最小のものは78-17で外径19.20mm・重さ1.46gである。その他の銭貨では、78-5の寶永通寶、78-6・7の天保通寶、78-4の文久永寶があり、各2・4・2枚出土した。キセル銭は遺構出土の2枚を図示した（78-8・9）。

（3）金属製品（図版79・80・141～144、観察表30）

金属製品としては鉄釘や煙管など多量に出土している。全ての出土品について保存処理作業を施すことができず、比較的保存状態のよいものや、遺構出土の製品を優先して処理作業を行った。報告にあたっては、極力出土した遺構年代が明瞭なものを選択した。また、出土した製品の種類を多く掲載するようにした。個々の製品は金属の成分分析を行っておらず、種類は肉眼観察によった。

79-1～7は釘である。いずれも土壌1122出土で、遺構の年代は18世紀前半である。叩いて延ばした不定形の頭部を持ち、断面方形もしくは長方形の体部が延びる。先端部が残る79-1の全長は6.5cmである。79-8は鎌先で、茎の部分は欠損している。79-9は鍬で、一本の茎から3本の鍬先に分かれる。小型製品のため家庭菜園や園芸用のものかと考えられる。79-10・11は火打金である。櫛形で、把手の部分は木で作られるが、木質は残っていない。79-12は鋸状の製品で、

断面長方形の棒状品の先をL字状に曲げ、先端を尖らしている。79-13・14は引戸などに使用する留め金と環である。79-15は鑿で、ほぼ全長が残り、10.5 cmに復元できる。79-16は皿状の口縁部に板状の突起が付く。底部には高台状のリングが巡る。鑄造製品で重量があり、用途がよくわからないが灯明皿と考えておく。79-17は左官用の鏝で、隅丸方形の鉄板にL字状の把手を取り付けたものである。79-18はやっとこ、もしくは釘抜きとみられる工具で、先端部の挟む部分は扁平ではない。鑄造関係の製品ならば、小型の坩堝などを挟むやっこと考えられる。79-19～21は銅製の杓子で、板状の柄と杓の部分を溶接して接合する。杓は皿状に作られ、厚みは1 mmに満たず、腐食して先端部を欠くものが多い。79-22・23は断面四角形の棒状品の頭部を、叩いて延ばした銅製の釘である。先端が尖る。79-23は全長が約23 cmあり、火箸の可能性もある。79-24は叩いて延ばした頭部を円環状にした火箸で、先細りの四角形断面をもつ。79-25・26は扁平な棒状品の一端を叩いて、小判状の皿に成形した匙である。79-27は薄い円板に透かしを切り抜いたもので目皿と推定した。製品の厚みがないので、香炉類の蓋の可能性も残る。79-28・29は十能で、平たく延ばした皿状部と円筒の把手を差し込む部分からなる。79-29の柄と金具接合部には鉄釘と木質が残っている。79-30は2枚の皿状製品が錆で重なって出土したものである。上の皿には幅2 cm、長さ7.5 cm程度の薄板が溶着しており、灯明皿と考えられる。下の皿は現状では剥がすことができないが、灯明受皿の可能性が高い。

80-1～5は髪飾り類で、80-1・2は頭部に耳搔きが付く、円形の飾板が付く二股の簪である。80-1の飾板は酢漿草文で、80-2は文様が彫られている。80-3・5は飾板はないが、菱形の細文が胴部から脚部にかけて彫られている。80-5の頭部には耳搔きが付くが、80-3は欠損している。80-4は1本足で飾板をもつ製品で、鉄製品である。飾板の文様は錆のため判別できない。80-6・7は耳搔きで、80-6は細い板状品を捻って螺旋状にしたものである。80-7は細い板状品の一端を叩いて耳搔き状に加工した製品である。80-8～11は火箸類である。頭部を球形に作り、先に向かって細く加工する。80-8は体部を断面六角形にするが、他は円形である。80-12・13は釣針状の掛金具である。80-13は薄い板状品で、穴が開けられている上端面には、3個の巴文が彫られている。80-14は細い針金を束ねて鎖状にし、一方に小さい掛金具を取り付けた製品である。鎖部分は腐食が激しく細部はよくわからないが、作りは丁寧である。80-15はミニチュアの刀で、刃の断面は板状で刃は付けられておらず、玩具として作られたものであろう。80-16は棹秤の分胴で、隅丸直方体の一端に小さな円環状のツマミを付ける。2面に二重枠があり枠内に文字が見えるが、判読できない。80-17は紡錘形に作られた鐘で、鑄造製品である。80-18～23は煙管である。80-18は雁首の部分と吸口と羅字が一体化した部分からなる煙管で、羅字部分には菊花文が巡る。80-19・21は断面六角形で、肩付きの形態をもつタイプである。出土遺構は異なるが本来は同一の煙管であった可能性がある。80-24～26は灯芯押えである。細長い板状品を円形に曲げ、一端を上延ばす。上部は螺旋状に捻るものと、そのままのものがある。80-27～29は引手金具で、いずれも一本の棒状品から成形され、両端は叩いて細く作られている。80-28・29は本体に取り付ける鉸や座金具が残る。80-30は円板形の素焼陶器の中央に、断面四



図33 陶器ニ粘土ヲ塗りテ小吹所ノ鎔壺ヲ造ル図
(「鑄貨図録」より)

角形の釘状のものが貫通し、陶器に接する位置に四角形の座金を取り付けた製品である。用途はよくわからないが、燭台に使用したものと考えられる。80-31は先端をL字に曲げたピンセット状の製品で、香道具の銀葉挟と考えられる。80-32は魚々子地状の細かい格子地に唐草文を施す八双金具である。残存範囲内に2箇所の釘穴がある。表面に鍍金の痕跡などはなく、細工も雑である。80-33は円板状の底板と三重構造で透かしの入った側板からなる引手金具である。側版には2箇所に釘穴があり、襖の引手金具と考えられる。底板に文様などはみられない。80-34は一枚の薄板から動物の形に切り出し、断面をレンズ状に叩き出して立体感を持たせた製品で、表面には目鼻や毛並みを彫り付ける。胴部を楕円形に切り抜き、引手状にする。動物は下半身と耳が欠損するが、兎を形象したものと考えられる。80-35～40は刀装具類である。

80-35は笄で、魚々子地に菱文の文様を彫る。表面は風化が激しく、鍍金の痕跡などは残らない。80-36・37は小柄の茎で、いずれも刀身は欠落している。80-36は七曜亀甲文、80-37は柄巻を模した文様を施している。80-38は切羽で、楕円形の薄い板状品の中央を刀身の形に削り抜いている。側面には細かい刻み目が一部に残る。80-39・40は目貫で、2個で一对になる。鹿と紅葉をレリーフ状に表現している。80-40の鹿に角があり、表裏で雌雄一对にしたものと考えられる。80-41は楔の形状をした留め金具で、2本の足はV字状に曲げられている。80-42は5弁の花形を2枚上下に重ねて球形にし、中心に細い棒状金具が貫通する紐状金具である。下部は本体に取り付くと考えられるが、用途は不明である。80-43は二重の円筒状の金具である。一端は3枚の花弁にきり、反対の端は内側の円筒から3個の爪が延びる。胴部にはハート形の透かしを3箇所入れる。棒状の調度品に取り付けた飾り金具と考えられる。表面は鍍金されているが錆により剥離が進行している。80-44は鏡で、直径約9cmに復元される。裏面には2羽の鶏が配されるが、全体の意匠は不明である。

(4) 鑄造関係遺物 (図版 81 ~ 84・145 ~ 148、観察表 31)

81- 1は炉蓋である²⁹⁾。復元径約 37 cmの半円形で、中央部の厚さは約 9.5 cmである。裏面は平坦で下面は熱のため黒褐色に変色し、所々に溶着した緑灰色の鉱滓が付着している。胎土は 1 ~ 3 mm程度の砂粒を多く含むが、坩堝に多く含まれる粉殻などは混入していない。81- 2は 81- 1と同じく炉蓋、もしくは坩堝の蓋と推定した遺物である。一辺約 16 cmの隅丸方形で、中央部に径 3.2 cmの孔が穿たれている。胎土には粉殻が多量に混入されており、坩堝の胎土に近い。底部に薄く煤が付着する程度で高熱を受けた痕跡はない。81- 3 ~ 5は直径 1 ~ 1.5 cmの孔を規則的に穿った板状もしくは箱状の製品である。81- 3は一辺 14 cm以上、厚さ約 3.5 cmの方形の板状製品で、直径 1.0 cmの孔がほぼ 1.5 cmの等間隔で長軸 5 列以上、短軸 3 列以上穿たれている。上面の孔周辺は二次被熱を受け灰色に変色しており、断面の観察では 5 mm程度の深さまで橙色を呈している。胎土はスサを含む比較的均一な粘土で、砂粒の混入は少ない。81- 4は楕円形の箱状を呈する製品である。厚さ約 3.5 cmの楕円形の板を底にして、幅約 16 cm、厚み約 4.5 cmの粘土板を巻き付けて成形している。成形ののちに竹筒状の工具で底に孔を穿っている。内側の孔周辺は 81- 3と同様に二次被熱を受け変色しているが、外面は熱を受けた痕跡はみられない。81- 5は長軸 34 cm以上、短軸 31.2 cm、高さ約 12 cmの長方形を呈するが、基本的な成形は 81- 4と同じであり、被熱部分も同じである。鑄造炉施設の一部と考えられるが、具体的な用途は不明である。81- 6・7は短軸の羽口である。

図版 82は坩堝と坩堝に付属する製品である。82- 1は坩堝の蓋である。中央がやや盛り上がる円盤状で、直径約 2 cmの孔が穿たれる。表面は熔融しガラス質の光沢がある。中央の孔の内側に緑錆が付着する。82- 2 ~ 4は坩堝の栓で茸状の形態をもつ。いずれも表面は強く熔融し、特に足部の先端 2 cm程は熱により光沢を失い、暗褐色に変色している。82- 5は肥前磁器の椀、82- 6は京・信楽系陶器の椀で、いずれも坩堝の芯に転用したものである。小型の椀類に多量の粉殻を混入した粘土を塗り、坩堝として使用している。小型の椀を利用して坩堝を作る技法は、江戸時代後期には一般的に行われていたようで、天保 6 年 (1835) の浅草橋の銭座の情景を写した絵図に描かれている³⁰⁾ (図 33)。82- 7・8、11 ~ 16は法量の違う坩堝類で、いずれも口縁部に注口が付けられている。他の用途に転用されたものもあり、82- 12は口縁部 3箇所を打ち欠き、体部に四角の穿孔をあけて焔炉にしている。また、82- 14のように、底部に孔を穿って植木鉢に転用するものもみられる。82- 13は 82- 5・6の坩堝のように陶器を骨材にして作られた坩堝で、今回の調査では多く出土している。坩堝を廃棄する際に陶器だけが剥がれた例が 82- 9・10である。外面はロクロ目を強く残して砲弾型に作り、その

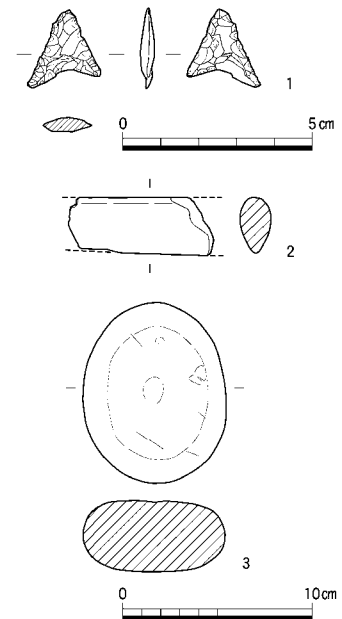


図 34 石製品実測図
(1は 1 : 2、2・3は 1 : 4)

先端部は櫛目で荒らして粘土との接着を高めている。底部に「新平」の文字がへら描きされているものがあり、製作者を表しているものと考えられる。生産地は特定できないが、京都市内では坩堝用に作られた専用陶器の存在が確認された例は少なく、今後の資料の増加が注目される。

図版 83・84 は鋳型類である。出土した遺構年代から 18 世紀前半のもの、18 世紀末から 19 世紀前半のものに分けられる。鋳型のみ廃棄された遺構はなく、坩堝や土器陶磁器類に混じって出土したものがほとんどである。

83- 1～8 は 18 世紀前半代の遺構（土壙 1122）から出土したものである。83- 1 は筒形容器の外型、83- 2～4 は碗状製品で、蓋子と呼ばれる容器の外型、83- 5・7 は凸面に真土が残る蓋状品の外型、83- 6・8 は凹面に真土が残る蓋状品の内型とみられる。蓋状製品の中央には、つまみの痕跡がみられる。残存する真土の厚さはいずれも 3 mm 程度で均一である。粗型は砂粒と粉殻が多量に混入した土で作られており、真土に接する面から器壁の中程まで橙色に変色している。

83-10～29、84- 1～34 は 18 世紀末から 19 世紀前半の遺構から出土したもので、型の胎土や真土の有無、厚さの違いなどで分類できる。真土の痕跡が認められないものは、83-10・11・18・19・21～23 である。型の胎土は砂粒が混入しない精良な土で成形されている。精良な粘土を用いて作られており、原型を踏み返して鋳型を製作したと考えられる。文様から製品の種類が推定できるものは、83-18・21・22 が壺・花瓶などの耳部、83-23 が火炎を象った剣で、不動明王像などの付属部品とみられる。

砂粒を多く含む粗い真土をもつものは、83-16・17・20、84-29～34 である。このうち形状から製品の種類が推定できるものは、83-17 が蓮座に乗り腕が天地を指す釈迦誕生仏で、頭の螺髪や目鼻立ち、衣の襷まで見て取れる。84-29 は仏の座像と推定できるが、背面のため種類は不明である。84-30 は植物の葉を象ったもの、84-31 は獣面を象ったもので、いずれも容器の足の部分であろう。84-32 は菱形と方形を組み合わせたもので、紐状を呈する。84-33・34 は手を広げた唐子像とみられ、3 人一組で後に手を組み円環状となるもので、容器の足部か台部であったと考えられる。

真土は粗型の上に直接重ねられており、厚さは比較的均一で、3 mm 程度である。真土が残るものは、表面に文様があるものと無いものに分けられる。文様の無いものには、83-12・13 の小型の碗状のもの、83- 9・15 の碗、83-24・25 の蓋、83-26 の皿もしくは浅い碗状製品、83-27・28 の仏飯器、84-29 の花瓶と、それぞれ器種が推定できるものがある。真土に文様が残るものは、亀甲や雷文、波文などの地文に蕨や木瓜状の模様を付けるものや、鋸歯状の蓮弁を配するものなど様々である。いずれも外型で仏花瓶などの製品の鋳型と考えられる。出土した鋳型は 18 世紀前半のものも含めて、仏具に関連するものがほとんどで、東・西両本願寺に近い立地を生かして仏具生産が行われていたものと推定できる。

（5）石製品

石鏃(図版 159、図 34- 1) 基部は長さ 2.35 cm と 2.0 cm で、片方が短い。厚さ 0.37 cm、重さ 0.822 g

である。凹基式の打製石鏃でサヌカイト製。縄文時代と推定される。中央北西寄りの楊梅小路路面形成層（標高 30.46 m）から出土した。

石刀（図版 159、図 34- 2）残存長 7.6 cm、幅 3.0 cm、厚さ 1.6 cm、重量 65 g ある。両端は破損しているが、広い方の端は部分的に研磨の痕跡があり、破損後に再利用している。縄文時代の石刀の可能性がある。頁岩～粘板岩製。土壙 267（19 世紀）から出土した。

叩石（図版 159、図 34- 3）長さ 9.45 cm、幅 7.6 cm、厚さ 4.2 m、重量 425 g ある。楕円形を呈し、上・下面はともに平坦である。図で上にした面はやや窪んだ面をなすが、敲打痕跡は明確ではない。砂岩製。土壙 1323（18 世紀前半）から出土した。

碁石（図版 85・149、観察表 33）10 点（85- 1～4、149- 1～6）出土している。図版 149 では全製品を掲載し、図版 85 では 4 点を図示した。直径 2.15 cm 程度で真円形のものが多い。厚さは 0.43～0.70 cm まで差があり、このため重さは 2.46 g から 6.06 g までである。85- 1 は周縁を打ち欠き、85- 4 は楕円形を呈する。17 世紀から 19 世紀までの遺構から出土した。

紡錘車（図版 85・149、観察表 32）2 点（85- 5・6）出土している。ともに滑石製で、底部側を削り抜いて輪状としている。85- 5 は無文であるが、85- 6 は部分的に線刻文様があり、古墳時代に流行する鋸歯文を施した紡錘車に類似する。

滑石加工品（図版 85・149、観察表 32）85- 7 は滑石製羽釜の口縁部を加工したものである。長さ 6.3 cm、幅 2.4 cm に切断し、外面に菱形の文様、内面に木の葉の文様、両端部にも花卉や刻みを彫る。2 孔を穿孔する。

文鎮（図版 85・149、観察表 32）85- 8 は長さ 9.3 cm あり、端の一方は破損している。また裏面も破損している。表面には菊水の文様が彫り込まれている。石材は軟質で加工しやすく、砥石と同じ石材である。

垢擦石（図版 85・150、観察表 35）軽石を加工した製品である。20 数基の遺構から出土した。単独出土と複数出土があり、複数出土では、土壙 889（6 点）、土壙 1094（16 点。観察表では 8 点を扱った）、土壙 1280（24 点。同じく 11 点を扱った）がある。全形をとどめる 37 点を抽出（85- 9・10 を図示）し、検討対象とした。

時期別では平安時代が 2 点あり、それ以外はすべて江戸時代に属する。平安時代に属するものは柱穴 2953 と井戸 3120 から出土している。両方とも小型品であり、使い込んだ様子がみられる。鎌倉・室町・桃山時代の資料はない。江戸時代資料は 17～19 世紀に属する。規模・形状は様々である。小型品は長さ 4～5 cm、大型品は長さ 11 cm 程である。重量は最も軽いものが 10 g（柱穴 2953）、最も重いものが 58 g である（土

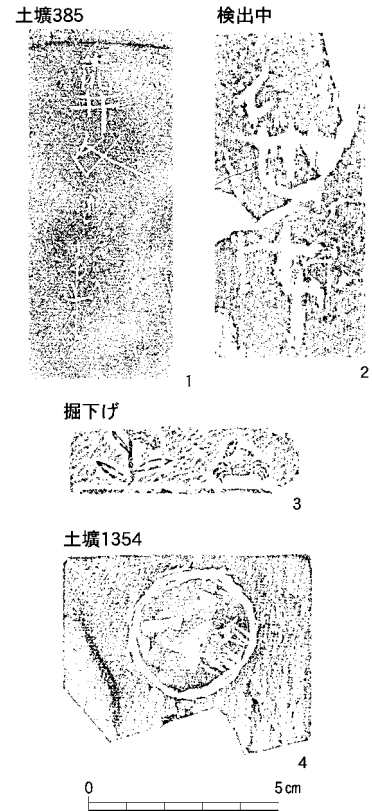


図 35 硯の銘文・文様拓影（1：2）

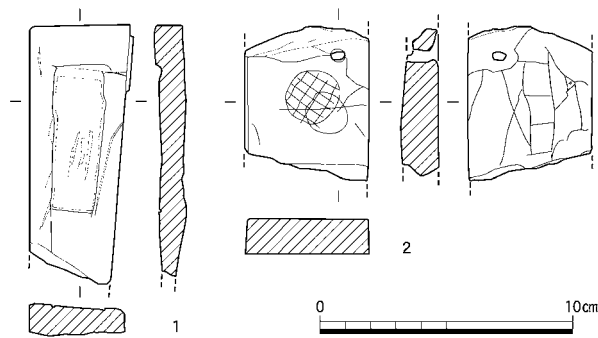


図36 石製品実測図（1：3）

壙 1280 中の 1 点)。形状は、丸いものと細長いものがあり、厚みがあるものと扁平なものがある。土壙 1280 中の 1 点は内弯する面をもつ。いずれの製品にも平坦面を有する点は注意される。使用されて平坦となつたとみるより、当初から平坦に仕上げられており、使用される過程で丸みのある形状に変化したとみられる。切り込みを入れて

割った例がある（土壙 1280 中の 1 点）。

火打石（図版 85・149、観察表 36） 34 遺構から出土したものを取り上げた。85-11～13 を図示した。破片の小さなものは打撃によって生じた剥離片である。破片の大きなものは、使用時の打撃によって角が取れ、鋭角性を失っている。淡い青緑色を呈するものが大半で、黒灰色を呈するものがある。石材はすべてチャート製であるが、京都近郊の山地を形成する地層にあるチャートとは異なるとされる。土壙 1087 が 17 世紀後半で最も古く、それ以外は 18・19 世紀に属する。

箱物（図版 85・149、観察表 32） 箱物の身の破片（85-14）が 1 点出土している。口縁は蓋を受けるため 2 段の構造をもつ。両方の側面には花卉状の文様が彫られている。内外各面に墨が付着しており、小型の硯を納めた硯箱と考えられる。白色の緻密な石材で、珪岩製とみられる。

温石（図版 85・151、観察表 34） 22 点あり（85-15・16 を図示）、うち 20 点までが滑石製羽釜を転用したものである。未製品が多数みられることから、当地で製作されていたことが推定できる。羽釜の口縁部より下部、体部から底部に至る部分、底部を利用したものの 3 通りがある。口縁部より下部を利用したものでは、タガの部分を取り去って平坦に研磨している。タガをとどめるものもあり、これらは製作途中の未製品といえる。口縁部と体部下半を利用したものは隅丸の長方形を呈する。底部を利用したものは、円形を呈していたとみられるが、完形品は出土していない。穿孔は 1 孔のみで、2 孔は認められない。

所属時期については、11 世紀代が最も古く、中世全般と江戸時代前期の遺構からも出土している。17 世紀の遺構から多く出土しており、転用の下限がここにあったことが窺われる。12 世紀から 13 世紀の製品は 6 点ある。小穴 1746・井戸 2680・土壙 2781 出土のものは小型品、柱穴 2186・土壙 2867・土壙 3213 出土のものは大型品と推定される。土壙 2867 出土例（86-11）は滑石製羽釜として図示したが、側面は研磨されており、温石へ転用される直前の製品と判断できる。タガは完存するが、タガより下半は煤を掻き取っている。端から 18 cm のタガ上には打撃痕があり、ここで割ろうとしたようである。土壙 3308 出土例（151-13）は小片であるが、羽釜の口縁部が穿孔され、そこに銅線が付属している。

温石として最初から製作されたものが 2 点ある。滑石製品の転用品に比べると極端に少ない。土壙 402 出土例（151-1）は滑石でありながら板状の石材を方形に加工しており、羽釜の転用品ではない。研磨途中であり、穿孔も片方のみである。土壙 861 出土例（85-16）は砂岩系統の石

材（砂質ホルンフェルス）を丁寧に研磨した完成品である。

硯（図版 85・152・153、図 35・36、観察表 32） 85-17～26 を図示した。長方形を呈するものが大多数である。長さ 13 cm 以上、幅 7.5 cm 前後のものが最も多く、これを大型品とする（85-24・25 など）。85-26 は上端を欠損するが、幅 9.2 cm と他よりも広く、長さは 22 cm に達していたとみられ、大型品の上位に分類できる。

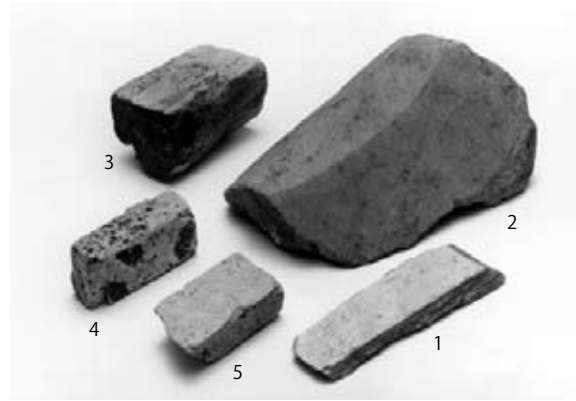


写真9 室町時代の砥石

中型品は長さ 12～13 cm で幅 5.5 cm 前後（85-22 など）、小型品は長さ 8.5 cm で幅 4 cm 前後（85-21 など）に設定できる。石材の種類は、流紋岩とみられるものが数点含まれる以外は、頁岩～粘板岩に属し、湖西地方の高島一帯で産出する硯石材に類似している³¹⁾。

装飾性のある形状のものが 2 個体ある。85-18 は海部の先端と側面にふくらみをもたせる。表面には梅花文を彫り込んで装飾する。152- 2 は周囲が破損するものの、楕円形であったと推定できる。硯の裏面は、浅く皿状に窪ませるもの（85-25・26 など）と平坦なもの（85-24 など）があり、後者が多い。85-23 は側面と先端を残して裏全面を削り込んでいる。85-17 は表裏両面を硯とする。裏面の陸側に梅花文を線刻しており、使用方向は表裏逆向きである。図 35- 4 も円形文様が彫り込まれている。鑿跡を明瞭に残す未成品であるが、同様の装飾を意図したものであろう。図 35- 3 は海部の縁上面に蟹と樹木を陽刻している。背後の青海波文は海を表現したものであろう。85-20 は小型の二連硯で、両方とも墨痕跡が付着している。

硯の裏面には文字や絵画を線刻するものが希にみられる。文字は海側から陸側に刻まれるが、85-19 は唯一海側から読む配置をとっている。線刻文字の内容は、人名と石材名を中心とする。人名は姓のみの場合が多く、「中村」「上村」「谷口」「荒井氏」「青山」が確認できる。石材名では「高嶋青石」「本高嶋上石」「高嶋虎班石」「虎班石」「あか志ま本石」が確認できる。高嶋石は湖西地方の高嶋が硯の名産地であったことに由来する。虎班石はその中での優品を指すが、本来は「虎斑石」であり、「班」は誤記である。「あか志ま」は石材中に赤い色脈をもつことから、高嶋石と周防の赤間石を文字って、「あか志ま」と称したのではなかろうか。以上の人名・石材名は、いずれも持ち主側が刻んだものとみられる。梅花文は、文書博士であった菅原道真を祭る北野天満宮境内の梅園に由来するものであろう。また、152- 1 の裏面にはユーモラスな人物戯画が線刻されている（図版 153 に写真）。硯の陸部は、中央が磨り減ったものが大半である。85-24 が最も著しく窪んでいるが、これは石材が軟質であるためである。硬質の硯では、85-26 がやや磨り減るものの、85-23 と 152- 2 は平坦面を保っている。硯の所属時期であるが、古いものは 16 世紀末からで、17 世紀にかけて増加し、以後 18・19 世紀にはさらに普及する。

砥石用の石材を硯状に削り込んだものが希にある。図 36- 1 は長さ 10.2 cm、幅 4.1 cm、厚さ 1.3 cm の破片であり、幅の広い方を海に見立てて、長さ 5.5 cm、幅 1.9 cm の範囲を削り込んで硯状に

加工しているが、未完成品である。

砥石（図版 86・153・154、写真 9、観察表 32）長方形で箱形を呈するもの、これより扁平なもの、扁平で幅が広いものなどがある。石材は、珪質頁岩～珪質粘板岩、砂質ホルンフェルス、頁岩～粘板岩の 3 種がある。珪質頁岩～珪質粘板岩の砥石は、「鳴滝砥石」と通称される仕上げ用の砥石で、出土量が最も多く、形態としては扁平なものが中心をなす。砂質ホルンフェルスの砥石は、粗加工用の砥石であり、箱形を呈するものが多い。またこの石材を用いた砥石には、表面に溝状の窪みが幾筋も形成された砥石がある。「玉砥石」と呼ばれるもので、金属の端部や丸みのある製品の研磨に使用された砥石とされる。頁岩～粘板岩の砥石は、硯に多用される石材である。3 者の中では最も硬質の仕上げ用砥石であるが、出土例は少ない。

86- 1 はほぼ直方体状で、図示した 3 面が砥面である。使用により中央部がやや窪み、上下面に線状の擦痕が多くみられる。被熱により、赤褐色に変色し、ひび割れが生じている。このため廃棄されたと推定される。86- 2 は薄い板状で図の左面が砥面である。表面には細かい線状の擦痕が無数に残る。裏面は鑿により表面の黒褐色の地肌を削り取った痕跡が残る。下端は斜方向の節理により欠落しており、この形状で製品としたものであろう。86- 3 はほぼ直方体状で、断面図の左右が砥面である。両面とも使用により中央部が窪む。両小口には石材を切り出した際の線条痕が残る。86- 4 は長方形の板状形で、被熱により灰赤色に変色している。その際に砥面が剥離し、廃棄されたと推定される。86- 5 は上端がわずかに欠けるが、ほぼ全体がわかる。いわゆる鳴滝砥石と呼ばれる京都産の製品であろう。86- 6・7 は断面 U 字状の溝が残る板状の砥石である。86- 7 は赤灰色を呈するが、被熱によるものか、風化によって生じたかは判断できない。86- 8 は砥面以外の面に漆をぬり、その上に布を貼り付けた製品である。布は滑り止めであったと推定される。鳴滝砥石と呼ばれる石材である。86- 9 は楔形をした製品で、4 面とも砥面として使用している。図示した 2 面には溝状の痕跡が残る。以上の砥石が出土した遺構の年代は、86- 5 が 18 世紀前半、他は 18 世紀後半以降である。

写真 9 に掲載した 5 点は、室町時代に属する遺構から出土したもので、桃山・江戸時代以降にみられる扁平な砥石とは形状が異なることが指摘できる。

写真 9- 1 は長さ 12.5 cm、幅 3.5 cm、厚さ 1.5 cm ある扁平な石材で、写真の上面のみに研磨面がある。土壌 2219 から出土した。遺構は 14 世紀に属する。写真 9- 2 は長さ 15.5 cm ほどある砂岩製の粗研ぎ用砥石で、土壌 2288 から出土した。遺構は 14 世紀に属する。写真 9- 3 は長さ 7.5 cm、幅 4.5 cm、厚さ 4.7 cm あり、写真の上面が研磨面、他の面はすべて風化面である。井戸 2617 から出土した。遺構は 14 世紀に属する。写真 9- 4・5 は、ともに長さ 7.5 cm、幅 2.3 cm、厚さ 3.5 cm 前後の直方体で、上面・下面、端面が研磨されている。土壌 2710 から出土した。遺構は 14・15 世紀に属する。石材は、写真 9- 2 以外すべて珪質頁岩～珪質粘板岩である。この他、砥石と同じ石材（珪質頁岩～珪質粘板岩）には、節理面で剥離したもの、切り込みを入れたもの、部分的に研磨したものなど、明らかに加工途中の製品が含まれている。幅 8～10 cm 程度で厚みのある石材は加工前の原石とみられる。幅 4～5 cm の薄い剥片が多くあり、これらは砥石に加工した後

の削り屑とみられる。節理面をとどめた製品でも十分使用に耐えるため、製品として流通していたのであろうが、石材加工が容易なこと、出土破片が多いことなどからみて、町内で製品加工されていた可能性は高いといえる。硯には、このような加工途中の製品は見出せないことも注意される。

砥石転用品（図版 153、図 36- 2） 砥石の転用品に戯画の描かれた製品がある。図 36- 2 は砥石の一端を再利用したもので、長さ 6.1 cm 以上、幅 4.9 cm、厚さ 1.3 cm である。一方の隅に孔が穿孔され、温石に使用されたとみられる。一面は円を描き、内部を格子文様で埋めている。裏面には建物が描かれている。入母屋造りの堂宇風の建物で、大棟の両端には鴟尾あるいは鯨も描かれている。梁間 1 間で桁行 2 間に描かれる。下部にも斜めに交差する線がある。

滑石製羽釜・鍋（図版 86・155、観察表 32） 86-10・11 は羽釜で、86-11 には温石として再利用するための鑿による加工痕が残る。86-12 は丸底鉢の形状をもつ鍋で、底部は煤が付着している。器高が浅いため、羽釜を二次加工した製品とみられる。86-10～12 は 12 世紀末から 13 世紀前半の遺構から出土した。

石臼（図版 87・155、観察表 32） 87- 1～4 は碾臼類である。87- 1 は茶臼の上臼で、上端面を中心に 1 / 3 程欠損する。底部の臼目は磨滅のため周縁部にわずかに残る程度である。子持菱の装飾がある挽手穴が 1 箇所残る。被熱により赤灰色に変色している。87- 2 は粉挽臼の下臼である。2 / 5 程度残存する。8 分画で 4 本の臼目が彫られている。87- 3・4 はほぼ同法量の下臼で、臼目はどちらも 8 分画で 6 本溝である。裏面は面取りの鑿痕が顕著である。87- 5 は搗臼で、1 / 2 程度残存する。外側は雑に打ち欠いたままの未調整で、内面も粗く調整しているが全面に鑿痕が残る。残存する底部が安定を欠くため、唐臼であった可能性もある。

宝篋印塔（図版 87・156、観察表 32） 87- 6 は宝篋印塔の笠部である。四隅の隅飾突起は全て欠損している。露盤は 6 段構成で、上・下面には窪みをもつ。

五輪塔（図版 87・156、観察表 32） 87- 7 は五輪塔の笠石である。上面は窪みをもち、下面はやや弯曲する。

石塔（図版 87・156、観察表 32） 87- 8・9 は石塔の宝珠と受花である。一体的に成形しており、五輪塔の頂部に乗せられていたとみられる。

手水鉢（図版 87・156、観察表 32） 87-10 は手洗鉢である。下半が欠損し、高さなどは不明である。全体に細かい鑿による調整痕が残るが、上端部の削り出しは丁寧である。

焜炉（図版 87・156、観察表 32） 87-11 は石製の焜炉の底部である。削り出された 3 足と、舌状に延びた送風口が残る。内側は被熱により赤褐色に変色しており、よく使用されたことがうかがえる。

火入（図版 87・156、観察表 32） 87-12 は民具では「バンドコ」と呼ばれる火入である。青灰色の凝灰岩系の石材（笏谷石）を削り抜いて作られている。側面は比較的丁寧に削られているが、底部と内面下半は鑿痕が多数残る。側面には格子窓状の通風孔があげられている。上端部と内面上半は、火を受けて黒灰色に変色している。分厚く作られており、手焙りや置き炬燵の熱源とし

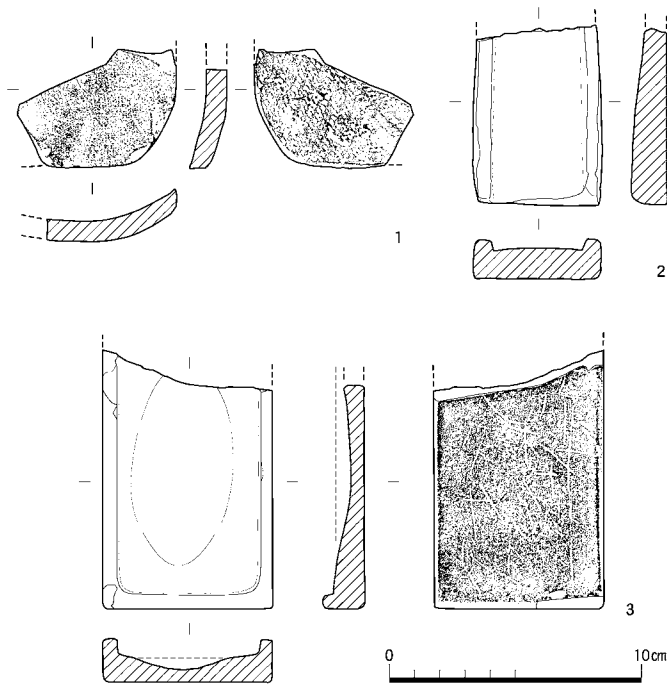


図 37 硯実測図 (1 : 3)

で使用されるものである。本来は、同じ材質で作られた蓋を有していたと考えられる。

漬物石 (図版 87・156、観察表 32) 87-13 は円柱形に粗く切り出し、側面の対角線上に 2 箇所楔形の持手を穿った漬物石である。

石墨 棒状の製品が出土している。材質は滑石 (蛭石) であり、石墨として使用されたと推定する。14 例あり、いずれも 19 世紀以降の遺構から出土している。残存状態は様々で、最長は 8.9 cm、最短は 2.1 cm。断面は直径 0.5 ~ 0.7 cm の円形を呈するが、楕円形のものもみられる。

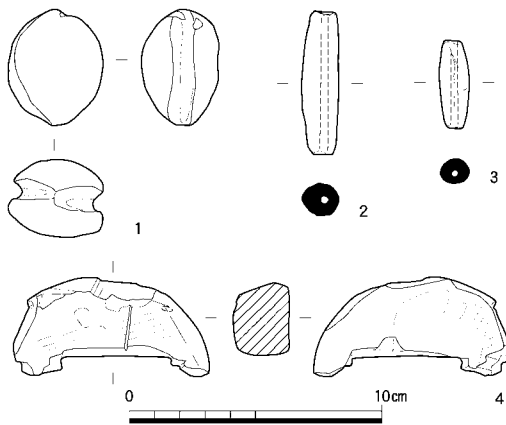


図 38 土製品実測図 (1 : 3)

玉製品 (図版 149、観察表 32) 149-24 はメノウ製品と推定した製品である。孔が中心を貫き、簪類の装飾玉として使用されたのであろう。表面の数箇所には同心円状の皺が形成される。内部は白色の非常に緻密な成分できている。比重計測値は 2.34 である。蛍光 X 線による定量分析では、Si (ケイ素)・O (酸素) と微量の C (炭素) からなり、通常のガラス製品にみられる呈色材などの鉱物混入はない。天然素材を加工した製品である可能性が高い。19 世紀後半の土壌 248 から出土した。

(6) 骨角製品・ガラス製品 (図版 88・155・158、観察表 37・38)

88- 1 ~ 32 は骨角製品とガラス製品である。櫛払や簪、棹秤の棹などが出土した。また、鹿角の切断品が土壌 1094 とその周辺遺構からまとまって出土した。鹿角切断品は角冠・柄角などが主体で、角座なども含まれている。ほとんどの部材が断面中央を海綿質が占めており、素材としては利用価値のない部位であったと推定できる。

88- 1 ~ 3 は櫛払である。88- 1 は刷毛を取り付ける頭の部分と櫛歯の一部が欠損している。88- 2・3 はブラシ形のもので、いずれも刷毛の部分は残っていない。88- 2・3 のブラシ状製品の裏面には、緑青による変色がみられ、植毛を留めるために銅線を使用したと推定できる。88- 4 ~ 10 は簪類で、頭部に耳搔状の突起を作り出すものが多い。足は一本のものと二股になったもの

があり、先端の残るものはいずれも尖っている。88-11・12は櫛で、多くは歯の部分が欠損している。88-11の櫛は表面が平滑で作りが丁寧である。表面・両端が焼けている。88-13・14は双六の駒で、円筒形の両端部を円盤状のもので塞ぐ構造をもつ。88-15は拍板と呼ばれる楽器を構成する板状の部品と考えられる。上端の2個の穴に同様の板状品を何枚も繋ぎ合わせて打ち鳴らすカスタネットのような製品である。表面は平滑で、体部中央がやや厚く作られている。88-16・17は円筒状の未製品で、両端面に鋸跡のような切断痕が残る。用途は不明である。88-18～20は棹秤の棹で、目盛や緒紐を取り付ける孔が残ることから、製品が壊れたものと推定できるが、88-20の棹には1列の目盛しかなく、緒紐を取り付ける孔もないことから、製作途中で廃棄された可能性も残る。88-21は魚の尾鱗に似た形状をもつもので、表面に細かな線刻がみられる。用途は特定できない。88-22は小刀状に削り出した篋である。88-23は匙状に加工された製品で、具体的な用途は特定できない。88-24～31は加工痕のある鹿角片である。いずれも鋸による切断痕が残る。88-24は梅花状の円形文と幅1mm程度の溝が彫り込まれている。88-32は楔状に切り出された骨材で、簪などに加工する材料であった可能性がある。88-16・17などの未製品の存在なども考慮すると、調査区内もしくは周辺に骨角細工を生業とした町家があったと推定できる。京都市域では同様の近世の調査事例が数例あり、小規模な職能集団が点在していた可能性が高い。鹿角片が集中していた土壙1094は、18世紀前半代の遺構である。

88-33～36はガラス製品である。調査面積に比べて、出土したガラス製品は少ない。88-33～35は簪類である。88-33は比重が2.43で、アルカリガラスと考えられ、中国製の可能性が高い。88-34・35は鉛ガラスで、日本製とみられる。88-36はワインボトルの底部で、ヨーロッパ製とみられる。17世紀前半の遺構から出土した。

(7) 土製品・その他

猿面硯(図版159、
 図37-1)長さ6.4cm、
 幅4.5cm残存する。厚
 さ0.8cmある。内面
 は平滑で墨が付着す
 る。全面に布目痕跡が
 あり、その上に同心円
 文が2箇所以上押され
 る。これは、須恵器甕
 内面に施されたタタキ
 当て具の痕跡が文様化
 されたものである。外
 面には格子タタキが施

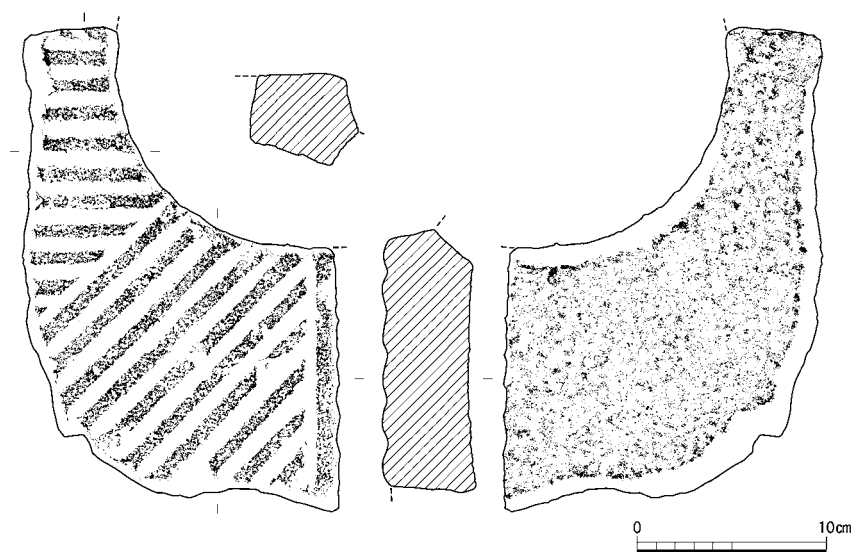


図39 西2区出土石製品実測図(1:4)

されるが、これも文様として押印されたものである。側面はへらで面取りされている。楊梅小路路面下の整地層から出土し、11世紀に属する。

陶器硯（図版 159、図 37- 2）海部は欠損する。現存長 7.1 cm、幅 5.3 cm、縁の高さ 1.6 cmある。陸部の手前側には縁がない。表面には墨が付着する。須恵質で焼成は良好である。楊梅小路路面形成層からの出土で、12世紀から17世紀までの遺物を含む。

瓦質硯（図版 159、図 37- 3）海部は欠損し、現存長 10.1 cm、幅 6.7 cm、縁の高さ 1.6 cmある。焼成は甘く、硯として使用したため中央は窪んでいる。裏面は平坦で、太めの文字を線刻する。文字は「正月十（廿カ）九日」「ろく十」「木又ミ上」「今□十にさ」などが判読できるが、意味は不明である。土壙 480（19世紀中葉）から出土した。

土錘（図版 159、図 38- 1～3）3点出土している。図 38- 1は扁平で楕円形を呈し、長径 4.6 cm、短径 3.8 cm、厚さ 3.0 cm、重さ 48 g がある。側面を紐で締めて凹部を形成している。重機掘削時に出土した。

図 38- 2は長さ 5.9 cm、最大径 1.6 cm、重さ 11 g がある。棒を芯とし、その回りに粘土を巻き付けて成形している。土壙 1314（17世紀前葉）から出土した。

図 38- 3は長さ 3.5 cm、最大径 1.2 cm、重さ 4 g がある。成形は前者と同じで、表面には粘土継目が観察できる。掘下げ時に出土した。

不明土製品（図 38- 4）用途がわからない土製品である。長さ 7.8 cm、幅 3.9 cm、厚さ 2.2 cmあり、把手状を呈する。把手の内側に相当する部分はへらで粘土を削り取っている。表面と側面には木目とみられる平行の筋が観察できる。円盤状の製品として造り、内側が削られ把手状の製品となったようにみえる。土壙 248（19世紀後葉）から出土した。

壁土（図版 138、観察表 39）平安時代後期から江戸時代にわたる各遺構から出土しており、34遺構から出土したものを取り上げた。表面に化粧土、裏側に木舞をもつものは建物の壁土と想定できるが、判断できないものも含まれる。室町時代以前では約 30 基の遺構から抽出した。各々出土量は少量であるが、土壙 1882 から約 30 点、重量 272 g 出土したのが最大である。

裏側に木舞の痕跡が明瞭に残るものが多い。小穴 617、柱穴 3243 出土例は白い化粧土が残存する。土壙 1749 出土例は木舞までの残存厚が 4 cmあり、最も厚い破片である。いずれも上塗りの化粧土は非常に薄く、下塗りの粗土にはスサと粗砂が入る。土壙 1882 出土例では建物の隅と考えられる破片も確認できる。熱を受け硬化したものが大半である。土壙 2060 出土例は青色に還元化している。土壙 2992 出土例は被熱が弱いため、保存状態は良くない。井戸 3497 出土例にはスサが入らず、建物の壁土ではなかいとみられる。柱穴 2827 では柱痕跡内から出土しており周囲に壁造りの建物が存在したことを想定させる。

6. 西1区～西4区の遺物

(1) 西1区の遺物 (図版 89・160)

溝 36 89-1～4は土師器皿Nである。89-1・2は小型皿、89-3・4は大型皿で、内弯する体部をもつ。京都V期～VI期に属する。

溝 47 89-5は土師器杯Lで、底部には退化した高台を貼り付ける。89-6はロクロ成形による小型の土師器皿で、底部は糸切り痕跡をとどめる。89-7・8は土師器皿Nで、内弯する体部をもつ。89-9は灰釉陶器皿の底部、89-10は須恵器鉢の底部である。89-7・8は京都V期新～VI期古に属する。89-5・9・10は京都II期であり、古い遺物の混入とみられる。

土壙 31 89-11は土師器皿Nである。京都V期～VI期に属する。

(2) 西2区の遺物 (図版 89・160、図 39)

溝 111 89-12～15は土師器皿である。89-12は杯Aで京都II期に属する。89-13は皿Aで、京都IV期～V期に属する。89-14は皿Nの小型皿、89-15は皿Nの大型皿で、京都V期新～VI期古に属する。

溝 119 89-16～19は土師器皿Nである。89-16は小型皿、89-17は大型皿で、89-17は深い器形の皿である。京都IV期に属する。89-18は小型皿、89-19は大型皿で、京都VI期に属する。

町尻小路路面形成層 89-20・21は土師器皿Nの小型皿であり、京都VIII期～IX期に属する。

集石 91 89-22～24は土師器皿である。89-22は皿Nの小型皿、89-23は皿Sh、89-24は皿Sの大型皿であり、京都IX期～X期に属する。89-25は施釉陶器の灰釉鉢である。口径35cmあり、体部は直線的に開く。内外面に釉がかかる。89-26は瓦器壺である。外面には成形時の指紋が付着している。27は瓦器羽釜である。外面は雑なオサエ成形で、粘土紐の単位が観察できる。内面は目の細かなハケで横方向に調整する。

土壙 25 89-28は古墳時代前期の土師器甕である。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリで成形する。内面の体部・口縁部境界に鋭い稜をもつ点が特徴であり、庄内併行期に属する。

土壙 72 89-29はベトナム産の長胴瓶の口縁部である。内外面とも暗茶色を呈する。

土壙 2 89-30は石帯の蛇尾である。長さ4.4cmある。裏面は綴じ穴が完存し、成形時の擦痕がみられる。この蛇尾は巡方の片側を削り込み、蛇尾に作り直しており、そのため片側の綴じ孔は端に寄っている。深緑色で淡い斑紋をもつ。土壙2は江戸時代の焼瓦を整理した土壙である。

石臼状製品(図 39) 一面には10～11本の筋目が彫られ、裏側は粗く加工されている。厚さ4.6cm以上、一側面は直径20cmに復元できる弯曲をもつ。ここが軸木に固定され、その上で粉を挽いた石臼と考えられるが、軸の径が太いこと、摺り面が広いこと、筋目の重なり方、石材がはんれい岩とみられることなど、江戸時代の石臼とは異なる点も指摘できる。町尻小路路面形成層と地山面の境界付近から出土した。平安時代後期と考えられる。

(3) 西3区の遺物 (図版 89・160)

溝 40 89-31～35は土師器皿である。89-31・32は皿A、89-33・34は皿Nの小型皿、

89-35 は皿 N の大型皿で、京都 V 期に属する。89-36 は輸入陶磁器の白磁皿である。内面には段をもつ。高台には釉はかからない。

89-37 ～ 39 は軒平瓦である。89-37 は偏行唐草文で、左から右へ偏行する。本体調査区での 71- 9 ・ 10 と同文である。89-38 は唐草文で、筈がずれて唐草は細い線となり、細かく枝分かれしている。89-39 は均整唐草文軒平瓦で、蕨手が上下に反転する。西賀茂角社瓦窯産で、平安時代前期に属する。89-40 は複弁六葉蓮華文軒平瓦で、大きな范傷が縦に入る。本体調査区 70-14 と同范である。

町尻小路路面形成層 89-41 ・ 42 は土師器皿 N の大型皿で、京都 V 期に属する。

(4) 西 4 区の遺物 (図版 89 ・ 160)

土壙 49 89-43 は土師器の皿 N の小型皿で、口縁端部に煤がつく。89-44 は皿 N の大型皿である。京都 V 期～VI 期に属する。

土壙 10 89-45 は土師器皿 Nr と呼ばれる手捏ね製の小皿、89-46 は皿 S の大型皿で、口縁端部に煤がつく。京都 X 期～XI 期に属する。89-47 は肥前系陶器の鉢である。口径 25.7 cm、器高 7.9 cm、底部径 10.9 cm ある。内面と外面上半に釉がかかる。内面はさらに白色の釉がのる。

土壙 5 89-48・49 は土師器の焙烙鍋である。ともに口径 29 cm、器高 3 cm 前後の浅い器形である。口縁端部は肥厚する。内面には使用時の焦げが付着する。89-50 は焼締陶器の水注であるが、注口側が欠損する。底部は糸切りで、足を 3 箇所貼り付ける。備前産と考えられる。

町尻小路路面形成層 89-51 は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で、蓮子は 3 個残る。蓮弁は短く、子葉をもつ。平安時代後期に属する。

註

- 1) 土器の名称と年代観については、小森寛俊・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年 によった。
- 2) 常滑甕については、中野晴久氏よりご教示をいただいた。
- 3) 『瀬戸陶芸の精華展』図録 瀬戸市美術館 2005 年 京都市内では「祖母懐」とヘラ描きされた壺の底部が出土している。『平安京高倉宮・曇華院跡』平安京跡研究調査報告第 8 号 財団法人古代学協会 1983 年
- 4) 渡辺 誠「焼塩壺」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編 吉川弘文館 1992 年
- 5) 鈴木裕子「絵高麗 - 生産年代へのアプローチ 伝世品の観察と国内の出土資料 -」『研究紀要』第 5 号 野村美術館 1996 年 なお、全国の出土資料に椀類はないが、同様の技法で製作されたと推定できる壺類は東京大学の御殿下記念館地点などで確認されている。
- 6) 勅旨 20 号窯出土資料。畑中英二「近世信楽に於ける陶器生産」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会 2001 年
- 7) 能芝 勉「京都出土の近世火入・焜炉類について」『四国と周辺の土器 II - 火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態 -』四国城下町研究会 2003 年

- 8) 瓦師の銘がある花塩壺の蓋には、「大仏瓦師 / 蒔田又左衛門」「深草 / 瓦師 / 弥兵衛」がある。能芝勉「焼塩壺と花塩壺」リーフレット京都No.53 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1993年
- 9) 『竹ノ鼻遺跡 蒲生郡蒲生町石塔』滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1998年
- 10) 近年、発掘調査事例が増え研究が進んでいる。近畿地方の鉛釉系陶器窯の出土例は、大坂城跡や京都鳴滝の乾山窯跡、京都大学構内遺跡の聖護院乾山窯跡などがある。
『大坂城跡』Ⅶ 大阪市文化財協会 2003年
『鳴滝乾山窯跡 1～5次発掘調査概報』法蔵寺鳴滝乾山窯址発掘調査団・立命館大学文学部 2005年
- 千葉豊「乾山陶と軟質施釉陶器 - 京都大学構内遺跡出土資料 -」『軟質施釉陶器の成立と展開』関西陶磁史研究会 2004年
- 11) 分類は、木立雅朗「近世鉛釉系陶磁器の窯について - 鳴滝乾山窯跡発掘資料を基点にして -」『立命館大学考古学論集Ⅳ』立命館大学考古学論集刊行会編 2005年 による。
- 12) 『平安京左京北辺四坊 - 第2分冊(公家町) -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 13) 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第86集 東京都埋蔵文化財センター 2000年
- 14) 佐藤浩司「小倉名物三官飴とその容器」『江戸時代の名産品と商標』江戸遺跡研究会 2005年
- 15) 畑中英一『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版 2003年
- 16) 能芝 勉「焼塩壺と花塩壺」1993年 前掲8)
- 17) 山口県埋蔵文化財センター『萩城跡(外堀地区)Ⅰ』山口県埋蔵文化財センター調査報告第27集 山口県埋蔵文化財センター 2002年
- 18) 小川 望『堺本湊焼 / 吉右衛門』の刻印をもつ焼塩壺『御壺塩師 / 堺湊伊織』との系譜関係を中心に -』『江戸在地系土器の研究Ⅳ』江戸在地系土器研究会 2000年
- 19) 京都深草の瓦窯元である寺本家伝世資料。伝世品は墨書ではなく、熨斗と「御用瓦師・紀伊郡深草竈元 / 寺本甚兵衛 / 京高辻烏丸(東入)」と印刷されたレッテルが貼られている。田中一廣「京都深草の「焼塩壺」伝世品」『研究紀要2』財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1994年
- 20) 岩国徴古館『岩国の焼物』1999年 岩国多田焼については、宮田伊津美氏に御教示いただいた。
- 21) 「美山」銘の皿については、『粟田焼』粟田焼保存会 1990年 による。
- 22) 注連縄文椀については、北條ゆうこ「近世阿波のしめなわ文茶椀」『徳島県立博物館研究報告』第8号 1998年 による。
- 23) 松崎亜砂子「日本出土のヨーロッパ陶磁器」『掘り出された都市 - 日蘭出土資料の比較から -』日本アソシエーツ 2002年
- 24) 同様のウィロータイプの皿は、京都市内出土例として下記の報告がある。
『平安京左京六条三坊七町 京都市下京区小田原町・東鋸屋町』京都府文化博物館調査報告第11集 京都府京都文化博物館 1995年

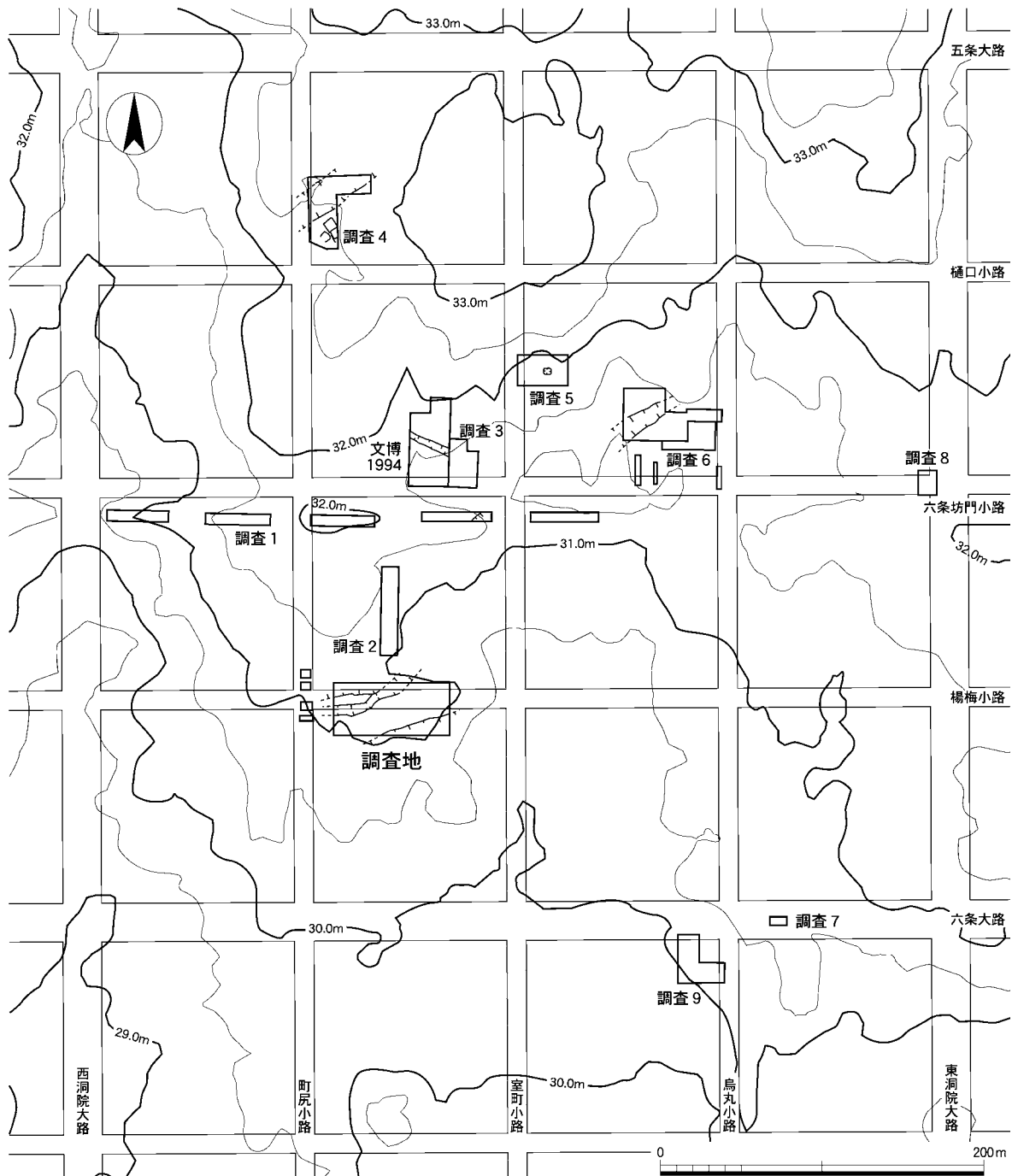


図 40 調査地周辺の地形環境（1：4,000）網は想定される谷筋、註1を元に作成
 能芝 勉・丸川義広「平安京左京一条四坊（97HL404・406）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成
 10年度』京都市文化市民局 1999年

『平安京右京三条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6 財団法人京都市埋蔵
 文化財研究所 2004年

25) 喜多川守貞『守貞謄稿』第5巻 朝倉治彦・柏川修一編 東京堂出版 1992年

26) 『南蛮・島物-南海請来の茶陶-』図録 根津美術館 1993年

27) 『平安京左京北辺四坊-第2分冊(公家町)-』2004年 前掲12)

なお壺屋焼については、小田静夫「海を渡った壺屋焼-琉球産泡盛陶器の交易-」『江戸時代の名産と
 商標』江戸遺跡研究会 2005年 による。

- 28) 『平安京左京北辺四坊 - 第2分冊(公家町) -』 2004年 前掲12)
今回の調査で出土したものよりも、単純な形状の押捺痕をもつ井戸椀瓦が出土している。
- 29) 大阪市の住友銅吹所跡の調査で出土した「翼状小蓋」と形状が似ており、被熱部分も共通している。
『大阪市中央区住友銅吹所跡発掘調査報告』財団法人大阪市文化財協会 1998年
- 30) 佐野英山編「鑄貨図録」大正二年『江戸科学古典叢書36』恒和出版 1982年
- 31) 高島市教育委員会の葛原秀雄氏よりご教示いただいた。
- 32) 竜子正彦「平安京左京三条四坊(91HL38)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
『平安京左京三条四坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年など。

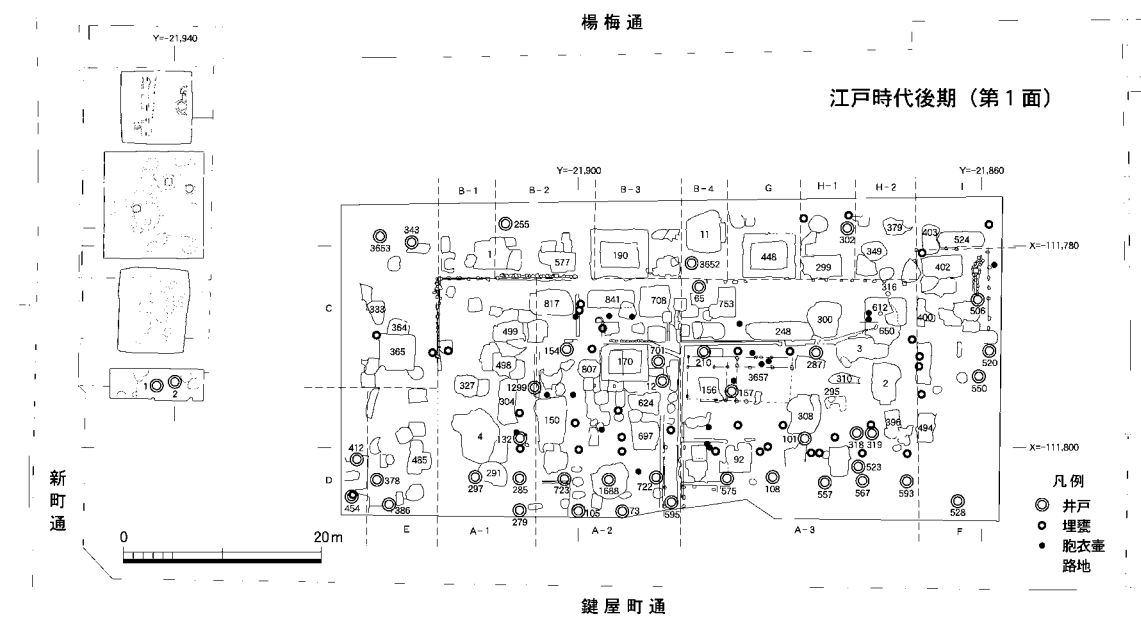
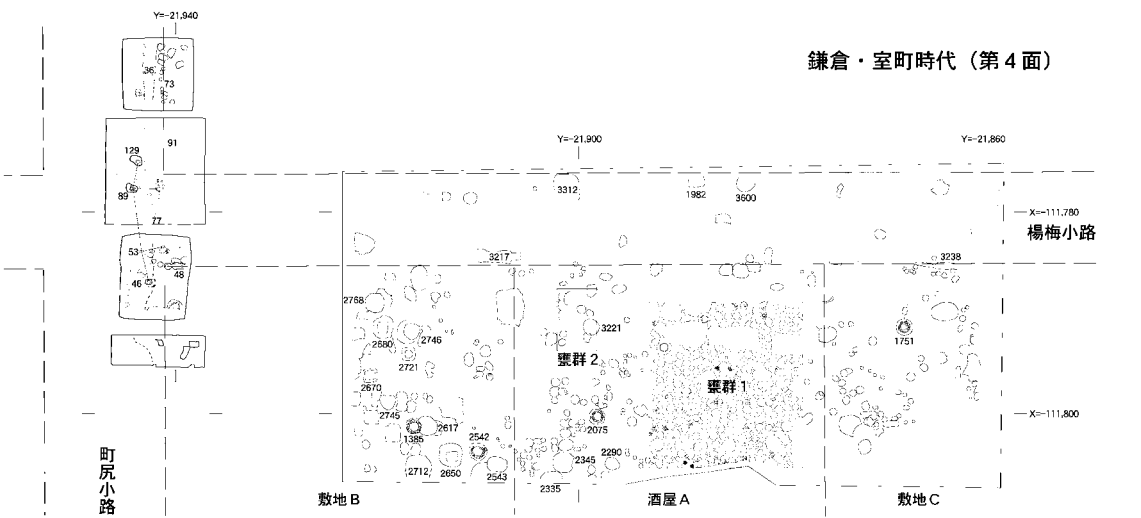
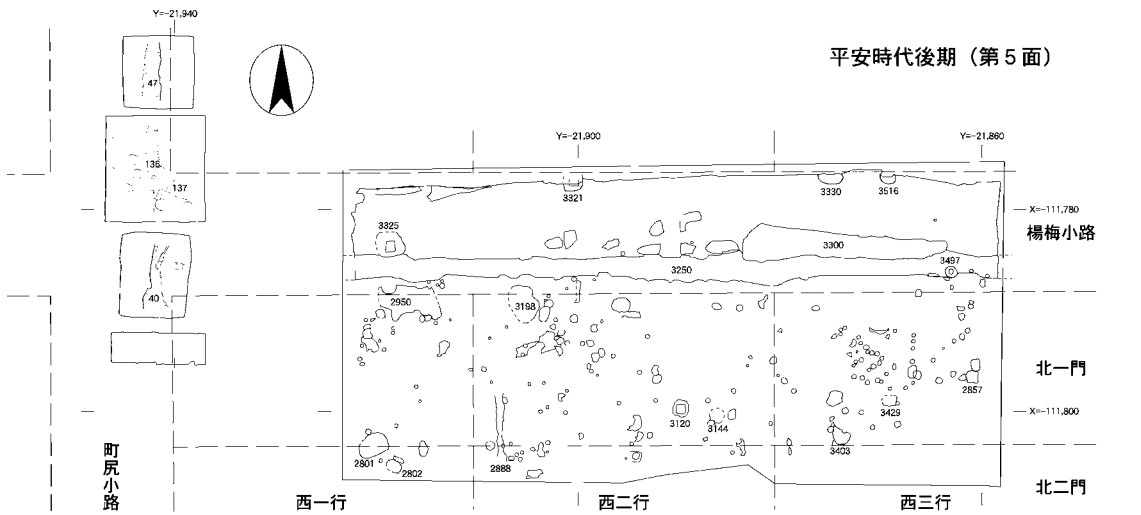


図 41 遺構の変遷 (1 : 750)

第5章 まとめ

1. 遺構の変遷

(1) 平安京成立前の様相

地形環境について 平安時代に属する遺構の下層で、斜め方向の流路を検出した。流路 3514からは弥生時代後期の土器が出土し、埋没年代を推定することもできた。出土した土器は磨滅の痕跡がなく、周辺に集落が存在した可能性は極めて高い。

第2章第2節で解説したように、調査地周辺で実施した調査1・4～6などでは、古墳・飛鳥時代の流路や土壙、竪穴住居跡が検出されている。これらの資料は、平安京が形成される前の京都盆地の遺跡の状態を推定する手がかりとなるものである。以下では、旧地形の等高線図に調査成果を重ねることで、調査地周辺の遺跡の立地環境について考えてみる。

図40は周辺の立会調査などで判明した地山面の標高をもとに作成した等高線図である¹⁾。等高線にはかなりの出入りがあり、北東から南西方向へ延びる高まり（尾根筋）と窪地（谷筋）からなる扇状地特有の微地形が復元できる。平安京が形成される前の京都盆地の様相を示すものであり、この等高線図に調査所見を加えることで、平安京形成前の遺跡がどのような立地環境にあったかが推定できる。以下、判明した諸点を列記する。

1 西端の西洞院大路下には大規模な南北方向の谷地形がある。西洞院大路が河川となり両側が侵食されたためできた地形と考えられ、当然平安京以後のものとなる。等高線から推定される谷筋もすべてこの谷筋に流れ込むかたちをとる。

2 今回の調査地は北東から南西方向に延びる尾根の先端に位置する。この尾根は調査4の東側にある平坦面から派生している。

3 調査地はこの尾根が南南東に方向を変える屈曲点にあたる。しかし流路を検出したことから、北西から延びると推定された尾根は分断されていたこと、南には湿地が及んでいたことが想定できる。

4 調査4では北東－南西方向の流路を検出したが、これは標高32～32.5mの等高線から推定される谷筋とよく合致する。

5 調査4では古墳時代前期の竪穴住居跡を検出し、調査5でも同時代の土壙を検出したが、これらは尾根の両側に遺跡が点在したことを示すものといえる。

6 調査6では飛鳥時代の遺物を含む北東－南西方向の流路を、文博1994年調査地では北西－南東方向の奈良時代の流路を検出したが、これらは推定される谷筋の方向と一致する。

7 調査6で検出した流路は、調査1の東から2つ目の調査区で検出した奈良時代の流路に連続していた可能性がある。

8 調査6・調査1・文博1994年調査地と今回検出した流路は、それぞれ標高30.5～31m

の等高線から推定される南東側の低地に流れ込んでいたと推定できる。

9 調査2の北東は「池亭」の推定地であるが、ここも低地の範囲に含まれていたと推定できる。

10 調査8では古墳時代の遺物が砂礫層から出土しているが、図上ではここに谷筋が復元できる。

以上、等高線図と調査所見の関連性を検討した。従来からも、高まりに当たる部分では集落遺跡、谷に当たる部分では流路が検出されることが知られてきたが、今回の作業はさらに細部まで検討できた点で、有意義であったと評価できる。

なお今回は、流路3508堆積土と上位整地層を対象に土壌分析を実施したが、それによると流路3508が形成された頃は水生生物が育成する湿地が広がり、周囲には多様性ある森林も分布していたことが判明している（付章5参照）。

弥生土器の特徴 流路3514から出土した弥生時代後期の土器には近江型甕の占める比率が非常に高い。京都の市街地で出土する弥生時代後期の土器は、総じて近江型甕の比率が高く、今回の資料もそれらを是認するものといえる。出土土器の所属時期は後期後半である。滋賀県側での類例と比較すると、近藤広氏による編年のV-5期からV-6期に該当する²⁾。また近年、弥生時代後期から古墳時代の土器が大量出土した久御山町佐山遺跡の編年案では、佐山I式1、ないしI式2に属する³⁾。

次に平安京を中心とした京都市域内での報告例をもとに、それらと比較しておく。左京二条三坊十町⁴⁾では竪穴住居跡を検出し、古墳時代初頭の土器が出土している。図示された資料では近江型甕は少なく、高杯も後出の形態を有する。左京二条四坊五町⁵⁾では竪穴住居跡を検出し、弥生時代後期の土器が出土している。高杯、器台の特徴は本例と類似し、併行期の資料とみてよい。左京二条四坊十町⁶⁾では流路、土壙などから弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土している。高杯は本例より古い形態を有するが、近江型甕を模した個体もみられる。山科区の中臣遺跡では、35次調査⁷⁾、52次調査⁸⁾、56次調査⁹⁾、67次調査¹⁰⁾などで弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土している。35次調査として報告された土器はハケメ成形の甕が主体をなし、近江型甕は少ない。52次調査では近江型甕が出土しているが、56次調査ではタタキ成形、ハケメ成形の甕が主体をなす。67次調査では庄内併行期の甕、タタキ成形の甕、近江型甕などが報告されている。左京区の岡崎遺跡では法勝寺跡（動物園内）の調査¹¹⁾で流路を検出し、弥生時代後期の土器が出土している。甕には近江型と畿内型がある。成勝寺跡（勸業館内）の調査¹²⁾では方形周溝墓を検出し、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土している。甕はタタキ成形のものは少なく、近江型甕が主流をなす。右京区の和泉式部町遺跡¹³⁾では竪穴住居跡を検出し、弥生時代後期の土器が出土している。甕口縁部は近江型である受口状を呈する。

以上のように、京都市内で出土する弥生時代後期、古墳時代初めの土器には、タタキで成形された畿内型の甕、ハケメ成形の甕、受口状口縁を有する近江型の甕などが共存しており、複雑な土器様相が特徴となっている。同じ受口状口縁甕においても、近江型甕を忠実に模したものの、それらを模倣しつつ技術的に到達できていない個体がある。今回の出土資料でいうなら、図版34-

7・8は比較的忠実な製品であるのに対し、図版34-5・6は口縁部の製作や櫛描列点文・直線文の施文が非常に稚拙である。今回の一括出土品にはこうした複雑な様相がよく示されている。

(2) 平安京条坊と宅地割

条坊関係の遺構 平安京条坊に関する遺構としては、楊梅小路と町尻小路を該当位置で検出した。両小路とも路面は非常に厚く、長期にわたる補修の跡が窺われた。楊梅小路の形成については、路面推定位置に掘られた土壌3300の存在が重要である。浅く掘られた土壌で、11世紀に属する土師器（図版35）が多量に廃棄されていた。ここが土器の廃棄場であったこと、路面はそれ以後に形成されたことを示す資料である。楊梅小路南側溝（溝3250）からは11世紀の遺物（図版36）が出土しているが、溝内の埋土は短期間に埋められた状況が観察できた。一方、楊梅小路北側溝は本体調査区では検出できず、北側溝・築地が想定される位置には11～12世紀代の井戸が掘られていることが判明した。このように、条坊に伴う遺構が平安時代後期に形成されること、北側溝は検出できず北築地位置には井戸が掘られることなどが、今回の調査で判明した。

史料の上からも、平安時代後期になると六条烏丸周辺には里内裏や邸宅が集中し、再開発の様相を呈したことが指摘されている¹⁴⁾。調査地では、楊梅小路の形成に先だって、下層の湿地が埋められているが、整地層に含まれる土器の下限は11世紀中葉頃までであり、史料と整合性が高い。したがって後述するように条坊が規格通り実施されなかった点については、施工が後期に下るところに原因を求めるのが妥当といえる。

路面と側溝の関係を図4から改めて整理しておこう。両断面での路面形成層は南北8mあり、北端はX=-111,777付近まで及んでいた。Y=-21,880付近での楊梅小路北築地心はX=-111,776.27と想定されるため、北築地心の南0.7mにまで路面が及ぶことは、北側溝が定位置に設けられなかったことを意味する。一方、南築地心の想定位置はX=-111,788.21である。南側溝3250心はX=-111,754.4にあり、南築地心の北2.8mの位置することから、こちらも該当位置より北に寄っている。なお北側溝は本体調査区では検出できていないが、西2区では該当位置で溝137を検出している。溝137は東で南に振れた状態で検出したが、本体調査区には達してお

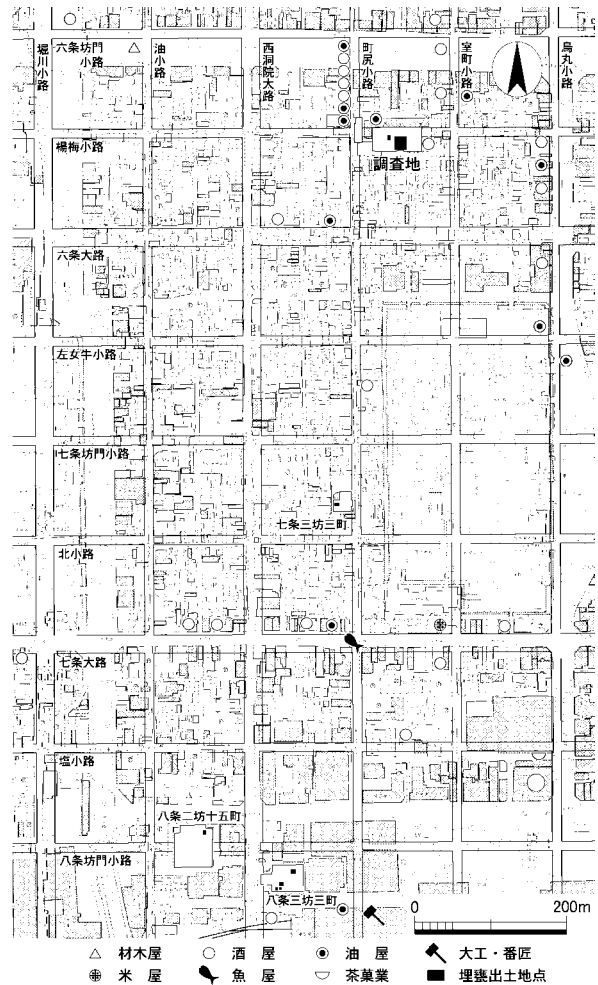


図42 埋葬の出土地点と店屋の位置（1：10,000）
※平安京条坊に註19地図を重ねて作成

らず、連続性については疑問を残すこととなった。

楊梅小路推定位置では、路面中央部に1基と北築地位置に3基、南側溝上にも溝埋没後に井戸が1基掘られていた。特に北築地想定位置に並ぶ井戸は、周辺住人が利用する共同井戸であった可能性を示すものである。そうすると南側の五町は有力貴族（源顕房など）が所有したとされるので、このことが北側に押し出す原因となったのではなかろうか。

なお、調査地の北東にあたる左京六条三坊十一町の調査では、六条坊門小路が十一町内に迂回していた事例が報告されている¹⁶⁾。こうした事例も含めて考えると、六条大路周辺の再開発は条坊制の変更を伴うかたちで進められたことがわかる。

五町内を東西に区画する施設として、南北溝2888がある。西一行・西二行境界より東に2.6mずれた位置にあるが、宅地内を東西に分割していた可能性は十分に想定できる。またこの位置は、室町時代には酒蔵の境界として継承された可能性もあり、宅地内の区画を考える上では重要な遺構である。

平安時代の火災史料 調査地である六条三坊五町は平安時代後期には源顕房の邸宅「六条殿」となったが、平安時代の火災を記した史料にはこの場所が特定できる史料がある¹⁷⁾。

- 1 『中右記』寛治元年(1087)6月20日条「午剋許右大臣之六条亭焼亡。」
- 2 『殿歴』永久五年(1117)1月8日条「六条右府(源顕房)堂、凡上下人家及び千余家皆焼失、」¹⁸⁾
- 3 『百練抄』久安元年(1145)3月23日条「六条右大臣(源顕房)旧第炎上す。六条北室町西。」
- 4 『明月記』建仁3年(1203)12月5日条「夜半許、南に火あり、楊梅南、室町西一町を焼く。」

また、周辺での火災史料として、延長8年(930)11月5日条では「中六条院」の火災を記す。中六条院は六条三坊十三町であるから、調査地とは一町はさんだ東側にあたる。『中右記』天永2年(1111)1月6日条には「烏丸六条坊門辺りの小屋焼亡す。」とある。こちらは調査地の北東側である。『玉葉』安元3年(1177)5月6日条は「中院焼亡す。」とある。中院は「六条室町なり」とするため、火災は調査地の東一町であったことになる。『明月記』元久2年(1205)1月10日条の火災は「六条坊門町より六条烏丸に及ぶ」とあり、調査地からは東側にあたる。

これらの火災がすべて調査地に及んだか、その可否はわからないが、少なくとも調査地では、1087年、1117年、1145年、1201年の4度にわたり火災に見舞われたことが確認できる。時期的にみると11世紀後半、12世紀前半、12世紀中頃、13世紀初頭の4時期であり、遺構・遺物の多い時期にあたるが、遺構の上からは明確な火災の痕跡は特定できない。出土遺物に注目すると、11世紀後半に属する土壙3300には、焼土・炭も含まれており、最初の火災を想定することも可能であろう。しかしこの時は、廃材を処理するために楊梅小路上に穴が掘られたことになる。また柱穴2827からは壁土が出土している。被熱によって硬く変質しており、火災を物語る証拠とみてよい。壁土は12世紀に属する遺構からも出土しているが、火災との関係を明確に指摘できる資料はない。

(3) 室町時代の埋蔵遺構

埋甕遺構と酒屋に関する史料 調査区中央で埋甕遺構（甕群1・2）を検出したことで、ここには地中に甕を並べた大規模な遺構が存在したことが明らかとなった。遺構の残りは非常に悪く、甕の内容物に関する知見も得られなかったが、資料からは室町時代の下京には数多くの麴室・酒倉が営まれていたことが知られてきたため、今回検出した埋甕遺構も酒を醸造するための甕が並んだ酒倉の遺構と考えた。

室町時代の酒屋に関する史料のうち最も著名な史料が、北野神社文書にある応永33年（1426）の酒屋名簿である。ここには洛中洛外の酒屋347軒が掲載され、詳細な分布図も作成されている¹⁹⁾。酒・麴造りは神人の特権であったため、神社側は他所での酒麴室を停止するよう幕府に働きかけ、応永26年（1419）9月には麴造りを停止させる命令が下された。これに応じるかたちで、洛中の酒屋、土倉、酒麴室は証文を提出することになるが、その中の1つに「楊梅室町西南頰之倉」と記した文書があり、今回検出した埋甕遺構はここにみえる「倉」に該当する可能性が高い²⁰⁾。

『京都の歴史』第3巻別添地図では、酒屋、土倉、油屋、米座、みそ屋などの所在地を具体的に示した復元図を載せている。分布の中心は下京の中心部分と重複し、北は三条大路、南はこの楊梅小路、西は油小路、東は東洞院大路間に店屋の印が集中する。今回の調査地はその南端に当たり、調査地のすぐ東に打たれた○印が先述した「楊梅室町西南頰之倉」に当たるものであろう。この場所で実際に酒倉遺構を検出したことは、想定の正しさを示すものでもある。ただし、甕据付穴とみられる遺構は今回の調査地以外にも、左京七条三坊三町²¹⁾、左京八条二坊十五町²²⁾、左京八条三坊三町²³⁾の3箇所で見出されており、いずれも分布が希薄な範囲で見つかっていることは、復元図以上に酒倉や店屋が広範囲に展開していたことを示すものといえる。この点は、考古資料が文書史料を補完した実例として評価できるであろう。

宅地割と酒倉の規模 まずこの時代の遺構配置について概述する。楊梅小路については、北側溝・南側溝は検出できなかった。しかし甕群1・2の北端は南築地付近にあるため、楊梅小路南端に規制されていたことは確かであろう。平安時代の南側溝上には小規模な溝3217・堀3238が作られるが、この付近には礎石や柱穴も並ぶことから、当時の宅地境界は遺構が掘られた付近であったとみてよい。一方、北築地の想定位置にはこの時代も井戸が掘られており、平安時代後期の状況と変化がない。むしろ南側の酒倉は、平安時代後期よりも道路側に進出することとなっている。

次に、酒倉の配置と酒屋の実態について解説する。甕群1の東側と西側には小規模な柱穴が密集しており、この場所で建物の建て替えがあったことが想定できた。西側では井戸も掘られており、建物と井戸が一体となった作業場であったと考えられる。そのようにみると、酒倉と作業場が組み合わさって「酒屋」を形成していたことになる。そこで甕群1・2からなる範囲を「酒屋A」とすると、その西端は先述した西一行・西二行境界付近は柱穴が少ないことから、この付近に求めることができる。東端を甕群1の東端付近に求めると、酒屋Aの東西幅は約30mとなる²⁴⁾。さらに酒屋Aの西側には井戸が多数掘られるが、これらは町尻小路側に面した別の酒屋、あるいは店屋に伴う井戸であったと考えておきたい（「敷地B」とする）。このように、検出した甕群1・2と柱穴・井戸群から、楊梅小路に面する酒屋A、町尻小路に面する敷地Bの範囲を想定した。

室町時代の下京では、道路に面して多くの店屋が存在したことを先述したが、町尻小路は室町小路とともに上京・下京をつなぐ主要道路であったため、町尻小路に面した敷地Bに酒屋Aを上回る規模の店があったとしても不自然ではない。酒屋Aの東隣りで敷地Cとした範囲は遺構が非常に少ないが、このことも町尻小路の重要性を反映しているのであろう。以上のように酒屋の姿を具体的に提示できた点は、今回調査の大きな成果といえる。

酒倉の操業・廃絶の時期 まず酒倉の開始年代について考えておこう。甕群1の下層には井戸3120・3144があるが、これらは11世紀に属するため甕群1の開始を限定する材料にはなり得ない。そこで常滑甕の年代観を参考にすると、図版42に示した口縁部は編年上の2期が最も古く、それ以後も継続しながら7期・8期に盛期を迎える²⁵⁾。常滑甕の編年では、7期が14世紀前半代、8期が14世紀後半代と推定されるため、甕群1は室町時代初めにはすでに操業しており、その後佳境を迎えたことが想定できる。

では操業はいつまで遡るのか。出土した常滑甕では6a期（13世紀の第3四半期）、6b期（13世紀の第4四半期）から増加傾向がみられた。しかし、それより古い型式の甕も存在するため、鎌倉時代の中頃には小規模な操業が始まっていた可能性がある。やがて大規模化するに及んで、新たに常滑甕を埋設することになった。その段階が7期であったと想定される。そのように考えるなら、今回検出した状態の酒倉は14世紀前半には姿を現していたことになる。

甕群2の下部に井戸3221がある。井戸の埋没年代は14世紀中頃と推定されるため、甕群2はそれ以後に設置された酒倉となる。甕据付穴2662には備前甕が据えられていたが、甕の年代は14世紀後半代とみられ、矛盾しない。

甕群の終焉については、甕群全体を覆う厚い整地層には桃山・江戸時代の遺物も含まれていたが、大要としては室町・戦国期までの遺物が下限と想定できた。この整地層を掘り込んで設置された埋納1697・1864は、瓦器羽釜に土師器皿を蓋として乗せるものであった。その土師器皿は京都市区期中～新段階で15世紀後葉頃に属し、酒倉の下限を確定させる資料となった（図版40）。以上から、酒倉は応仁の乱（1466～1477）の前後にはすでに廃絶しており、遺構の上には整地層が覆っていたことが想定できた。応永26年（1419）に洛中での酒麴の製造に規制が加えられたことを先述したが、規制によるためか比較的早い段階に終焉を迎えたことが、遺構の上からも解釈できた。図版42に示した常滑甕口縁部は、9期とされるものが下限であり、それ以後のものは出土していない。常滑9期の推定年代は15世紀前半であるため、9期の製品が普及する前に酒倉は廃絶を迎えていたのであり、この点も先の推定とは矛盾しない。

酒倉廃棄時の状況 北野神社が酒麴の規制を幕府に働きかけた結果、応永26年（1419）には規制が出されたことを先述した。このとき、麴室52軒は幕府の役人の目で破却された²⁶⁾とされる。その後、応永33年（1426）になって作成されたのが有名な酒屋名簿²⁷⁾であるが、そこに記載された347軒中には「楊梅室町西南頬之倉」の名は見えない。すでに廃絶していたためであろうか。

その後も酒麴をめぐる争動は継続する。文安元年（1444）には延暦寺衆徒の強訴があり、その圧力によって洛中での麴造りは許されることになる（「文安の麴騒動」）。その後も、文正元年（1466）

には徳政で諸大名が土倉・酒屋を破却したこと、文明 19 年（1487）には奈良酒密売の禁止が命じられたこと、永正 6 年（1509）には京都の酒屋が坂本・奈良酒等の洛中売買禁止を幕府に請うたこと、天文 14 年（1545）には上下京の酒屋と西ノ京麴師が洛中麴室の事で争ったこと、などが史料にみえる²⁸⁾。このように洛中での酒麴をめぐる争いは止むことがなかったが、甕群 1・2 がそこまで継続しなかったことは、遺構・遺物の年代から推定した通りである。

甕群 1 の終焉に関しては、底部に穿孔があることが判明し、より具体的な姿を想像することが可能となった。穴は内側から打撃されており、口径 1.5 cm 前後と小さいため、鋭利な鉄器で突き抜かれたとみられる。陶器甕自体は再利用が可能であるため、大半は抜き取られたであろうが、底が抜けない個体は、底を打ち抜いて破壊したのであろう²⁹⁾。そう考えると、操業停止に際しては強制力が働いたと考えるのがよく、あるいは応永 26 年（1419）の麴室破却の場面と同じく、役人が差し向けられて破却を確認する手続きがとられたとも考えられる。穿孔された陶器甕は室町時代の酒麴をめぐる争いを示す具体的な遺物でもある。

町尻小路上の柱穴群 西 2 区・西 3 区の町尻小路路面上で検出した礎石をもつ柱穴は、一連の遺構とみられるため、改めてその性格について注目してみる（図 41 中段参照）。

西 2 区では柱穴 129 と柱穴 89 を検出した。両者の間隔は 2.75 m で、柱穴 89 の東 2.5 m にも同様の礎石が据わっていた。西 3 区では柱穴 46 を検出し、その北 3.15 m で礎石 53 を、さらに礎石 53 の東 2.2 m にも礎石がみられた。このように、西 2 区・西 3 区で検出した柱穴と礎石は、ほぼ対称形で三角形の配置をとること、柱穴 129・89・礎石 53・柱穴 46 がほぼ一直線に並ぶことなどから、一連の建造物の基礎と考えるのが妥当といえる。この場合、柱穴 89 と礎石 53 間(6.25 m) が通用部分となる。その南北中心は楊梅小路心よりやや北に位置するが、楊梅小路心は北に片寄っていたことが判明しており、この点でも柱穴群が楊梅小路と一連の建造物であったことを示している。所属時期であるが、柱穴は平安時代後期の路面を掘り込み、礎石は東側溝上に据わっていた。柱穴の底に礎石を敷く構造は、室町時代には普及することなどから、調査地で遺構数が増加する室町時代に属すると想定するのがよいであろう。

中世京都（特に戦国期）においては道路上に、木戸門、釘貫、櫓が設置され、町の自治を守る性格を担っていたことが指摘されてきた³⁰⁾。『洛中洛外図 町田家旧蔵本』では、右隻第二扇の左下に町通（町尻小路）に面した木戸が描かれている³¹⁾。この木戸は、下京の町への出入りを規制するために設けられた施設であるが、上記柱穴群もこのような木戸の下部構造であり、楊梅小路への出入りを規制する目的で設置されていたのではなかろうか。このような絵画資料で指摘されてきた道路上の施設が、今回の調査で判明したことは、大いに評価できるであろう³²⁾。

なお、西 3 区で検出した東西方向の溝 48 は、内部に礎石が据わる布掘柱列であったが、その位置は楊梅小路の南端と想定した溝 3238 の西延長に一致する。楊梅小路の南築地に相当する施設がここにあったことになり、平安京条坊の想定位置からは約 3 m 北に移動していたことになる。

（４）江戸時代の町家遺構

町家境の復元 江戸時代の町家の範囲を復元する場合、遺構のみでは困難な場合が多いが、地籍図などの資料があると比較的容易に作業ができる。今回は、明治9年(1876)作成の地籍図が存在し、地籍図と遺構の関係を検討した結果、両者が良く一致することが判明した。ただし、地籍図作成段階の調査地は学校用地となっており、この範囲(「町家A」「町家B」とした)については遺構配置から細分することとした。

以下、町家境の復元案について解説する。まず、地籍図から得られた町家境の位置には石垣や礎石列が存在しており、これらが境界施設であることが判明した。たとえば、 $X=-111,784$ 付近では東西方向の石垣と礎石列を検出したが、ここは楊梅通に面する町家と鍵屋町通に面する町家の背後が接する「背割り」に合致した。同様の石垣・礎石列は、南北方向では $Y=-21,867$ 、 $Y=-21,914$ 付近などにも築かれており、町家を東西方向に区切る施設と判断できた。この他、石垣や礎石列がない場合も土壌の肩が直線的に並ぶ状況がみられ、その部分が町家境と判断できた。以上から、町家A～町家Iの9区画を設定した。そして、学校用地となった町家Aを3区分、町家Bを4区分し、町家Hも2区分したため、15区画が調査地内での町家の姿と考えた(図版14・15)。

町家境に築かれた石垣・礎石列は、町家ごとに構築状態が異なっていた。これは町家の主が施工主であったことを示すものである。石垣の場合、必ず面を揃えて積んでおり、施工主からみて外側に面を揃えていたと考えられる。また境界施設の変化から町家の変遷を知ることもできた。たとえば町家Hでは、第1面では礎石列3649が構築されていたが、下部では礎石列3647と漆喰列3631に2分され、幕末期と江戸時代中期では境界の明示が異なっていたことが判明した。なお礎石列の場合は、礎石間の距離が1m前後(当時の半間)で、この数値は礎石建物の場合も同じであるため、両者を区別するには遺構の広がり調べが必要があった。

町家内部の構成 調査地が尚徳中学校のグラウンドであったため、通りに面した部分は調査できず、この結果、間口付近の所見は得ることができなかった。次に、背割りの位置について考える。背割りの施設である石垣・礎石列の南には幅約6mの空閑地があり、この南半分は路地(路地3656)であったと想定した。楊梅通の南端から鍵屋町通の北端までは約56mある。楊梅通から背割りの石垣・礎石列までと、鍵屋町通から路地3656の南端まではともに約25mあり、楊梅通に面した町家と鍵屋町通に面した町家は、両方とも奥行き25mで設定され、残りの6m分は空地として残されたことが想定できた。背割りの石垣・礎石列は平安京の楊梅小路心にあるため、平安京条坊を踏襲したようにみえたが、このように考えるなら偶然の一致となる。また、背割りの北側には土蔵190と土蔵448が、路地3656の南側には土蔵170が配置されており、町家の最奥部に土蔵を配置するのが一般的であったことが窺われた。

町家内部では、礎石列(礎石建物の一部を構成する)、土蔵、穴蔵、溝、井戸、埋嚢、胞衣壺、炉、竈、池、土間、漆喰組みの枅や槽、などの遺構を検出した。礎石建物と土間の広がる範囲が住居部分であるが、今回は町家A-3で礎石建物3657を検出するにとどまった。しかし、 $X=-111,798$ 付近には埋嚢(便所)と井戸が並ぶため、この付近まで建物が及んでいたと考えられる。埋嚢・井戸

が東西に並ぶことは、建物内部が等間隔に仕切られた長屋のような建物が、鍵屋町通に面して建てられていたことを示すものであろう。今回は、町家の背後側・背割り付近の様相を明らかにした点で、大きな成果が得られたといえる。

桃山・江戸時代初期の町家境の異同点 地籍図による町家境の復元は、江戸時代を通じて有効であったが、桃山・江戸時代初期の遺構に当てはめた場合、境を移動させた方が良い箇所がみられた。たとえば、 $X=-111,784$ 付近の背割り線上では土壇 1477・

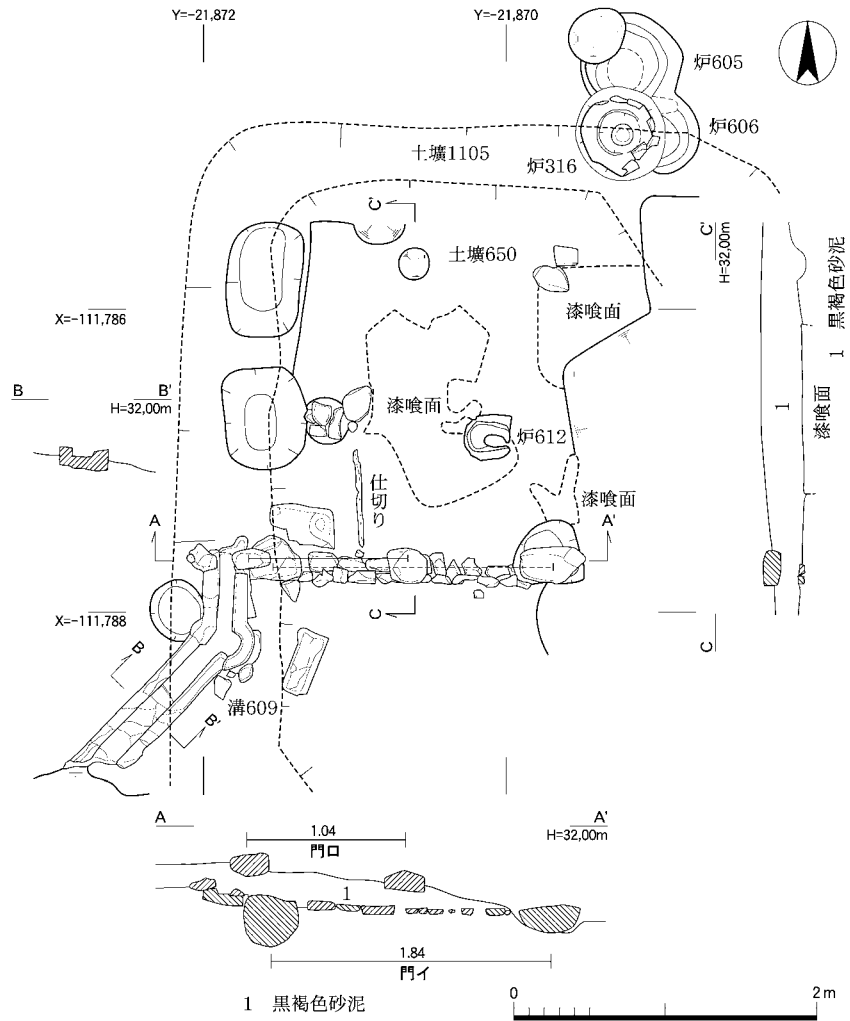


図 43 鑄造遺構配置図 (1 : 50)

1485・1970・1418・1400・1336・1458などが並んで掘られており、背割り設定前の状況がみてとれた。そこで遺構の配置関係から、町家境の復元案を以下のように修正した。

1 $X=-111,784$ 付近の背割りについては、町家 B - 3・B - 4 境でクランク状に折れ、東半では約 1.5 m 南にあったと考えた。このように考えると、門 3650 の北端ならびに土壇群の南肩と合致する。

2 町家 A - 1 と町家 A - 2 については、井戸 2666・2500・1420・2130 が東西に並ぶことから同一敷地と考えた。

3 町家 A - 1 の西端は、井戸 1533・土壇 1573 などの存在から西へ 1.5 m 移動させた。

4 町家 B - 1 と町家 B - 2 の境は、土壇 1375・1304 間を想定し、東へ約 1 m 移動させた。

5 町家 B - 3 と町家 B - 4 の境は、土壇 1477 の存在から西へ約 2.5 m 移動させた。

6 町家 G と町家 H - 1 の境は、門 3650 からの位置から土壇 1418・1400 間を想定し、東へ 1.5 m 移動させた。

7 町家 A - 3 と町家 F の境は、石室 1365 の位置から東へ 1.2 m 移動させた。

このようにみると、町家境はさほど変化せず幕末期に至ったことがわかる。

楊梅小路の付け替え時期 江戸時代の初期、慶長7年(1602)から寛永17年(1640)まで、ここには公許の遊里「六条三筋町(六条柳町)」が設置された。公許の遊里が移ってきた理由としては、調査地周辺がまだ郊外であったためと考えられる。実際の調査でも戦国期から桃山時代の遺構は少なく、空闲地が広がっていたことが想定できた。公許の遊里の移設は、当地にとって平安時代後期の再開発に続く2度目の大規模開発となったのであろう。

この時、平安京条坊によらない東西三筋の通り(楊梅通・鍵屋町通・的場通)が開設された。楊梅通については、当初の位置から北へ約26m(心々)移動することになった。仮に楊梅小路が機能していたなら、町割り改変時に移動させられることはなかったであろう。しかし実際に移動した経緯からすると、当時の楊梅小路は相当に衰退していたとみられる。

楊梅小路の路面上では、17世紀以後の遺構が多数掘られていた。この点は、16世紀代の遺構がほとんどみられないことと好対照をなす。17世紀に入り楊梅小路が北側に移ったことで道路部分が宅地側に入れられ、このため穴が多数掘られることになったのであろう。このように、楊梅小路の付け替え時期についても史料との整合性が高いことが確認できた。

桃山・江戸時代初期の遺構配置 調査地に置かれた公許の遊里「六条三筋町」の様子は、『洛中洛外図 舟木家旧蔵本』に描かれている。³³⁾元和初め(1615年頃)の景観を描くとされるこの絵図では、左隻第1扇と右隻第5・6扇に「上の町」「中の町」「下の町」の表記と、三筋に面して店が開き、人々でにぎわう様子が描かれている。調査地は、上の町と中の町の間位置するため、中の町に面した建物が調査地内に及んでいたことになる。屏風に描かれた建物は、町家の構造をもち、建物の側面を通りに向けている。屋根は、縦板と横棧で組むものはその上に石を乗せ、その他の屋根は横板で葺いたように描かれている。瓦葺き屋根は寺院など一部に限られ、町家には普及していない。左隻第1扇の中央部では、唐破風を乗せた重荘な門(東本願寺の門)が描かれる。門の型式は薬医門とみられ、門3650から推定される構造と同じである。一方、右隻第5扇の左下にも板塀に開かれた木戸門が描かれる。その他、右隻第6扇の下端には湯浴みをする女性が描かれ、風呂や井戸などの施設が建物の後ろにあったことがわかる。女性の西側には土壁造りの蔵が描かれているが、今回の調査でも土蔵1414を検出しており、町家の後ろ側にある点で共通している。

門3650は町家Gの最奥部にあり、北柱筋が当時の背割りに一致すると考えた。したがってこの門は、楊梅通から町家Gの範囲を経て、町家A-3の北(裏)側へ出入りするための門ということになる。町家A-3は調査地内で最も広い区画を有する。ここに北門が付くことは、公許の遊里との関係やその後の町家への移行を考える上で重要となろう。

町家A-3の南東寄り検出した井戸1644の埋土上部から、鹿骨の前肢・後肢がまとまって出土した。前肢・後肢は本体から切断されたものであり、いずれかの場所で解体され、ここに廃棄されたと考えられる。『江戸図屏風』などの絵画資料には、巻狩で得られた鹿が解体される場面が描かれ、後肢は家臣達に分与されている。³⁴⁾こうした事例をみても、町家A-3は一般的な町家を考えるよりも集客性ある施設を想定した方が、より理解しやすいのではなかろうか。なお井戸1644

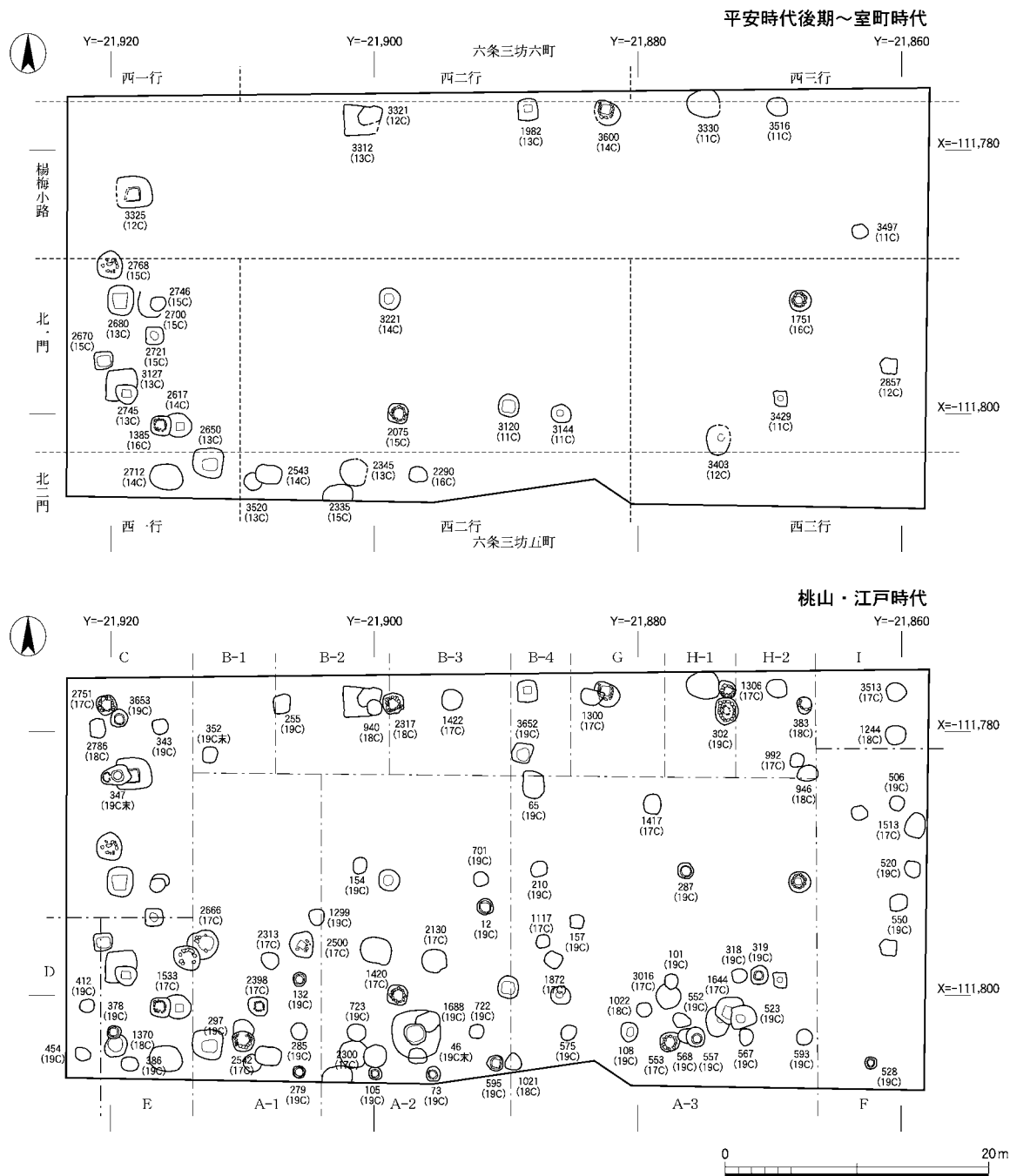


図 44 井戸の配置図 (1 : 500)

出土鹿骨については、付章 2 で詳しい分析を掲載している。

鑄造施設の復元 町家 A - 1 ・ A - 2 ・ A - 3 では炉の遺構を検出し、町家内に鑄造施設が設置されていたことが判明した。検出した炉は、町家 A - 1 に 4 基 (炉 600 ・ 601 ・ 602 ・ 514)、町家 A - 2 に 1 基 (炉 832)、町家 A - 3 に 7 基 (炉 605 ・ 606 ・ 316 ・ 612 ・ 310 ・ 295 ・ 755) の合計 12 基である。このうち、町家 A - 1 の最奥部では炉 600 ・ 601 ・ 602 の 3 基が、町家 A - 3 でも最奥部に炉 605 ・ 606 ・ 316 と炉 612 の 4 基が相次いで築かれた。最奥部に 3 基～ 4 基の炉が集中することは、操業期間がほぼ同じであったことを示すものであろう。これら遺構の年代は、18 世紀後半から 19 世紀前半までである。

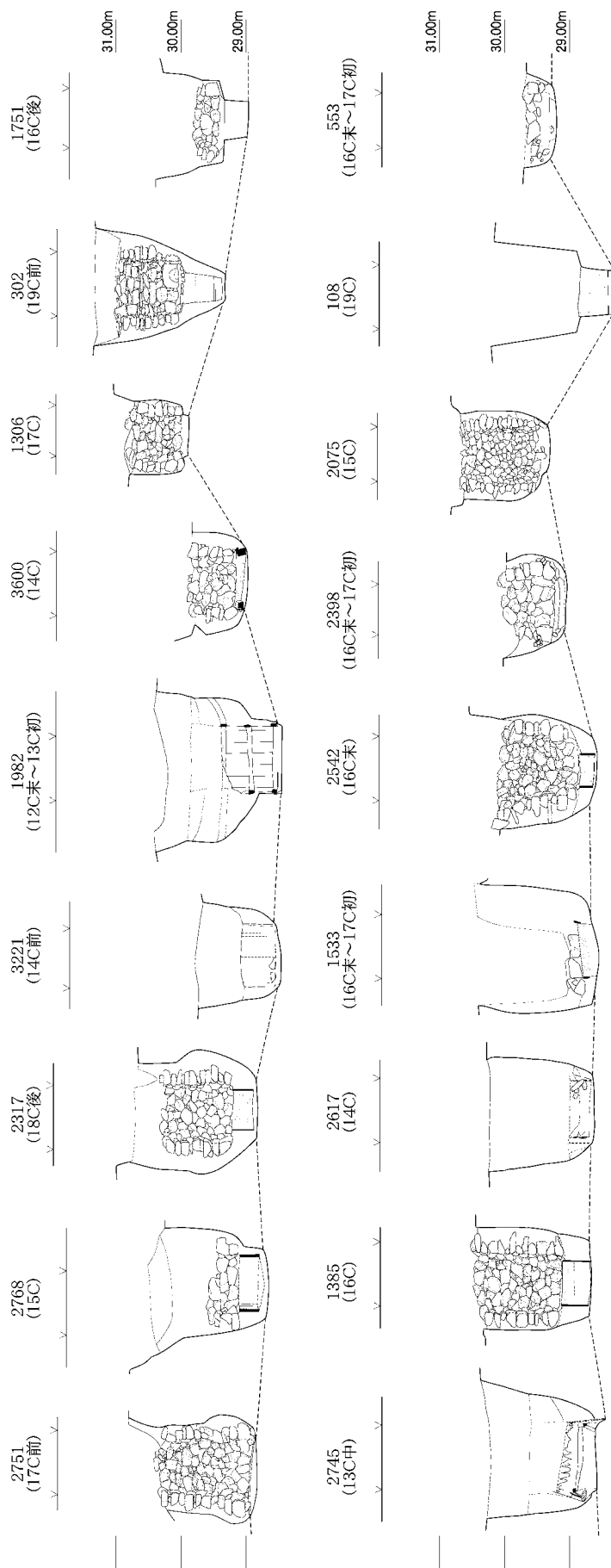


図45 井戸断面の比較（1：100）

図43では、町家A-3北東部にあった鑄造施設を、第1面と第2面を重複させて図示した。第2面で検出した大規模な土壙1105（穴蔵）は、18世紀後半に廃絶し、その後はゴミ穴として利用された（土壙650）。穴は19世紀初めには内部が埋まり、上面が完全に整理された後、炉606、次いで炉605が設置された。この時、炉の南3mには漆喰片で東西の仕切りが造られ、両端には礎石が据えられて、外部とを仕切る門（「門イ」とした）が設置された。門イの北（内）側には漆喰面が一部残存し、また漆喰面の西端には仕切りもみられた。この漆喰面の広がる範囲が、鑄造施設の作業場であったとみてよい。門イの西端には漆喰組みの溝609が設置された。この溝は、鑄造施設の排水を外に流すために設置された溝であり、西側では溝230となって、町家A-3の北面・西面を迂回して南へ水を流出させていた。ただし、土壙1105・650の内部が陥没したため、検出時の溝609は北側へ傾斜する状態であった。

第1面では、炉605・606の位置に炉316、その南にも炉612が設置された。この段階での門は礎石が小さくなり、幅も約半間となった（「門口」とする）。溝609は埋没し、同じ位置には丸瓦を伏せた瓦列289（図版15）が置かれた。

瓦列 289 は暗渠であり、上を人が往来していたとみられる。なお、土壙 650 内部には鑄造製品の鑄型が大量に含まれていた。南側の炉 295 など生じた鑄型片が、土壙 650 に廃棄されたと考えられる。炉 605・606・316 で生じた鑄型片は、西側に掘られた土壙 708・753 などに廃棄されたと考えられる。

次に、鑄造施設の配置を理解する意味で、背割り付近に設置された胞衣壺についてもみておく。胞衣壺は、背割りの北側ではまったく出土していない。これに対して、背割りの石垣・礎石列の南約 4 m では 7 基が東西に並んで出土した。7 基の胞衣壺は、町家 A - 2・A - 3 間を超えて並ぶこと、瓦列 537・539 の北端と一致することから、路地 3656 の北端に沿って埋められたと考えられる。町家境については、町家 A - 1・A - 2 間に路地 3655 を、町家 A - 2・A - 3 間には河原石を敷いた路地 3654 を想定したが、路地 3656 はそれらと結ばれ、町家 A - 3 の最奥部に設置された鑄造施設に至っていたのであろう³⁵⁾。

「小中居」墨書土器について 北東隅の土壙 403 から出土した瀬戸皿(馬の目皿)の底部外面には、「小中居」などと墨書したものがみられた。瀬戸皿は 5 枚あり、すべてに墨書がある。墨書の内容は、「小中居 とり 十二月」、「小中居 午十二月 十□」、「小中い」、「中居 [御カ] 膳所」、「少 [中カ] 十一」である。この他、信楽鉢の底部外面にも、「小中い 大清」、「岐カ」、「小中居」の墨書がみられた。いずれも大型品で、共用器とよべる食器である。

町家 I は調査地の北東隅にあり、東端が調査区外のため規模は判明しないが、明治 9 年の地籍図を参照すると、間口 11.6 m、奥行き 22 m と推定できる。また明治 9 年の地籍図では、この町家 I と西側の町家 H - 1・H - 2、さらに東側の 1 軒までが同じ家主となっている。土壙 403 は、町家 I の南西隅に掘られた南北に細長い穴で、長さ 2.8 m、幅 1.6 m、深さ 1.7 m ある。南北に長いのは、敷地の西端に沿って掘られたためであらう³⁶⁾。

「小中居」の意味については、明確にできなかった。しかし、「中居」については、1. 殿中・大名邸の奥向きにあり、勤仕する女性の控室、転じてそこに勤めていた女性、2. 台所に続いた家人の居間、主婦の平常の間、3. 遊女屋、料理屋などで客に応接し、その用を弁じる女性などの意味があり、「小中居」も同様に炊事・調理・配膳を行う場所か、あるいは応接する人(女性)をさすとみてよい。今回の出土例に「[御カ] 膳所」の墨書があるのは、調理や配膳を行う部屋の意味が含まれているのであろう。付属して記された墨書のうち、「とり」「午」は干支である。「十二月」は、購入した月か、あるいは使用する月を記したのではなかろうか。

町家 I は明治 2 年の尚徳校開校時には校地に含まれなかった範囲である。そして、町家 H - 1 から町家 I の東まで同じ家主であったことを考慮すると、町内の有力者であったと推定できる。そうすると、大勢で会食する機会もあったと推測でき、そうした場面で使用するため、「小中居」と墨書したのではなかろうか。土壙 403 の埋没年代は 19 世紀後半であるため、尚徳校が開校する直前の様相を窺い知る貴重な資料である。

2. 井戸の配置について

(1) 平面配置

まず平面的な配置関係を整理する。調査で検出した井戸は113基ある。図44では上段に平安時代(11世紀)から室町時代(16世紀)、下段に桃山・江戸時代(17世紀～19世紀)に属する井戸を示した。2段に区別したのは、上段では平安京条坊との関係、下段では町家内での配置をみるためである。上段・下段とも、井戸の配置には粗密があるが、その要因として、1.水脈、2.土地利用の両方があったと考えられる。

上段では、楊梅小路北築地想定線上に井戸が並ぶ点が注目される。実際には路面上に掘られた井戸であり、平安時代後期から室町時代まで継続して掘られたことは、本章(2)で解説したとおりである。これに比べると、楊梅小路路面と南築地付近には井戸はほとんど掘られない。路面と南築地が機能していたためであろう。東西の宅地境についても、楊梅小路南築地と西一行・西二行の交点、ならびに西二行・西三行の交点付近には井戸が掘られなかった点が注目できる。明確な境界施設は検出していないが、ここでも宅地境が機能していたためと考えられる。

西一行と西二行には井戸が多く掘られていた。室町時代には西二行の東半に酒倉が設置されたが、酒の醸造に井戸は不可欠であったため、西二行に掘られた井戸は酒倉用の井戸であったとみてよい。同様に、町尻小路側においても店舗・酒倉が想定されるため、西一行に掘られた井戸はそこで使用された井戸と考えられる。西一行・西二行では、北一門と北二門の境界付近ならびに町尻小路東築地想定線から東20～25mに井戸が掘られており、建物背後に掘られた井戸と解釈できる。西三行では井戸は少なく、調査区南壁沿いにも井戸は掘られていない。井戸の少なさは宅地利用の乏しさを示すものであり、この点でも町尻小路側が表通りであったことを窺わせる。

次に、江戸時代に属する井戸の配置を整理する。この時代の背割りは、X=-111,784付近に築かれた石垣・礎石列である。しかし、背割りの南には幅6mの空き地があり、その南半は路地であったことを先述した。この範囲には井戸が少ないことが、まず指摘できる。

次に、この時代の井戸は東西に規則的に並ぶ点が指摘できる。これは町家内部の間取りに影響を受けたためと考えられる。以下、顕著な例を列記する。

1 背割りの約5m北側では、東西に井戸が約10基程並んで掘られている。町家Cを除いては、いずれも楊梅通に面した町家であり、町家の後ろ側に井戸が掘られたものといえる。

2 X=-111,790付近の町家A-2・A-3内では、19世紀の井戸が東西に3基並ぶ。この列からX=-111,794付近までに掘られた井戸が、鍵屋町通から20m程奥まった位置に掘られた井戸である。

3 X=-111,797付近では、町家EからA-3の範囲に17世紀の井戸が東西に8基並ぶ。江戸時代初期の町家境を復元する上で重要であるとともに、江戸時代後期の井戸配置とも共通する点は注目できる。

4 X=-111,803付近では、町家EからA-3の範囲に19世紀の井戸が合計12基が並ぶ。特に、

町家A - 1～A - 3間では4.5 mほどの間隔で掘られており、町家の建物構造を推定する手がかりとなる。

5 南壁に沿うX=-111,806付近では、町家A - 1・A - 2で19世紀の井戸が3基並ぶ。この列と約3 m北の列は、同時期に共存したと考えられる。

このように、町家A - 1、A - 2、A - 3を中心に多くの井戸が掘られていた。井戸が集中する範囲は、掘られる位置が限られていたためであろう。また、町家Fでは町家A - 3のような井戸の集中はみられなかった。町家Fは町家A - 1～A - 3より奥行きがあり、東西方向の背割りも及ばないことから、西側の町家とは異なった間取りであったことは確かであろう。

(2) 垂直位置

井戸の底面は当時の湧水帯に当たるため、井戸底の深さから当時の地下水位を知ることができる。江戸時代の井戸は、底が確認できないほど深い井戸が大半であったが、底が判明した井戸もあり、それらを含めた合計18基を検討対象とした。図45では井戸断面図を東西に配置した。この図を元に、井戸はどこまで掘られたか、時代ごとの変化はあるのか、などを検討してみる。³⁸⁾なお、井戸断面図を配列するにあたっては、北壁付近に掘られたものと南半に掘られたものに2分し、それぞれ北壁を向いた状態で配置した。また井戸断面図は様々な方向で図化しているが、ここではそれらを見捨てる。

北半列の西側の5基は13世紀代から17世紀代までの井戸であるが、標高29.0 m付近に平均的な底がある。一般的には新しい井戸ほど深い傾向が知られるが、ここでは年代による差異は認められない。東半の4基は、西半の5基よりやや底が浅い。またこの4基は、14世紀代から19世紀代までの井戸であり、ここでも年代による差異は指摘できなかった。南半列も同じ傾向が指摘できる。西半の5基は標高28.55 m付近に底があり、これらは13世紀代から17世紀に属する井戸であった。また東半の井戸4基は、井戸108(19世紀)を除くと西側より浅い傾向がみられた。

このように、北半列と南半列の井戸からは、1. 井戸底の平均的な深さは標高29.0 m前後であること、2. 底が確認できたものでは平安時代後期から江戸時代まで差異がないこと、3. 江戸時代では17世紀代の井戸から底が確認できないほど深い井戸が出現すること、4. 東半の井戸は西半の井戸より底がやや浅いことなどが指摘できた。特に注目できる点は、井戸302・108など19世紀に属する井戸が、平安時代後期から室町時代までの井戸と同じような深さであったということである。³⁹⁾これは調査地一帯の地下水位が長期間一定であったことを示すものであろう。

註

- 1) 丸川義広・宮原健吾「平安京跡の旧地形復原 - 発掘調査の成果から -」『文部科学省地域連携推進研究費 分散技術を応用した歴史地理情報基盤の構築』平成12年度～平成14年度 通称京都プロジェクト 国際日本文化研究センター 2003年 に研究成果の一部を報告している。
- 2) 近藤 広「近江からみた弥生後期の伊勢湾地域」第11回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

2004年 近藤氏には直接ご教示をいただいた。

- 3) 高野陽子「第5章第1節 出土遺物の検討」『佐山遺跡 京都府遺跡調査報告書』第33冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003年
- 4) 山本雅和「烏丸丸太町発見の集落跡」『研究紀要』第7号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001年
- 5) 持田 透『平安京左京二条四坊五町跡 リソシエ・アージュ御所南建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』株式会社イビソク 2005年
- 6) 山本雅和・上村和直『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001年
- 7) 「35次調査」『中臣遺跡発掘調査概要 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- 8) 平方幸雄・辻 裕司「52次調査」『中臣遺跡発掘調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 9) 平方幸雄・辻 裕司「56次調査」『中臣遺跡発掘調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 10) 平方幸雄・菅田 薫「67次調査」『中臣遺跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 11) 平方幸雄「法勝寺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 12) 会下和宏「岡崎遺跡の方形周溝墓について」『研究紀要』第1号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 13) 辻 裕司「和泉式部町遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 14) 美川 圭「京・白河・鳥羽 院政期の都市」『日本の時代史』7 院政の展開と内乱 吉川弘文館 2002年 P227「六条地区の再開発」を参照した。白河天皇は院政を開始した翌年（寛治元年、1087）より六条院（中院）を院御所として使用し、以後一帯には、里内裏、外戚家・院近臣・武士の邸宅が集中することになった。六条周辺には平安時代後期の遺物を含む整地層が広範囲に存在することが知られており、再開発の実態を示す考古学的な事例といえる。
- 15) 『融通念仏縁起』などの絵巻には街路上に井戸があり、それを庶民が共同で利用する風景が描かれており、今回の調査例との類似性が指摘できる。
『融通念仏縁起』 続日本の絵巻 21 中央公論社 1992年 P69 参照。
- 16) 内田好昭・丸川義広「平安京左京六条三坊3」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年。内田好昭「小六条殿と街路のつけかえ」『リーフレット京都』No.44 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1992年
- 17) 平安時代の火災記事については、山田邦和「第2部第3章 左京全町の概要 左京六条三坊」『平安京提要』角川書店 1994年 ならびに『史料京都の歴史』12 下京区 平凡社 1981年 P295を参照した。
- 18) 『大日本古記録 殿暦五』岩波書店 1970年 P4による。

表5 種名表

軟体動物門 Mollusca	斧足綱 Bivalvia
腹足綱 Gastropoda	フネガイ目 Arcoida
盤足目 Discopoda	フネガイ科 Arcidae
ウミナナ科 Batillariidae	アカガイ <i>Scapharaca broughtonii</i>
ウミナナ科の一種 Batillariidae ger. et sp. indet.	カキ目 Ostreoidae
古腹足目 Vetigastropoda	イタボガキ科 Ostreidae
ミミガイ科 Haliotidae	イタボガキ <i>Ostrea denselamellosa</i>
ミミガイ科の一種 Haliotidae gen. et sp. indet.	マルスダレガイ目 Veneroida
サザエ科 Turbnidae	シジミ科 Corbiculidae
サザエ <i>Turbo cornutus</i>	シジミ科の一種 Corbiculidae gen. et sp. indet.
新腹足目 Neogastropoda	マルスダレガイ科 Veneridae
アッキガイ科 Muricidae	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>
レイシガイ <i>Thais bronni</i>	頭足綱 Cephalopoda
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	コウイカ目 Sepioida
エゾバイ科 Buccinidae	コウイカ科 Sepioidae gen. et sp. indet.
バイ <i>Balytonia japonica</i>	
テングニシ科 Melongenidae	
テングニシ <i>Hemifusus tuba</i>	

- 19) 『京都の歴史』第3巻
- 20) 第2章の註9に同じ。
- 21) 堀内明博「平安京左京七条三坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 22) 鈴木廣司「平安京左京八条二坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 23) 上村憲章「平安京左京八条三坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 24) 酒屋の規模については、土御門四丁町で

近世の胎動 学芸書林 1968年 別添地図

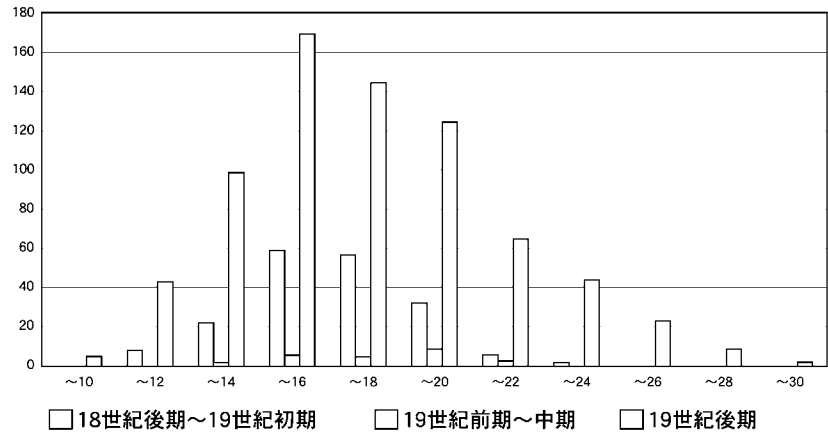


図46 シジミ類の計測分布 (mm)

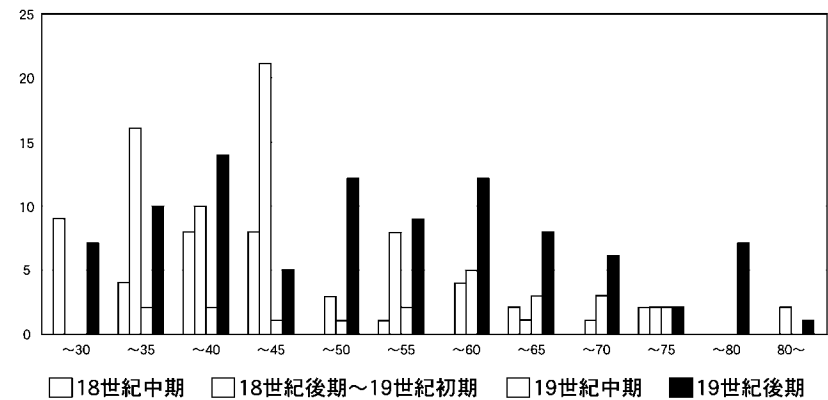


図47 ハマグリ of 計測分布 (mm)

万里小路に面した酒屋が、間口 8.1 丈、奥行 10 丈と復元されている。今回の推定値約 30 m という数値はこれを上回る規模であるが、東西の端が確定できていない点で今後修正される余地はあり得る。高橋康夫「土御門四丁町の構造」『京都中世都市史研究』思文閣史学叢書 思文閣出版 1983 年

- 25) 検討対象とした口縁端部の点数は以下である。2 期 = 4 点、3 期 = 8 点、4 期 = 4 点、5 期 = 4 点、6a 期 = 11 点、6b 期 = 6 点、7 期 = 36 点、8 期 = 16 点、9 = 1 点。永原慶二編『常滑焼と中世社会』小学館 1995 年 分類は中野晴久氏のご教示による。
- 26) 脇田晴子「商業と町座」前掲 19) の P238 による。
- 27) 『史料京都の歴史』4 市街・生業 平凡社 1981 年 P257 ~ 262 に酒屋の所在地が掲載される。
- 28) この部分は『史料京都の歴史』4 の P255、P262、P306、P312 による。
- 29) 口縁部まで残存する個体では、周囲を少し掘るだけで比較的容易に取り出せるという。中野氏のご教示による。
- 30) 高橋康夫 前掲 24) の P297・367 を参照した。
- 31) 『洛中洛外図大観 町田家旧蔵本』小学館 1987 年 P32 による。
- 32) 高橋康夫 前掲 24) P369 では「洛中の主要出入口の木戸門、櫓などは、町々の「自衛」のため築造されたとはいえ、とりわけその恩恵に浴するものは徳政一揆の対象とされた土倉・酒屋などの金融業者であったことからすると、おそらくはこれらの土倉・酒屋が当初の建設費用、さらには維持費用を負担したのであろう」とする。図 41 中段にはそうした状況が示されているのであろう。
- 33) 『洛中洛外図大観 舟木家旧蔵本』小学館 1987 年 P130 に解説があり、図版 51、57、59、65、67 に掲載される。
- 34) 原田信男編『江戸の料理と食生活』日本ビジュアル生活史 小学館 2004 年。資料については北野信彦氏よりご教示を受けた。
- 35) 3 者の路地をこのように接続させると、町家 A - 3 北東隅の鑄造施設に達して行き止まりとなるため、実際には町家 F の西端を南下する路地が存在したはずである。井戸 593 と井戸 528 は南北位置が異なることも、路地がここにあったことを想定させる。
- 36) 明治 9 年作成の地籍図には、町家 I は「奥行九間四尺三寸」(約 19.1 m) とある。これを現況図に

表 6 遺構の分類

	18世紀代	19世紀代
I 類	土壙521 土壙745	土壙11 漆喰36 井戸210 土壙280 土壙346 土壙399 土壙403 土壙728
II 類	土壙825 土壙1009 土壙1407	土壙160 土壙208 井戸255
III 類		土蔵170 土壙292 土壙577 土壙681 土壙807

当てはめると、土壙 403・524 の北肩付近となる。さらに南側の町家 F も「奥行十八間四尺」(約 36.7 m) でこの位置に合致する。このため当初は、土壙 403・524 の北肩を町家 I・F 間の境界と考えたが、ここでは東西方向の礎石列 3642 を町家 I・F 間の境界施設と想定したため、土壙 403 は町家 I 内に掘られた穴として考えた。

37) 「中居・仲居」『広辞苑』第 2 版補訂版 岩波書店 1955 年 P1644

38) 「第 6 章第 1 節 井戸の配置と地下水位」『平安京左京北辺四坊 第 1 分冊 (公家町形成前)』財団

法人京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 22 冊 財団 法人京都市埋蔵文化財研究所 2004 年

39) 「4. まとめ (2) 井戸の分布と時期的変遷」『平安京

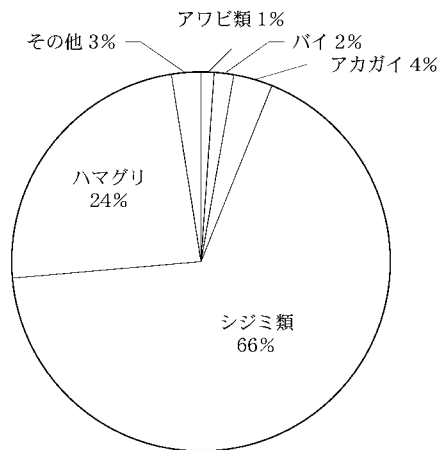


図 48 貝類組成 (NISP) N=1704
左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研

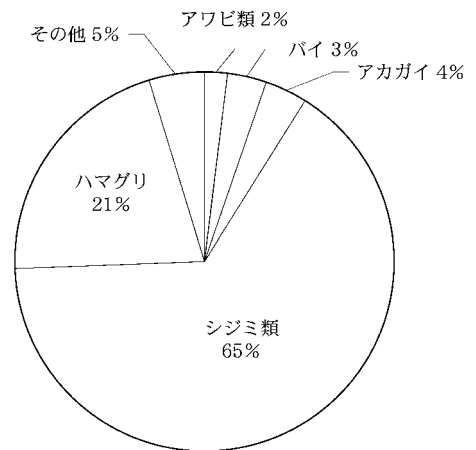


図 49 貝類組成 (MNI) N=873

究所調査概報 2003 - 5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003 年 P136 でも同じ傾向が指摘されている。

付章 1 出土した軟体動物遺存体

丸山真史・北野信彦・竜子正彦

1. はじめに

今回、報告する資料は、平安京左京六条三坊五町から出土した軟体動物遺存体である。当地は、江戸時代前期（1602～1640）は「六条三筋町」、または「六条柳町」とよばれ公許の遊里があった。出土した軟体動物遺存体の総破片点数は 1725 点を数え、そのうち種類と部位を同定できたのは、腹足綱 85 点、斧足綱 1617 点、頭足綱が 2 点、計 1704 点である。腹足綱はアワビ属、フジツボ、サザエ、アカニシ、バイ、テングニシ、レイシガイ、ウミニナ科の 8 種、斧足綱はアカガイ、シジミ類、ハマグリ、イタボガキの 4 種、頭足綱はコウイカ科の 1 種である（表 5）。シジミ類が 1168 点（66%）と最も多く出土し、ハマグリが 415 点（24%）、アカガイが 62 点（4%）と続く（図 48）。これらは江戸時代の 18 世紀前期から 19 世紀後期までに比定される遺構から出土したものである。なお、土蔵 170 から出土した資料は埋土の一部を水洗篩別したのち採取され、その他は発掘調査中に肉眼で確認できたものだけが採取された。

貝殻の計測は北野信彦の指導のもと、くらしき作陽大学の学生諸氏が行った。

2. 種類別の特徴

（1）腹足綱

43 基の遺構から、計 85 点が出土している。バイが最も多く 29 点が出土し、そのうち 5 点は殻軸のみである。ついで、アワビ類 17 点、サザエ、テングニシが 12 点ずつ出土している。サザエは、殻に棘が有るもの 1 点、無いもの 7 点が混在する。棘の有無は、遺伝的な形質変化ではなく環境要因に影響され、外海に生息するものは有棘で、内海に生息するものは無棘のものが多いとされる。テングニシは、一般的に房総半島以南の太平洋に生息することから、紀伊半島方面からの流通が想定される。他に、アカニシが 10 点、ウミニナ科、フジツボが 2 点ずつ、レイシガイが 1 点出土している。フジツボは他の貝殻に付着していたものが外れたもので、食用ではない。

（2）斧足綱

67 基の遺構から、計 1616 点が出土している。シジミ類が 1168 点（左 494 右 580 不明 94）と最も多く出土した。これらは、セタシジミやマシジミの可能性はあるが、種の同定には至っていない。大きさは、18 世紀後期から 19 世紀中期まで殻長 17 mm 内外に集中する。それが 19 世紀後期になると大きさに幅が出てくる（図 46）。次いでハマグリが 430 点（左 207 右 210 不明 13）出土した。大きさは、18 世紀中期は殻長 45 mm 以下に集中し、18 世紀後期から 19 世紀初

期にかけて 30 mm から 45 mm に集中する。19 世紀中期では 60 mm 内外に集中し、19 世紀後期になると出土量が多く、分布幅が広がるが、40 mm 内外と 60 mm 内外の 2 群を見ることができる（図 47）。次にアカガイ 62 点（左 33 右 28 不明 1）が出土し、大きさは 60 mm 以上の個体が多い。これらの他に、イタボガキ 2 点、イタヤガイ 1 点が出土している。イタヤガイは食用となった以外に、加工品である貝杓と考えられるものがある。

（3）頭足綱

コウイカ科の殻が 2 点出土している。イカやタコ、エビなどといった動物が消費されても遺跡で保存される確率は低く、その消費が想定されるのみである。本例のように、実際に遺跡からイカが出土したことで、その消費が確実であると言える。

3. 遺構別の特徴

出土量が多いシジミ類とハマグリ類の出土状況に着目すると、シジミ類が主体となる遺構（Ⅰ類）、ハマグリが主体となる遺構（Ⅱ類）、シジミ類とハマグリが混在する遺構（Ⅲ類）に分類できる。18 世紀代はⅠ類とⅡ類で構成され、19 世紀代はⅠ類とⅡ類にⅢ類が加わり、Ⅰ類が 8 基と最も多く、Ⅲ類が 5 基と続く（表 6）。

表 7 出土貝類集計表

年代	遺構	腹足綱							斧足綱													
		サザエ			アカニシ	テングニシ	アワビ属	バイ	その他	アカガイ			シジミ類			ハマグリ			イタボガキ	その他		
		有棘	無棘	その他						L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明				
17C末～18C前期	土壙1152				4																	
17C末～18C初	土壙1270							フジツボ1														
18C前期	土壙1122		1	1												1						
	土壙1271		2																			
	土壙1319				1																	
18C中期	土壙969										2	1										
	土壙1407				1										33	36	8					
18C後期	土壙521							フジツボ1			59	84	6									
	土壙920				1			1														
	土壙1009													6	4							
	土壙1178		1																			
18C後期～19C初	土壙650							1								1						
	土壙820					1									2	1						
	土壙825			1		1		1		2		1		46	3	3					ミミガイ科、アカガイ、ハマグリ破片	
土壙837									4	1		1	5	1	1							
18C末	土壙452													2	1						ハマグリ破片	
18C末～19C初	土壙624							1														
	土壙671							1		3	1											
	土壙745											36	37									
	土壙784					1		1		1	1	1	2		1	1						(コウイカ)
	土壙799							1								1						
18C末～19C前期	土蔵448									1	2				1							
	土壙729							1				1										
土壙843															1							

これらの遺構が形成されてから埋没するまでの期間が短ければ、Ⅰ類とⅡ類の相違は、種類に

年代	遺構	腹足網							斧足網												
		サザエ			アカニシ	テングニシ	アワビ属	パイ	その他	アカガイ			シジミ類			ハマグリ			イタボガキ	その他	
		有棘	無棘	その他						L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明			
19C前期	土塚454															1	1				
	土塚498						1	4							1		1				
19C中期	土塚160						1	1									6	14			
	土塚425												1	3			2				
	土塚438						1										2				
	土塚346												25	14						2	
	土塚499																2			1	
	土塚480																1	1		1	
	土塚489																1	2		2	
	土塚489																1	2		7	
	土蔵190																1			1	
	土塚11																1			1	
19C後期	土塚42																29	36		1	
	土塚84																1	1		1	
	土塚150																1	1		1	
	土塚208																1			3	
	土塚248																2			7	
	土塚248																			1	
	土塚292																3	39	41	1	
	土塚300																2			15	
	土塚309																			1	
	土塚349																2	1		2	
	土塚365																			1	
	土塚399																1			1	
	土塚400																25	24		1	
	土塚402																			1	
	土塚403																	3	29	4	3
	土塚407																	1			3
	土塚420																				1
	土塚494																	1	1		1
	土塚531																	1	2		1
	土塚746																				1
	土塚466																	1			2
	土塚479																				2
	土塚479																				1
	土塚280																	6	4	1	1
	土塚681																	9	10		8
	土塚690																	1			1
	土塚700																				3
	土塚807																	4	5		5
	井戸132																				2
	井戸210																	6	4	1	1
井戸255																	1	2		15	
埋襲149																				15	
漆喰17																				2	
漆喰17																				1	
漆喰36																				1	
漆喰36																	2	2		4	
漆喰125																				4	
土蔵170																				4	
土塚413																				4	
土塚502																				4	
土塚502																				4	
土塚577																				4	
土塚577																				4	
土塚728																				4	
井戸652																				4	
井戸652																				4	
池651																				4	
溝505																				4	

よって廃棄場所が定まっていたというより、調理形態によって生じたと考えられる。言いかえれば、18世紀代の料理の献立において貝類利用は、シジミ類あるいはハマグリの中からどちらかを主体として料理に用いたのであろう。

19世紀代になると貝類が出土する遺構数が増加するとともに、一遺構における出土量も増加する。19世紀代になって貝類の消費量が増加し、皿類が加わるというのは、廃棄遺構の利用、献立、調理形態などに変化があったと考えられる。この変化の要因は、他の遺物や遺構の性格など、複数の要素をあわせ考えなければならない。

4. 貝類の流通

出土した貝類は、シジミ類を除いて海水産ばかりで、内陸部に位置する京都の遺跡からそれらが出土することは、遠隔地流通があったことを示す。遠隔地流通は、奈良時代の『万葉集』や平安時代の『延喜式』などによって、若狭、淡路、志摩といった「御食国」が朝廷へ海産物を納めたことが知られる。平安時代にこのような海産物の遠隔地流通があったことは事実にしても、贄や税として都へ運ばれたものであり、京都で一般的に海産物が消費されたとは考えにくい。

当遺跡から出土した貝類の構成は、平安京北辺四坊の近世の公家屋敷跡とほぼ相違なく（富岡2004）、大阪の近世遺跡と比較すると、大阪の方は種類が多い。大阪の久留米藩蔵屋敷跡（中原・丸山2003）や広島藩蔵屋敷跡（池田2004a）などでアサリが出土しているが、これら以外の遺跡からの出土例は少ない。近畿地方でアサリの出土が少ないのは、当地域の資源量の乏しさに起因していると考えられており（池田2004b）、これまで京都でもアサリの出土を見ない。しかし、京都における遠隔地からの海産物流通は既述のとおりで、当遺跡からも出土しているテングニシはその生息分布から、紀伊半島方面から運ばれた可能性がある。京都では、二条家公家屋敷跡（同志社大学埋蔵文化財委員会編1994）や平安京北辺四坊からもテングニシが出土しており、大阪と比べ出土頻度が高いように考えられる。また、有棘のサザエは、内海である瀬戸内海ではあまりみられず、外海に面する地域からの輸入が想定される。京都は沿岸部に位置する大阪と異なった流通経路があったとすれば、今後、京都でもアサリが出土する可能性がある。

これらの貝類は、シジミ類が琵琶湖とその水系、鴨川などの河川、巨椋池など淡水域から、その他の海水産貝類は瀬戸内、紀伊半島方面から流通していた可能性がある。また、日本海側の若狭もまた京都にとって重要な地域であり、多方面からの流通によって、大消費地である京都の台所を支えたのだろう。また近世になり、貝類だけでなく当遺跡から出土した魚類遺存体からもわかるように、京都における海産物の消費が拡大したと考えられる（付章2参照）。

5. 貝類の消費傾向

大阪の中近世遺跡から出土する貝類は、中世は漁業集団により形成された生産地のゴミで、近世は屋敷地などの最終消費地のゴミへと変化するため、近世は屋敷地内に遺構が密集し、一遺構あたりの出土量が中世に比べ減少するという指摘がある（池田2004b）。当遺跡でも、そういっ

た最終消費地の特徴がみられ、ほとんどの貝殻は当地に居住した人々の食料残滓であると考えられる。天保 11 (1840) 年の「庖丁里山海見立角力」は、魚貝類や野菜の番付であり(林・芳賀 1975)、魚貝類の産地が瀬戸内に集中し、ハモを上位に位置づけることから、それを好む近畿地方で作成された可能性が高く、大坂城三の丸跡の魚類遺存体の出土傾向と類似する(丸山・松井 2006)。番付された種類のわかる貝類は、上位からハマグリ(桑名)、サザエ(阿波)、ニシ(阿波)、アカガイ(尼崎)、トリガイ(尼崎)、カキ(広島)、バイ(尼崎)、マテ(堺)、シジミ(瀬田)、サルボウ(大阪)、タニシ(大阪)である(図 50)。実際に出土している貝類は、ハマグリ、サザエ、アカニシ、アカガイ、イタボガキ、バイ、シジミ類である。出土品が番付に記された産地から流通したものであるという確証はないが、19 世紀の人々の海産物への関心の高さが伺える。

貝類全体の出土状況は、破片点数(NISP)と最小個体数(MNI)に大きな相違はない(図 48・図 49)。17 世紀代の遺構からは、魚類遺存体が出土しているにもかかわらず、貝類の出土は非常に少ない。当遺跡では、同じ海産物でも魚類と貝類で、搬入あるいは利用状況が異なっていたのかもしれない。シジミ類は破片数でも最小個体数でも他を圧倒するが、他種に比べ可食部分が少なく、番付で上位に位置づけられないことからわかるように、数量のみでは消費を過大評価することになる。しかし、19 世紀代にはシジミ類主体の遺構(I 類)が多く、シジミ類が重要種であることが分かる。同様にハマグリ主体の遺構(II 類)があることから、ハマグリもシジミ類とならんで重要と言える。アカガイやバイは、一遺構における出土量は多くないが、各時期で安定した出土を見る。シジミ類やハマグリと比較して、アカガイやバイは可食部分が多い。実際に出土したアカガイの殻長は、60 mm を超える大形のものが多い。シジミ類やハマグリは一度に複数個を利用するが、バイやアカガイは利用個数が限られていたと考えられる。両者の出土傾向の違いは、献立や調理方法によって生じた可能性が指摘できる。

18 世紀中期から 19 世紀初期にかけてハマグリが大型化し、19 世紀後期になると殻長 40 mm 内外と 60 mm 内外の 2 群がみられるようになる。小さなハマグリは吸い物など、大きなハマグリは焼きハマグリといった、大きさによる使い分けが貝殻の受熱状態の相違によって指摘されている(桜井 1987)。本例には、明確な受熱の痕跡がみられる資料はないが、使い分けがあったと考えられる。遺構別の特徴を加味すると、18 世紀中期の II 類のハマグリは殻長 45 mm 以下の小さな個体で、18 世紀後期から 19 世紀初期の II 類のハマグリは 45 mm 内外の中程度の個体が利用されるようになる。19 世紀中期の II 類、III 類はともに小型から大型までが混在する。19 世紀後期もまた、II 類、III 類ともに大小が混在して利用される。そして、II 類は遺構ごとに大きさが集中する一方、III 類は大、中、小のハマグリを含む遺構である。まとめると、ハマグリが主体の遺構(II 類)は、ハマグリの大きさにまとまりがあり、調理による使い分けはなかったが、シジミ類とハマグリが混在する遺構(III 類)は大、中、小の各種の大きさが揃い、調理によって使い分けられた可能性がある。

このように 18 世紀から 19 世紀にかけて、ハマグリ大きさと遺構ごとの廃棄状況に変化がみられ、調理形態によることが指摘できる。さらに、こういった変化は種類ごとの価値、季節、流通規格、購買者の選択などの要因を反映している可能性もあり、遺構の規模や他種との同伴関係、

他の遺物などもあわせて検討しなければならない。

6. おわりに

18世紀から19世紀の遺構から多くの貝類が出土した。また、コウイカ科の殻も出土した。出土した貝類は、シジミ類を除いて全て海水産であり、瀬戸内、紀伊半島方面、日本海側からの流通によって、内陸部の京都にもたらされたと考えられる。古代の海産物の遠隔地流通が『万葉集』や『延喜式』といった文献史料にみられるが、一部の階層に限られた消費であったと考えられる。当遺跡から出土した貝類だけでなく魚類遺存体からもわかるように、近世になって海産物がより一般的に普及するようになったと考えられる。

17世紀代の貝類利用は明らかでないが、18世紀から19世紀になるとシジミ類とハマグリを主体とし、アカガイ、アワビ、アカニシ、バイといった貝類が利用されるようになり、19世紀代は魚類遺存体とともに出土量、遺構数ともに増加する。18世紀から19世紀にかけてハマグリの大きさと遺構ごとの廃棄状況に変化がみられる。こういった変化は、献立、季節、流通規格、購買者の選択などを示唆するものと考えられるが、いずれの要因によるのかは今後の課題である。以上のように、近世の消費地で出土した貝類は、水産物の流通や食生活を物語る貴重な資料であり、今後の資料蓄積によって、考古学から近世の京都の食文化を明らかにすることができるだろう。

参考文献

- 池田研 2004a 「貝類」『広島藩蔵屋敷跡』Ⅱ（財）大阪市文化財協会 pp.237-240
- 池田研 2004b 「大坂城下町跡出土貝類の分析」『大坂城下町跡』Ⅱ（財）大阪市文化財協会 pp.452-467
- 桜井準也 1987 「近世大名屋敷における食生活」『史学』57巻1号 pp.79-97
- 林英夫・芳賀登 1975 「庖丁里山海見立角力」『番付集成』p.84
- 同志社大学埋蔵文化財委員会編 1994 『今日の公家屋敷と武家屋敷』pp.123-130
- 富岡直人 2004 「動物遺存体の分析」『平安京北辺四坊』本文編（財）京都市埋蔵文化財研究所 pp.342-356
- 中原計・丸山真史 2003 「分析」『久留米藩蔵屋敷跡』大阪大学埋蔵文化財調査会 pp.60-68
- 丸山真史・松井章 2006 「大坂城跡出土の魚類遺存体」『大坂城址Ⅲ』（財）大阪府文化財センター調査報告

書第144集 pp.445-463

付章2 出土した脊椎動物遺存体

丸山真史・松井 章

1. はじめに

今回、報告する資料は、平安京左京六条三坊五町から出土した脊椎動物遺存体である。当地は、平安時代後期には源頭房の邸宅「六条殿」で、江戸時代前期（1602～1640）には「六条三筋町」または「六条柳町」とよばれ公許の遊里があった。同定作業を行った動物遺存体の総破片点数は1049点を数え、種類や部位などが同定できたのは764点である。その内訳は、魚類567点、両生類1点、鳥類38点、哺乳類158点である。この他にも、骨角器やその製作にともなう廃材などが出土している(92頁参照)。これら動物遺存体の主な特徴は、(1)平安時代後期(11世紀後半)の路面およびその整地土から出土したウシとウマ、(2)桃山時代(16世紀末～17世紀初)の井戸から出土したニホンジカ、(3)江戸時代(17世紀～19世紀)の遺構および遺物包含層から出土した動物遺存体をあげることができる。

18世紀前期の土壌1122、19世紀後期の土蔵170については、埋土の一部を水洗篩別したことで、魚類などの微細な骨が採集された。その他の遺構から出土したものは、発掘中に肉眼で確認できたものだけ採取された。なお記載する魚類の体長は、奈良文化財研究所が所蔵する現生骨格標本との比較により推定した標準体長である。

2. 平安時代後期の路面および整地土から出土した牛馬骨

平安時代後期(11世紀後半)の楊梅小路の路面上で、ウシとウマの骨が多数検出された。ウシが脛骨4点(右4)、大腿骨3点(左1右2)、尺骨2点(左1右1)など、計23点、ウマが上腕骨5点(左3右2)、大腿骨4点(左1右3)、脛骨4点(左3右1)など、計32点が同定できた(表9)。このほか、ウシまたはウマと両種の区別が出来ない破片が25点、鹿角1点、イヌの寛骨2点(左1右1)が存在する。同地点において、路面上で出土した動物遺存体以外にも、その路面を形成する整地土からも動物骨が多く出土し、その多くがウシとウマと考えられる。西日本では一般的に、古代ではウマが多く、ウシは少数に留まる。しかし、中世以降は、寺島良安が著した江戸時代の『和漢三才図絵』には「大抵関東馬多牛少関西牛多馬少」とあるように、ウシが増加する傾向がみられる。本資料もまた、破片点数ではウマが多いが、最小個体数で比較すると、ウシの右脛骨が3点で3個体分、ウマの左脛骨が3点で3個体分となり、両種の差はなくなる。こうした一部の骨だけしか残っていない場合、骨50点でも異なる部位であれば最小個体数は1個体であり、骨5点でも同じ部位が重複していれば最小個体数は5個体となるが、それは実数からかけ離れた数値となる可能性がある。

路面上、あるいはその直下の整地土層より出土したウシとウマの骨は、 $Y = -21,873 \sim 876$ ならびに、 $Y = -21,900 \sim 910$ 付近に集中しているが、いずれも各部位が散乱状態で出土しており、

関節がつながったものはない。(図7参照)。このことから、これらの骨は筋肉や腱が無くなった状態で、路面に散乱した後に埋没したと考えられる。これらの骨は保存状態に恵まれており、骨の表面の観察は容易であるが、明確な解体痕はみられなかった。ただ、ウシの大腿骨1点と脛骨1点には、斧や鉞のような重みのある刃物によって付けられたような鈍い窪みがみられるが、その周辺は腐食が進み、解体による傷とは断定できなかった。骨の表面には、イヌやタヌキのような死肉あさり動物(スカベンジャー)による食害は観察できず、火熱を受けた痕跡もみられなかった。しかしながら、この地点にウシとウマの骨が集中して出土することは、この場に選択的に骨を廃棄あるいは埋め込み、牛馬の骨を保存する自然条件が備わっていたものと考えられる。

計測可能な部位をもとに、ウシとウマの体高を推定したところ、ウシは110 cm以上115 cm未満2点、115 cm以上120 cm未満が1点、120 cm以上125 cm未満が2点、125 cm以上130 cm未満が3点で、ウマは、110 cm以上115 cm未満1点、120 cm以上125 cm未満が1点、125 cm以上130 cm未満が5点、135 cm以上140 cm未満が2点となった(方法は西中川編1991、林田・山内1957による:表10・表11、図51)。本遺跡から出土したウマは135 cmを超える個体が2個体みられ、中型馬のなかでも大きな部類に分類される。西中川(1991)による年齢推定法に従うと、若い個体が多く出土しているが(表12)、計測できなかった資料の中にはエナメル質の磨滅が進行した壮齢か老齢と考えられる個体もある。

古代から近世において、ウシやウマは、役畜として乗馬や駄馬、牛車の牽引、農耕に使役され、時には神の使いや犠牲として祭祀に用いられた。死んでなおも、ウシやウマの肉、皮革、骨、角が利用されたことが、発掘調査によって明らかにされている。また、牛乳が飲用とされたことは、長屋王家木簡に「牛乳持参人米七合五夕」とあり(奈良国立文化財研究所2001)、元慶8(884)年9月1日の「太政官符」には典薬寮の別所としての乳牛院の記事などから明らかである。さらに、長岡京右京二条二坊や平安京右京六条三坊では、ウシやウマとともに祭祀遺物が出土していることから、祭祀の可能性が指摘されるが、明確な動物供儀と断定するには至っていない(向日市教育委員会1989、丸山・松井2004)。平城京では東堀河や西一坊坊間路西側溝などから(松井1983、1984)、平安京では右京八条二坊の側溝から(辻・本・加納1993、辻・近藤1996)、ウシやウマの骨が多数出土している。これら都城の南方の運河や大規模な側溝は水が最も汚濁する地点であり、ウシやウマの骨が多数出土することから、官営の斃牛馬処理工房の存在や、そこで皮革生産も行われたという指摘がなされている(松井2004)。平安京左京三条四坊では、近世の土壌から、ウシやウマの四肢骨の骨端部を鋸で切断し、関節部のみが投棄された一括遺物が出土しており、骨角器製作にともなう廃材と考えられる(竜子1991)。本例は、路面とその整地土から出土していることや、皮革、骨角器の原材料とされた痕跡がないことから、古代、中世に西日本でしばしばみられる土壌や溝への廃棄という行為とは区別される。

以上に述べた路面上に検出された牛馬骨以外に、路面を形成する整地土からも牛馬骨が多数出土している。これらは同定作業が一部にとどまっており、今後も作業を継続するとともに、これらウシ、ウマの利用について別の機会に改めて検討したい。

3. 桃山時代の井戸から出土した鹿骨

桃山時代（16世紀末～17世紀初）の井戸1644から、ニホンジカの指骨17点、手根骨11点、椎骨3点、上腕骨（右2）、橈骨（右2）、尺骨（右2）、中手骨（右2）、寛骨（左1右1）、足根骨（右2）、が2点ずつ、肩甲骨（右）、仙骨、大腿骨（右）、膝蓋骨（右）、脛骨（右）、中足骨（右）、踵骨（右）、距骨（右）、が1点ずつ、計51点が出土している（表14、図52・53）。いずれも解体された痕跡や、火熱を受けた痕跡はみられない。これらの骨は、前肢と後肢のそれぞれが交連状態で検出された（図53）。足の数をもとに個体数を算定すると右前肢が2本、右後肢が1本、計3本であり、最小個体数は2個体となる。これらは、井戸埋土の上層で出土しており、井戸の廃絶時、またはその後、投棄され埋没したものと考えられる。このニホンジカの足が交連状態で検出されたということは、それが投棄される際に、筋肉あるいは腱が付着し、骨と骨の関節が連結した状態であったことを示す。このような出土状況は、動物が土中に埋葬された場合、一般的にみられる特徴である。本例は、前肢と後肢の各部位が交連状態であると同時に、前肢と後肢が折り重なって検出された。前肢、後肢とも右側に偏っていることは、人間の意図的な選択によるものと考えられる。

ニホンジカの枝角や中手骨、中足骨は、骨角器の素材として適しており、遺跡から出土する比率は、出土する遺構の性格によって、高くなるか、あるいは低くなるという傾向がしばしば生じる。それは、主として解体を行った遺構では骨角器の素材として持ち去られ、骨角器製作に関する遺構では原材料と、その未製品、廃材が集中するためである。本例は、中手骨や中足骨が出土しているが、先述のように交連状態であり、解体痕もみられず骨角器の素材として利用した痕跡はない。

また、長屋王家木簡から、馬肉や鼠肉が鷹狩りの鷹の餌にした可能性も指摘され（東野1989）、中近世にはイヌやネコが同じく鷹の餌にされたことが論じられている（金子1975）。古代、中世の人々は肉食を忌避していたと考えられており、そうした観点からすると、この鹿肉も飼われていた動物の餌であったという可能性が考えられる。しかし、近年の歴史時代の遺跡の発掘調査では、都市や集落の湿地環境にあるゴミ捨て場に、夥しい数の動物骨が捨てられており、その多くが人間の食料とされていたことが明らかにされてきた（松井1994、丸山・藤沢・松井2005）。したがって、肉の付着が多い前肢、後肢が折り重なって出土したことは、一度に大きな肉をとった結果と考えられ、これらも人間の食料の残滓であると考えたい。

古代から近世にかけて、かつて言われていた日本人の獣肉食の忌避という固定観念は、文献史学から塚本学（1983）、原田信男（1994）らによって、考古学から松井章（1987）らによって、否定されてきた。特に、イノシシやニホンジカは、天武天皇による675（天武4）年の肉食禁止令には含まれず、1643（寛永20）年成立の料理書である『料理物語』でもそれらの料理が紹介されることなどから、単純に肉食忌避が推し進められたのではないことがわかる。本例も、交連状態で出土したのが筋肉の付着が多い前肢と後肢であることや、そのなかで意図的に大腿骨がはずされていること、出土部位が右側に偏っていることから、人間の食用となった残滓である可能性が高いことが指摘できよう。

4. 江戸時代の層から出土した動物遺存体

江戸時代（17世紀～19世紀）の動物遺存体が、土壌や遺物包含層から破片数にして、計644点出土している。そのうち魚類が最も多く出土し、567点と9割弱を占める。ついで哺乳類が39点、鳥類が38点を数える。このほかニホンジカの枝角やウシ、ウマの四肢骨を利用した骨角器や未製品、その製作にともなう廃材も出土している（第4章第5節の（6）参照）。

魚類は、マダイが172点（30.3%）と最も多く出土し、カマス科59点（10.4%）、ハモ属32点（5.6%）、サワラ、キダイがそれぞれ26点ずつ（4.6%）、トビエイ科が21点（3.7%）など、計567点が出土している（表15）。マダイは、体長60cmを超える大きな個体が多く、前頭骨24点のうち16点が椎骨と同方向、つまり正中方向に切断する「兜割り」がみられる。椎骨は、椎体側面が削られるような切断痕など、163点のうち41点（25.1%）に加工痕がみられる。このような加工痕は、マダイが二枚あるいは三枚におろされ、身をとった後、頭部や椎骨と残った肉を、潮煮や出汁に利用したことを示す。このように、マダイの出土比率が高い傾向は、大消費地である大阪や京都の近世遺跡で一般的である。このような傾向がみられる背景には、マダイを多く消費したという以外に、マダイの骨が大きく堅固であり、イヌなどの食害にあうことが少なかったことや、発掘調査中に肉眼でも確認されやすいことがある。また中世以降、西日本ではタイ科の中でもクロダイなどより、マダイが好まれる（久保1997）。特に、京都においてその傾向は顕著であり、内陸という環境において選択性が強く働いたと考えられる。

カマス科は、体長20cmから30cm程度の小形のものである。18世紀前期の土壌1122から集中して出土している。しかし、他の魚種と比べて特徴的で、同定が容易な椎骨が皆無という特徴がある。この土壌の埋土の一部は、3mmのフルイで水洗選別が行われているため、見逃した可能性は低く、調理、あるいは保存加工のための処理方法が反映されているのであろう。つまり、頭のみを取り去って調理したために頭部と胴部の廃棄場所が異なったか、頭を残して椎骨が除去された状態で持ち込まれたと考えられる。

ハモ属、特にハモは瀬戸内の特産であり、京都の夏の風物詩とも言えるが、当遺跡では18世紀以前の遺構からの出土は少なく、19世紀前期から幕末にかけて多く出土する。大きさは、1m以下の小形のものや2m近い大形ものが混在する。ハモ属は、近世の瀬戸内の遺跡で一般的に出土し、特に大阪と京都の遺跡から出土する割合は高い。19世紀後半の土壌160から出土した前頭骨と土壌452から出土した前上顎骨－篩骨－鋤骨板は正中方向に切断されており、出汁として利用されたと考えられる。

カマス科、サワラ、キダイは、近世の大阪や京都では一般的に出土するが、当遺跡のように他の魚種に比して多数を占めることはない。このような傾向は、遺構がきわめて短期間に埋まり、その埋土を水洗選別したことに起因するかもしれない。トビエイ科は、扁平で細長い六角形を呈する歯板が出土しており、京都で出土することは稀である。

これらの他にブリやマグロ属、シイラといった大型魚が出土していることも本遺跡の特徴であ

表8 種名表

脊椎動物門 Vertebrata	サワラ <i>Scomberomorus niphonius</i>
軟骨魚綱 Chondrichthyes	カツオ <i>Katsuwonus pelamis</i>
板鰐亜綱の一種 Elasmobranchii, order, fam., gen. et sp. indet.	マサバ <i>Scomber japonicus</i>
エイ目 Rajiformes	サバ属の一種 <i>Scomber</i> sp.
トビエイ科 Myliobatidae	マグロ属の一種 <i>Thunnus</i> sp.
トビエイ科の一種 Myliobatidae gen. et sp. indet.	ソウダガツオ属の一種 <i>Auxis</i> sp.
硬骨魚綱 Osteichthyes	カレイ目 Pleuronectiformes
ウナギ目 Anguilliformes	ヒラメ科 Bothidae
ウナギ目の一種 Anguilliformes, fam., gen. et sp. indet.	ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i>
ハモ科 Muraenesocidae	カレイ科 Pleuronectidae
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	カレイ科の一種 Pleuronectidae gen. et sp. indet.
ニシン目 Cluperiformes	フグ目 Tetraodontiformes
ニシン科 Clupeidae	フグ科 Tetraodontidae
ニシン科の一種 Clupeidae, gen. et sp. indet.	フグ科の一種 Tetraodontidae gen. et sp. indet.
マイワシ <i>Sardinops melanostictus</i>	両生綱 Amphibia
コイ目 Cyprinida	無尾目 Anura
コイ科 Cyprinidae	無尾目の一種 Anura fam., gen. et sp. indet.
コイ <i>Cyprinus carpio</i>	鳥綱 Aves
ナマズ目 Siluriformes	カモ目 Anseriformes
ナマズ科 Siluridae	カモ科 Anatidae
ナマズ属の一種 <i>Silurus</i> sp.	カモ科の一種 Anatidae gen. et sp. indet.
タラ目 Gadiformes	キジ目 Galliformes
タラ科 Gadidae	キジ科 Phasianidae
マダラ <i>Gadus macrocephalus</i>	ニワトリ属 <i>Gullus domesticus</i>
タラ科の一種 Gadidae, gen. et sp. indet.	キジ科の一種 Phasianidae gen. et sp. indet.
メダカ目 Cyprinodontiformes	チドリ目 Charadriiformes
トビウオ科 Exocoetidae	カモメ科 Laridae
トビウオ科の一種 Exocoetidae gen. et sp. indet.	カモメ科の一種 Laridae gen. et sp. indet.
ボラ目 Mugiliformes	ワシタカ目 Falconiformes
ボラ科 Mugilidae	ワシタカ科 Accipitridae
ボラ科の一種 Mugilidae, gen. et sp. indet.	ワシタカ科の一種 Accipitridae, gen. et sp. indet.
カサゴ目 Scorpaeniformes	哺乳綱 Mammalia
フサカサゴ科 Scorpaenidae	霊長目 Primates
フサカサゴ科の一種 Scorpaenidae, gen. et sp. indet.	ヒト科 Hominidae
コチ科 Platycephalidae	ヒト <i>Homo sapiens</i>
コチ科の一種 Platycephalidae, gen. et sp. indet.	食肉目 Carnivora
スズキ目 Percidae	イヌ科 Canidae
スズキ科 Percichthyidae	イヌ <i>canis familiaris</i>
スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>	タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides</i>
アマダイ科 Malacanthidae	イタチ科 Mustelidae
アマダイ属の一種 <i>Branchiostegus</i> sp.	イタチ <i>Mustela itatsi</i>
アジ科 Carangiae	ネコ科 Felidae
ブリ <i>Seriola quinqueradiata</i>	ネコ <i>Felis catus</i>
ブリ属の一種 <i>Seriola</i> sp.	奇蹄目 Perissodactyla
アジ科の一種 Carangiae, gen. et sp. indet.	ウマ科 Equidae
シイラ科 Coryphaenidae	ウマ <i>Equus caballus</i>
シイラ <i>Coryphaena hippurus</i>	偶蹄目 Artiodactyla
タイ科 Sparidae	ウシ科 Bovidae
マダイ <i>Pagrus major</i>	ウシ <i>Bos Taurus</i>
キダイ <i>Dentex tumifrons</i>	イノシシ科 Suidae
タイ科の一種 Sparidae, gen. et sp. indet.	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
ニベ科 Sciaenidae	シカ科 Cervidae
ニベ科の一種 Sciaenidae, gen. et sp. indet.	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
カマス科 Sphyraenidae	齧歯目 Rodentia
カマス科の一種 Sphyraenidae, gen. et sp. indet.	ネズミ科 Muridae
サバ科 Scombridae	ネズミ科の一種 Muridae gen. et sp. indet.

表9 ウシ・ウマ集計表

	下顎骨		肩甲骨		上腕骨		橈骨		尺骨		中手骨		寛骨		大腿骨		脛骨		中足骨		その他	計
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右		
ウシ	1		2	1	1		1	1	1		1		1	1	2		4		1		遊離歯1 基節骨1 踵骨1 距骨1	23
ウマ	1		3	2	1	1					1				1	3	3	1			遊離歯7 下顎骨1 基節骨1 中節骨1 大腿骨1 踵骨1	32

表10 ウシ計測値 (mm)

部位	LR	推定体高	Bp	Bd	SD
中手骨	L	110~115	55.7	61.4	33.5
中足骨	R	110~115	44.6	54.4+	
上腕骨	L	115~120	79.7	80.6	
脛骨	R	120~125		65.2	40.7
脛骨	R	120~125	102.0	66.6	
脛骨	R	125~130	75.8	68.2	39.7
脛骨	R	125~130	94.4	69.2	46.5
橈骨	L	125~130	85.3	79.9	48.8

表11 ウマ計測値 (mm)

部位	LR	推定体高	Bp	Bd	SD
大腿骨	R	110~115		70.9	
橈骨	L	120~125	73.2+	65.2	
脛骨	L	125~130	86.0	68.8	35.2
脛骨	L	125~130	79.1	56.6	36.4
脛骨	L	125~130	92.2	67.8	
上腕骨	R	125~130		75.0	
上腕骨	L	125~130		75.9	
大腿骨	R	135~140	114.7		
中手骨	L	135~140	51.5	46.6	

表12 ウマ年齢査定 (mm)

部位	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	年齢
上顎M1/M2	-	-	50.7	6-8
上顎M1/M2	29.9	25.1	70.9	0-4
上顎P4/M1/M2	31.4	27.3	72.1	0-4
下顎M2	27.5	15.4	71.6	4-5

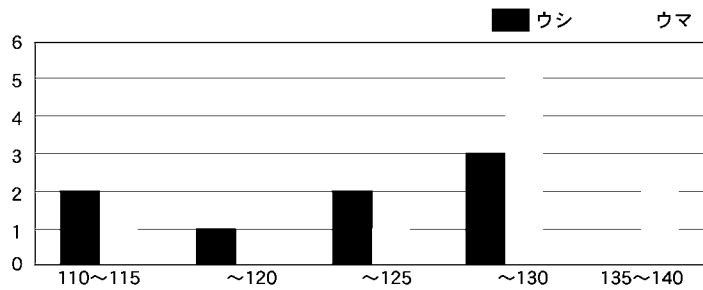


図51 ウシ・ウマ体高分布 (cm)

表13 ニホンジカ計測値 (mm)

部位	LR	Bp	Bd	GL
上腕骨	R	46.8	38.9	186.3
上腕骨	R	-	39.1	192.5
橈骨	R	36.7	32.4	192.6
橈骨	R	37.0	31.9	202.2
中手骨	R	26.2	26.3	192.4
中手骨	R	27.7	27.1	198.8
脛骨	R	54.3	33.5	87.5
中足骨	R	25.3	28.2	224.8

表14 井戸1644出土ニホンジカ集計表

	下顎骨		肩甲骨		上腕骨		橈骨		尺骨		中手骨		寛骨		大腿骨		脛骨		中足骨		その他	計
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右				
ニホンジカ			1		2		2		2		2		1	1	1		1		1		椎骨3 仙骨1 手根骨11 膝蓋骨1 踵骨1 距骨1 足根骨2 指骨17	51

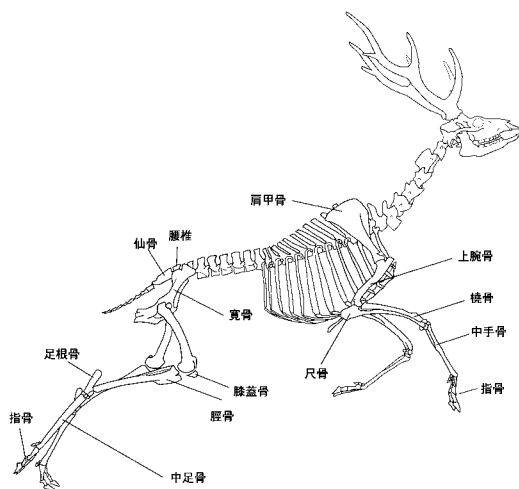


図52 ニホンジカの出土部位

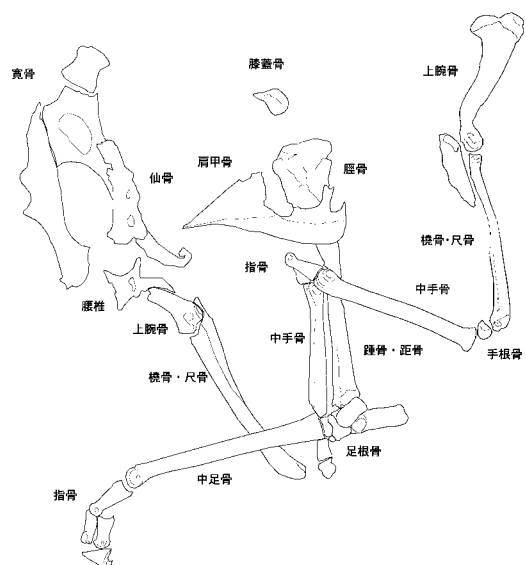


図53 ニホンジカの出土状況

表15 魚類集計表

遺構	小分類	部位	L	M	R	-	計	
17C前								
土壙1027 下層	マダイ	上腕骨 前頭骨		1 1			1 1	
土壙1027 最下層	ニシン科	椎骨		1			1	
	マダイ	神経頭蓋		1			1	
土壙1418	スズキ	主上顎骨	1				1	
		前上顎骨	1				1	
		前鰓蓋骨	1				1	
	ブリ	椎骨		2				2
		ブリ属	主鰓蓋骨 舌顎骨	1 1				1 1
	マダイ	角骨	1					1
		角舌骨	1					1
		基鰭骨			1			1
		擬鎖骨	1					1
		肩甲骨	1					1
		口蓋骨	1					1
		歯骨			1			1
		主鰓蓋骨			1			1
		上擬鎖骨	1					1
		上舌骨	1					1
	マダイ	神経頭蓋			1			1
		前上顎骨			1			1
		前鰓蓋骨			1			1
		椎骨		4				4
		方骨			1			1
角骨		1		1			2	
歯骨		1		1			2	
土壙1419	マダイ	主上顎骨 前上顎骨	1 1		1 1		2 2	
	サバ科	角骨			1		1	
		ブリ	歯骨 椎骨			1 1		1 1
	土壙1517	ブリ属	間鰓蓋骨 前鰓蓋骨			1 1		1 1
		マダイ	歯骨			1		1
上後頭骨 前上顎骨 前頭骨				1 1 2		1 1 1		1 1 2
土壙1670	マダイ	神経頭蓋		1			1	
17C後								
土壙1211	ハモ属	歯骨	1				1	
	ブリ属	椎骨		1			1	
	マダイ	前鰓蓋骨	1				1	
土壙1248	マダイ	前上顎骨 前頭骨 副蝶形骨	1 3 3				1 3 3	
		17C?						
溝1351	マグロ属	歯骨			1		1	
18C前								
土壙1122	カツオ	下尾骨 擬鎖骨 椎骨		1 4	2		1 2 4	
		カマス科	角骨	4		3		7
			舌骨	2		4		6
	擬鎖骨		2		2		2	
	口蓋骨		3		2		5	
	歯骨		5		3		8	
	主上顎骨		3		2		5	
	主鰓蓋骨		3				3	
	鋤骨			2			2	
	神経頭蓋			2			2	
	前上顎骨		3		3		6	
	前頭骨		2		1		3	
	前鰓蓋骨		5		4		9	
	翼耳骨	1				1		
	18C中							
土壙1407	カツオ	主鰓蓋骨 角骨 歯骨 前鰓蓋骨			1		1 1 1 1	
		コチ科	歯骨 前鰓蓋骨	1		1		1 1
			サバ属	歯骨 主上顎骨	1		1	
	シイラ	角骨 歯骨			1 1		1 1	
		スズキ	角骨	1			1	
	ハモ属	歯骨			1		1	
		ヒラメ	第一血管間棘		1		1	
	ブリ	歯骨	1				1	
	マダイ	擬鎖骨 舌顎骨	2			1		2 1
		前頭骨			1			1
	土壙969	マダイ	椎骨		3			3
	18C前							
	18C前							
	土壙1122	カレイ科	擬鎖骨 舌顎骨 椎骨	1		2		3 1 2
			キダイ	角舌骨 角舌骨・上舌骨 歯骨 主上顎骨 上後頭骨 舌顎骨 前上顎骨 前頭骨 椎骨	1 1 1 2 2 1 1 1 12		1 1 2 1	
コチ科				椎骨		1		1
サバ属		角骨 肩甲骨 椎骨				1 1 3		1 1 3
		サワラ		椎骨		6		6
シイラ		角舌骨				1		1
ソウダ ガツオ属		擬鎖骨 椎骨				1 5		1 5
		タイ科		下鰓蓋骨 基鰭骨 擬鎖骨 後側頭骨 舌顎骨 椎骨 不完全神経間棘 副蝶形骨 翼耳骨	1 2 1 1 1 2 1 1 1		1 2 1 1	1
トビウオ科				椎骨		2		2
ニシン科			角舌骨?				2	2
ハモ属			椎骨		1			1
ブリ			前上顎骨 椎骨	1 1				1 1
			ブリ属	歯骨 椎骨	1 1			1 1
ボラ科			椎骨		3			3
マイワシ		主鰓蓋骨			1		1	
		マダイ	主鰓蓋骨 上後頭骨 前上顎骨 前鰓蓋骨 椎骨		1 3 1 4	1		1 1 3 4
			マグロ属	主上顎骨	1			1
土壙1319		マダイ	前頭骨		1		1	
		フサカサゴ科	主鰓蓋骨	1				1
土壙996		マグロ属	主鰓蓋骨 椎骨				1	1 2
	18C中							
土壙1407	カツオ	主鰓蓋骨 角骨 歯骨 前鰓蓋骨			1		1 1 1 1	
		コチ科	歯骨 前鰓蓋骨	1		1		1 1
			サバ属	歯骨 主上顎骨	1		1	
	シイラ	角骨 歯骨			1 1		1 1	
		スズキ	角骨	1			1	
	ハモ属	歯骨			1		1	
		ヒラメ	第一血管間棘		1		1	
	ブリ	歯骨	1				1	
	マダイ	擬鎖骨 舌顎骨	2			1		2 1
		前頭骨			1		1	
	土壙969	マダイ	椎骨		3			3

遺構	小分類	部位	L	M	R	-	計
18C後							
	シイラ	椎骨		1			1
	タイ科	擬鎖骨	1				1
	マダイ	前上顎骨	1				1
		椎骨		4			4
土壌1178	マグロ属	椎骨		1			1
土壌1274	ヒラメ	主上顎骨			1		1
土壌309	サワラ	椎骨		1			1
	ブリ	舌顎骨			1		1
土壌903	マダイ	主上顎骨	1				1
土壌920	ハモ属	歯骨	1				1
	マグロ属	椎骨		1			1
土壌922	マダイ	主上顎骨	1				1
		前上顎骨	1				1
土壌937	ブリ属	椎骨		1			1
土壌956	サバ属	角骨	1				1
	マダイ	前鰓蓋骨	1				1
土壌961	マダイ	擬鎖骨	1				1
		主上顎骨	1				1
		椎骨		1			1
18C～19C初							
土壌515	マダイ	椎骨		1			1
土壌685	マダイ	前頭骨		1			1
土壌825	スズキ	角骨	1		1		1
		歯骨		1			1
		椎骨		1			1
土壌941	ブリ	歯骨			1		1
		角舌骨	1				1
18C～19C前							
土壌435	ハモ属	歯骨	1		1		2
土壌843	サバ属	前鰓蓋骨	1				1
	マダイ	前頭骨		1			1
土壌919	ブリ	歯骨			1		1
18C後～19C初							
土壌334下層	ブリ属	椎骨		1			1
18C末～19C初							
-	ハモ属	歯骨	1				1
	マグロ属	椎骨		1			1
19C前							
-	マグロ属	椎骨		3			3
	マダイ	椎骨		1			1
土壌1045	マダイ	角骨			1		1
		擬鎖骨	1				1
		前頭骨	1				1
土壌419	スズキ	主鰓蓋骨			1		1
	ハモ属	歯骨			1		1
	マダイ	前頭骨		1			1
土壌502	タイ科	擬鎖骨	1				1
土壌576	サワラ	歯骨	1				1
	ブリ属	椎骨		1			1
	マダイ	前上顎骨			1		1
土蔵448南東部	サバ科	擬鎖骨			1		1
19C中							
土壌280	ヒラメ	擬鎖骨			1		1
土壌346	シイラ	椎骨		2			2
土壌425	サワラ	椎骨		1			1
	マダイ	前上顎骨			1		1
土壌489	タイ科	椎骨		1			1
	マグロ属	擬鎖骨				1	1
	マダイ	神経頭蓋		2			2
		椎骨		1			1
土壌499	ハモ属	歯骨	1				1
土壌511	マダイ	椎骨		2			2
	マグロ属	角舌骨	1				1
19C後							
井戸210	タイ科	椎骨		1			1
	マダイ	擬鎖骨			1		1

遺構	小分類	部位	L	M	R	-	計
19C後							
	ブリ属	椎骨		1			1
	タイ科	主上顎骨	1		1		2
		前鰓蓋骨			1		1
		椎骨		1			1
井戸255	ナマズ属	胸鰭棘			1		1
	ハモ属	椎骨		1			1
	マダイ	口蓋骨	1				1
		上後頭骨		1			1
		椎骨		1			1
小穴235	マダイ	角舌骨			1		1
		鋤骨		1			1
		上後頭骨		1			1
		前上顎骨	1				1
		前頭骨	1				1
		副蝶形骨		1			1
		方骨	1				1
	スズキ	角骨	1				1
		歯骨	1				1
	タイ科	主上顎骨	1				1
		椎骨		5			5
土壌160南半	ハモ属	歯骨	2				2
		前頭骨		2			2
	マダイ	口蓋骨	1				1
		主上顎骨			1		1
		前上顎骨	3		1		4
		前頭骨		1			1
		椎骨		2			2
土壌292	アマダイ属	主上顎骨				1	1
	カツオ	擬鎖骨			1		1
	タイ属	椎骨		1			1
	ハモ属	前頭骨		1			1
	ブリ	椎骨		1			1
	マダイ	主鰓蓋骨	1			2	2
		舌顎骨	1				1
		前上顎骨			1		1
		前上顎骨/歯骨	1			1	1
		前鰓蓋骨			1		1
土壌371	コチ科	基鰭骨	1				1
土壌399	マダイ	前上顎骨	1				1
土壌402	マダイ	椎骨		1			1
土壌403	サバ属	角骨			1		1
土壌452	ハモ属	歯骨			1		1
		前上顎骨-歯骨-鋤骨板		1			1
	マグロ属	椎骨		1			1
土壌479	ハモ属	前頭骨		1			1
	ブリ	椎骨		1			1
	カレイ科	椎骨		1			1
	スズキ	角骨			1		1
	タイ科	上擬鎖骨	1				1
		前鰓蓋骨	1				1
		椎骨		2			2
		副蝶形骨		1			1
	ハモ属	角骨	1				1
		歯骨	1		1		2
		舌顎骨	2		1		3
		方骨	1				1
土壌681	マダイ	角骨	1				1
		口蓋骨			1		1
		歯骨	2		2		4
		主上顎骨	3		1		4
		上後頭骨		3			3
		舌顎骨			1		1
		前上顎骨	2		1		3
		前頭骨		5			5
		椎骨		7			7
		翼耳骨			2		2

遺構	小分類	部位	L	M	R	-	計
19C後							
土壙700	キダイ	神経頭骨		1			1
	スズキ	擬鎖骨	1				1
	ハモ属	前上顎骨-篩骨-鋤骨板		1			1
	マサバ	神経頭骨		1			1
	マダイ	主上顎骨			1		1
	マダラ	歯骨			1		1
土壙807	マダイ	外後頭骨		1			1
		主上顎骨	1				1
		上後頭骨		1			1
		舌顎骨	1				1
		前頭骨			5		
土蔵170	アジ科	主上顎骨	1				1
		稜鱗				2	2
	イワシ類	椎骨		1			1
	カレイ科	椎骨		1			1
	コイ	咽頭歯			1		1
	サバ属	角骨			1		1
		前上顎骨	1		1		2
椎骨			3			3	
タイ科	前上顎骨				1	1	

遺構	小分類	部位	L	M	R	-	計
19C後							
土蔵170	タイ科	椎骨		2			2
	タイ類	遊離歯				4	4
	タラ科	前上顎骨	1				1
		椎骨		1			1
	トビウオ科	椎骨		16			16
	ナマズ属	胸鰭棘			1		1
	ニベ科	主上顎骨	1				1
	ハモ属	角骨	1		1		2
		歯骨	1		1		2
		前上顎骨-篩骨-鋤骨板		1			1
		椎骨		4			4
		方骨				1	
	ブリ	椎骨		1			1
マダイ	角骨	1				1	
	口蓋骨	1				1	
	歯骨				2	2	
	耳骨			1		1	
	主上顎骨			1		1	
	主上顎骨	1		1		2	
	前頭骨			1		1	
方骨	1		4		5		

表16 鳥類集計表

遺構	小分類	部位	L	R	計
17C前					
土壙1027	カモ科	手根中手骨	1		1
土壙1477	カモ科	脛足根骨		1	1
土壙1517	ニワトリ	足根中足骨		1	1
18C前					
土壙1122	カモ科	上腕骨	1		1
	カモメ科	大腿骨		1	1
	ニワトリ	脛足根骨		1	1
18C～19C初					
土壙837	タカ科	上腕骨		1	1
18C～19C後					
土壙435	ニワトリ	脛足根骨	1		1
19C前					
-	キジ科	尺骨	1		1
土壙419	カモメ科	上腕骨		1	1
		橈骨		1	1

遺構	小分類	部位	L	R	計
19C後					
井戸210	キジ科	尺骨		1	1
		上腕骨	1	1	2
		大腿骨	1	1	2
		脛足根骨		1	1
土壙327	ニワトリ	大腿骨	1		1
土壙610	キジ属	上腕骨		1	1
土壙746	カモ科	手根中手骨		1	1
土壙807	ニワトリ	烏口骨		1	1
		足根中足骨		1	1
		大腿骨	2		2
		橈骨	1	1	2
		脛足根骨		1	1
19C中以降					
-	キジ科	脛足根骨		1	1

表17 哺乳類集計表

遺構	小分類	部位	L	M	R	-	計
17C前							
土壙1477南半	イノシシ/ブタ	上腕骨		1			1
17C～18C前							
土壙1234西半	ネコ	脛骨		1		1	2
18C前							
土壙1122	ネズミ科	遊離歯				1	1
18C後～19C初							
土壙820	イヌ	下顎骨				1	1
	タヌキ	遊離歯				1	1
土壙822	ウシ	角芯	1				1
19C							
土壙590	イヌ	下顎骨		1			1
土壙655	ネコ	尺骨				1	1
		上腕骨		2			2
		大腿骨		1			1
		橈骨		1		1	2
		脛骨		1		1	2
19C中							
土壙499	ウマ	橈骨				1	1

遺構	小分類	部位	L	M	R	-	計
19C後							
漆喰36	ネズミ科	尺骨				1	1
		椎骨			1		1
土壙292	イノシシ	遊離歯	1				1
土壙300	ネズミ科	大腿骨		1			1
土蔵170	ネズミ科	下顎骨				1	1
		尺骨				1	1
		上腕骨				1	1
		大腿骨		1			1
		頭蓋骨				1	1
		遊離歯	3		6	1	10
	踵骨				1	1	
	ヒト	遊離歯	2				2
17C?							
土壙1364	イタチ	椎骨5、肋骨3、橈骨2、尺骨2、 寛骨2、大腿骨2、上腕骨1、 脛骨1					18

る。特にマグロ属の椎体からすると、体長 1.5 m を超えると考えられる個体がある。これまで京都市内においてブリやシイラは出土しているが、マグロ属の出土はなかった。しかし、18 世紀前期の遺構から出土したマグロ属は、主上顎骨や主鰓蓋骨の大きさから体長 60 cm 以上の個体ばかりと推測され、なかには 1 m を超える巨大なものも存在しており、この時代になって大形のマグロ属が頭の付いた状態で、京都まで流通していたことが分かる。また、これまで京都では、カツオやソウダガツオ属の出土は稀で、やはり 18 世紀に外洋における漁獲を含む水産物流通の広域化がうかがえる。その一方で、琵琶湖とその水系、桂川や鴨川といった河川、巨椋池などをひかえる京都で、重要な水産資源であったはずのコイやフナ、アユなどの淡水魚の出土が少ないことも、当遺跡の特徴と言える。

鳥類は、カモ科が 17 点と最多で、ニワトリ 11 点、キジ科 7 点、カモメ科 3 点、タカ科 1 点、計 38 点が続く（表 16）。カモ科と同定した資料は、マガモを家禽化したアヒル、マガンやサカツラガンを家禽化したガチョウを含むが、破片骨からそれらの同定はできない。出土した鳥類には、こうしたカモ科やニワトリ、キジなどの食肉用の鳥類が多い。ニワトリと同定した破片には、シャモのような大形の品種も含まれており、闘鶏など食用以外の利用も考えられるが、出土状態からすると食用となったものであろう。この他、18 世紀前期および 19 世紀前期の遺構から、カモメ科が出土している。これらは、ウミネコよりもやや大きく、現在も鴨川で見ることができユリカモメとは形態が異なる。海鳥が京都へ飛来したのか、人間によって持ち込まれたものか明らかでない。18 世紀から 19 世紀初期の土壌 837 から、トビ程度の大きさのタカ科のが出土している。クマタカやハヤブサなどは、鷹狩りに利用されるが、本資料から種の同定には至らなかった。

哺乳類は、ネズミ科が 20 点と最多で、ネコ 10 点、イヌ、イノシシ、ヒトが 2 点ずつ、タヌキ、ウシ、ウマが 1 点ずつ、計 39 点が同定できた（表 17）。ネコは各部位の骨端部が癒合しておらず、イヌも第一後臼歯が未萌出で、生後 3 ヶ月に満たない幼獣と推測される。これらの他にウシやウマの四肢骨、ニホンジカの枝角などが、多数みられたが、これらは、骨角器製作の際に生じた廃材であり、機会を改めて報告したい。

5. その他の動物遺存体

土壌 1364 から、イタチの椎骨 5 点、肋骨 3 点、橈骨（左 1 右 1）、尺骨（左 1 右 1）、寛骨（左 1 右 1）、大腿骨（左 1 右 1）はそれぞれ対になって出土し、さらに上腕骨（左）、脛骨（右）が 1 点ずつ、計 18 点が出土している。それぞれ解体などの痕跡はみられず、成長状態や、左右の骨の大きさから、全て同一個体と考えられる。本遺構は、直径 40 cm、深さ 43 cm の円形で、共伴する土器片は 14 世紀のものであるが、同一遺構面で検出した他のほとんどの遺構が 17 世紀のものであり、本遺構も 17 世紀の可能性もある。江戸時代の『本朝食鑑』に、イタチが愛玩用として飼われていたという記載がある。イタチの平均的な頭胴長（頭部から尾の付け根までの長さ）は、オスが 30 cm 前後で、メスが 20 cm 前後であり、土壌の規模に適應する。この遺構では、イタチの骨と共伴する遺物は少なく数点の土器片のみで、埋葬の可能性も考えられるが、頭蓋骨や下顎骨が

出土していないことや交連状態であったかどうか分からないことから、その可能性を指摘するに留め、今後の中近世の動物の埋葬例の増加を待ち、結論づけたい。

この他、19世紀後期の土蔵170から、トノサマガエルと同様の大きさのカエル類の尾骨1点が出土している。両生類はこの1点のみで、食用となったのかどうか判断できない。

6. おわりに

これまで平安京における動物利用は、文献や絵巻物などの史料によって知られるところが大きかった(西山2004)。今回の平安時代後期を主体とする楊梅小路から出土した動物遺存体は、平安時代の動物利用の一面を考古学から論じることを可能にし、さらに道路の利用の実態についての情報をもたらせた。ウマは平城京から出土するものより大きな個体が含まれる。これらは、解体や火熱を受けた痕跡はなく、イヌなどの食害にもあっていない。さらにウシやウマの骨が、ある地点に集中した状態で路面上において、散乱状態で検出されたことは、古代や中世の西日本にみられる土壙や溝への牛馬骨の廃棄とは性格の異なるものである。これらは、路面を形成する整地層から出土したウシとウマの骨を含めて、今後改めてその意義を検討しなければならない。

桃山時代の井戸1644から出土したニホンジカは、交連状態の前肢と後肢が、折り重なるように検出された。これらは筋肉が多く付着する部位であり、右側だけが出土していることから人間の食料の残滓である可能性が指摘される。仏教思想の到来以降、「生類憐れみの令」に代表されるような従来の肉食忌避という固定観念は、文献史学のみならず考古学からも見直されつつあり、本例も近世の肉食の実態を物語る一例であろう。

江戸時代の遺構あるいは遺物包含層から出土した動物遺存体は、魚類が主体で約9割弱を占め、近世の食生活や水産物流通の一端を見ることができた。京都では、タイ科の中でもマダイへの嗜好が強く、海水産魚類の利用は多彩である。カマス科、ハモ属、サワラ、キダイの出土が多い一方で、淡水魚の出土が低調という特徴がみられた。少なくとも18世紀以降には、ブリ、シイラ、マグロ属といった大形魚は、頭付きの状態でも流通しており、カツオやソウダガツオ属といった外洋で漁獲される種類も京都で流通していた。鳥類は、食用となるカモ科やニワトリが中心であるが、海鳥のカモメ科も出土した。これは人間が内陸の京都に持ち込んだものか、飛来したものか明らかではなく、今後、類例を待ち、改めて検討しなければならない。今回報告できなかった、骨角器や未製品、その製作にともなう廃材についても、同定や分類を行っていく必要がある。

このように実際に遺跡から出土する動物遺存体を分析することにより、考古学からも、歴史時代の動物利用とその変遷を知ることができる。京都は、平安時代以来の日本を代表する大都市であるが、考古学では食生活や動物利用について論じられることが少なかった。今後も、京都の遺跡から出土する動物遺存体に注目することで、新たな歴史的一面を捉えることも可能だろう。

参考文献

金子浩昌 1975 「葛西城址Ⅳ・Ⅴ区濠出土の動物遺体」『青戸・葛西城址調査報告Ⅲ』葛飾区・葛西城址調

査会 pp.197-263

久保和士 1999 「近世大坂における水産物の流通と消費」『動物と人間の考古学』 pp.137-179

塚本学 1983 『生類をめぐる政治一元祿のフォークロア』 平凡社

辻裕司・本弥八郎・加納敬二 1988 「平安京右京八条二坊」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 pp.50-52

辻裕司・近藤知子 1996 「平安京右京八条二坊」『平成 5 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵

文化財研究所 pp.49-55

東野治之 1989 「古文書・古写経・木簡」『水荃』第七号 古筆学研究所 pp.15-24

奈良国立文化財研究所編 2001 『長屋王家・二条大路木簡を読む』奈良国立文化財研究所学報第 61 冊

西中川駿編 1991 『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成 2
年

度文部省科学研究費補助金(一般研究 B)研究成果報告

西山良平 2004 「平安京の動物誌」『都市平安京』京都大学学術出版会 pp.173-199

林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告書』第 6 号
pp.146-156

原田信男 1994 『歴史の中の米と肉』平凡社

松井章 1983 「動物遺存体」『平城京東堀河一左京 9 条 3 坊の発掘調査一』奈良国立文化財研究所 p.32

松井章 1984 「動物遺存体」『平城京右京八条一坊十一坪』奈良国立文化財研究所 pp.54-56

松井章 1987 「養老厩牧令の考古学的考察」『信濃』第 39 巻第 4 号 pp.231-256

松井章 1994 「草戸千軒町遺跡第 36 次調査出土の動物遺存体」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 II』広島県
草

戸千軒町遺跡調査研究所編 pp.343-346

丸山真史・松井章 2004 「平安京右京六条三坊七・八・九・十町出土の動物遺存体」『平安京跡研究調査報
告』第 20 輯平安京右京六条三坊(財)古代学協会 pp.169-179

丸山真史・藤澤珠織・松井章 2005 「大物遺跡出土の人骨および打動物遺存体について」『尼崎市埋蔵文化
財調査年報平成 7 年度(6)』尼崎市教育委員会 pp.31-59

向日市教育委員会 1989 「長岡京左京第 162 次(7 ANKDE 地区)～左京二条二坊十五町、二条条間大路東
二坊大路交差点～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告第 27 集』(財)向日市埋蔵文化財
セ

ンター・向日市教育委員会 pp.187-233

竜子正彦 1991 「左京三条四坊」『京都市内立会調査概報平成三年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 pp.9-
12

表18 ガラス分析結果表 (ワインボトル)

平安京左京六条三坊五町出土資料

No.	器形	色相	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Sn	Pb	遺構	備考
40	ワインボトル	Dark Green	2.55	0	0.03	4.55	0.61	2.99	0.12	0.07	1.39	0	0.08	0	土壙1480	36(ガ実4)
41	ワインボトル	Dark Green	2.55	0	0.13	6.39	0.72	3.88	0.11	0.06	1.98	0.01	0.11	0	土壙1480	
42	ワインボトル	Dark Green	2.55	0	0.04	5.71	0.66	2.31	0.14	0.09	1.21	0	0.09	0	土壙1480	
43	ワインボトル	Dark Green	2.55	0.01	0.20	6.33	0.70	2.94	0.14	0.10	1.19	0	0.1	0	土壙1480	

長崎出島出土資料 (参考)

No.	器形	色相	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Sn	Pb	備考
1	ジンボトル	Dark Green	未調査	0	0.13	4.21	0.67	2.63	0.18	1.03	1.34	0	0.09	0	
2	ワインボトル	Dark Green	未調査	0	0.08	1.67	0.67	2.64	0.11	0.20	1.20	0	0.08	0	
3	ビール瓶	Dark Green	未調査	0	0.14	3.45	0.68	2.42	0.17	0.35	1.16	0	0.08	0	

平安京左京北辺四坊 (公家町) 出土資料

No.	器形	色相	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Sn	Pb	備考
3	ワインボトル	Dark Green	2.59	0.05	0.34	4.18	0.65	2.43	0.09	2.03	0.81	0.01	0	0	
9	ワインボトル	Dark Green	2.75	0	0.4	6.88	0.47	10.16	0.15	0.03	2.47	0.01	0	0	
29	ワインボトル	Dark Green	2.67	0.02	0.29	6.32	0.61	8.35	0.09	0.07	1.72	0	0.02	0	
96	ワインボトル	Dark Green	2.67	0	0.54	5.35	0.64	2.81	0.18	0.4	1.07	0.01	0.03	0.01	
116	ワインボトル	Dark Green	2.64	0	0.5	6.12	0.93	3.68	0.21	0.4	1.35	0.01	0.06	0	
127	ワインボトル	Dark Green	2.76	0.01	0.39	6.54	0.49	9.65	0.14	0.03	2.33	0.01	0	0	
135	ワインボトル	Dark Green	2.75	0	0.39	6.53	0.43	9.83	0.14	0.03	2.33	0.01	0.01	0	
156	ワインボトル	Dark Green	2.75	0	0.39	6.81	0.45	9.70	0.14	0.03	2.33	0.01	0	0	
159	ワインボトル	Dark Green	2.74	0	0.43	6.39	0.43	9.36	0.13	0.04	2.27	0.01	0	0	
161	ワインボトル	Dark Green	2.73	0	0.08	2.11	0.5	7.89	0.14	0.05	1.98	0	0.01	0	
165	ワインボトル	Dark Green	2.75	0	0.42	6.33	0.42	9.20	0.13	0.04	2.23	0.01	0	0	
172	ワインボトル	Dark Green	2.74	0	0.49	6.82	0.47	10.35	0.15	0.04	2.52	0.01	0.01	0	
173	ワインボトル	Dark Green	2.64	0	0.31	7.83	0.21	9.11	0.10	0.06	1.72	0	0	0	
174	ワインボトル	Dark Green	2.71	0.01	0.33	6.59	0.39	8.81	0.13	0.13	2.21	0.01	0.01	0	
177	ワインボトル	Dark Green	2.58	0.03	0.46	6.39	0.84	3.01	0.14	3.43	1.62	0.01	0.04	0	
184	ワインボトル	Dark Green	2.76	0	0.20	6.20	0.52	9.46	0.08	0.09	1.97	0	0.01	0	
185	ワインボトル	Dark Green	2.73	0	0.43	6.42	0.44	9.15	0.14	0.04	2.28	0	0.01	0	
191	ワインボトル	Dark Green	2.76	0.01	0.20	6.14	0.54	9.46	0.07	0.08	1.94	0	0.06	0	
198	ワインボトル	Dark Green	2.75	0	0.37	6.56	0.43	10.15	0.14	0.03	2.31	0	0	0	
203	ワインボトル	Dark Green	2.75	0	0.48	6.42	0.47	8.93	0.16	0.04	2.40	0	0.01	0	
204	ワインボトル	Dark Green	2.64	0	0.21	5.44	0.14	6.28	0.07	0.04	1.20	0	0	0.01	
214	ワインボトル	Dark Green	2.74	0	0.43	6.53	0.44	9.62	0.14	0.04	2.34	0.01	0.01	0	
217	ワインボトル	Dark Green	2.77	0.02	0.47	6.74	0.53	9.75	0.14	0.04	2.26	0.01	0	0	

平安京左京北辺四坊（公家町）出土資料

No.	器形	色相	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Mn	Fe	Co	Cu	Zn	Sn	Pb	備考
248	フインボトル	Dark Green	2.77	0.01	0.44	6.32	0.49	9.11	0.13	0.04	2.11	0.01	0	0	0	
250	フインボトル	Dark Green	2.55	0.07	0.42	5.98	0.94	3.48	0.08	0.75	1.25	0	0	0.04	0.01	
252	フインボトル	Dark Green	2.75	0	0.46	6.27	0.51	8.79	0.15	0.04	2.32	0.01	0	0	0	
254	フインボトル	Dark Green	2.71	0	0.01	0.42	0.01	1.45	0.02	0.01	0.20	0	0	0	0	
271	フインボトル	Dark Green	2.76	0.01	0.19	5.84	0.45	9.20	0.07	0.09	1.86	0	0	0	0	
300	フインボトル	Dark Green	2.68	0.02	0.31	6.66	0.42	8.71	0.13	0.1	2.08	0.01	0	0.01	0	
311	フインボトル	Dark Green	2.72	0	0.29	6.43	0.23	9.32	0.11	0.05	1.95	0	0	0	0	
344	フインボトル	Dark Green	2.73	0	0.29	6.66	0.26	9.55	0.11	0.04	2.01	0	0	0	0	
385	フインボトル	Dark Green	2.66	0.03	0.20	6.72	0.92	7.43	0.10	0.88	1.08	0	0	0.08	0.02	
400	フインボトル	Dark Green	2.62	0.01	0.3	6.63	0.42	6.23	0.13	1.24	1.36	0.02	0	0.02	0.01	
432	フインボトル	Dark Green	2.54	0.1	0.45	6.66	0.98	3.14	0.12	1.14	1.64	0	0	0.05	0	
433	フインボトル	Dark Green	2.51	0.04	0.34	7.08	0.81	3.01	0.08	1.23	1.47	0.01	0	0.04	0	
480	フインボトル	Dark Green	2.69	0.02	0.28	5.38	0.74	7.45	0.1	0.68	0.97	0	0	0	0	
535	フインボトル	Dark Green	2.64	0	0.41	7.19	0.59	6.69	0.1	0.06	1.4	0.01	0	0.02	0	
560	フインボトル	Dark Green	2.62	0.08	0.11	7.17	0.21	6.9	0.04	0.03	0.41	0	0	0.03	0	
701	フインボトル	Dark Green	2.74	0.02	0.22	6.03	0.44	8.98	0.09	0.24	1.11	0	0	0	0	

表19 ガラス分析結果表（一般ガラス）

平安京左京六条三坊五町出土資料

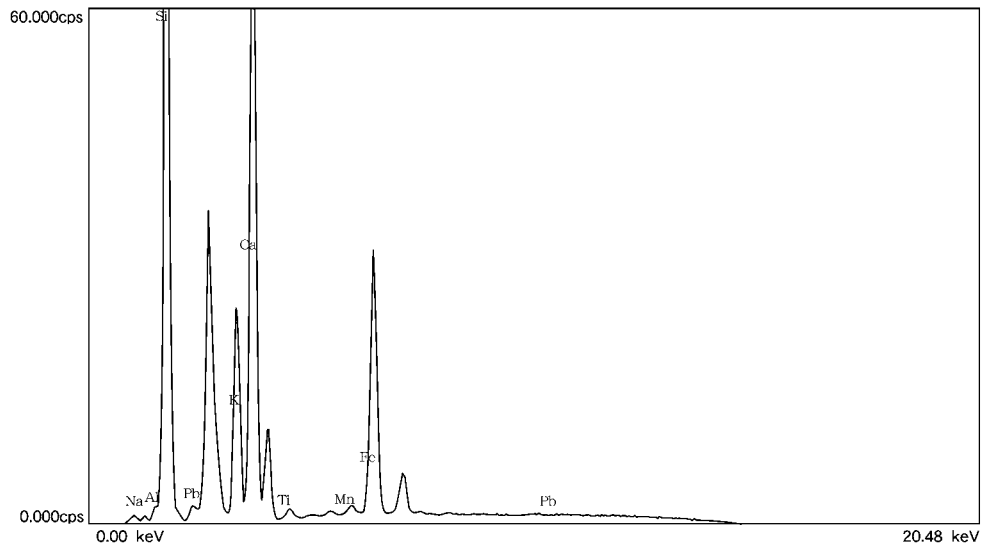
No.	器形	Color	比重	Al	Si	K	Ca	Mn	Fe	Co	Cu	Zn	Sn	Pb	備考	遺構
1	板状	Color less	2.65	0	6.27	0.01	0	0	0	0	0	0	0.01	0	西1	漆喰36
2	玉	Color less	3.61	0	0.34	0	0.11	0	0.01	0	0	0	0	0.26	西2	漆喰36
3	ねじり棒	White	3.85	0.06	1.68	0.16	0.14	0	0.01	0	0	0.04	0.06	0.23	西3	漆喰36
4	不明	Dark Green	3.95	0	0.63	0.28	0.24	0	0.01	0	0.9	0.27	0.08	0.16	西4	漆喰36
5	玉	Color less	4.00	0.02	0.44	0.06	0.08	0	0.02	0	0	0	0.02	0.12	西5	漆喰36
6	玉	Color less	3.52	0	0.24	0.05	0.04	0	0.01	0	0	0	0.02	0.08	西6	漆喰36
7	玉	Green	3.46	0.03	0.44	0.07	0.06	0	0.03	0	0.03	0	0.03	0.07	西7	漆喰36
8	不明	Dark Green	2.67	0.31	1.92	0.97	2.25	0.14	0.71	0	0	0	0.29	0	東1	漆喰36
9	板状	Color less	3.67	0	0.57	0.12	0.54	0.01	0.04	0	0.02	0	0	0.01	東2	漆喰36
10	ポッペン破片	Color less	3.90	0.05	0.68	0.07	0.24	0.01	0.08	0	0	0	0	0.12	東3	漆喰36
11	玉	Color less	3.86	0.01	0.28	0.04	0.04	0	0.02	0	0	0	0.02	0.13	東4	漆喰36
12	玉	Color less	3.76	0	0.16	0.02	0.05	0	0	0	0	0	0.01	0.12	東5	漆喰36
13	玉	Color less	3.83	0	0.11	0.03	0.08	0	0.00	0	0	0	0.02	0.04	東6	漆喰36
14	玉	Purple?	3.76	0.01	0.43	0.07	0.06	0.01	0.04	0	0	0	0.03	0.06	東7	漆喰36
15	板状	Dark Green	4.00	0.12	1.27	0.29	0.23	0	0.09	0	0.66	0.29	0.11	0.13	東8	漆喰36

平安京左京六条三坊五町出土資料

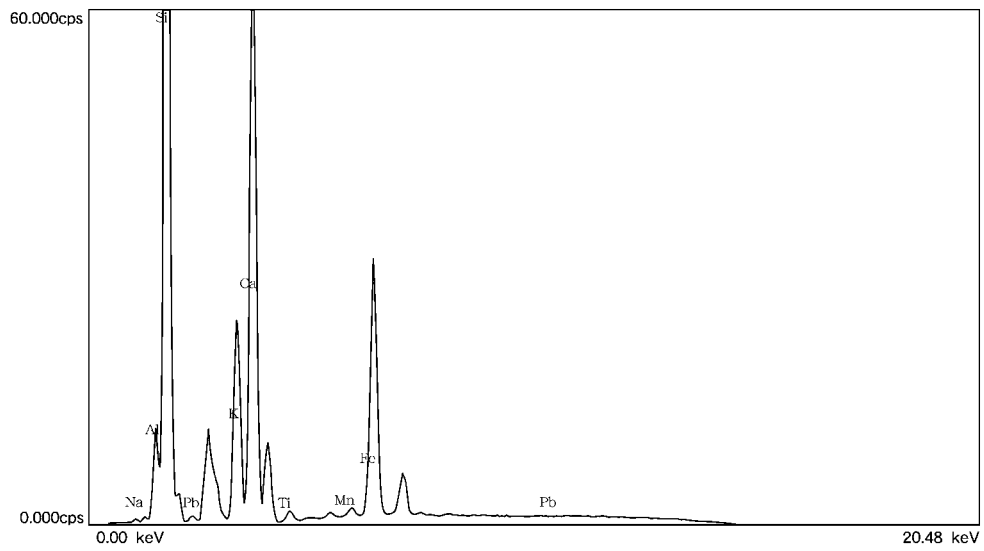
No.	器形	Color	比重	Al	Si	K	Ca	Mn	Fe	Co	Cu	Zn	Sn	Pb	備考	遺構
16	不明	Dark Green	3.79	0.14	1.36	0.29	0.20	0	0	0	0.75	0.37	0.10	0.1	東9	漆喰36
17	棒	Yellow	3.67	0.01	1.18	0.17	0.12	0	0.32	0	0	0	0.07	0.09	東10	漆喰36
18	棒	Color less	3.57	0.13	1.71	0.16	0.20	0.01	0.03	0	0	0	0.04	0.38	南1	漆喰36
19	玉	Color less	3.56	0	0.18	0	0.18	0.01	0.02	0	0	0	0	0.25	南2	漆喰36
20	曲棒	Green	3.92	0.11	0.98	0.13	0.22	0	0.09	0	0.03	0.39	0.05	0	南3	漆喰36
21	板状	Color less	3.59	0.04	0.83	0.08	0.34	0.01	0.07	0	0	0	0	0.47	南4	漆喰36
22	板状	Color less	3.59	0.02	0.22	0.01	0.31	0	0.03	0	0	0	0	0.11	南5	漆喰36
23	曲棒	Green	3.44	0.14	1.38	0.25	0.29	0	0.04	0	0.15	0	0.09	0.15	南6	漆喰36
24	玉	Green	3.84	0.08	0.82	0.10	0.15	0	0.12	0	0.11	0	0.04	0.16	南7	漆喰36
25	棒	Blue navy	2.57	0.16	1.93	1.39	0.93	0	0.04	0	0.07	0.08	0.46	0	南8	漆喰36
26	玉	Green	3.29	0.10	0.83	0.13	0.19	0	0.07	0	0.03	0	0.05	0.13	南9	漆喰36
27	かんざし頭	Color less	3.42	0.07	1.53	0.44	0.27	0	0.01	0	0	0	0.17	0.42	北1	漆喰36
28	曲棒	Green	3.73	0.05	0.66	0.10	0.11	0	0.04	0	0.02	0	0.04	0.04	北2	漆喰36
29	板状	Green	3.75	0	2.59	0.33	0.27	0	0.02	0	0.35	0	0.12	0.17	北3	漆喰36
30	ねじり棒	不明	3.75	0.01	0.49	0.07	0.07	0	0.04	0	0.03	0	0.02	0.07	北4	漆喰36
31	玉	Color less	3.68	0.03	0.81	0.10	0.07	0	0.01	0	0	0	0.05	0.14	北5	漆喰36
32	玉	Color less	3.46	0	0.16	0	0.07	0	0.01	0	0	0	0	0.10	北6	漆喰36
33	玉	White	4.00	0.06	0.32	0.04	0.12	0	0.04	0	0	0	0.01	0.16	北7	漆喰36
34	玉	Color less	3.15	0	0.37	0.06	0.04	0	0	0	0	0	0.04	0.11	北8	漆喰36
35	玉	White	4.00	0.01	0.27	0.03	0.05	0	0	0	0	0	0.02	0.06	北9	漆喰36
36	玉	Color less	3.40	0.03	0.47	0.08	0.11	0	0.02	0	0	0	0.03	0.12	北10	漆喰36
37	髪飾	Blue navy	2.43	0.25	6.95	3.44	1.89	0.01	0.12	0	0.81	0.02	0.29	0	33(芳実3)	土壇419
38	髪飾	Purple?	3.58	0.11	2.98	0.76	1.06	0	0.06	0	0.15	0	0.32	0.2	34(芳実2)	掘下層
39	髪飾	Color less	3.71	0.07	1.29	0.43	0.26	0	0.02	0	0.03	0.02	0.03	0.41	35(芳実1)	土壇690

平安京左京北辺四坊(公家町)出土資料

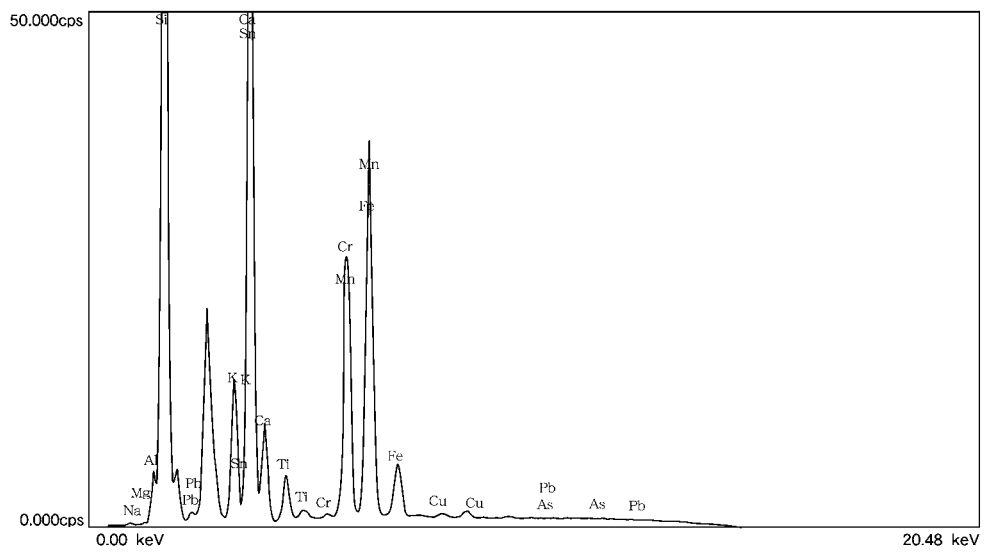
No.	器形	Color	比重	Al	Si	K	Ca	Mn	Fe	Co	Cu	Zn	Sn	Pb	備考
205	棒状	Blue Navy	2.47	0.25	6.91	3.7	1.98	0.01	0.32	0	0.91	0.02	0.27	0.01	18c末~19中頃
259	棒状	Blue Navy	2.50	0.31	6.74	2.8	2.4	0.01	0.22	0	0.31	0.04	0.21	0.01	16c末
272	酒杯	Blue Navy	2.51	0.05	5.52	3.29	2.04	0.01	0.39	0	0.84	0.09	0.23	0.01	18c後半
396	瓶	Blue Navy	2.52	0.35	6.02	0.97	3.03	0.04	0.68	0	0.97	0	0.05	0	18c後半
479	酒杯	Blue Navy	2.50	0.1	7.62	4.77	2.96	0.02	0.59	0	1.2	0.11	0.25	0.01	不明
582	棒状	Blue Navy	2.49	0.19	4.93	2.93	1.92	0.01	0.29	0	0.4	0	0.14	0.01	19c中頃
654	棒状	Blue Navy	2.46	0.1	2.52	3.41	1.92	0.02	0.35	0	0.78	0.09	0.17	0.01	19c前半
699	棒状	Blue Navy	2.50	0.25	4.46	2.71	1.49	0.01	0.32	0	0.47	0.06	0.14	0.01	18c後半以降



1 ワインボトル (No.40)



2 ワインボトル (No.41)



3 長崎出島ワインボトル (参考)

図 54 ガラス製品の定性分析 - 1

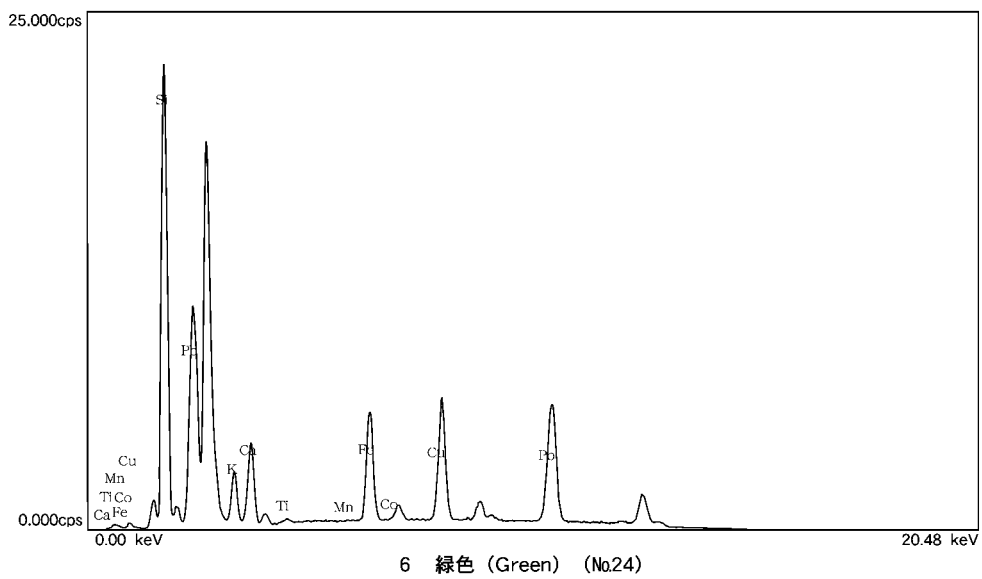
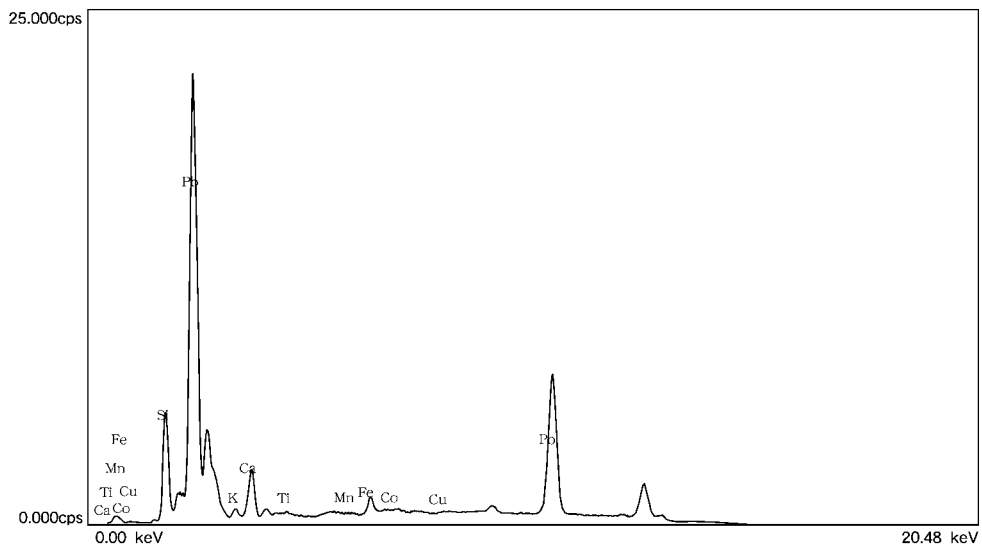
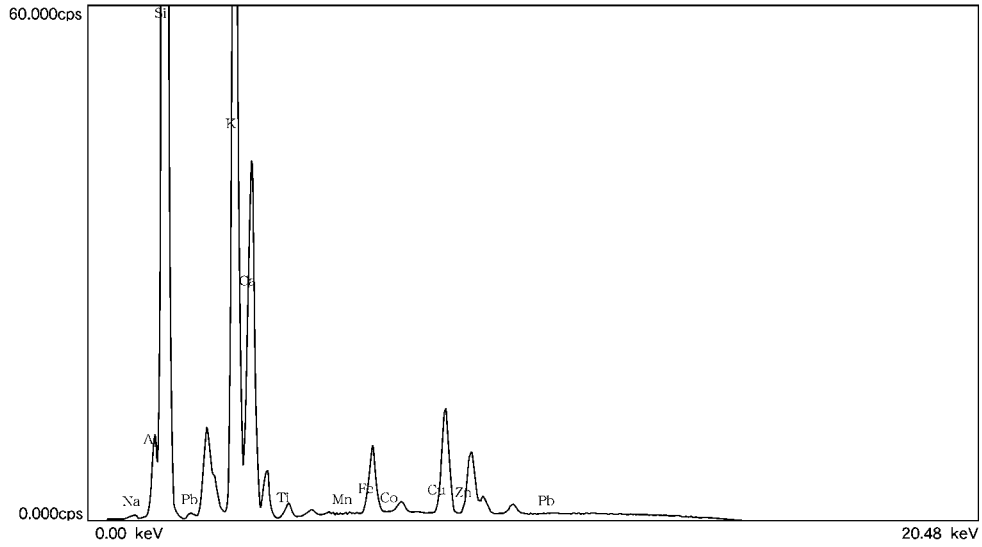


図 55 ガラス製品の定性分析 - 2

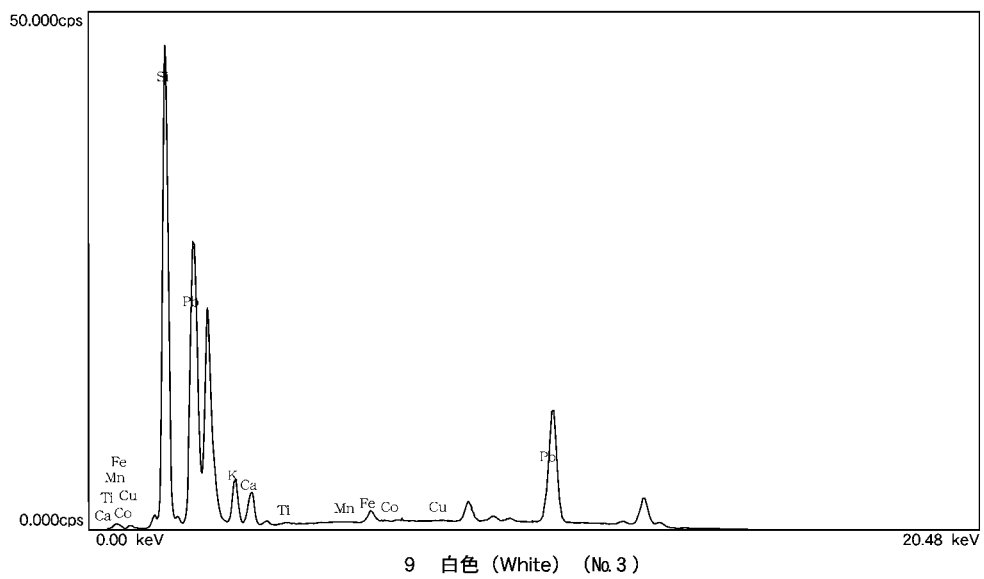
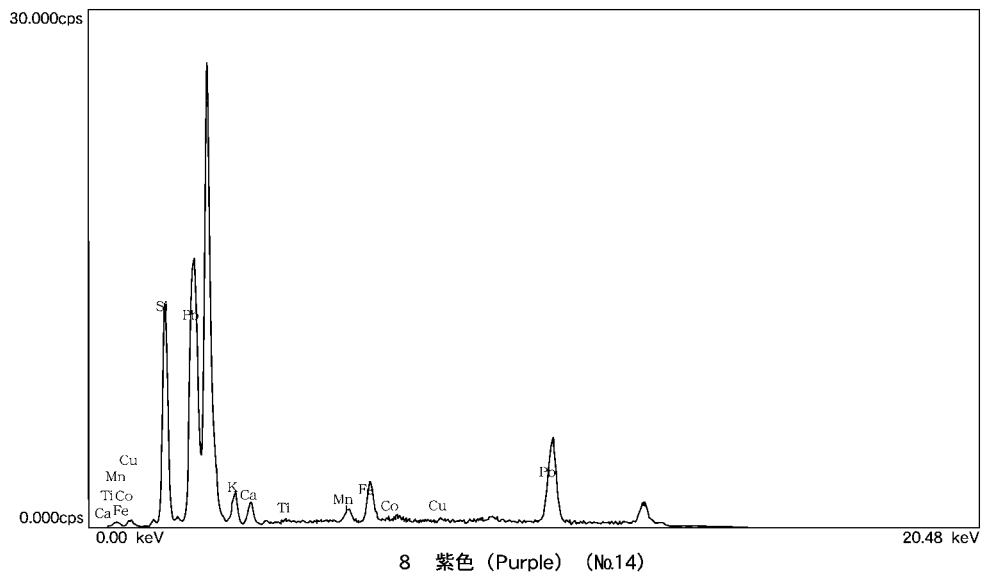
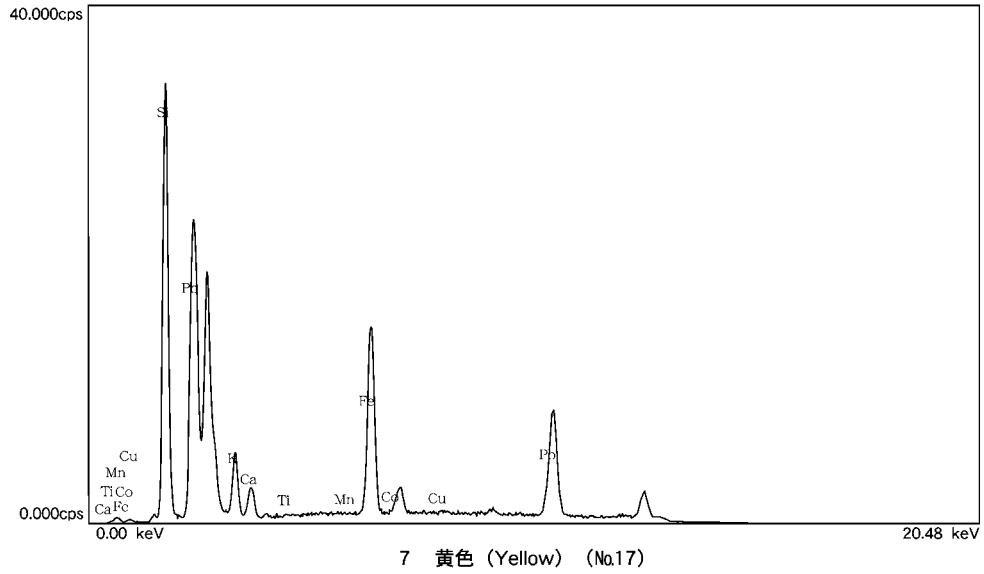


図 56 ガラス製品の定性分析 - 3

付章3 出土したガラス製品の理化学的分析

北野信彦・竜子正彦

1. はじめに

尚徳中学校地内の発掘調査では、数量は多くないが江戸時代のガラス製品が幾例か出土している。まず、江戸時代前期頃（17世紀中期頃）の町家跡関連遺構（土壙1480）からは、長崎交易を通じてわが国に招来されたワインボトル破片であると考えられるガラス容器片が4点、土壙419や土壙690などからは、江戸時代後期頃の櫛飾（簪）の破片がそれぞれ1点ずつ検出されている。さらに、江戸時代後期から幕末期頃（19世紀中期頃）の漆喰土蔵の埋土を3mmメッシュで篩ったところ、ガラス製小玉、ポップペンや簪、さらには用途不明の棒状や板状のガラス片などの小破片が35点ほど検出された。本報では、合計43点のガラス製品の器形や色相、表面の劣化状態を肉眼観察するとともに、蛍光X線分析装置による資料非破壊の定性分析や比重値測定を行ったので、その結果を報告する。この目的は、貴重な江戸期の出土ガラス製品、とりわけ長崎交易との関連性が指摘されるワインボトル破片や、仏具の一部と考えられるガラス製小玉の実体を把握して、今後の相互比較が可能となる基礎資料の作成を行なうことにある。

2. 調査方法

一般にガラス製品の製作は、珪石原料とアルカリ硝石、着色材料などを溶解混合して基本的なガラス種を作成する粗煮～精煮工程と、このガラス種を（a）芯材に巻き付けて小玉成形し、表面研磨の調整を行ない小玉の製品に仕上げる、もしくは（b）型吹き成形や切りカットなどを行ないガラス製品に仕上げる、などの成型工程から成り立っている。

本報では、まず器形や色系分類のためのガラス色相などを表面観察した後、（1）比重値測定、（2）原材料や着色材料などのガラス組成の定性分析、にわたった調査を行った。以下、項目別に調査方法を記す。

（1）比重値測定

本報では、近世のガラス製品を、アルカリ珪酸塩ガラス（カリガラス）と鉛珪酸塩ガラス（鉛ガラス）の二系統に大別するが、通常、鉛ガラスはカリガラスに比較して鉛が含有されるため比重値が大きい。この基本的な理論を応用して、棚橋淳二・岡泰正・土屋良雄らは、伝世している近世ガラス製品を、 $(\text{空中重量} - \text{水中重量}) / \text{空中重量} = \text{比重値}$ （カリガラスは平均比重値2.4～2.9台、鉛ガラスは平均比重値3.0～3.7台）として算定して、その軽重を相対的に比較し、上記2つのガラスの種類を簡便に判別する方法とした。

(2) ガラス原材料や着色材料などの定性分析

ガラス製品の定性分析は、個々の資料を専用の分析試料セル内に装着させ、(株)堀場製作所 MESA-500 型の蛍光 X 線分析装置に非破壊で設置して、元素の特性 X 線を検出した。分析では、検出される元素のうち、Na (ナトリウム)、Mg (マグネシウム)、Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、S (硫黄)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Mn (マンガン)、Fe (鉄)、Co (コバルト)、Cu (銅)、Zn (亜鉛)、As (砒素)、Sn (スズ)、Pb (鉛) の二次電子線強度をカウントした。なお、分析設定時間は 600 秒、試料室内は真空状態、励起電圧は 15kV、管電流は 300 μ A、検出強度は 10,000 ~ 100,000cps、定量補正法はスタンダードレスの設定条件である。

3. 調査結果

今回調査を行ったガラス製品は、いずれもガラス小玉を除いては破片類である。個々の分析結果を(表 18・19)に示す。まず本資料は、簪や捻り棒・ポップン管などの棒状製品や板物類片など、他遺跡でも比較的良く検出される一般的な資料が多い。その一方で、検出例では比較的古い年代観が与えられているヨーロッパ産と推定される厚手で深緑色 (Dark Green) を呈するワインボトル破片 (4 点)、仏具の一部と考えられる国産と推定されるガラス小玉 (17 点)、さらには乳濁した青色 (Blue navy) を呈する中国産と推定される髪飾 (2 点)、などの希少なガラス製品も含まれており、この点の本資料群を特徴づけている。そのため本稿では、長崎交易に伴う輸入品と考えられるワインボトル・ジンボトル・ビールビンなどのガラス容器に注目して、同じ京都市中の近世遺跡である京都御苑内 (迎賓館建設地) の公家屋敷跡出土資料、および長崎出島出土資料 (長崎市教育委員会出島整理室のご好意による) の調査結果も併せて表示した。また、中国産と推定される髪飾 (簪) の比較資料群も、京都御苑内迎賓館敷地の公家屋敷跡出土資料分析結果を併せて表示した。以下、調査結果を示す。

(1) 表面観察による基本的なガラス色相の色系統分類では、(a) 透明感がある無色 (Colorless) 系の資料が多い。その他では、(b) 乳白色 (White) 系、(c) 透明感のある緑色もしくは萌黄 (Green) 系、(d) 深緑色 (Dark Green) 系 (これは少なくとも 2 ~ 3 種類に分類される)、(e) 乳濁した青色 (Blue navy) 系、(f) 透明感がある黄色 (Yellow) 系、(g) 透明感がある紫色 (Purple) 系、など少なくとも 7 ~ 8 種類に識別された。

(2) これらの蛍光 X 線分析によるガラス原材料の定性分析を行った結果、鉛珪酸塩ガラス (鉛ガラス) とアルカリ珪酸塩ガラス (カリガラス) の 2 種類に大別されたが、基本的には前者が多かった。

(3) 器形分類別で見ると、ガラス小玉はいずれも比重値が大きく、これらはいずれも Pb (鉛) 元素の検出量が高い鉛珪酸塩ガラス (鉛ガラス) であった。また、ワインボトル破片および乳濁した青色 (Blue navy) を呈する髪飾はいずれも比重値が小さく、Pb (鉛) 元素の検出量が高いアルカリ珪酸塩 (カリガラス) であった。

(4) 近世以降の白色もしくは乳白色 (White) 系ガラスの着色材料には、石灰;カルシウム (Ca) やスズ (Sn) が使用されるが、本資料では積極的にこれらの元素は確認されず、若干の鉄 (Fe) 元素の混入が見出された。これらは、ガラス生産過程の鉄坩堝由来と考えられる。これは、透明感のある無色 (Color less) 系ガラスも同様である。

(5) 透明感のある緑色もしくは萌黄 (Green) 系ガラスでは、着色材料としての銅 (Cu) 元素と若干の鉄 (Fe) のピークが認められた。これは、酸化銅 (CuO) 物質による青色と鉄系 (Fe) 物質による黄色を併せて緑色となる色相に由来するものであろう。

(6) 透明感がある黄色 (Yellow) 系ガラスでは、鉄 (Fe) 元素のピークが比較的強く検出された。これは、着色材料である酸化鉄由来と考えられる。この点は、近世以降の出土ガラス製品や色ガラスの復元実験試料の成分分析結果でも裏付けられる。

(7) 透明感がある紫色 (Purple) 系ガラスは、通常マンガン (Mn) 元素が特徴的に検出される。本資料の場合、積極的にこの元素は強く認められないものの、若干のピークが検出された。

(8) 乳濁した青色 (Blue navy) 系ガラスでは、やや強い銅 (Cu) 元素のピークに鉄 (Fe) 元素のピークが共存する特徴を有する。これは着色材料である酸化銅由来と考えられる。同様の成分分析の結果は、同じ色相を有する京都御所内の公家屋敷跡出土ガラス資料群や、色ガラス復元実験でも得られている。一方、中世段階の乳濁した青色 (Blue navy) 系の色相を呈するガラス製品の場合、着色材料は同じであるが、基本的には鉛珪酸塩ガラスであり、この点が近世段階のそれとは異なる。通常、本資料のような乳濁した青色のガラス製品は、中国製品とされるが、この点の検討は今後の課題の一つであろう。

(9) 深緑色 (Dark Green) 系のワインボトル破片には、厚い器壁を有し、表面がやや銀化して透明感が乏しく深い緑色を呈する資料群と、やや薄い器壁を有し、透明感があるやや淡い深緑色を呈する資料群の少なくとも2種類に分類されようである。この資料群の特徴は、(3)にも記述したようにいずれもアルカリ珪酸塩ガラス (カリガラス) である点とともに、深緑色の色相はマンガン (Mn) を共存する鉄 (Fe) 材料によるものであると理解した。ただし、鉄とマンガンの共存率は京都市中のそれに比較して出島資料群が特に顕著であった。これは、それぞれの容器資料の製作年代や生産地、品質の違いなどが想定されるが、この点に関する調査はヨーロッパの伝世品資料の調査も含め、今後の興味ある課題である。

(引用文献)

- (1) 土屋良雄 (1987) 『日本のガラス』しこうしゃ
- (2) 山崎一雄 (1987) 『古文化財の科学』思文閣出版
- (3) 棚橋淳二 (1989) 「江戸時代の技法によるガラス素地の製造」『研究紀要 第31号』松蔭女子学院大学・松蔭女子学院短期大学 学術研究会
- (4) 二宮修治・今野春樹・中村瑞絵 (1998) 「千駄ヶ谷五丁目遺跡2次調査出土のガラス及び焼継ぎ材料化学的分析について」『千駄ヶ谷五丁目遺跡2次調査報告書』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- (5) 北野信彦 (2004) 「出土ガラス製品の定性分析と保存に関する基礎的調査」『平安京北辺四坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所

表20 動物遺存体出土遺構一覧表

遺構番号	遺構の種類	動物遺体				所属時期	遺構番号	遺構の種類	動物遺体				所属時期
		貝	魚	鳥	獣				貝	魚	鳥	獣	
11	土壙	◎				19C後	577	土壙	○				19C代
17	漆喰	○				19C後	590	土壙				○	19C代
36	漆喰	◎			○	19C後	610	土壙			○		19C後
42	土壙	○				19C後	624	土壙	○				18C末～19C初
84	土壙	○				19C後	650	土壙	○				18C後～19C初
125	漆喰	○				19C後	651	池	○				19C代
132	井戸	○				19C後	652	土壙	○				19C代
149	埋甕	○				19C後	655	土壙				◎	19C代
150	土壙	○				19C後	671	土壙	○				18C末～19C初
160	土壙	○	◎			19C中	681	土壙	◎	◎			19C後
170	土蔵	◎	◎		◎	19C後	685	土壙		○			18C～19C初
190	土蔵	○				19C中	690	土壙	○				19C後
208	土壙	○				19C後	700	土壙	○	◎			19C後
210	井戸	○	○	◎		19C後	728	土壙	○				19C代
235	小穴		○			19C後	729	土壙	○				18C末～19C前
248	土壙	○				19C後	745	土壙	◎				18C末～19C初
255	井戸	○	◎			19C後	746	土壙	○		○		19C後
280	土壙	○	○			19C後	784	土壙	○				18C末～19C初
292	土壙	◎	◎		○	19C後	799	土壙	○				18C末～19C初
300	土壙	○			○	19C後	807	土壙	○	○	◎		19C後
309	土壙	○	○			19C後	820	土壙	○			○	18C後～19C初
327	土壙			○		19C後	822	土壙				○	18C後～19C初
334	土壙		○			18C後～19C初	825	土壙	◎	○			18C後～19C初
346	土壙	○	○			19C中	837	土壙	○		○		18C後～19C初
349	土壙	○				19C後	843	土壙	○	○			18C末～19C前
365	土壙	○				19C後	903	土壙		○			18C後
371	土壙		○			19C後	919	土壙		○			18C～19C前
399	土壙	◎	○			19C後	920	土壙	○	○			18C後
400	土壙	○				19C後	922	土壙		○			18C後
402	土壙	○	○			19C後	937	土壙		○			18C後
403	土壙	◎	○			19C後	941	土壙		○			18C～19C初
407	土壙	○				19C後	956	土壙		○			18C後
413	土壙	○				19C代	961	土壙		○			18C後
419	土壙		○	○		19C前	969	土壙	○	○			18C中
420	土壙	○				19C後	996	土壙		○			18C前
425	土壙	○	○			19C中	1009	土壙	○				18C後
435	土壙		○	○		18C～19C前	1027	土壙		○	○		17C前
438	土壙	○				19C中	1045	土壙		○			19C前
448	土蔵	○	○			18C末～19C前	1122	土壙	○	◎	○	○	18C前
452	土壙	○	○			18C末	1152	土壙	○				17C末～18C前
454	井戸	○				19C前	1178	土壙	○	○			18C後
466	土壙	○				19C後	1211	土壙		○			17C後
479	土壙	○	○			19C後	1234	土壙				○	17C～18C前
480	土壙	○				19C中	1248	土壙		○			17C後
489	土壙	○	○			19C中	1270	土壙	○				17C末～18C初
494	土壙	○				19C後	1271	土壙	○				18C前
498	土壙	○				19C前	1274	土壙		○			18C後
499	土壙	○	○		○	19C中	1351	土壙		○			17C?
502	土壙	○	○			19C代	1364	土壙				◎	17C?
505	溝	○				19C代	1407	土壙	◎	◎			18C中
511	土壙		○			19C中	1418	土壙		◎			17C前
515	土壙		○			18C～19C初	1419	土壙		○			17C前
521	土壙	◎				18C後	1477	土壙			○	○	17C前
531	土壙	○				19C後	1517	土壙		◎	○		17C前
576	土壙		○			19C前	1670	土壙		○			17C前

※ 付章1・2より作成、◎：量が多いもの

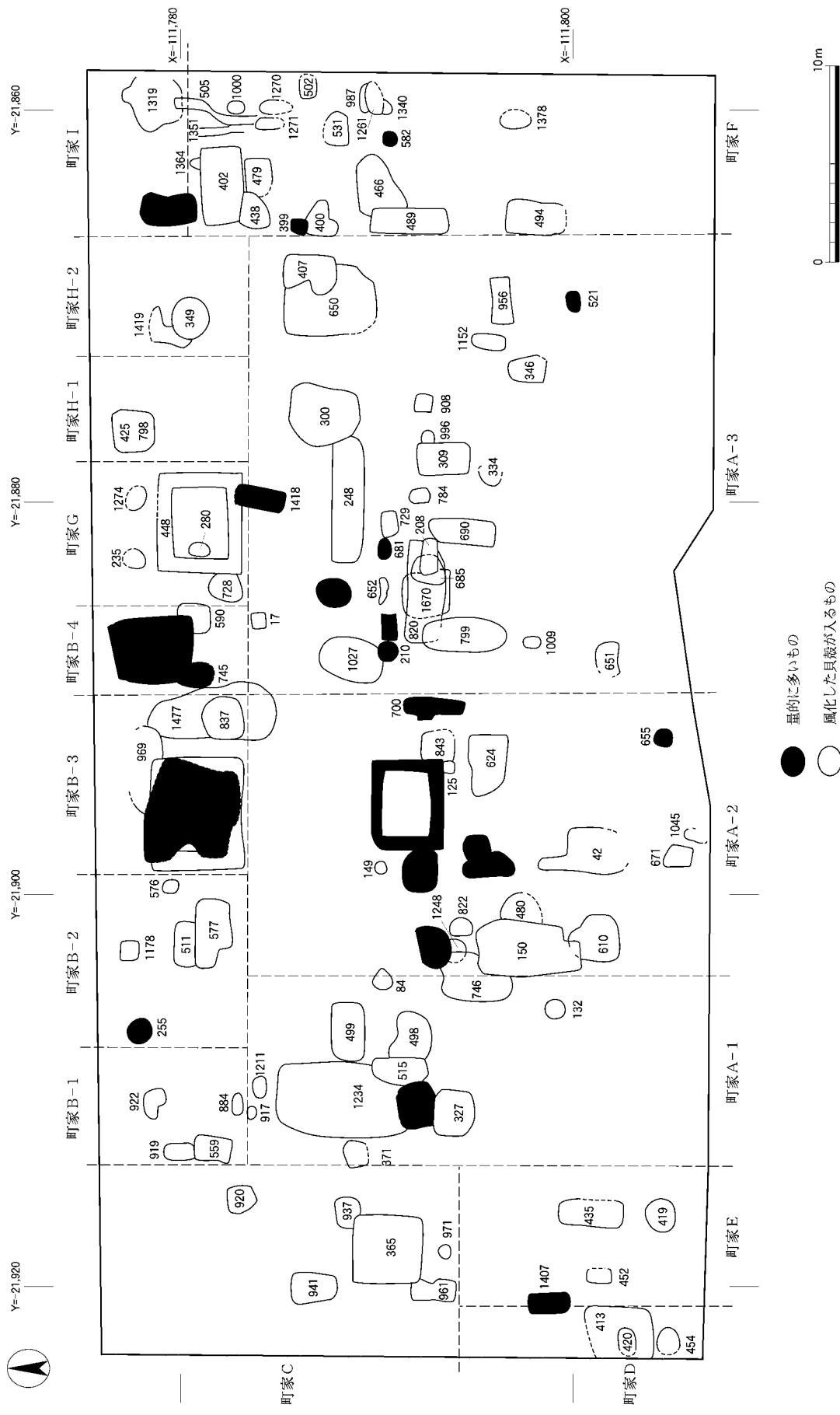


図 57 動物遺存体出土遺構配置図 (1 : 300)

付章 4 動物遺存体が出土した遺構について

丸川義広

1. 経過

付章 1・2 では当該調査地から出土した動物遺存体について、詳細な検討が加えられている。従来から、京都市内の江戸時代遺構では貝や動物の骨が出土してきたが、今回ほど詳細に検討されることはなかった。検討結果から、内陸都市である京都には豊富な海産物がもたらされていたことが判明し、都市住民の食生活、ならびに海産物の流通を知る上でも重要な所見となった。そこで本章では、付章 1・2 で取り扱った動物遺存体出土遺構について検討する。この時代の町家境については、復元案も提示しているため、動物遺存体出土遺構が各町家内のどの位置に掘られたかなどを検討することで、町家内部の利用実態がさらに明白になると期待できる。またそうすることで、付章 1・2 で検討された内容もさらに意義深いものとなろう。なお本章では、付章 1 で軟体動物としたものを「貝」、付章 2 で脊椎動物としたものを「魚骨」「鳥骨」「獣骨」として記述を進める。

2. 試料の採集について

都市遺跡である京都では、江戸時代に入ると膨大な量の土器・陶磁器類、瓦類、その他遺物が出土する。その量が多いため、従来から選択的に採集する方法をとってきた。動物遺存体の場合も然りであり、目立った個体に限定して採集される傾向がある点は否めない。付章 1・2 で検討した数量が全出土量でないことを、断っておく。

次に、動物遺存体出土した遺構としては、表 20 に掲載した 110 基を基本とした。しかしこれら以外にも、この章の 3 で述べる 13 基があり、図 57 はそれらを加えて作成した。これらの遺構は調査地の全域に及んでいる。しかし、図示した遺構の全てが動物遺存体を廃棄した穴であったとは断言できない。付章 1・2 で検討した試料は、図示した遺構から出土したことは確かであるが、これは遺構埋土に包含されていたものであって、他の遺構からもたらされたことも十分想定できるからである。特に平安京左京の場合は、都市遺跡特有の複雑な遺構の重複がみられる。このため、遺構の掘削・堆積の過程で別遺構の埋土が入り込む余地は十分にありうる。そこで、図 57 ではこれらを区別する意味で、動物遺存体が比較的多く出土したものを網かけで表示することにした。したがって、動物遺存体が直接廃棄された遺構とした場合は、図中で網をかけた遺構に限定できることとなった。

3. 出土遺構について

付章 1・2 で検討されなかった遺構からも、動物遺存体出土している。表 20 には掲載しなかったが、動物遺存体出土遺構であることに変わりがないため、図 57 には表示することにした。遺構

は 13 基あり、出土内容、所属時期などは以下である。

土壙 559 (貝が出土。19C 後)、土壙 582 (貝が出土。18C 後)、土壙 780 (貝が多く出土。19C 中)、土壙 798 (各種貝と魚骨が出土。18C ~ 19C 初)、土壙 884 (貝が出土。18C 後) 土壙 908 (風化した貝が出土。18C)、土壙 917 (貝が出土。18C 後)、土壙 971 (貝が出土。18C 前)、土壙 987 (風化した貝が出土。18C 前)、土壙 1000 (風化した貝が出土。18C 後)、土壙 1261 (風化した貝が出土。18C 後)、土壙 1340 (風化した貝が出土。18C 中)、土壙 1378 (貝が出土。17C ?)。

次に、網かけで示した遺構について、要点を整理する。遺構の規模は、径 1 m 前後の円形ないし楕円形を呈するもの (西から、土壙 655、681、908、521、399、582)、長さ 4 m 前後の楕円形ないし長方形を呈するもの (同、土壙 1407、292、160、807、780、700、1418、403) が主体をなす。調査地内に掘られた土壙の規模からすると、前者は小型、後者は中型の範囲に含まれる。この他、土壙 825、745、1517 は長さ 1.5 m 前後あり、両者の中間規模といえる。このように、動物遺存体が多く出土した遺構は、土壙 11・1122 を除けば小型・中型規模の土壙が多いことが指摘できる。

4. 出土遺構の配置

X=-111,784 付近に設定された東西方向の背割りの北側をみると、土壙 11 は焼瓦が廃棄された土壙であるため、貝類の多くは混入したものとみてよい。土蔵 190 では方形にめぐる基礎溝内から貝類が多数出土したが、土蔵 190 の下部には動物遺存体を多く含む土壙 1122 が掘られており、ここの遺物が土蔵 190 造成時に混入したとみられる。土壙 1122 からは各種の魚骨が出土しており、試料の中身が最も豊富な遺構となった。またここからは、土器・陶磁器類も多量に出土しており、町家 B - 3 の生活ゴミが継続的に廃棄された穴であることは確かである。魚骨の比率が特別に高い点は、この町家の生業を反映した可能性も考慮すべきであろう。土壙 403 は町家 I の最奥部にあり、シジミが多く出土した。「小中居」と墨書した陶器皿がまとまって廃棄された遺構でもあり(第 5 章第 1 節の (4) 参照)、調理関係の遺物の出土は注目される。

背割りの南側では、南に数 m 離れた位置 (X=-111,790 付近) に掘られた穴から動物遺存体が多く出土した。背割りの南には路地 3656 が想定されるため、これらの土壙は路地 3656 の南に接して掘られたことになる。この位置は、鍵屋町通に面した町家では最奥部に相当し、背割りの北側、楊梅通に面した町家で掘られた土壙と同じ位置にあったことになる。この他、動物遺存体が出土した土壙は町家 A - 1 から町家 A - 3 までに分布するが、数量的には差異があり、町家 A - 2 に集中すること、最大の敷地面積をもつ町家 A - 3 には少ない点も指摘できる。町家 A - 3 の北東部では、土壙 650 の埋没後に鑄造施設が設置されるが、遺構の少なさはこのような土地利用とも関係するのであろう。

なお、魚骨がまとまって出土した遺構には土壙 1407 (町家 E)、土壙 292 (町家 A - 1)、土壙 160・700 (ともに町家 A - 2)、土壙 1517・1418・681 (以上、町家 A - 3) などがある。時

表 21 植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		地点・試料		
分類群	学名	1	2	3
		北壁 5 層	北壁 9 層	北壁 7 層
イネ科	Gramineae (Grasses)			
イネ	Oryza sativa	14		
キビ族型	Paniceae type	7		
ヨシ属	Phragmites	14	26	21
ススキ属型	Miscanthus type	7		
ウシクサ族 A	Andropogoneae A type	14	13	14
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	20	20	14
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	95	111	34
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	27	13	7
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	7	26	7
未分類等	Others	27	20	21
その他のイネ科	Others			
表皮毛起源	Husk hair origin	7	7	7
棒状珪酸体	Rod-shaped	55	85	48
未分類等	Others	266	182	171
樹木起源	Arboreal			
その他	Others	7		
植物珪酸体総数	Total	566	501	343

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	Oryza sativa	0.40		
ヨシ属	Phragmites	0.86	1.64	1.30
ススキ属型	Miscanthus type	0.08		
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.24	0.23	0.16
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.46	0.53	0.16
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.20	0.10	0.05
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.02	0.08	0.02

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	26	24	40
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	50	57	42
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	22	10	13
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	2	8	5

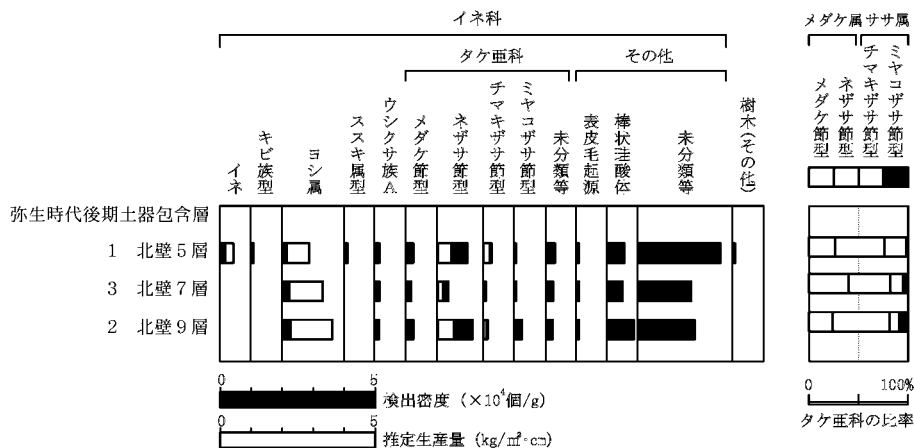


図 58 植物珪酸体ダイアグラム

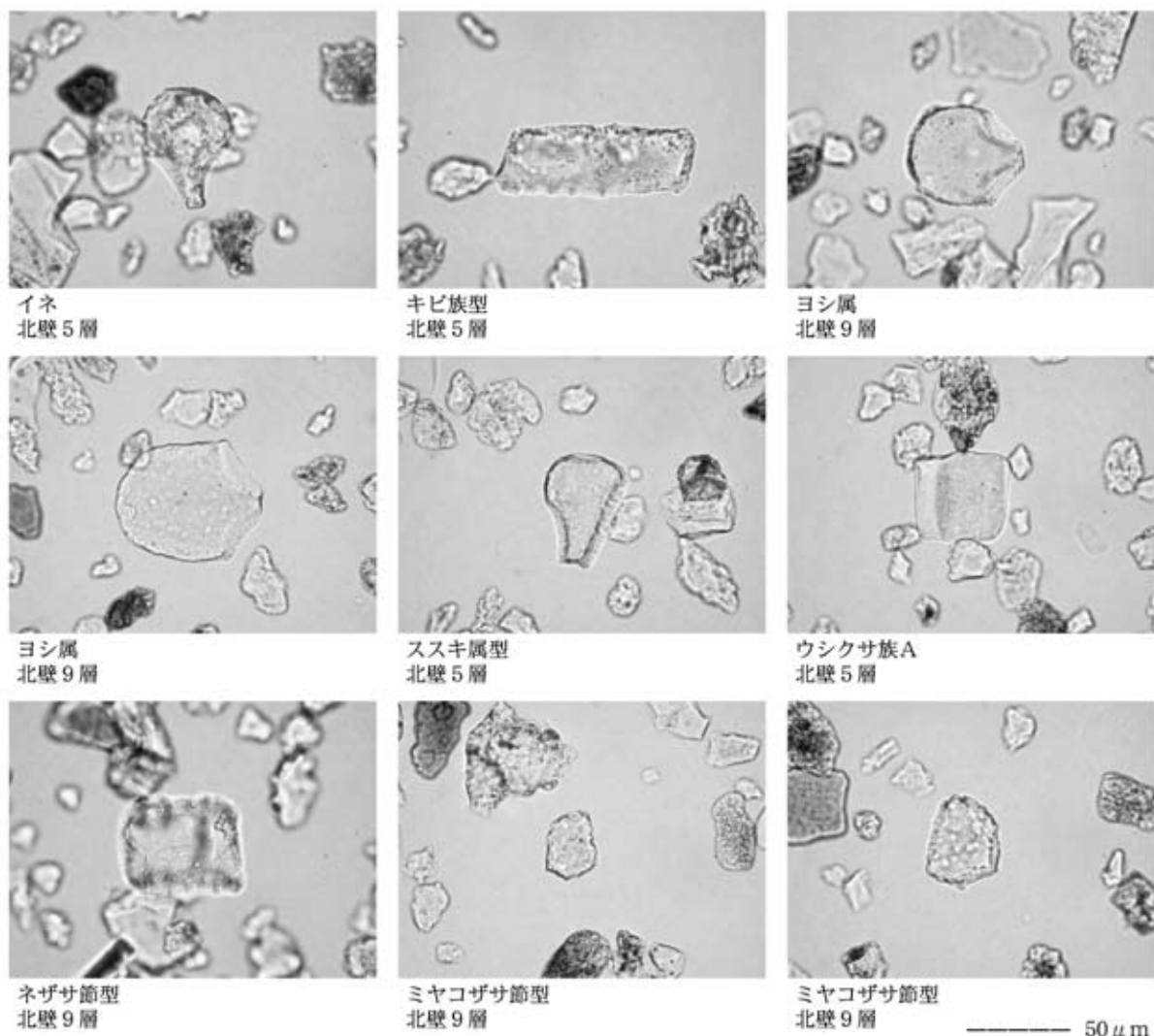


写真 10 植物珪酸体

期的に差異はあるが、各町家に所属した廃棄穴であったことは確実であろう。

最後に、遺構の所属時期を整理しておく。検討対象とした 124 遺構の内訳は、19 世紀代（69 基、全体の 55%）、18 世紀末～19 世紀初（16 基、同 13%）、18 世紀代（27 基、同 22%）、17 世紀末～18 世紀初（1 基、同 1%）、17 世紀代（11 基、同 9%）となっている。19 世紀に属するものが 7 割近くを占めているが、これは都市住人の増加、ならびに消費量の増大を反映するものであろう。一方、調査地の東端、町家 F ではサザエ・アワビなどの貝類が風化して脆くなった状態で堆積した土壌がみられた。長さ 1 m 前後の小規模な土壌であったが、18 世紀に属することは、貝殻の経年風化を示す事例と考えられる。こうした観点でみると、时期的に新しい遺構が多い要因には、風化・分解の進行具合も考慮すべきであろう。

5. 小結

以上、動物遺存体が出土した遺構 126 基について検討を加えた。要約すると、遺構数は多数に及ぶものの少量出土したものが大半であり、これらは周囲から混入したか、あるいは当初から少

量であったと想定できた。比較的多く出土した遺構を網かけで表示したところ、背割りを中心に南と北の両方、つまり町家の最奥部に掘られたことが判明した。土壌の規模は小型・中型であり、19世紀に属するものが7割り近くを占めたが、その背景には消費量の拡大とは別に、貝や骨の風化・分解の度合いが影響を与えたことも推定した。

江戸時代の動物遺存体は遺構から多量に出土することが知られてきたが、今回は内容物の検討、ならびに出土遺構の配置関係まで追跡することができた、こうした成果は、都市住人の食生活、流通経路、町家内部の土地利用など、多角的な内容を含んでいる。今後の資料の増加によって、江戸時代の庶民生活史はさらに解明が進むものと期待される。

表 22 花粉分析結果

学名	分類群	和名	2		
			1	3	2
			北壁 5 層	北壁 7 層	北壁 9 層
Arboreal pollen		樹木花粉			
<i>Abies</i>		モミ属	3	1	4
<i>Tsuga</i>		ツガ属	1	4	1
<i>Pinus subgen . Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	5	8	4
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	30	27	23
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	3	1	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	43	184	35
<i>Salix</i>		ヤナギ属	5	1	
<i>Juglans</i>		クルミ属	4	1	1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ			1
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	3	4	3
<i>Betula</i>		カバノキ属	2	4	2
<i>Corylus</i>		ハシバミ属		1	1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	4	5	1
<i>Castanea crenata</i>		クリ			2
<i>Castanopsis</i>		シイ属	26	14	10
<i>Fagus</i>		ブナ属	1	3	2
<i>Quercus subgen . Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	26	26	21
<i>Quercus subgen . Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	44	50	67
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	7	13	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	6	14	13
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属		1	
<i>Ilex</i>		モチノキ属	1	1	
Celastraceae		ニシキギ科		1	
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	14	8	13
<i>Sapindus</i>		ムクロジ属	1		
<i>Lonicera</i>		スイカズラ属	1	1	
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	16	20	19
Rosaceae		バラ科			2
Leguminosae		マメ科		1	
Sambucus-Viburnum		ニワトコ属-ガマズミ属		2	
Nonarboreal pollen		草本花粉			
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属			3
Gramineae		イネ科	90	20	66
<i>Oryza type</i>		イネ属型	9		
Cyperaceae		カヤツリグサ科	31	8	3
<i>Polygonum sect . Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	1	2	
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1		
<i>Ranunculus</i>		キンポウゲ属		1	
Cruciferae		アブラナ科		1	2
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属			3
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>		ノブドウ	1		
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属-フサモ属		1	
Apiodeae		セリ亜科	4		3
<i>Actinostemma lobatum</i>		ゴキツル	1	1	
Lactuoidaeae		タンポポ亜科		1	2
Asteroidaeae		キク亜科	4		
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	44	9	36
Fern spore		シダ植物胞子			
Monolate type spore		単条溝胞子	25	9	8
Trilate type spore		二条溝胞子	11	4	4
Arboreal pollen		樹木花粉	230	373	205
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	16	23	21
Nonarboreal pollen		草本花粉	187	44	118
Total pollen		花粉総数	433	440	344
Pollen frequencies of 1cm³		試料1cm ³ 中の花粉密度	2.3 ×10 ⁴	2.1 ×10 ⁴	1.3 ×10 ⁴
Unknown pollen		未同定花粉	11	13	10
Fern spore		シダ植物胞子	36	13	12
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物	(-)	(-)	(+)

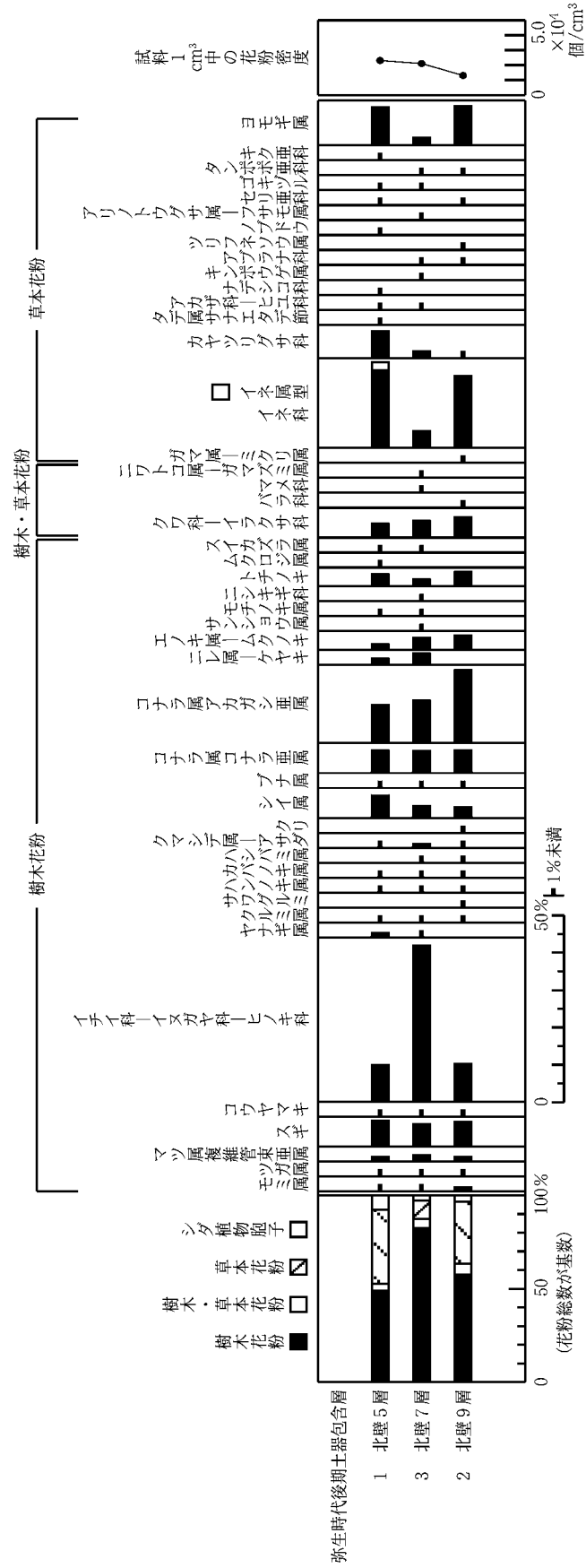
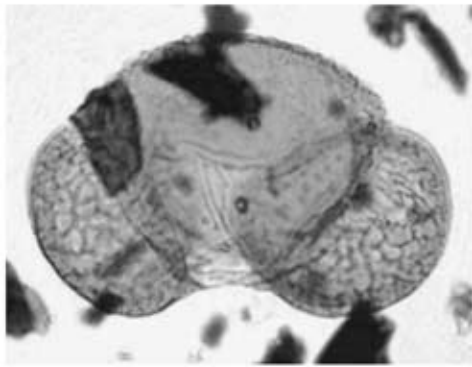
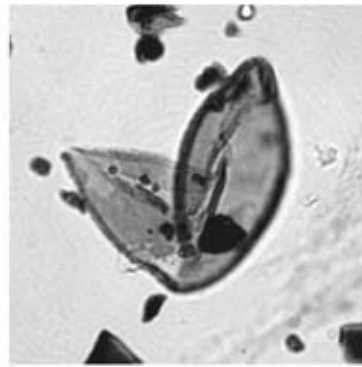


図 59 花粉ダイアグラム



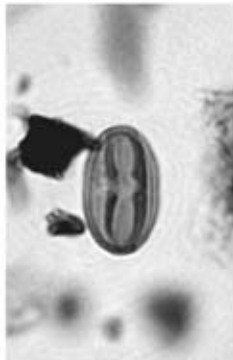
1 マツ属複維管束亜属



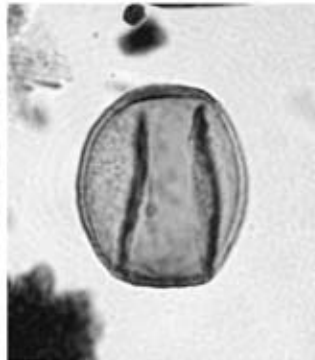
2 スギ



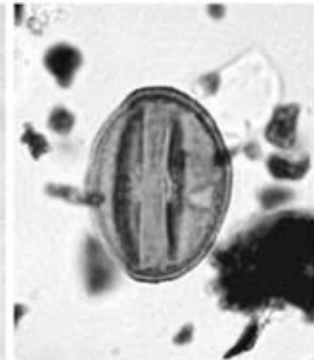
3 イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科



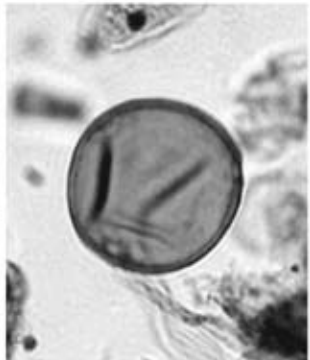
4 シイ属



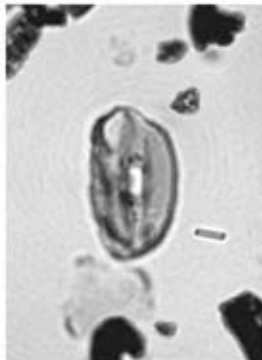
5 コナラ属コナラ亜属



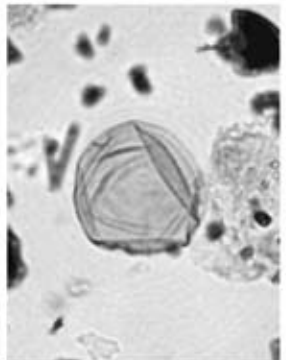
6 コナラ属アカガシ亜属



7 エノキ属-ムクノキ



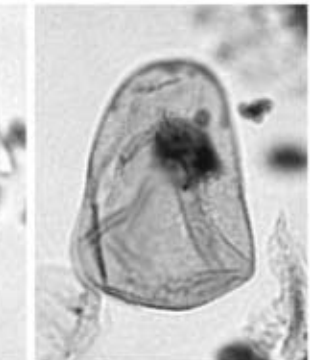
8 トチノキ



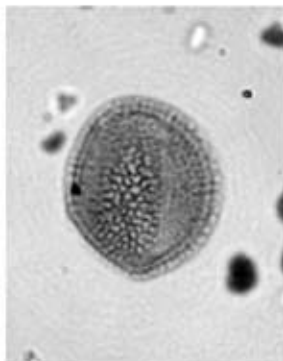
9 クワ科-イラクサ科



10 イネ属型



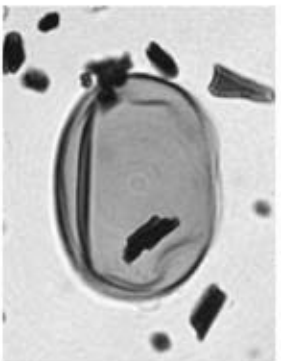
11 カヤツリグサ科



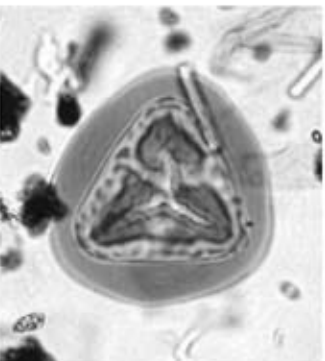
12 アブラナ科



13 ヨモギ属



14 シダ植物単条溝胞子



15 シダ植物三条溝胞子

— 10 μm

写真 11 花粉・胞子

付章5 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

平安京左京六条三坊五町の発掘調査では、弥生時代後期の土器を含む旧河道・湿地状堆積土が検出された。ここでは、当時の植生や堆積環境を推定する目的で植物珪酸体（プラント・オパール）分析、花粉分析、珪藻分析を行った。

分析試料は、調査区北・西壁断面から採取された北壁5層（試料1、褐灰色粘質土、図版2の北壁1の4層に相当する）、北壁9層（試料2、黒褐色粘質土、同8層に相当）、北壁7層（試料3、黒褐色粘質土、同6層に相当）の計3点である。

2. 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

(2) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植

物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

（3）分析結果

分類群 分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表21および図58に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を写真10に示す。

〔イネ科〕 イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科タケ亜科〕 メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科その他〕 表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕 その他

植物珪酸体の検出状況 北壁9層（試料2）では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型なども検出された。北壁7層（試料3）と北壁5層（試料1）でも、おおむね同様の結果であるが、北壁5層（試料1）ではイネ、キビ族型、ススキ属型、樹木（その他）が出現している。イネの密度は1,400個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢となっている。

（4）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

弥生時代後期の土器を含む旧河道・湿地状堆積土（流路3508）の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、北壁5層の時期には周辺で稲作が行われていたと推定される。また、周囲の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類やウシクサ族などが生育していたと考えられる。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）プラント・オパール分析による水田址の探査. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表 23 珪藻分析結果

分類群	1	3	2
	北壁 5 層	北壁 7 層	北壁 9 層
貧塩性種 (淡水生種)			
<i>Achnanthes lanceolata</i>	1		
<i>Amphora copulata</i>	2	5	1
<i>Amphora spp.</i>		1	
<i>Aulacoseira valida</i>	1	1	
<i>Caloneis hyalina</i>	2		
<i>Cocconeis placentula</i>	19	43	13
<i>Cymbella cuspidata</i>	1		
<i>Cymbella sinuata</i>	1	4	
<i>Cymbella tumida</i>	9	7	2
<i>Cymbella turgidula</i>		27	4
<i>Diatoma hyemale mesodon</i>	1		
<i>Diploneis spp.</i>	1		
<i>Eunotia minor</i>	4	15	1
<i>Eunotia praerupta</i>	1	2	
<i>Fragilaria capucina</i>	5	6	1
<i>Fragilaria ulna</i>	1	1	1
<i>Gomphonema acuminatum</i>		1	1
<i>Gomphonema augur</i>		6	
<i>Gomphonema clevei</i>	2	17	5
<i>Gomphonema gracile</i>		2	
<i>Gomphonema minutum</i>	3	3	
<i>Gomphonema olivaceum</i>		1	
<i>Gomphonema parvulum</i>	1	6	
<i>Gomphonema spp.</i>	3	2	
<i>Gomphonema truncatum</i>	1	2	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	7	5	5
<i>Navicula bacillum</i>		1	
<i>Navicula elginensis</i>		1	
<i>Navicula mobiliensis v. minor</i>		5	
<i>Navicula mutica</i>	16	16	8
<i>Navicula pupula</i>	1		
<i>Navicula viridula v. rostellata</i>	1		
<i>Neidium ampliatum</i>			1
<i>Pinnularia microstauron</i>		1	
<i>Pinnularia schroederii</i>	1		
<i>Pinnularia viridis</i>	1		
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>	3	4	2
<i>Rhopalodia gibba</i>	1		
<i>Synedra ulna</i>	4	10	4
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>		1	3
貧 - 中塩性種 (淡 - 汽水生種)			
<i>Achnanthes brevipes</i>	19	10	8
<i>Rhopalodia gibberula</i>	2		
合 計	115	206	60
未同定	3	8	3
破片	72	126	48
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	3.6	7.0	1.6
	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴
完形殻保存率 (%)	62.1	62.9	56.8

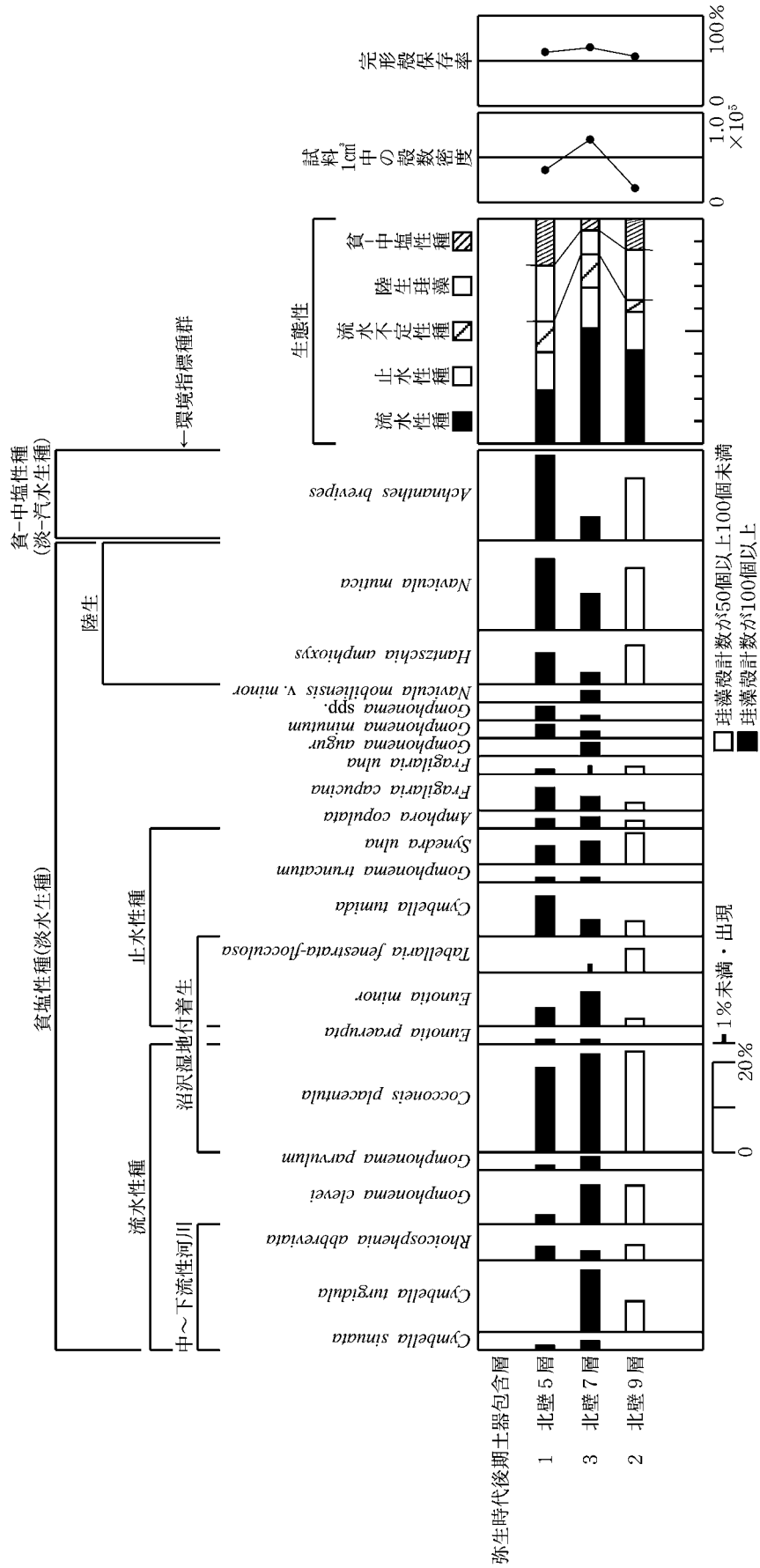
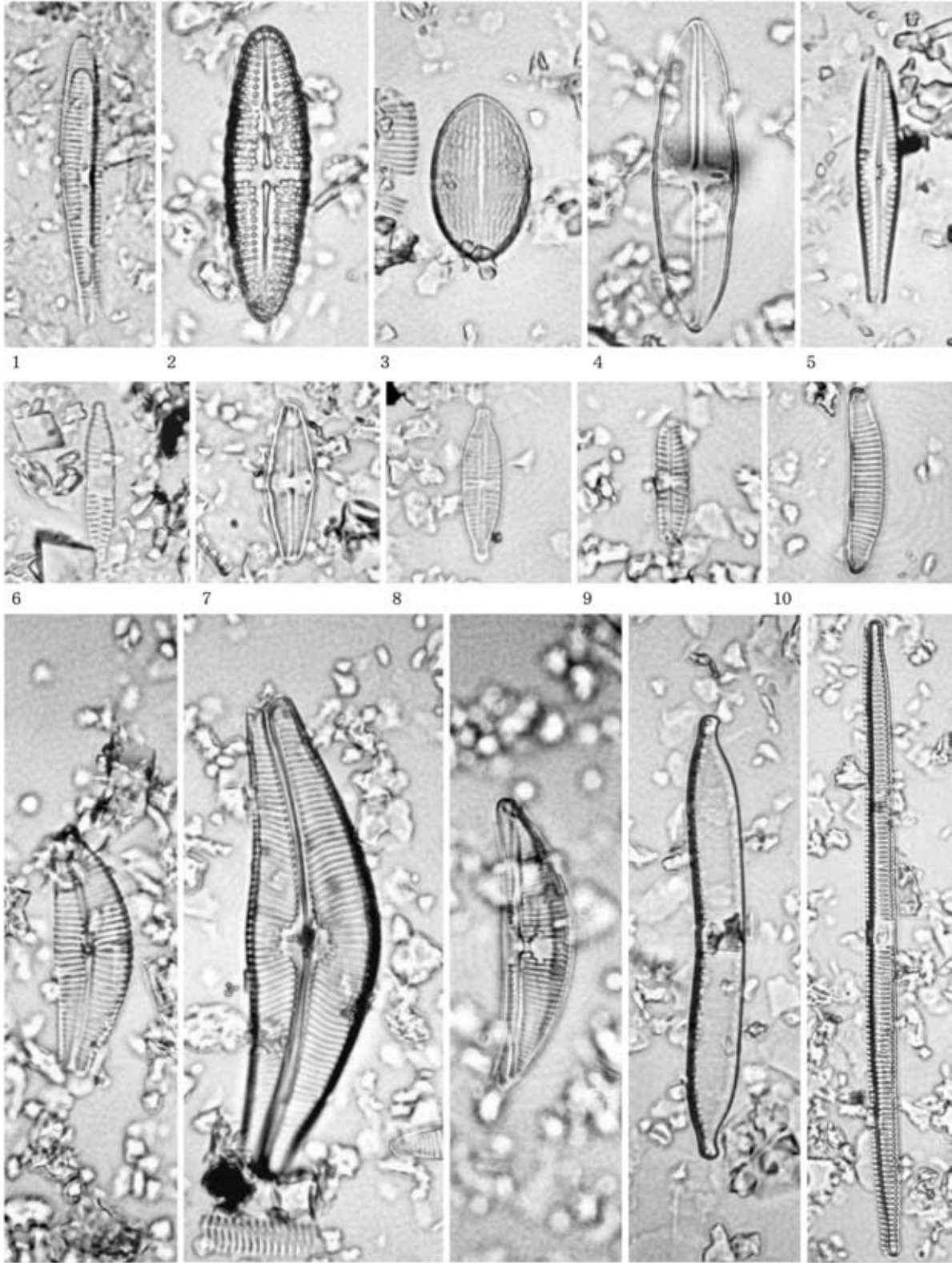


図 60 主要珪藻ダイアグラム



1. *Rhoicosphenia abbreviata* 2. *Achnanthes brevipes* 3. *Cocconeis placentula* 4. *Navicula mobiliensis* v. *minor*
 5. *Gomphonema clevei* 6. *Fragilaria capucina* 7. *Navicula mutica* 8. *Gomphonema parvulum* 9. *Cymbella sinuata*
 10. *Eunotia minor* 11. *Cymbella turgidula* 12. *Cymbella tumida* 13. *Amphora copulata* 14. *Hantzschia amphioxys*
 15. *Synedra ulna*

1-14 ——— 10 μm
 15 ——— 10 μm

写真12 珪藻

3. 花粉分析

(1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

(3) 結果

分類群 出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉17、シダ植物孢子2形態の計49である。分析結果を表22に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図59に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を写真11に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ケヤキ、エノキ属ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、トチノキ、ムクロジ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

観察表1 井戸一覧表

() 現状値、単位 (m)

番号	名称	掘形	井筒	木柵・横棧・側板	底部施設	位置	底部標高	時期	備考
1	井戸12	円形 径1.25	瓦積 内径0.8			X=-111,793.4 Y=-21,891.6	(29.70)	19C	鉄パイプ入る(電気汲み上げ用)。一周10枚。
2	井戸46	不整円形 東西3.5 南北5.0	漆喰 内径1.4			X=-111,803.0 Y=-21,897.0	(29.59)	19C末	規模大きい。学校時か?
3	井戸65	円形 径1.5				X=-111,784.0 Y=-21,887.9	(30.57)	19C中	焼瓦・焼土多く入る。井筒の構造不明。
4	井戸73	円形 径1.2	瓦積 内径0.9			X=-111,806.3 Y=-21,895.5	(30.34)	19C後	瓦は幅0.25で長さ0.31と0.14の2種類を交互に使う。5段以上残存。一周9枚。
5	井戸101	円形 径1.0				X=-111,799.2 Y=-21,877.4	29.80	19C後	漆喰多く入る。井筒の構造不明。
6	井戸105	円形 径1.1	瓦積 内径0.75			X=-111,806.4 Y=-21,899.9	(30.50)	19C後	焼土・瓦入る。瓦は幅0.25で長さ0.30、2段以上残存。一周9枚。
7	井戸108	円形 東西1.3 南北1.4	縦板組 径0.75 幅0.08 長さ0.5			X=-111,803.1 Y=-21,880.6	28.30	19C	桶?
8	井戸132	円形 径1.2	瓦積 内径0.75			X=-111,799.1 Y=-21,905.7	(30.71)	19C中	瓦は幅0.22で長さ0.30、5段以上残存。一周9枚。
9	井戸154	円形 径1.2	瓦積 内径0.8			X=-111,790.3 Y=-21,901.0	(29.56)	19C後	第3面で瓦積検出。
10	井戸157	円形 径1.0				X=-111,794.5 Y=-21,884.6	(29.80)	19C後	井筒の構造不明。
11	井戸210	円形 径1.15	瓦積 内径0.7			X=-111,790.5 Y=-21,887.5	(29.13)	19C後	第4面で瓦積検出。
12	井戸255	方形 東西1.3 南北1.4				X=-111,777.3 Y=-21,907.2	(30.07)	19C後	井筒の構造不明。
13	井戸279	円形 東西0.95 南北0.9	瓦積 内径0.8			X=-111,806.4 Y=-21,905.8	(30.19)	19C後	焼瓦多く入る。瓦は幅0.25で長さ0.30、3段以上残存。一周9枚。
14	井戸285	円形 東西1.2 南北1.3				X=-111,803.2 Y=-21,905.8	(30.28)	19C中 ～後	焼瓦多く入る。井筒の構造不明。
15	井戸287	円形 径1.2	瓦積 内径0.85			X=-111,790.6 Y=-21,876.4	(30.49)	19C後	瓦は幅0.25で長さ0.30、4段以上残存。一周10枚。
16	井戸297	円形 径1.4				X=-111,803.0 Y=-21,910.1	29.14	19C後	井筒の構造不明。
17	井戸302	楕円形 東西1.7 南北1.95	石組 東西0.9 南北1.2 残存高1.0		径0.45 深さ0.6	X=-111,778.3 Y=-21,873.1	29.30	19C前	石組だが漆喰も利用する。底面に小礫を敷く。
18	井戸318	円形 径1.0				X=-111,798.6 Y=-21,872.4	(29.57)	19C後	井筒の構造不明。
19	井戸319	円形 径1.2	瓦積 内径0.85			X=-111,798.6 Y=-21,870.7	(29.49)	19C後	
20	井戸343	円形 径1.2				X=-111,779.7 Y=-21,916.4	(29.72)	19C後	井筒の構造不明。
21	井戸347	不整円形 東西2.2 南北1.7	漆喰 内径0.8			X=-111,783.5 Y=-21,919.8	28.15	19C末	漆喰井筒の内側に巴文の軒丸瓦を埋め込む。

() 現状値、単位 (m)

番号	名称	掘形	井筒	木枠・横棧・側板	底部施設	位置	底部標高	時期	備考
22	井戸352	円形 径1.1				X=-111,781.9 Y=-21,912.7	29.94	19C末	井筒の構造不明。
23	井戸378	円形 径1.0	瓦積 内径0.85			X=-111,803.3 Y=-21,919.9	(30.37)	19C後	一周10枚。
24	井戸383	円形 東西1.3 南北1.4	石組 内径0.8			X=-111,777.9 Y=-21,867.4	(29.55)	18C後	南西のみ残存。
25	井戸386	円形 東西1.3 南北1.2				X=-111,805.7 Y=-21,918.6	(30.05)	19C後	井筒の構造不明。
26	井戸412	円形 東西1.0 南北1.1				X=-111,801.7 Y=-21,921.8	(29.97)	19C	井筒の構造不明。
27	井戸454	円形 径1.4				X=-111,804.8 Y=-21,922.4	(30.01)	19C前	井筒の構造不明。
28	井戸506	円形 東西1.0 南北1.1				X=-111,785.4 Y=-21,860.4	29.38	19C	井筒の構造不明。
29	井戸520	円形 径1.2				X=-111,790.4 Y=-21,859.1	(29.56)	19C後	井筒の構造不明。
30	井戸523	円形 東西1.2 南北1.4	縦板組 径0.65 長さ0.80			X=-111,801.9 Y=-21,871.7	28.50	19C後	桶。
31	井戸528	円形 径0.9	瓦積 内径0.65 残存高0.6			X=-111,805.4 Y=-21,862.2	29.00	19C前	瓦は2段目まで残存。 一周9枚。
32	井戸550	円形 東西1.25 南北1.4				X=-111,793.0 Y=-21,860.2	29.42	19C中	井筒の構造不明。
33	井戸552	円形 径1.2	縦板組 痕跡のみ 径0.70 長さ0.08			X=-111,802.2 Y=-21,876.7	29.15	19C後	焼瓦が多く入る。桶。
34	井戸553	円形 径1.4	石組 内径0.8			X=-111,803.8 Y=-21,877.5	29.38	16C～ 17C初	石組は1段目のみ残存。
35	井戸557	円形 東西1.3 南北1.5	瓦積 内径0.8 残存高0.3			X=-111,803.4 Y=-21,875.7	28.86	19C中	瓦は1段目のみ残存。 完全な円周では残って おらず瓦は6枚目まで 残存。
36	井戸567	円形 東西1.1 南北1.3	縦板組 痕跡のみ 径0.70 長さ0.8			X=-111,803.4 Y=-21,871.7	28.40	19C	桶。
37	井戸568	円形 東西0.7以上 南北1.2				X=-111,803.4 Y=-21,876.4	(29.00)	19C?	井筒の構造不明。
38	井戸575	円形 径1.2	瓦積 径不明			X=-111,803.2 Y=-21,885.2	29.69	19C後	検出面より-0.85で瓦積 検出。焼土・焼瓦が多く 入る。
39	井戸593	円形 東西1.2 南北1.35	縦板組 径0.7 長さ0.2			X=-111,803.4 Y=-21,867.2	28.45	19C	桶?
40	井戸595	円形 東西1.2 南北0.9以上	瓦積 内径0.8			X=-111,805.6 Y=-21,890.8	(30.04)	19C後	焼瓦・焼土が多く入る。
41	井戸701	円形 径1.1				X=-111,791.5	(29.59)	19C	井筒の構造不明。

() 現状値、単位 (m)

番号	名称	掘形	井筒	木杵・横棧・側板	底部施設	位置	底部標高	時期	備考
42	井戸722	円形 径1.1				X=-111,803.0 Y=-21,892.8	(29.88)	19C	井筒の構造不明。
43	井戸723	円形 東西1.4 南北1.3				X=-111,803.2 Y=-21,901.3	(29.97)	19C中	焼瓦が多く入る。井筒の構造不明。
44	井戸940	円形 東西1.15 南北0.95				X=-111,778.1 Y=-21,899.8	(29.70)	18C後	石は抜かれる。井筒の構造不明。
45	井戸946	円形 東西1.4 南北1.25				X=-111,783.0 Y=-21,867.1	29.71	18C後	石は抜かれる。井筒の構造不明。
46	井戸992	円形 径1.1				X=-111,782.1 Y=-21,867.9	29.86	17C初	石は抜かれる。井筒の構造不明。
47	井戸1021	円形 径1.2	縦板組			X=-111,806. ? Y=-21,889. ?	(29.76)	18C	南壁にかかる。桶を積み上げる。
48	井戸1022	円形 径1.0				X=-111,801.3 Y=-21,879.4	(29.35)	18C	石は抜かれる。井筒の構造不明。
49	井戸1117	円形 東西1.3 南北1.4				X=-111,796.0 Y=-21,887.1	29.55	17C前	石は抜かれる。井筒の構造不明。
50	井戸1244	円形 東西1.5 南北1.4				X=-111,780.1 Y=-21,860.5	29.53	18C前	石は抜かれる。井筒の構造不明。
51	井戸1299	円形 東西1.4 南北1.55	瓦積 内径0.85			X=-111,794.4 Y=-21,904.3	(29.10)	19C	
52	井戸1300	円形 東西1.75 南北1.2以上				X=-111,777.3 Y=-21,883.5	(30.19)	17C前	北壁にかかる。石は抜かれる。
53	井戸1306	円形 東西1.35 南北1.1	石組 内径0.65 残存高0.9		なし	X=-111,776.7 Y=-21,873.2	30.06	17C	
54	井戸1370	円形 径1.3				X=-111,804.3 Y=-21,919.7	(30.22)	18C後	石は抜かれる。
55	井戸1385	円形 径1.5	石組 内径0.8 残存高1.3	東西0.65、南北0.65	なし	X=-111,801.2 Y=-21,916.2	28.65	16C	底部に横板を木杵として据える。
56	井戸1417	楕円形 東西1.2 南北1.5				X=-111,785.5 Y=-21,879.0	(28.80)	17C後	石は抜かれる。
57	井戸1420	不整円形 東西2.4 南北2.0				X=-111,796.8 Y=-21,899.9	(29.26)	17C	井筒の構造不明。
58	井戸1422	円形 径1.5				X=-111,778.1 Y=-21,894.3	(29.56)	17C前	北壁にかかる。井筒の構造不明。
59	井戸1513	円形 東西1.0以上 南北2.1				X=-111,787.0 Y=-21,859.2	(29.80)	17C後	石は抜かれる。埋土に貝殻多く入る。
60	井戸1533	円形 東西2.0 南北1.8	石組 内径0.9	東西0.8、南北0.9	なし	X=-111,797.4 Y=-21,914.4	28.53	16C末～ 17C初	石組は底部より1段目のみ残存。底部に横板を木杵として据える。
61	井戸1644	円形 東西2.1 南北1.9		東西0.9のみ遺存、先端欠き込みあり。	なし	X=-111,801.3 Y=-21,873.0	28.97	16C末～ 17C初	中位で鹿骨が出土。石は抜かれる。底部に横棧を方形に据える。
62	井戸1688	不整円形 東西1.8 南北1.5				X=-111,802.3 Y=-21,895.8	(29.48)	19C中	石は抜かれる。

() 現状値、単位 (m)

番号	名称	掘形	井筒	木柵・横棧・側板	底部施設	位置	底部標高	時期	備考
63	井戸1751	円形 径1.6	石組 内径0.8 残存高0.4		痕跡のみ 径0.6 深さ0.4	X=-111,791.5 Y=-21,867.6	28.94	16C後	
64	井戸1872	楕円形 東西1.4 南北1.1				X=-111,798.4 Y=-21,885.9	(29.59)	16C末～ 17C初	石は抜かれる。
65	井戸1982	隅丸方形 東西2.5 南北1.7以上	木柵組	東西0.85、南北長さ 0.45以上。 横棧は幅0.08で3段 目まで残る。 側板は幅0.17、長さ 0.85以上。	なし	X=-111,777.2 Y=-21,888.4	28.44	12C末～ 13C初	北壁にかかる。
66	井戸2075	隅丸方形 東西1.6 南北1.5	石組 内径0.8 残存高1.1		なし	X=-111,800.3 Y=-21,898.2	29.23	15C	
67	井戸2130	円形 径1.8			なし	X=-111,797.5 Y=-21,895.2	29.48	16C末～ 17C初	石は抜かれる。
68	井戸2290	不整円形 東西1.4 南北1.2			なし	X=-111,804.9 Y=-21,896.7	28.80	16C?	石は抜かれる。
69	井戸2300	円形 東西1.8 南北1.7			なし	X=-111,805.3 Y=-21,899.9	29.57	17C前～ 後	石は抜かれる。
70	井戸2313	円形 径1.3			なし	X=-111,797.7 Y=-21,908.0	29.25	17C前	石は抜かれる。
71	井戸2317	円形 東西1.6 南北1.5	石組 内径0.8 残存高1.1	痕跡のみ 東西0.60、南北0.65 幅0.35	なし	X=-111,777.8 Y=-21,898.6	28.78	17C後～ 18C末	底部に横板を木柵とし て据える。
72	井戸2335	不整円形 東西2.2 南北0.9以上				X=-111,805.5 Y=-21,902.7	(29.77)	15C	南壁にかかる。
73	井戸2345	円形 東西2.2 南北2.1				X=-111,804.8 Y=-21,901.6	29.36	12C末～ 13C初	木柵の痕跡なし。
74	井戸2398	不整円形 東西1.5 南北1.4	石組 内径0.7 残存高0.9	東西0.8、南北0.8 幅0.08	なし	X=-111,801.2 Y=-21,908.8	29.01	16C末～ 17C初	底部に横棧を方形に据 える。
75	井戸2500	円形 東西1.9 南北2.0	石組 内径0.85	痕跡のみ 東西0.83、南北0.38 幅0.4	なし	X=-111,796.3 Y=-21,905.6	28.80	16C末～ 17C初	石組は底部より1段目 が残存。底部に横板を 木柵として斜めに据え る。
76	井戸2542	円形 東西1.7 南北1.5以上	石組 内径1.0 残存高1.2	東西0.50、南北0.45	なし	X=-111,803.8 Y=-21,910.1	28.56	16C	底部に横板を拵として 据える。
77	井戸2543	円形 東西1.5 南北1.4			なし	X=-111,805.0 Y=-21,908.1	28.81	14C前	木柵・石材の痕跡なし。
78	井戸2617	不整円形 東西1.7以上 南北1.9	木柵組	痕跡のみ 東西1.0、南北1.0 側板は幅0.12、高さ 0.30以上 横棧は不明	なし	X=-111,801.2 Y=-21,915.0	28.65	14C	底部に木柵の痕跡残る。
79	井戸2650	方形 東西2.2 南北2.3	木柵組	痕跡のみ 東西1.1、南北0.9 側板は高さ0.2以上	なし	X=-111,804.1 Y=-21,912.7	28.78	12C末～ 13C初	底部に木柵の痕跡残る。
80	井戸2666	円形 東西2.4 南北2.3	石組 内径1.0		なし	X=-111,796.4 Y=-21,913.2	28.16	16C末～ 17C初	石組は底部より1段目 が数個残存。

() 現状値、単位 (m)

番号	名称	掘形	井筒	木枠・横棧・側板	底部施設	位置	底部標高	時期	備考
81	井戸2670	方形 東西1.3 南北1.3	木枠組	痕跡のみ 東西0.9、南北0.9 側板は高さ0.2以上	なし	X=-111,795.7 Y=-21,920.8	28.27	15C	底部に木枠の痕跡残る。
82	井戸2680	隅丸方形 東西2.0 南北2.3	木枠組	痕跡のみ 東西1.1、南北1.1 側板は高さ0.75以上	痕跡のみ 径0.45 深さ0.20	X=-111,791.5 Y=-21,919.5	28.26	13C初	
83	井戸2700	円形 東西1.1 南北1.0				X=-111,791.9 Y=-21,916.6	29.10	15C	木枠の痕跡なし。
84	井戸2712	円形 東西2.5 南北1.2以上				X=-111,804.9 Y=-21,916.0	28.18	14C	南壁にかかる。
85	井戸2721	隅丸方形 東西1.3 南北1.3	縦板組	痕跡のみ 円形で径0.7 側板は高さ0.7以上	なし	X=-111,794.3 Y=-21,916.9	28.67	15C	
86	井戸2745	隅丸方形 東西1.8 南北1.9	木枠組	東西0.95、南北1.0 幅0.07 側板は幅不明、長さ 0.3以上		X=-111,798.9 Y=-21,919.0	28.46	13C中	東西が凸、南北が凹。
87	井戸2746	隅丸方形 東西1.5 南北1.6				X=-111,791.4 Y=-21,916.4	28.20	15C	井戸2700の下で検出。 木枠・石材の痕跡なし。
88	井戸2751	円形 径1.5	石組 内径0.8 残存高1.5	痕跡のみ 東西1.1、南北1.1	なし	X=-111,778.2 Y=-21,920.5	28.82	17C前	底部に板を斜め方向に 敷く。
89	井戸2768	円形 東西1.8 南北1.9	石組 内径0.9 残存高0.5	東西0.85、南北0.85 幅0.3	なし	X=-111,788.9 Y=-21,920.3	28.63	15C	底部に横棧を木枠（深 さ0.3）として据える。
90	井戸2786	方形 東西1.2 南北1.5				X=-111,779.8 Y=-21,921.0	30.22	18C前	石は抜かれる。
91	井戸2857	方形 東西1.2 南北1.2	木枠組	痕跡のみ 東西0.7、南北0.66 側板は幅0.2、高さ 0.2以上。	なし	X=-111,796.5 Y=-21,861.0	29.01	12C後	底部に木枠の痕跡が残 る。
92	井戸3016	円形 東西1.8 南北1.9				X=-111,800.2 Y=-21,877.6	29.27	16C末～ 17C初	石は抜かれる。
93	井戸3120	隅丸方形 東西1.5 南北1.6			なし	X=-111,799.6 Y=-21,889.8	29.44	11C後	木枠の痕跡はないが、 底部中央は東西1.0、南 北0.8で窪む。
94	井戸3127	方形 東西2.2 南北2.4			なし	X=-111,798.1 Y=-21,919.3	29.15	13C中	木枠の痕跡なし。
95	井戸3144	隅丸方形 東西1.4 南北1.0			痕跡か？	X=-111,800.2 Y=-21,885.7	29.53	11C	木枠の痕跡なし。
96	井戸3221	円形 径1.6	縦板組	痕跡のみ 遺存具合悪く不明 側板は痕跡のみ 幅0.2、高さ0.5以上。	なし	X=-111,791.4 Y=-21,898.8	28.47	14C	
97	井戸3312	方形 東西2.4 南北2.2以上				X=-111,777.9 Y=-21,901.3	29.20	13C前	北壁にかかる。木枠の 痕跡なし。
98	井戸3321	方形 東西1.5 南北1.3以上	木枠組	痕跡のみ 東西0.9、南北0.3 以上 幅0.1程 側板は痕跡のみ		X=-111,777.5 Y=-21,900.5	28.91	12C前	北壁にかかる。

() 現状値、単位 (m)

番号	名称	掘形	井筒	木枠・横棧・側板	底部施設	位置	底部標高	時期	備考
99	井戸3325	円形 東西2.8 南北2.5	木枠組	痕跡のみ 東西0.91、南北0.93 側板は痕跡のみ 一辺5～6枚程 幅0.2以上、高さ0.1 以上	なし	X=-111,783.5 Y=-21,918.3	28.70	12C末	木枠は底部のみ残存。
100	井戸3330	円形 東西2.5 南北1.0以上	木枠組	痕跡のみ 規模不明		X=-111,777.0 Y=-21,875.0	(29.72)	11C後	北壁にかかる。
101	井戸3403	円形 東西1.7 南北1.8以上			径0.45 深さ0.24	X=-111,802.3 Y=-21,874.0	28.95	12C前	木枠の痕跡なし。底部 中央に曲物痕跡あり。
102	井戸3429	方形 東西1.0 南北1.2			径0.55 深さ0.25	X=-111,799.0 Y=-21,869.3	29.41	11C後	底部中央に曲物痕跡あり。
103	井戸3497	円形 径1.2			痕跡のみ 径0.4 深さ0.1	X=-111,786.1 Y=-21,863.1		11C中	木枠の痕跡なし。
104	井戸3513	円形 径1.4				X=-111,776.9 Y=-21,860.3	(29.83)	17C	未掘のため詳細不明、 路面排除後に検出。
105	井戸3516	円形 東西1.5 南北0.8以上				X=-111,776.9 Y=-21,871.4	(29.24)	11C	北壁にかかる、木枠の 痕跡なし。
106	井戸3520	円形 東西1.0以上 南北0.8以上				X=-111,805.4 Y=-21,909.4		13C	木枠の痕跡なし。
107	井戸3600	円形 東西1.9 南北1.6以上	石組 内径0.8 残存高0.8	東西0.9、南北0.8	なし	X=-111,778.2 Y=-21,882.4	28.97	14C?	底部に横棧を方形に据 える。
108	井戸3652	円形 径1.5	瓦積 内径0.9			X=-111,781.6 Y=-21,888.7	(29.60)	19C	第1面時に攪乱とした もの、第3面で瓦積検 出。
109	井戸3653	円形 径1.4	漆喰 内径0.8			X=-111,779.2 Y=-21,919.5	(29.77)	19C	第3面で漆喰の枠を検 出。
110	西2区 井戸82	円形 径1.6	石組 内径0.8 残存高1.6	東西0.6、南北0.6 高さ0.15	なし	X=-111,774.0 Y=-21,941.1	28.83	16C末	底部に横板を木枠とし て据える。
111	西3区 井戸35	不整形 東西1.4以上 南北0.85以上	石組 内径0.9			X=-111,789.8 Y=-21,940.0	(30.24)	15C～ 16C	東壁、南壁にかかる。
112	西4区 井戸1	不整形 東西1.7 南北1.4以上	漆喰 瓦積 内径0.8			X=-111,793.8 Y=-21,941.7	(29.80)	19C後	上部は漆喰、下部は瓦 積。瓦は幅0.23、高さ 0.3で2段目まで検出。
113	西4区 井戸2	円形 径1.8	漆喰 内径0.8前後			X=-111,793.5 Y=-21,939.9	29.89	18C～ 19C	

観察表2 埋甕一覧表

番号	名称	残存状態	底部標高(m)	位置	産地	時期	備考
1	埋甕6 A・B	2個重複する。外側(B)は底部から高さ27cmまで。内側(A)は底部から25cmまで残存。	B 31.19 A 31.23	X=-111,805.2 Y=-21,922.3	信楽	19C後	埋土に漆喰片入る。Aは内面に白い結晶付着。
2	埋甕72	底部より50cm残存。	31.28	X=-111,800.3 Y=-21,899.8	信楽	19C	埋土に炭、焼土入る。
3	埋甕93	底部より51cm残存。	31.33	X=-111,800.5 Y=-21,886.2	信楽	19C後	埋土に焼土、焼瓦、瓦入る。内面に白い結晶付着。
4	埋甕95	底部より56.5cm残存。口縁部一部残存。	31.36	X=-111,799.1 Y=-21,895.5	信楽	19C	埋土に炭、焼土入る。
5	埋甕98	底部より18cm残存。	31.23	X=-111,800.6 Y=-21,876.1	信楽	19C	埋土に焼土入る。
6	埋甕99	底部より18cm残存。	31.23	X=-111,800.7 Y=-21,876.7	信楽	19C中	埋土に焼土入る。
7	埋甕115	底部より52.5cm残存。口縁部残存。	31.34	X=-111,790.5 Y=-21,884.1	信楽	19C	埋土に焼土入る。
8	埋甕118	底部より24cm残存。	31.23	X=-111,799.9 Y=-21,881.1	信楽	19C	埋土に焼土、瓦入る。
9	埋甕127	底部より32cm残存。	31.22	X=-111,800.5 Y=-21,881.8	信楽	19C	埋土に焼土、瓦、コンクリート入る。
10	埋甕133	底部より44cm残存。	31.32	X=-111,800.2 Y=-21,905.7	信楽	19C	埋土に焼土入る。
11	埋甕135	底部より14.5cm残存。	31.25	X=-111,799.2 Y=-21,875.0	信楽	19C	埋土に焼土入る。
12	埋甕149	底部より55cm残存。口縁部も3/4程残存。	31.415	X=-111,790.3 Y=-21,898.5	信楽	19C後	埋土に漆喰、磚入る。
13	埋甕175	底部より59cm残存。	31.22	X=-111,798.3 Y=-21,890.7	信楽	19C後	土壇176に切られる。埋土に炭、焼土、漆喰入る。内面に白い結晶付着。
14	埋甕189	底部より49cm残存。	31.12	X=-111,797.9 Y=-21,884.3	信楽	19C	埋土に礫、漆喰入る。
15	埋甕322			X=-111,797.0 Y=-21,905.8	信楽	19C前	埋土に焼土、漆喰入る。
16	埋甕340	底部より65cm残存。	31.225	X=-111,790.6 Y=-21,914.3	信楽	19C前	埋土に焼土、瓦入る。器高67.8cm、最大径72.6cm、底径28.2cm。
17	埋甕341	底部より46cm残存。	31.39	X=-111,790.4 Y=-21,912.7	信楽	19C後	埋土に漆喰、瓦入る。
18	埋甕358	底部より24cm残存。	31.07	X=-111,797.9 Y=-21,870.8	信楽	19C	埋土に焼土入る。
19	埋甕360			X=-111,777.2 Y=-21,872.9	信楽	19C中	埋土に漆喰入る。
20	埋甕377	底部より60cm残存。	30.98	X=-111,801.3 Y=-21,918.6	備前	17C前	埋土に焼土入る。器高59.95cm、最大径80.8cm、底径41.6cm。内面に白い結晶付着。第3面。
21	埋甕384	底部より23cm残存。	31.32	X=-111,780.8 Y=-21,865.9	信楽	19C	埋土に漆喰入る。
22	埋甕395	底部より10cm残存。	31.215	X=-111,800.7 Y=-21,867.4	信楽	19C	埋土に焼土入る。
23	埋甕446	底部より27.5cm残存。	31.015	X=-111,778.0 Y=-21,859.2	信楽	19C	埋土に焼土入る。
24	埋甕453	底部より58cm残存。	31.03	X=-111,801.3 Y=-21,917.7	信楽	18C～ 19C初	埋土に焼土、漆喰入る。第2面。

番号	名称	残存状態	底部標高(m)	位置	産地	時期	備考
25	埋甕465	底部より26cm残存。	31.04	X=-111,792.0 Y=-21,866.2	信楽	19C	埋土に焼土、漆喰入る。
26	埋甕475			X=-111,794.8 Y=-21,865.9	信楽	19C	埋土に焼土入る。
27	埋甕477	底部より12cm残存。	31.15	X=-111,789.8 Y=-21,867.1	信楽	19C	埋土に漆喰入る。
28	埋甕487	底部より34.5cm残存。	31.14	X=-111,797.6 Y=-21,900.3	信楽	19C	埋土に漆喰、焼土入る。
29	埋甕596	底部のみ残存。	31.225	X=-111,800.6 Y=-21,871.7	信楽	19C	埋土に焼土入る。
30	埋甕696	底部より43cm残存。	31.29	X=-111,800.4 Y=-21,895.5	信楽	19C?	埋土に礫、漆喰入る。
31	埋甕715	底部より45cm残存。	31.29	X=-111,796.5 Y=-21,895.7	信楽	19C前	埋土に漆喰、焼土入る。
32	埋甕721	底部より45cm残存。	31.21	X=-111,790.6 Y=-21,878.9	信楽	19C前	埋土に焼土入る。
33	埋甕743	底部より39cm残存。	31.125	X=-111,797.8 Y=-21,879.5	信楽	19C前	埋土に漆喰入る。
34	埋甕749	底部より66cm残存。口縁も一部残存。	31.2	X=-111,794.0 Y=-21,900.0	信楽	18C～ 19C前	埋土に焼土入る。器高65.2cm、口径59.2cm、底径20.6cm。甕の底に瓦を敷く。内面に白い結晶付着。第2面。
35	埋甕756	底部より51cm残存。	31.45	X=-111,785.8 Y=-21,899.7	信楽	19C前	埋土に漆喰入る。内部に結晶付着。
36	埋甕757	底部より37cm残存。	31.55	X=-111,786.3 Y=-21,899.8	信楽	19C	埋土に漆喰入る。
37	埋甕789	底部より30cm残存。	31.36	X=-111,799.7 Y=-21,900.5	信楽	18C～ 19C	埋土に焼土入る。第2面。
38	埋甕797			X=-111,777.2 Y=-21,877.7		19C?	埋土に焼土入る。
39	埋甕806	底部より44cm残存。	31.01	X=-111,788.4 Y=-21,897.6	信楽	19C	上部に甕の破片多く含む。内面に白い結晶付着。
40	埋甕855 A・B	2個重複する。外側(B)は底部から49cmまで。内側(A)は底部から54cmまで残存。	B 31.02 A 31.16	X=-111,797.5 Y=-21,904.8	信楽	18C後	埋土に漆喰入る。A:器高55.8cm、最大径56.0cm、底径22.2cm。第2面。
41	埋甕862	底部より48cm残存。	31.11	X=-111,795.6 Y=-21,885.0	信楽	18C後	埋土に焼土入る。第2面。
42	埋甕887	底部より45cm残存。	33.36	X=-111,789.6 Y=-21,914.3	信楽	18C～ 19C初	埋土に焼土入る。第2面。
43	埋甕933	底部より70cm残存。口縁も一部残存。	30.82	X=-111,781.6 Y=-21,915.4	信楽	18C後	埋土に礫入る。第2面。
44	埋甕1095	上部はほぼなし。	31.38	X=-111,791.2 Y=-21,888.1	信楽	18C後	埋土に礫入る。第2面。

観察表3 胞衣壺一覧表

番号	名称	残存状態	底部標高(m)	位置	産地	時期	備考
1	胞衣壺55	身のみ完存。	31.59	X=-111,802.4 Y=-21,893.9	伏見・深草	19C	
2	胞衣壺213	底部より3~4cm残存。	31.69	X=-111,787.1 Y=-21,888.6	伏見・深草	19C	
3	胞衣壺284	底部より5.5cm残存。蓋も残存。	31.625	X=-111,790.8 Y=-21,882.6	伏見・深草	19C	埋土に焼土入る。
4	胞衣壺320	身は完存。蓋も一部残存。	31.52	X=-111,786.7 Y=-21,871.2	伏見・深草	19C	埋土に焼土、焼瓦入る。器高7.2cm、口径13.9cm、底径14.6cm。
5	胞衣壺324	身は完存。蓋も一部残存。	31.65	X=-111,798.5 Y=-21,905.9	伏見・深草	19C	
6	胞衣壺481	身のみ完存。	31.79	X=-111,794.8 Y=-21,902.9	伏見・深草	19C	
7	胞衣壺495	身のみ完存。	31.175	X=-111,781.9 Y=-21,858.7	伏見・深草	19C	器高7.5cm、口径11.7cm、最大径12.2cm、底径14.7cm。
8	胞衣壺532	身は完存。半分に分れた壺が二つ重なった状態で出土。	31.64	X=-111,787.1 Y=-21,894.6	伏見・深草	19C中	埋土に焼土入る。
9	胞衣壺578	身のみ完存。	31.785	X=-111,787.1 Y=-21,900.4	伏見・深草	19C	底径11.0cm。
10	胞衣壺603	身のみ完存。	31.73	X=-111,798.4 Y=-21,897.6	伏見・深草	19C	
11	胞衣壺608	身と蓋は完存。	31.48	X=-111,787.3 Y=-21,871.3	伏見・深草	19C	埋土に焼土入る。器高6.2cm、口径14.2cm、最大径16.4cm、底径14.6cm。
12	胞衣壺613	身のみ完存。	31.735	X=-111,798.5 Y=-21,887.0	伏見・深草	19C前	埋土に焼土入る。器高6.3cm、口径11.6cm、底径11.6cm。
13	胞衣壺623a	身は完存。蓋も一部残存。	31.56	X=-111,787.9 Y=-21,884.1	伏見・深草	19C	埋土に焼土入る。器高7.5cm、口径12.0cm、最大径15.0cm、底径13.0cm。
14	胞衣壺623b		31.65	X=-111,800.0 Y=-21,887.3	伏見・深草	19C?	
15	胞衣壺674	身のみ完存。	31.73	X=-111,791.8 Y=-21,882.0	伏見・深草	19C	器高7.0cm、底径13.5cm。
16	胞衣壺675	底部より5cm残存。下半分のみの残存と思われる。	31.76	X=-111,791.4 Y=-21,881.4	伏見・深草	19C	
17	胞衣壺676	身は完存。蓋の一部残存。	31.59	X=-111,795.7 Y=-21,883.0	伏見・深草	19C	器高6.4cm、口径12.0cm、底径12.6cm。
18	胞衣壺688	身のみ完存。	31.62	X=-111,793.4 Y=-21,884.6	伏見・深草	19C	埋土に焼土入る。底径14.0cm。
19	胞衣壺741	身は完存。蓋の一部残存。	31.56	X=-111,800.9 Y=-21,905.7	伏見・深草	18C後	胞衣壺か？ 底径17.2cm。第2面。
20	胞衣壺758	底部より5cm残存。	31.27	X=-111,787.2 Y=-21,896.9	伏見・深草	19C?	埋土に焼土入る。底径12.0cm。
21	胞衣壺765		31.65	X=-111,800.3 Y=-21,887.1	伏見・深草	19C	
22	胞衣壺791	底部より5cm残存。	31.525	X=-111,788.7 Y=-21,900.3	信楽	18C後	鉄釉壺。第2面。
23	胞衣壺809	底部より3cm残存。	31.575	X=-111,793.4 Y=-21,900.3	伏見・深草	19C	
24	胞衣壺984	身のみ完存。	31.105	X=-111,784.8 Y=-21,860.0	伏見・深草	19C	器高7.5cm、口径11.0cm、最大径14.8cm、底径12.2cm。

観察表4 陶器甕口縁部一覽表 (図版42・120・121)

No	出土遺構・層	産地	口縁幅	口縁残存	推定口径 (cm)	遺構年代	備考
42-1	検出中		未肥厚	1/32	40~46		渥美
42-2	重機掘削		未肥厚	1/10	46	15C~17C	須恵器系陶器
42-3	井戸2617		未肥厚	1/12	26	14C	須恵器系陶器
42-4	掘削中		未肥厚	1/25	64~72	13C~14C	須恵器
42-5	井戸2617		未肥厚	1/30	58~64	14C	須恵器
42-6	重機掘削	常滑	2.0	1/6	26	15C以降	
42-7	井戸2130	常滑	2.3	1/24	46~50	16C末~17C初	
42-8	重機掘削	常滑	2.4	1/16	48	15C~17C	
42-9	重機掘削	常滑	2.5	1/12	52	14C	
42-10	重機掘削	常滑	2.7	1/16	46	15C~17C	
42-11	土壌2241	常滑	3.0	1/16	52~56	16C末~17C初	
42-12	重機掘削	常滑	2.4	1/20	46~50	15C~17C	
42-13	土壌2710	常滑	2.6	1/10	36	14C~15C	
42-14	重機掘削	常滑	3.4	1/6	50	15C	
42-15	土壌2587	常滑	3.9	1/32	38~48	13C~14C	甕掘付穴
42-16	重機掘削	常滑	3.9	1/13	50	15C	
42-17	重機掘削	常滑	4.0	1/18	46~50	15C	
42-18	集石1873	常滑	4.3	1/32	60~68	15C	
42-19	土壌2579	常滑	4.5	1/5	64	14C	甕掘付穴
42-20	重機掘削	常滑	4.9	1/16	54	15C	
42-21	掘削中	常滑	5.0	1/16	52		
42-22	土壌2587	常滑	5.1	1/10	58	13C~14C	甕掘付穴
42-23	重機掘削	常滑	5.2	1/10	66	14C	
42-24	重機掘削	常滑	5.3	1/8	56	14C、17C	
42-25	土壌3024	常滑	5.4	1/20	70~74	15C前	
42-26	井戸2075	常滑	5.6	1/20	56~62	15C	
42-27	井戸2543	常滑	2.1	2/7	24.7	14C前	復元図化
42-28	重機掘削	常滑	4.6	1/4	44	15C末、16C	復元図化
42-29	掘削中	常滑	4.4	3/16	54		復元図化
42-30	重機掘削	備前	1.8	1/20	58~64	15C	
42-31	重機掘削	備前	2.1	1/10	44	15C前~17C	
42-32	土壌1836	備前	2.8	1/32	60~70	16C末~17C初	
42-33	土壌2502	備前	2.6	1/8	46	14C	
42-34	重機掘削	備前	2.9	1/20	60~66	15C~18C	
42-35	掘削中	備前	3.8	1/40	64~72		

観察表5 楊梅小路路面形成層出土遺物一覽表 (図版43)

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
43-01	土師器	皿	9.8	1.4		浅黄橙		在地	
43-02	土師器	皿	10.4	1.6		鈍い黄橙		在地	
43-03	土師器	皿	6.8	1.2		灰白		在地	
43-04	土師器	皿	9.4	1.4		鈍い黄橙		在地	
43-05	土師器	皿	9.0	1.7		鈍い黄橙		在地	
43-06	土師器	皿	10.0	1.7		鈍い黄橙		在地	
43-07	土師器	皿	9.9	1.7		鈍い黄橙		在地	
43-08	土師器	皿	10.0	1.8		鈍い黄橙		在地	
43-09	土師器	皿	14.0	2.3		淡黄		在地	
43-10	土師器	皿	14.0	2.7		鈍い橙		在地	
43-11	土師器	皿	14.0	2.9		浅黄		在地	
43-12	土師器	皿	15.3	3.0		浅黄橙		在地	
43-13	土師器	椀	12.7	4.4	5.0	灰白			貼付高台付
43-14	瓦質	火鉢	33~36			鈍い橙+橙			
43-15	瓦質	ミニチュア	2.8	3.8		灰白			ミニチュア壺
43-16	瓦質	鍋	19.0			灰			外面煤付着
43-17	須恵器	小皿	8.6	1.8	5.2	灰白			底部糸切未調整
43-18	須恵器	鉢			7.0	灰白	自然		山茶椀

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
43-19	須恵器	甕	27.0			暗灰			
43-20	須恵器	鉢			13.0	灰白			
43-21	須恵器	壺			8.2	灰白			
43-22	陶器	壺	9.0			灰白	褐		褐釉短頸壺
43-23	緑釉陶器	段皿			7.2	灰	緑		陰刻花文
43-24	白色土器	皿			4.2	クリーム白			底部糸切未調整
43-25	白色土器	皿			7.4	クリーム白			
43-26	磁器	小皿	9.8	2.5	3.0	灰白	白磁	中国	
43-27	磁器	椀			7.5	灰白	白磁	中国	
43-28	磁器	壺			9.4	灰黄	白磁	中国	
43-29	磁器	椀	17.0			灰白	白磁	中国	
43-30	磁器	椀	15.0			灰白	白磁	中国	
43-31	磁器	壺			8.5	鈍い橙	褐	中国	
43-32	土師器	皿	5.5	1.3		鈍い黄橙		在地	
43-33	土師器	皿	7.0	1.2		鈍い黄橙		在地	
43-34	土師器	皿	9.0	2.0		橙		在地	口縁に煤付着
43-35	土師器	皿	11.1	2.2		浅黄		在地	
43-36	土師器	皿	11.1	2.1		橙		在地	
43-37	土師質	鉢	9.2	3.6	5.0	灰白		在地	
43-38	土師質	焼塩壺蓋	8.5	2.3		鈍い橙		堺系	
43-39	土師質	焼塩壺				橙		堺系	
43-40	土師質	小壺	2.5	2.6		灰白		在地	
43-41	瓦質	火消壺蓋	20.0			灰			
43-42	瓦質	火入	30.0	9.6		灰黄			
43-43	陶器	椀	11.2	7.0	4.5	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	天目
43-44	陶器	鉢	7.7	5.8	5.2	浅黄橙	鉄	瀬戸・美濃系	碁笥底
43-45	陶器	鉢	23.8	5.4	15.0	浅黄橙	黄瀬戸	瀬戸・美濃系	平底
43-46	陶器	皿	10.8	3.3	5.0	鈍い黄橙	灰	肥前系	
43-47	陶器	椀	11.4	6.1	4.3	鈍い橙	灰	肥前系	
43-48	陶器	椀	11.6	6.2	4.5	鈍い橙	灰	肥前系	
43-49	陶器	椀	11.2			灰白	灰	肥前系	
43-50	陶器	椀			4.3	灰白	灰	肥前系	
43-51	陶器	壺	14.0			灰黄	鉄	肥前系	
43-52	陶器	鉢	14.5	6.9		鈍い黄褐	灰	丹波	
43-53	陶器	播鉢	34.0	13.6	11.3	橙		丹波	
43-54	磁器	皿				灰白	青花	中国	漳州窯系

観察表 6 土壙1666出土遺物一覧表 (図版44・45・129・130)

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
44-1	土師器	皿	5.5	1.0		鈍い黄橙		在地	
44-2	土師器	皿	6.0	1.4		鈍い黄橙		在地	
44-3	土師器	皿	6.1	1.3		鈍い黄橙		在地	
44-4	土師器	皿	6.4	1.5		鈍い黄橙		在地	
44-5	土師器	皿	6.5	1.3		鈍い黄橙		在地	
44-6	土師器	皿	10.0	2.4		鈍い橙		在地	
44-7	土師器	皿	10.5	2.3		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
44-8	土師器	皿	10.8	2.3		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
44-9	土師器	皿	11.0	2.4		鈍い黄橙		在地	
44-10	土師器	皿	11.0	2.4		鈍い黄橙		在地	
44-11	土師器	皿	11.2	2.1		鈍い橙		在地	
44-12	土師器	皿	11.4	2.3		鈍い橙		在地	
44-13	土師器	皿	11.5	2.1		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
44-14	土師器	皿	12.4	2.3		鈍い橙		在地	
44-15	土師器	皿	12.5	2.2		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
44-16	土師質	小壺	2.1	2.7		淡黄		伏見・深草	
44-17	土師質	小壺	2.2	2.5		灰白		伏見・深草	

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
44-18	土師質	釜	13.8	10.0		明黄褐		大和	
44-19	土師質	釜	21.3			橙		大和	
44-20	土師質	炮烙	26.3			褐灰		大和	
44-21	土師質	焼塩壺蓋	7.4	1.8		鈍い橙		堺系	
44-22	土師質	焼塩壺	6.0	8.5		橙		堺系	
44-23	土師質	焼塩壺	6.1	8.6		橙		堺系	
44-24	瓦質	火入	20.8	7.8		灰黄		在地	
44-25	瓦質	火入	31.7	10.5		鈍い橙		在地	
44-26	瓦質	瓦灯	19.3			褐灰		在地	
44-27	瓦質	瓦灯	最大19.6	8.2	14.6	灰		在地	
44-28	陶器	皿	7.8	1.9	5.0	灰白	灰	瀬戸・美濃系	
44-29	陶器	鉢	6.8	6.3	4.2	灰白	白	瀬戸・美濃系	
44-30	陶器	椀	10.7	7.1	4.9	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	天目
44-31	陶器	鉢	一辺9.4	4.0	4.9	灰白	志野	瀬戸・美濃系	
44-32	陶器	甕	14.8			灰白	鉄	瀬戸・美濃系	
44-33	陶器	汁注	4.7	10.3	6.5	橙	鉄	瀬戸・美濃系	
44-34	陶器	椀	10.0	7.4	4.8	明褐	灰	肥前系	
44-35	陶器	皿	12.7	3.9	4.0	褐	灰	肥前系	砂目
44-36	陶器	皿	13.6	3.4	5.0	橙	灰	肥前系	胎土目
44-37	陶器	播鉢	36.7	16.5	14.5	灰褐		丹波	
45-1	磁器	椀			4.1	淡黄	青花	中国	漳州窯系
45-2	磁器	皿	29.8	6.1	13.7	灰白	青花	中国	漳州窯系
45-3	陶器	四耳壺		残37.1	12.8	褐	鉄	瀬戸か	祖母懐茶壺か

観察表7 土壙1269出土遺物一覧表 (図版45)

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
45-4	土師器	皿	5.6	1.2		浅黄		在地	
45-5	土師器	皿	6.0	1.1		鈍い黄橙		在地	
45-6	土師器	皿	10.0	1.9		鈍い黄橙		在地	
45-7	土師器	皿	10.1	2.1		鈍い橙		在地	
45-8	土師器	皿	11.5	2.2		浅黄橙		在地	
45-9	土師器	皿	11.4	2.2		浅黄橙		在地	
45-10	土師器	皿	12.3	2.3		鈍い黄橙		在地	
45-11	陶器	皿	11.5	3.6	4.5	浅黄橙	灰	肥前系	
45-12	陶器	皿	13.2	4.1	4.4	浅黄	灰	肥前系	
45-13	陶器	皿	14.9	3.6	4.7	浅黄	灰	肥前系	
45-14	陶器	播鉢	26.0	12.7	13.2	赤		信楽	
45-15	陶器	播鉢	30.3	13.9	13.5	赤		備前	

観察表8 土壙1027出土遺物一覧表 (図版46・123)

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
46-1	土師器	皿	5.6	1.2		浅黄橙		在地	
46-2	土師器	皿	5.8	1.3		浅黄橙		在地	
46-3	土師器	皿	5.9	1.3		浅黄橙		在地	
46-4	土師器	皿	7.2	1.5		鈍い黄橙		在地	
46-5	土師器	皿	7.2	1.6		鈍い黄橙		在地	口縁に煤付着
46-6	土師器	皿	9.9	2.1		橙		在地	口縁に煤付着
46-7	土師器	皿	10.1	2.3		鈍い橙		在地	
46-8	土師器	皿	10.0	2.3		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
46-9	土師器	皿	10.0	2.2		橙		在地	口縁に煤付着
46-10	土師器	皿	10.2	2.4		橙		在地	口縁に煤付着
46-11	土師器	皿	10.0	2.1		橙		在地	口縁に煤付着
46-12	土師器	皿	10.0	2.1		浅黄橙		在地	
46-13	土師器	皿	10.8	2.3		鈍い橙		在地	

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
46-14	土師器	皿	11.2	2.1		鈍い橙		在地	
46-15	土師器	皿	11.0	2.1		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
46-16	土師器	皿	11.0	2.1		鈍い橙		在地	
46-17	土師器	皿	11.5	2.1		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
46-18	土師器	皿	12.0	2.2		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
46-19	土師器	皿	12.2	2.4		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
46-20	土師器	皿	12.4	1.9		鈍い橙		在地	口縁に煤付着
46-21	土師質	鉢	13.8	7.3		灰白		伏見・深草	
46-22	土師質	炮烙	29.2			鈍い黄橙		在地	
46-23	土師質	焼塩壺蓋	6.9	1.5		鈍い橙		堺系	
46-24	土師質	焼塩壺	5.8	9.1		橙		堺系	
46-25	土師質	焼塩壺	6.5	10.2		橙		堺系	「ミなと/藤左衛門」印
46-26	瓦質	火消壺蓋	19.0	2.6		暗灰			
46-27	瓦質	火入	15.8	6.0	14.9	灰			
46-28	瓦質	火鉢	29.0	10.5	25.1	黒			
46-29	磁器	皿	11.7	2.3	6.8	灰白	青花	中国	
46-30	磁器	皿	13.2	2.9	7.4	灰白	青花	中国	
46-31	磁器	椀	6.5	3.7	2.3	灰白	青花	中国	
46-32	磁器	椀	9.2	7.0	5.3	灰白	染付	肥前系	
46-33	磁器	椀	10.4	5.0	4.2	灰白	染付	肥前系	
46-34	磁器	椀	13.9	5.9	5.2	灰白	青花	中国	
46-35	磁器	椀	6.2	4.1	2.9	灰白	灰	肥前系	
46-36	陶器	椀	10.2	6.8	3.8	灰白	灰	肥前系	
46-37	陶器	椀	13.4	4.8	4.8	灰白	灰	肥前系	
46-38	陶器	椀	13.4	5.0	4.5	灰白	灰	肥前系	
46-39	陶器	皿	12.5	3.1	5.2	鈍い黄橙	灰	肥前系	
46-40	陶器	皿	13.4	3.7	4.1	灰白	灰	肥前系	
46-41	陶器	椀	7.7	4.1	3.8	灰白	灰	瀬戸・美濃系	
46-42	陶器	椀	9.9	6.9	5.1	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	
46-43	陶器	椀	8.3	6.2	3.7	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	
46-44	陶器	椀	7.5	7.5	4.9	灰白	灰	瀬戸・美濃系	
46-45	陶器	皿	14.0	3.8	6.3	灰白	灰	瀬戸・美濃系	
46-46	陶器	皿	15.5	3.6	8.2	灰白	灰釉具須絵	瀬戸・美濃系	
46-47	陶器	鉢	13.2	7.0	10.0	灰白	灰	瀬戸・美濃系	
46-48	陶器	播鉢	35.0	14.8	13.0	暗褐		丹波	

観察表9 土壌1477出土遺物一覧表 (図版47・48・124)

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
47-1	土師器	皿	5.3	1.4		橙		在地	
47-2	土師器	皿	5.7	1.3		鈍い橙		在地	
47-3	土師器	皿	5.8	1.5		鈍い黄橙		在地	
47-4	土師器	皿	5.8	1.5		鈍い黄橙		在地	
47-5	土師器	皿	5.8	1.3		浅黄橙		在地	
47-6	土師器	皿	9.0	1.9		鈍い黄橙		在地	
47-7	土師器	皿	9.2	2.0		鈍い黄橙		在地	
47-8	土師器	皿	9.4	2.1		鈍い黄橙		在地	
47-9	土師器	皿	10.0	2.2		鈍い黄橙		在地	
47-10	土師器	皿	10.2	2.3		鈍い黄橙		在地	
47-11	土師器	皿	10.5	1.9		浅黄		在地	
47-12	土師器	皿	10.7	2.1		黒		在地	胎土瓦質化
47-13	土師器	皿	11.0	2.3		浅黄橙		在地	
47-14	土師器	皿	11.0	2.4		鈍い黄橙		在地	
47-15	土師器	皿	11.1	2.2		浅黄橙		在地	
47-16	土師器	皿	12.0	2.0		鈍い黄橙		在地	
47-17	土師質	焼塩壺蓋	6.7	1.5		鈍い橙		堺系	
47-18	土師質	焼塩壺蓋	6.4	1.5		鈍い橙		堺系	

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
47-19	土師質	焼塩壺	5.7	8.9	4.0	鈍い黄橙		堺系	表面上部に指頭圧痕有
47-20	土師質	焼塩壺	5.8	9.1	4.4	鈍い黄橙		堺系	
47-21	土師質	羽釜	21.2			淡黄橙		大和	内面に指頭圧痕有
47-22	土師質	炮烙	28.0			淡橙		大和か	
47-23	瓦質	火入	24.0	15.8	25.3	灰白		大和	
47-24	磁器	椀	7.7	7.7	5.4	白	染付	肥前系	
47-25	磁器	椀	8.0	6.7	4.8	白	染付	肥前系	
47-26	磁器	椀	9.9	6.6	4.7	灰白	染付	肥前系	
47-27	磁器	椀	13.4	7.2	4.6	白	染付	肥前系	荒磯文
47-28	磁器	皿	12.4	3.7	5.2	灰白	染付	肥前系	
47-29	磁器	小杯	7.7	4.2	2.6	白	青花	中国	景德镇系
47-30	磁器	椀		残4.5	5.4	白	青花	中国	漳州窯系
47-31	陶器	小杯	8.6	3.6	4.0	鈍い黄橙	灰	肥前系	
47-32	陶器	椀	9.4	6.9	4.2	鈍い橙	灰	肥前系	丸椀
47-33	陶器	椀	10.9	5.7	4.2	灰白	灰	肥前系	丸椀
47-34	陶器	椀	11.1	6.9	4.4	灰白	青緑	肥前系	
47-35	陶器	椀	12.0	6.2	4.3	明灰褐	鉄	肥前系	天目椀
47-36	陶器	椀	11.9	6.6	4.5	灰白	灰	肥前系	丸椀
47-37	陶器	椀	11.3	6.0	4.5	灰白	灰	肥前系	丸椀
47-38	陶器	椀	11.1	6.0	4.2	浅黄橙	灰	福岡系	
47-39	陶器	椀	12.5	7.3	5.0	鈍い橙	灰	肥前系	
47-40	陶器	椀		残6.9	5.6	浅黄橙	灰	肥前系	
47-41	陶器	椀	14.5	8.1	6.2	鈍い橙	錆絵	肥前系	絵唐津 沓茶椀
47-42	陶器	鉢	13.9	5.4	5.0	鈍い黄橙	錆絵	肥前系	絵唐津
47-43	陶器	皿	10.6	2.9	4.2	鈍い黄橙	灰	肥前系	
47-44	陶器	皿	14.1	3.7	4.8	灰白	灰	肥前系	砂目
47-45	陶器	香炉	10.5	5.0		灰白	鉄	瀬戸・美濃系	足付香炉 瀬戸・美濃系か
47-46	陶器	椀	11.0	6.3	3.7	明褐灰	鉄	瀬戸・美濃系	天目椀
47-47	陶器	椀	11.5	7.2	5.0	浅黄橙	鉄	瀬戸・美濃系	天目椀
47-48	陶器	椀	9.9	5.6	4.0	灰白	志野	瀬戸・美濃系	志野織部
48-1	陶器	皿	9.5	2.1	5.0	灰白	灰	瀬戸・美濃系	丸皿
48-2	陶器	皿	12.7	3.2	7.2	浅黄橙	灰	瀬戸・美濃系	菊皿
48-3	陶器	皿	19.2	4.0	11.1	灰白	御深井	瀬戸・美濃系	輪花
48-4	陶器	皿	18.0	2.3	9.1		絵志野	瀬戸・美濃系	
48-5	陶器	汁注	4.2	6.0	6.0	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	
48-6	陶器	鉢	8.1	5.4	4.6	灰白	志野	瀬戸・美濃系	
48-7	陶器	火入	10.5	9.5		浅黄橙	鉄	信楽	足付
48-8	陶器	火入	14.2			灰白	鉄	信楽	足付
48-9	陶器	壺	6.8	8.9	7.6	灰白	鉄	丹波	お歯黒壺
48-10	陶器	盤	37.2	8.7	23.4	鈍い黄橙		丹波	
48-11	陶器	播鉢	37.6	16.5	13.6	褐灰		丹波	
48-12	陶器	椀	13.7	4.8	5.6	浅黄橙	錆絵	京都	
48-13	軟質施釉	灯明皿	11.5	2.6		淡黄	透明		

観察表10 土壙1469出土遺物一覧表 (図版48)

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
48-14	土師器	皿	5.3	1.3		鈍い黄橙		在地	
48-15	土師器	皿	5.7	1.3		鈍い黄橙		在地	
48-16	土師器	皿	9.5	2.0		浅黄橙		在地	
48-17	土師器	皿	10.3	1.8		浅黄橙		在地	
48-18	土師器	皿	11.1	1.9		浅黄橙		在地	
48-19	磁器	皿	13.0	2.9	5.8	灰白	染付	肥前系	
48-20	陶器	皿	12.0	3.2	4.5	淡黄	灰	肥前系	
48-21	陶器	椀	10.6			浅黄橙	鉄	瀬戸・美濃系	天目
48-22	陶器	鉢	19.5	7.8	7.5	鈍い黄橙	白化粧鉄絵	中国	絵高麗 見込蛇ノ目釉剥
48-23	陶器	播鉢	40.3	17.7	16.2	鈍い黄橙+暗赤褐		信楽	長石粒多量含む

観察表11 石室1500出土遺物一覧表 (図版48)

No.	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
48-24	土師器	皿	5.4	1.0		浅黄橙		在地	
48-25	土師器	皿	6.0	1.3		淡黄		在地	
48-26	土師器	皿	9.9	1.7		灰黄		在地	
48-27	土師器	皿	10.1	2.0		灰白		在地	
48-28	土師器	皿	10.7	2.3		灰白		在地	
48-29	磁器	椀	10.6	5.5	4.5	白	青花	中国	漳州窯系
48-30	磁器	椀	15.0			灰白	青花	中国	漳州窯系 端反椀
48-31	土師質	炮烙	31.0			浅黄橙		大和	

観察表12 土壙1122出土遺物一覧表 (図版49~51・125)

No.	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
49-1	土師器	皿	5.5	1.4		鈍い橙		在地	口縁端部に煤付着
49-2	土師器	皿	5.7	1.2		鈍い橙		在地	
49-3	土師器	皿	5.7	1.3		鈍い橙		在地	
49-4	土師器	皿	5.7	1.4		鈍い黄橙		在地	
49-5	土師器	皿	9.1	1.7		鈍い橙		在地	
49-6	土師器	皿	10.2	1.9		鈍い橙		在地	
49-7	土師器	皿	10.6	1.5		鈍い橙		在地	
49-8	土師器	皿	10.8	2.2		鈍い橙		在地	口縁端部に煤付着
49-9	土師器	皿	11.0	2.1		鈍い黄橙		在地	
49-10	土師器	皿	11.3	2.0		鈍い橙		在地	
49-11	土師質	小壺	2.3	2.3		灰白		伏見・深草	外面に指頭圧痕
49-12	土師質	小壺	2.2	2.4		灰白		伏見・深草	
49-13	土師質	鉢	5.1	1.7	3.2	灰白		伏見・深草	
49-14	土師質	鉢	14.6	4.8		鈍い橙		伏見・深草か	外面底部に煤付着
49-15	土師質	火消壺蓋	20.2	3.8		橙		伏見・深草	
49-16	土師質	炮烙	28.4	6.0		褐灰		伏見・深草か	内外面に煤付着
49-17	土師質	炮烙	26.0			鈍い橙		伏見・深草か	底面に煤付着
49-18	土製品	人形		6.7		灰白		伏見・深草	
49-19	磁器	小杯	7.0	5.0	3.2	白	染付	肥前系	コンニャク文+草花文
49-20	磁器	小杯	7.0	4.7	3.0	白	染付	肥前系	草花文
49-21	磁器	仏飯器	7.4	4.7	3.9	灰白	染付	肥前系	梅樹文
49-22	磁器	小椀	7.4	4.2	2.8	灰白	白磁	肥前系	内部に紅付着
49-23	磁器	椀	9.2	4.1	3.2	白	白磁	肥前系	
49-24	磁器	椀	9.9	5.5	3.8	白	染付	肥前系	コンニャク文
49-25	磁器	椀	10.0	5.7	4.0	白	染付	肥前系	雨降文
49-26	磁器	椀	10.2	5.6	4.0	白	染付	肥前系	コンニャク文
49-27	磁器	椀	8.6	4.4	3.5	灰白	染付	肥前系	雨降文
49-28	磁器	椀	10.0	5.3	4.2	白	染付	肥前系	コンニャク文
49-29	磁器	椀	10.1	5.5	3.8	灰白	染付	肥前系	梅樹文
49-30	磁器	椀	10.2	5.6	4.2	灰白	染付	肥前系	コンニャク文+手描文
49-31	磁器	皿	9.6	2.4	5.2	灰白	染付	肥前系	コンニャク文
49-32	磁器	紅皿	4.2	1.4	1.3	灰白	白磁	肥前系	
49-33	磁器	皿	8.3	2.3	3.6	灰白	染付	肥前系	輪花
49-34	磁器	皿	13.9	4.0	7.4	灰白	染付	肥前系	輪花 沢潟文
49-35	磁器	皿	12.0	3.5	3.8	灰白	染付	肥前系	見込蛇ノ目釉剥
49-36	磁器	皿	12.6	3.4	4.0	灰白	染付	肥前系	見込蛇ノ目釉剥
49-37	磁器	皿	13.7	3.6	5.4	白	染付	肥前系	円圈文
49-38	磁器	皿	14.5	2.2	9.3	白	染付	肥前系	高台ハリ支え
49-39	磁器	皿	22.5	4.8	13.2	白	染付	肥前系	輪花 高台ハリ支え 口紅
49-40	磁器	段重 蓋	14.9	4.0	13.6	灰白	染付	肥前系	亀甲繫文
49-41	磁器	段重 身	14.8	6.1	9.0	灰白	染付	肥前系	亀甲繫文
49-42	磁器	鉢	15.0	6.4	5.0	灰白	染付	肥前系	輪花 捻花文

No.	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
50-1	陶器	丸椀	9.5	5.7	3.2	灰白	上絵	京都	上絵 (金・緑・赤・青彩)
50-2	陶器	丸椀	9.5	5.6	3.2	灰白	錆絵染付	京都	
50-3	陶器	丸椀	10.4	5.4	3.7	灰白	鉄	京都	
50-4	陶器	丸椀	11.0	5.7	3.8	灰白	錆絵染付	京都	見込目痕
50-5	陶器	小杉椀	11.0	5.9	4.9	灰白	灰	京都	
50-6	陶器	半筒椀	10.9	5.7	4.2	灰白	錆絵白化粧	京都	見込目痕
50-7	陶器	半筒椀	11.0	5.7	4.3	淡黄	錆絵白化粧	京都	見込目痕
50-8	陶器	平椀	12.5	4.7	4.2	灰白	錆絵	京都	見込目痕
50-9	陶器	平椀	12.7	4.3	4.2	灰黄	錆絵	京都	見込目痕
50-10	陶器	鉢	7.2	4.7	5.8	灰白	錆絵染付	京都	
50-11	陶器	鉢	12.2	8.0	7.0	黄灰	錆絵染付	京都	
50-12	陶器	瓶	4.1	6.4	3.0	鈍い橙	灰	京都	
50-13	陶器	椀	9.6	6.0	4.6	白	呉須	肥前系	京焼風
50-14	陶器	平椀	12.4	4.4	5.0	灰白	呉須	肥前系	京焼風 「中村金」銘
50-15	陶器	平椀	13.2	5.2	4.6	灰白	呉須	肥前系	京焼風 「木下弥」銘
50-16	陶器	稜皿	21.6	5.8	12.0	灰黄	呉須	肥前系	京焼風 長方形杵印(不明)
50-17	陶器	鉢	17.6	6.4	8.4	灰白	呉須錆絵	肥前系	京焼風 「清水」銘
50-18	陶器	香炉	15.8	7.9	8.4	灰白	呉須	肥前系	京焼風
50-19	陶器	椀	10.9	5.6	4.2	黄灰	刷毛目	肥前系	
50-20	陶器	椀	11.0	5.5	4.2	黄灰	刷毛目	肥前系	
50-21	陶器	椀	11.3	5.8	4.2	鈍い橙	刷毛目	肥前系	見込蛇ノ目釉剥
50-22	陶器	椀	12.3	5.8	4.4	鈍い橙	刷毛目	肥前系	見込蛇ノ目釉剥
50-23	陶器	椀	12.1	7.5	5.2	灰黄	刷毛目	肥前系	
50-24	陶器	鉢	16.0	6.1	5.0	灰白	刷毛目	肥前系	見込蛇ノ目釉剥
50-25	陶器	片口鉢	24.7	10.5	9.5	赤	刷毛目	肥前系	
50-26	陶器	香炉	10.5	8.2	6.0	灰	灰	肥前系	
50-27	陶器	椀	11.0	7.5	5.0	鈍い橙	陶胎染付	肥前系	
50-28	陶器	椀	22.0	10.3	9.2	暗青灰	陶胎染付	肥前系	
50-29	陶器	椀	10.8	6.8	4.6	鈍い橙	鉄	肥前系	
50-30	陶器	皿	11.4	3.9	3.4	灰	青緑	肥前系	見込蛇ノ目釉剥
50-31	陶器	皿	12.2	3.7	4.6	明緑灰	青緑	肥前系	見込蛇ノ目釉剥
50-32	陶器	段皿	18.2	5.6	6.0	灰白	灰釉+鉄掛分	肥前系	見込蛇ノ目釉剥
50-33	陶器	皿	14.0	3.7	7.0	明緑灰	陶胎染付	肥前系	輪花 見込コンニャク文
50-34	陶器	椀	11.4	8.6	5.0	灰白	灰+鉄掛分	瀬戸・美濃系	
50-35	陶器	香炉	10.4	5.8	8.2	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	底部裏面に「ニ」の墨書
50-36	陶器	耳付鉢	17.4	7.6	14.0	淡黄	灰	瀬戸・美濃系	
50-37	陶器	片口鉢	14.4	8.6	7.0	灰白	灰	瀬戸・美濃系	見込目痕
51-1	陶器	鬘水入	長径12.6	3.4	13.2×3.9	灰白色	灰+錆絵	瀬戸・美濃系	摺絵
51-2	陶器	澆瓶	7.6	16.0	13.3	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	
51-3	陶器	壺	5.5	10.9	8.5	灰白	鉄	信楽	底部裏面に糸切痕
51-4	陶器	壺	10.6	14.8	10.0	灰白	鉄	信楽	内外面鉄釉
51-5	陶器	鉢	13.3	8.3	10.6	灰白	灰	信楽	
51-6	陶器	壺	7.2	9.6	8.0	鈍い橙	鉄	丹波	
51-7	陶器	瓶			6.0	橙		備前	底部に「寺見」の刻印
51-8	陶器	長胴瓶	11.2			暗赤灰		ベトナム	
51-9	軟質施釉	鬘水入	長径11.7	3.2	11.8×5.2	鈍い橙	透明+緑		
51-10	軟質施釉	灯明皿	10.3	2.0		赤褐	透明		口縁に煤付着
51-11	陶器	播鉢			17.2	暗赤褐	鉄	信楽	底部に「輪違」の窯印
51-12	陶器	播鉢	35.9	14.2	16.6	極暗赤褐	鉄	信楽	砂粒多量含む
51-13	陶器	播鉢	41.0	15.3	14.0	鈍い赤褐		備前	播目は口縁から底部へ

観察表13 土壙1234出土遺物一覽表 (図版52・53・129)

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
52-1	土師器	皿	5.2	1.1		鈍い橙		在地	
52-2	土師器	皿	5.2	1.1		鈍い橙		在地	
52-3	土師器	皿	5.8	1.1		鈍い橙		在地	
52-4	土師器	皿	5.5	1.1		鈍い橙		在地	
52-5	土師器	皿	8.2	1.8		灰		在地	
52-6	土師器	皿	8.5	1.6		浅黄橙		在地	
52-7	土師器	皿	9.2	2.0		浅黄橙		在地	
52-8	土師器	皿	10.0	1.8		鈍い橙		在地	
52-9	土師器	皿	9.8	1.4		浅黄		在地	
52-10	土師器	皿	10.4	1.9		鈍い橙		在地	
52-11	土師器	皿	10.4	2.0		鈍い橙		在地	
52-12	土師器	皿	10.5	2.1		鈍い橙		在地	
52-13	土師器	皿	11.0	1.7		浅黄橙		在地	
52-14	土師器	皿	12.8	2.1		鈍い橙		在地	
52-15	土師質	鉢	8.8	2.8	5.8	灰白		伏見・深草	
52-16	土師質	鉢	12.0	4.3	8.0	灰白		伏見・深草	
52-17	土師質	鉢	9.6	5.8		浅黄橙		伏見・深草	
52-18	土師質	焼塩壺蓋	8.0	1.8		浅黄橙		堺系	
52-19	土師質	焼塩壺	7.6	9.8	5.4	浅黄橙		堺系	「泉州麻生」銘
52-20	土師質	瓦灯	17.5	4.3		鈍い黄橙		伏見・深草	
52-21	土師質	風炉	19.8	19.6	15.4	鈍い橙		伏見・深草	
52-22	磁器	椀	8.7	4.7	3.4	白	染付	肥前系	コンニャク文
52-23	磁器	椀	9.8	5.7	4.2	白	染付	肥前系	藤文 高台内 大明年製
52-24	磁器	椀	9.8	5.7	3.8	白	染付	肥前系	コンニャク文+手描
52-25	磁器	椀	9.8	5.6	4.2	灰白	染付	肥前系	梅樹文 見込蛇ノ目釉剥
52-26	磁器	椀	11.0	6.1	4.4	白	染付	肥前系	草花文 高台内 大明年製
52-27	磁器	椀	9.9	4.7	3.8	白	染付	肥前系	壽亀甲文、高台内二重角福
52-28	磁器	杯	7.6	5.3	3.2	白	染付	肥前系	コンニャク文
52-29	磁器	仏飯器	7.0	5.7	3.8	白	染付	肥前系	コンニャク文
52-30	磁器	仏飯器	8.4	6.7	4.4	灰白	染付	肥前系	
52-31	磁器	香油壺		(残)9.0	5.4	白	染付	肥前系	
52-32	磁器	鉢	16.8	6.7	8.2	白	染付	肥前系	高台内ハリ支え 富貴長春
52-33	磁器	鬚水入	13.8×6.7	3.8		灰白	鉄	肥前系	線刻笹文
52-34	磁器	水滴		(残)5.1		灰白	染付	肥前系	獅子型
52-35	磁器	皿	9.0	2.6	4.2	灰白	青磁	中国	輪花、型押し
53-1	陶器	椀	9.8	5.0	4.0	灰黄	鉄	京都	
53-2	陶器	椀	9.8	5.9	3.4	灰白	上絵	京都	緑・黄彩
53-3	陶器	半筒椀	9.2	7.0	3.8	褐灰	灰	京都	高台内刻印
53-4	陶器	灯明受皿	11.2	2.5	5.0	鈍い橙	灰	京都	2箇所日痕
53-5	陶器	椀	10.4	7.3	5.0	褐灰	陶胎染付	肥前系	唐草文
53-6	陶器	椀	10.6	5.3	4.0	鈍い橙	刷毛目	肥前系	
53-7	陶器	椀	11.1	5.3	4.4	赤灰	刷毛目	肥前系	
53-8	陶器	椀	11.6	5.1	4.1	鈍い黄橙	刷毛目	肥前系	蛇ノ目釉剥
53-9	陶器	鉢	15.2	5.9	5.8	浅黄	刷毛目	肥前系	蛇ノ目釉剥
53-10	陶器	皿	11.4	3.1	4.0	灰白	陶胎染付	肥前系	蛇ノ目釉剥
53-11	陶器	壺蓋	11.4	3.8		褐灰	刷毛目	肥前系	
53-12	陶器	鉢	22.8	6.5	9.0	赤灰	刷毛+二彩	肥前系	見込砂目6箇所
53-13	陶器	片口鉢	23.8	11.7	10.6	赤褐	刷毛目	肥前系	
53-14	陶器	鉢	13.2	8.2	11.0	淡黄	灰釉+緑	瀬戸・美濃系	
53-15	陶器	灯明受皿	10.8	1.4		灰褐		備前	
53-16	陶器	広口壺	12.3	(残)9.9		鈍い黄橙	鉄		
53-17	陶器	鍋	23.0	11.0	13.0	灰白	鉄		
53-18	軟質施釉	椀	9.6	6.1	4.6	橙	赤・緑		楽系
53-19	軟質施釉	灯火具	6.0	2.3	3.4	橙	鉄		
53-20	軟質施釉	灯火具	8.0	2.6	4.4	橙	鉄		

観察表14 土壙820出土遺物一覧表 (図版54~57・126・127)

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
54-1	土師器	皿	4.9	1.2		浅黄橙		在地	
54-2	土師器	皿	5.2	1.3		浅黄橙		在地	
54-3	土師器	皿	5.5	1.3		鈍い黄橙		在地	
54-4	土師器	皿	5.7	1.5		浅黄		在地	
54-5	土師器	皿	7.6	1.5		浅黄橙		在地	
54-6	土師器	皿	7.8	1.6		浅黄橙		在地	
54-7	土師器	皿	7.7	1.6		浅黄橙		在地	
54-8	土師器	皿	8.0	1.5		浅黄橙		在地	
54-9	土師器	皿	8.0	1.5		鈍い橙		在地	
54-10	土師器	皿	8.5	1.4		浅黄橙		在地	
54-11	土師器	皿	9.8	2.0		浅黄		在地	
54-12	土師器	皿	10.0	1.9		オリーブ黄		在地	
54-13	土師器	皿	10.0	1.9		浅黄		在地	
54-14	土師器	皿	10.0	2.0		浅黄		在地	
54-15	土師器	皿	10.0	1.8		浅黄		在地	
54-16	土師器	皿	10.7	1.8		浅黄橙		在地	
54-17	土師器	皿	11.9	2.2		鈍い橙		在地	
54-18	土製品	泥面子	2.9	0.9		浅黄橙		伏見・深草	轡文
54-19	土製品	泥面子	3.0	1.0		鈍い黄橙		伏見・深草	笠文
54-20	土製品	面型	4.4			鈍い橙		伏見・深草	
54-21	土製品	土鈴	横幅2.9	2.9		浅黄橙		伏見・深草	
54-22	土製品	ミニチュア	2.6	3.3		灰白		伏見・深草	
54-23	土製品	ミニチュア				灰白	緑	伏見・深草	
54-24	土製品	ミニチュア	4.9	2.6	2.6	浅黄橙	透明	伏見・深草	
54-25	土製品	人形	横幅5.4	7.2		淡橙	緑	伏見・深草	
54-26	土製品	人形	横幅8.2	5.5		浅黄橙		伏見・深草	
54-27	土師質	ミニチュア	3.8	1.1		灰白		伏見・深草	輪花状口縁
54-28	土師質	ミニチュア	4.4	1.2		浅橙		伏見・深草	輪花状口縁
54-29	土師質	鉢	5.3	2.0		灰白		伏見・深草	
54-30	土師質	小壺	2.2	2.1		灰白		伏見・深草	
54-31	土師質	小壺	4.6	3.6		灰白		伏見・深草	
54-32	土師質	鉢	8.2	2.6		灰白		伏見・深草	
54-33	土師質	鉢	12.1	3.8		浅黄		伏見・深草	
54-34	土師質	焼塩壺蓋	6.6	1.8		橙		伏見・深草	
54-35	土師質	焼塩壺	4.3	6.1		鈍い橙		伏見・深草	内面に布目痕
54-36	土師質	焼塩壺	5.2	6.3		鈍い橙		伏見・深草	内面に布目痕
54-37	土師質	花塩壺	6.2	3.3		浅黄橙		伏見・深草	
54-38	土師質	焼塩壺蓋	8.0	1.7		橙		堺系	
54-39	土師質	焼塩壺	6.0	7.6		鈍い橙		堺系	「泉湊伊織」銘
54-40	土師質	花塩壺蓋	7.0	0.9		灰白		伏見・深草	「深草瓦師/御焼塩/田中良左衛門」銘
54-41	土師質	火消壺蓋	19.0	4.0		鈍い橙		伏見・深草	
54-42	土師質	火入	21.0	9.5	17.4	鈍い橙		伏見・深草	
54-43	土師質	火入	10.0	16.5		鈍い橙		伏見・深草	外面下部に刻印有「吉」
54-44	土師質	炮烙	31.0			橙		伏見・深草	
54-45	土師質	火入	43.4	9.9		鈍い橙		伏見・深草	内面下部に「深草・」銘
54-46	軟質施釉	油受皿	8.0	1.5		灰白	灰		底部無釉
54-47	軟質施釉	灯火具	4.8	2.4		浅黄橙	透明		内面施釉
54-48	軟質施釉	灯火具	5.6	6.3	3.4	淡黄	透明		全面施釉
54-49	軟質施釉	灯火具	7.2	7.4	3.8	鈍い黄橙	透明		全面施釉
55-1	磁器	蓋物身	7.0	4.1	3.6	白	染付	肥前系	草花文 口縁内面釉剥ぎ
55-2	磁器	椀	10.2	5.4	4.2	白	染付	肥前系	草花文・ハの字状高台
55-3	磁器	椀	10.2	5.4	4.0	灰白	染付	肥前系	二重網目文
55-4	磁器	椀	9.4	5.7	3.8	白	染付	肥前系	帆掛船文
55-5	磁器	椀	8.7	5.7	4.5	白	染付	肥前系	花唐草文 筒形椀
55-6	磁器	椀	8.9	7.0	5.1	灰白	染付	肥前系	蛸唐草文 筒形椀
55-7	磁器	椀	8.4	6.6	4.3	白	染付	肥前系	丸文散 筒形椀
55-8	磁器	椀	7.3	5.4	4.3	白	染付	肥前系	草花文 筒形椀 型紙摺 口紅

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
55-9	磁器	鉢	9.3	7.7	7.1	白	染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台 輪花
55-10	磁器	仏飯器	6.2	6.0	4.4	灰白	染付	肥前系	斜格子文
55-11	磁器	仏飯器	7.6	5.3	4.1	灰白	染付	肥前系	雨降文
55-12	磁器	仏飯器	8.3	4.3	4.1	灰白	染付	肥前系	笹文
55-13	磁器	皿	13.4	3.7	8.1	灰白	染付	肥前系	唐草文
55-14	磁器	皿	14.0	4.6	7.4	白	染付	肥前系	唐草文輪花皿
55-15	磁器	皿	14.9	3.0	9.4	白	染付	肥前系	草花文
55-16	磁器	皿	12.5	4.1	4.6	白	染付	肥前系	蛇ノ目釉剥
55-17	磁器	皿	9.9	2.0	6.5	白	染付	肥前系	輪花
55-18	磁器	鉢	10.0	6.1	4.8	白	染付	肥前系	草花文
55-19	磁器	鉢	17.3	6.2	9.4	灰白	染付	肥前系	草花文 輪花鉢
55-20	磁器	鉢	16.8	5.2	10.0	白	染付	肥前系	松竹梅文
55-21	磁器	鉢	18.4	7.0	11.3	白	染付	肥前系	蛸唐草文 輪花鉢
55-22	磁器	香炉	10.2	7.7	7.0	灰白	青磁	肥前系	底部穿孔
55-23	磁器	椀	8.1	5.9	3.7	灰白	青磁染付	肥前系	四方椀 五弁花
55-24	磁器	椀	11.6	6.5	4.8	灰白	青磁染付	肥前系	四方椀 五弁花
56-1	磁器	蓋	11.1	3.1	4.6	白	青磁染付	肥前系	草文
56-2	磁器	蓋	10.1	3.2	4.4	白	染付	肥前系	花唐草文
56-3	磁器	蓋	10.7	4.4	3.2	白	染付	肥前系	魚網文
56-4	磁器	蓋	13.9	3.7		白	染付	肥前系	草花文
56-5	磁器	花瓶	1.6	14.7	4.3	灰白	染付	肥前系	菊花文
56-6	陶器	椀	9.3	5.3	2.8	灰白	上絵	京・信楽系	草花文
56-7	陶器	椀	9.2	5.3	3.0	灰白	上絵	京・信楽系	
56-8	陶器	椀	10.8	5.7	3.9	灰白	錆絵	京・信楽系	
56-9	陶器	椀	9.6	5.1	4.0	灰白	錆絵	京・信楽系	
56-10	陶器	椀	9.4	5.1	4.4	鈍い黄橙	白化粧錆絵	京・信楽系	煎じ椀
56-11	陶器	椀	9.0	6.1	3.9	灰白	灰	京・信楽系	小杉椀
56-12	陶器	椀	10.8	5.8	4.0	浅黄橙	白化粧錆絵	京・信楽系	煎じ椀
56-13	陶器	椀	8.7	6.9	5.4	灰白	錆絵染付	京・信楽系	筒椀
56-14	陶器	椀	8.3	6.4	5.5	灰白	灰	京・信楽系	鎧椀
56-15	陶器	椀	11.0	7.3	5.5	黄灰	灰・鉄	京・信楽系	鎧椀
56-16	陶器	椀	11.4	7.2	5.5	灰	灰・鉄	京・信楽系	鎧椀
56-17	陶器	椀	7.3	6.1	5.3	浅黄橙	灰	京・信楽系	筒椀
56-18	陶器	椀	8.0	6.2	6.0	浅黄橙	灰	京・信楽系	筒椀
56-19	陶器	椀	8.7	6.6	5.5	灰白	灰・鉄	京・信楽系	筒椀
56-20	陶器	平椀	12.3	4.3	4.4	灰白	上絵	京・信楽系	芦舟文
56-21	陶器	平椀	12.0	4.3	4.3	灰白	上絵	京・信楽系	草花文
56-22	陶器	汁注	7.6	4.0	3.6	灰白	灰	京・信楽系	
56-23	陶器	合子蓋	7.0	1.1		灰白	灰	京・信楽系	
56-24	陶器	合子身	6.9	2.2	6.5	灰白	灰	京・信楽系	
56-25	陶器	稜皿	9.2	1.9	4.1	灰白	灰	京・信楽系	
56-26	陶器	油受皿	9.2	1.5	4.1	灰白	灰	京・信楽系	
56-27	陶器	油受皿	11.4	2.2	4.7	灰白	灰	京・信楽系	
56-28	陶器	油受皿	11.0	2.5	5.2	灰白	灰	京・信楽系	
56-29	陶器	灯明皿	11.1	2.6	4.6	灰白	灰	京・信楽系	
56-30	陶器	灯明皿	11.3	2.1	4.4	灰	灰	京・信楽系	
56-31	陶器	蓋	10.9	2.7		灰白	錆絵	京・信楽系	
56-32	陶器	蓋	10.2	1.6		灰白	灰	京・信楽系	
56-33	陶器	蓋	12.0	3.8		鈍い黄橙	鉄	京・信楽系	
56-34	陶器	椀	10.2	6.5	4.3	灰白	灰	萩	
56-35	陶器	蓋	11.2	3.8		鈍い橙	刷毛目	肥前系	
56-36	陶器	椀	9.4	5.0	3.4	灰白	鉄	京都	
56-37	陶器	椀	9.2	7.0	4.2	浅黄橙	灰・鉄	京都	白化粧上絵筒椀
56-38	陶器	蓋	6.6	2.5		鈍い橙	灰	京・信楽系	
56-39	軟質施釉	香炉	6.8	4.0	5.0	浅黄橙	鉛釉	京都	黄・緑・茶彩 「洛東」 銘
56-40	軟質施釉	皿	11.8	3.2	6.2	灰白	鉛釉	京都	白化粧 上絵か
57-1	陶器	鍋	14.7	6.1	6.7	褐灰	鉄	京・信楽系か	
57-2	陶器	片口鍋	18.5	9.6	8.1	褐灰	鉄	京・信楽系か	

No.	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
57-3	陶器	爛鍋	14.6	13.3	6.8	灰白	鉄	京・信楽系か	
57-4	陶器	土瓶	10.0	12.2	7.2	灰	鉄	京・信楽系か	
57-5	陶器	甕	14.8	21.8	11.2	灰白	鉄	京・信楽系か	黒釉流し
57-6	陶器	植木鉢	15.5	14.7	9.7	灰白	灰	瀬戸・美濃系	
57-7	陶器	壺	6.6	10.6	7.0	灰白	鉄	信楽	
57-8	陶器	鉢	16.6	8.9	13.0	灰白	灰	信楽	
57-9	陶器	壺	14.5	21.2	13.6	褐灰	鉄	信楽	
57-10	陶器	甕	26.6			灰白	鉄	信楽	
57-11	陶器	甕	22.6	22.3	15.1	灰	鉄	丹波	
57-12	陶器	鉢	20.8	5.1	7.4	灰白	灰・鉄	京・信楽系	

観察表15 土壙489出土遺物一覧表 (図版58)

No.	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
58-1	土師質	窯道具		15.8		褐灰		在地	二次被熱
58-2	土師質	内窯	23.0			にぶい黄橙		在地	二次被熱 底部内面鉛釉附着
58-3	土師質	内窯の足				灰白		在地	未使用か

観察表16 土壙771出土遺物一覧表 (図版58)

No.	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
58-4	土師質	風炉	18.6	16.1	18.2	鈍い黄橙		伏見・深草	
58-5	土師質	目皿	12.5	2.7		浅黄		伏見・深草	
58-6	土師質	焜炉	15.4	14.8		浅黄		伏見・深草	
58-7	軟質施釉	盤		10.4		灰白	緑+黄	伏見・深草か	箱庭道具か。長径38.9cm、短径25.0cm。

観察表17 土壙403出土遺物一覧表 (図版59~62・128)

No.	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
59-1	磁器	椀	6.9	5.2	3.8	灰白	染付	肥前系	
59-2	磁器	椀	6.9	5.3	3.5	灰白	染付	肥前系	
59-3	磁器	椀	7.0	5.4	3.8	灰白	染付	肥前系	
59-4	磁器	椀	7.7	5.6	3.6	灰白	染付	肥前系	
59-5	磁器	椀	8.6	5.7	3.4	灰白	染付	肥前系	高台内に焼継材で「大森」銘
59-6	磁器	椀	9.4	4.7	3.9	灰白	染付	瀬戸・美濃系	
59-7	磁器	椀	9.2	5.3	3.8	灰白	染付	瀬戸・美濃系	
59-8	磁器	椀	10.5	6.2	4.3	灰白	染付	肥前系	
59-9	磁器	椀	10.7	6.0	4.4	灰白	染付	肥前系	焼継・口縁部に土師器破片を呼継
59-10	磁器	椀	11.6	6.4	5.2	灰白	染付	肥前系	
59-11	磁器	椀	11.6	6.2	4.7	灰白	染付	肥前系	
59-12	磁器	椀	10.0	5.2	5.4	灰白	染付	肥前系	
59-13	磁器	椀	11.9	6.7	6.1	灰白+橙	染付	肥前系	焼継
59-14	磁器	椀	11.8	7.0	5.9	灰白+橙	染付	肥前系	
59-15	磁器	鉢	14.5	4.2	8.2	灰白	染付	肥前系	口紅
59-16	磁器	仏飯器	6.6	6.0	3.8	灰白	染付	肥前系	
59-17	磁器	仏花具	2.4	11.3	5.1	灰白	染付	肥前系	
59-18	磁器	紅皿	7.3	3.2	2.8	灰白	白磁	肥前系	京都で上絵付か
59-19	磁器	椀	9.6	5.1	5.1	灰白	上絵	肥前系	
59-20	磁器	鉢か			6.7	灰白	上絵	肥前系	柿右衛門様式か
59-21	陶器	椀	9.0	4.7	3.6	灰白	灰	萩	
59-22	陶器	椀	9.2	4.9	3.2	灰白	緑+灰	京都	
59-23	陶器	平椀	12.0	4.5	3.5	灰白	灰	京・信楽系	
59-24	陶器	平椀	12.3	4.4	4.4	灰白	灰	京・信楽系	
60-1	陶器	油受皿	6.9	1.6	2.9	灰黄	灰	京・信楽系	
60-2	陶器	油受皿	11.2	2.6	4.0	灰白	灰	京・信楽系	
60-3	陶器	灯明皿	10.8	2.5	4.1	灰白	灰	京・信楽系	見込3箇所目痕

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
60-4	陶器	灯明皿	11.5	2.9	4.3	灰白	灰	京・信楽系	見込3箇所目痕
60-5	陶器	蓋物	9.5	5.5	6.5	灰白+灰黄	灰	京・信楽系	
60-6	陶器	火入	10.4	9.8	10.3	灰黄	白化粧+透	京都	
60-7	陶器	瓶			10.0	灰白	鉄	丹波	ヘラ描文字
60-8	陶器	鍋蓋	16.3	3.7	4.2	灰黄	灰	京・信楽系	
60-9	陶器	行平	14.6	8.1	6.0	灰黄	灰	京・信楽系	
60-10	陶器	急須	12.2	13.9	8.4	鈍い黄橙	灰	京・信楽系	底部に煤付着
60-11	陶器	鍋	20.7	10.4	8.8	灰黄	鉄	京・信楽系	
60-12	陶器	鍋	20.0			鈍い褐	鉄	京・信楽系か	煤付着
60-13	陶器	植木鉢	14.3	11.6	9.4	浅黄橙	鉄	在地か	
60-14	陶器	鍋	7.0	3.4	3.2	灰黄	褐	京・信楽系か	手鍋形 ミニチュアか
60-15	陶器	鉢	11.2	5.5	10.8	暗赤褐		備前	底部にヘラ描文字
60-16	土製品	ミニチュア	2.1	1.0	0.9	鈍い橙		伏見・深草	型作り
60-17	土製品	ミニチュア	3.2	1.5	1.2	淡黄	緑	伏見・深草	型作り
60-18	土製品	ミニチュア	4.1	3.9		鈍い橙		伏見・深草	型作り
60-19	土製品	ミニチュア	2.5	4.0	2.8	黄橙	緑	伏見・深草	型作り
60-20	土製品	ミニチュア	1.5	6.4	2.4	灰白	緑	伏見・深草	徳利
60-21	土製品	ミニチュア	7.1	6.2	5.3	灰白		伏見・深草	涼炉
60-22	土製品	泥面子	3.0	0.8		橙		伏見・深草	分銅文
60-23	土製品	泥面子	3.0	1.0		橙		伏見・深草	鍵文
60-24	軟質施釉	灯明皿	7.1	1.1		橙	透明		ロクロ成形
60-25	軟質施釉	灯明皿	7.1	1.2		橙	透明		ロクロ成形
60-26	土師質	灯火具	3.3	1.5		鈍い橙		在地	
60-27	土師質	灯火具	4.0	1.8		鈍い橙		在地	
60-28	土師質	焼塩壺	6.8	7.4	5.0	鈍い橙		堺系	
60-29	土師質	胞衣壺	12.0	6.8	12.4	鈍い黄橙		伏見・深草	
60-30	土師質	風炉			27.4	明赤褐		伏見・深草	高台部に孔3箇所あり
60-31	土師質	焜炉	16.6	17.2	14.0	灰白		伏見・深草	
61-1	陶器	大皿	27.1	5.6	12.5	灰白	鉄絵	瀬戸・美濃系	高台内墨書「小中い」
61-2	陶器	大皿	26.8	6.1	14.0	灰白	鉄絵	瀬戸・美濃系	高台内墨書「小中居 午十二月 十口」
61-3	陶器	大皿	27.0	5.8	14.0	灰白	鉄絵	瀬戸・美濃系	高台内墨書「小中居 とり 十二月」
61-4	陶器	大皿	26.3	6.1	13.5	灰白	鉄絵	瀬戸・美濃系	高台内墨書「中居 膳所」
62-1	陶器	大皿	25.2	6.0	13.0	灰白	鉄絵	瀬戸・美濃系	高台内墨書「少 十一」
62-2	陶器	鉢	21.0	8.8	10.2	浅黄	灰+鉄	信楽	高台内墨書「岐カ」
62-3	陶器	鉢	21.6	6.4	8.4	灰白	灰+刷毛目	信楽	高台内外に墨書「小中居」
62-4	陶器	大鉢	32.0	14.1	21.6	灰白	灰	信楽	底部に墨書有
62-5	陶器	大鉢	39.4	13.6	21.3	淡黄	灰	信楽	底部に墨書「小中い 大清」

観察表18 土壌494出土遺物一覧表 (図版63・64・128)

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
63-1	土師器	皿	5.0	0.9		鈍い黄橙		在地	
63-2	土師器	皿	5.2	1.2		鈍い黄橙		在地	
63-3	土師器	皿	5.4	1.2		浅黄橙		在地	
63-4	土師器	皿	7.0	1.3	4.2	鈍い黄橙			搬入品か
63-5	土師器	皿	8.2	1.4		浅黄橙		在地	
63-6	土師器	皿	8.8	1.3		浅黄橙		在地	
63-7	土師器	皿	9.0	2.0		黒		在地	
63-8	土師器	皿	9.2	1.6		浅黄橙		在地	
63-9	土師質	蓋	6.2	1.7		淡黄		在地	上面に八角「清」印
63-10	土師質	花塩壺蓋	7.2	0.8		灰白		伏見・深草	ロクロ成形 糸切
63-11	土師質	花塩壺	8.2	3.1		鈍い黄橙			
63-12	土師質	花塩壺蓋	7.8	0.9		鈍い橙			「浪花/桃州」銘
63-13	土師質	花塩壺	8.3	3.1	5.3	鈍い黄橙			12の身か
63-14	土製品	泥面子	2.3	0.8		浅黄橙		伏見・深草	宝袋文
63-15	土製品	泥面子	3.1	1.0		浅黄橙		伏見・深草	「う」文
63-16	土製品	泥面子	3.1	0.9		鈍い黄橙		伏見・深草	雪輪文

No	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
			口径	器高	底径				
63-17	土製品	泥面子	3.9	1.2		鈍い黄橙		伏見・深草	銭貨文 中央に穴
63-18	土製品	ミニチュア	1.2	5.4		浅黄橙	緑彩	伏見・深草	
63-19	土製品	雀	(幅)3.2	4.1		灰白		伏見・深草	底部に穿孔
63-20	土師質	炮烙	27.6			浅黄		在地	外型成形
63-21	磁器	小椀	6.8			白	上絵	中国	景德鎮系 端反椀 煎茶椀か
63-22	磁器	小杯	7.0	3.5	2.7	白	白磁	肥前系	
63-23	磁器	小杯	6.8	3.4	2.4	灰白	染付	肥前系	笹文 紅皿か
63-24	磁器	椀	10.0	4.6	3.6	白	染付	肥前系	菊花文
63-25	磁器	椀	11.2	6.2	4.3	灰白	青磁染付	肥前系	見込コンニャク五弁花
63-26	磁器	椀	7.2	5.4	3.6	白色	染付	肥前系	見込コンニャク五弁花
63-27	磁器	皿	13.6	4.2	8.5	灰白	染付	肥前系	見込コンニャク五弁花
63-28	磁器	皿	13.4	2.6	7.2	灰白	染付	肥前系	見込蛇ノ目釉剥
63-29	磁器	皿	13.9	3.6	8.5	灰白	染付	肥前系か	蛇ノ目凹形高台
63-30	磁器	蓋	10.0	3.3	4.0	白	白磁	肥前系	松竹梅文陰刻
63-31	磁器	椀	9.2	4.8	4.2	灰白	染付	瀬戸・美濃系	山水文
63-32	磁器	椀	9.8	5.1	4.4	灰白	染付	瀬戸・美濃系	山水文
63-33	磁器	椀	10.6	6.0	4.4	白色	染付	瀬戸・美濃系	綺文
63-34	磁器	椀	9.8	5.3	4.4	白色	染付	瀬戸・美濃系	麗芝文
63-35	陶器	椀	8.2	5.4	2.4	灰白	灰	京・信楽系	
63-36	陶器	椀	9.2	5.4	3.1	灰白	灰+緑流	京・信楽系	
63-37	陶器	椀	9.0	5.3	3.8	灰白	灰	京・信楽系	
63-38	陶器	椀	8.8	5.0	3.2	灰白	灰	萩	
63-39	陶器	小鉢	9.0	4.8	3.8	浅黄	灰	京・信楽系	イッチン描
63-40	陶器	蓋物	9.8	7.1	5.5	灰白	白化粧錆絵	京・信楽系	見込3箇所目痕
63-41	陶器	椀	11.6	6.3	6.8	灰白	灰+鉄	京・信楽系	鎧椀 見込3箇所目痕
63-42	陶器	皿	13.4	3.4	5.8	灰白	灰	京・信楽系	
63-43	陶器	椀	12.8	3.8	3.4	灰白	灰	京・信楽系	平椀
63-44	陶器	灯明皿	6.8	1.6	2.9	灰白	灰	京・信楽系	
63-45	陶器	灯明皿	7.2	1.8	3.2	灰黄	灰	京・信楽系	
63-46	陶器	灯明皿	6.6	1.7	2.8	灰白	灰	京・信楽系	
63-47	陶器	灯明皿	12.0	2.5	4.2	灰白	灰	京・信楽系	
63-48	陶器	灯明皿	12.2	2.9	4.7	灰白	灰	京・信楽系	
63-49	陶器	鉢	16.2	6.4	6.0	灰白	白+鉄	京・信楽系	掛分イッチン 高台内墨書
64-1	陶器	蓋	10.4	1.7	8.6	灰白	灰	京・信楽系	
64-2	陶器	片口鍋蓋	14.0	2.4	4.0	褐灰	灰	京・信楽系	
64-3	陶器	土瓶蓋	12.8	3.1	5.6	灰黄	灰	京・信楽系	
64-4	陶器	土瓶	8.2	11.0	7.4	灰	灰	京・信楽系	
64-5	陶器	行平	15.4	12.2	6.4	灰白	灰	京・信楽系	
64-6	陶器	行平	18.9	13.2	7.0	褐灰	灰	京・信楽系	
64-7	陶器	仏花瓶	10.8	13.4	8.1	灰白	鉄	京・信楽系	
64-8	陶器	瓶	(残)16.5	8.7	灰白	鉄	丹波		
64-9	陶器	鉢	18.0	11.9	11.8	橙	灰	丹波	植木鉢転用
64-10	陶器	水甕		12.6	灰白	灰・鉄釉	瀬戸・美濃系	植木鉢転用	
64-11	陶器	四耳壺	19.8		橙		タイ		
64-12	陶器	壺		4.7	淡赤橙	鉄			三官鉛壺
64-13	陶器	鉢	12.3	7.0	13.0	灰		備前	体部刻印
64-14	陶器	甕	32.8		灰白	鉄		信楽か	水甕
64-15	陶器	撞鉢	36.0	14.1	15.8	明赤褐		堺・明石系	

観察表19 陶器甕一覧表 (図版65)

No	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
65-1	土壙2795	17C	陶器	甕	55.6	71.4	29.0	橙		信楽	焼締
65-2	埋甕340	19C前	陶器	甕	最大72.6	(残)67.8	28.2	灰白	鉄釉	信楽	
65-3	埋甕749	18C~19C前	陶器	甕	59.2	65.2	20.6	灰白	鉄釉	信楽	
65-4	埋甕855A	18C後	陶器	甕	最大56.0	(残)55.8	22.2	灰白	鉄釉	信楽	
65-5	埋甕377	17C前	陶器	甕	最大80.8	(残)60.0	41.6	赤褐		備前	焼締

観察表20 その他遺構出土桃山・江戸時代前期の遺物一覧表 (図版66・67・129・130)

No	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
66-1	土壇1257	17C前	陶器	皿	6.7	2.5	4.2	灰黄	灰	瀬戸・美濃系	
66-2	土壇1257	17C前	陶器	椀	10.8	7.4	5.1	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	鉄釉黒釉流し椀
66-3	土壇1257	17C前	陶器	椀	13.5	7.9	5.4	灰白	黒織部	瀬戸・美濃系	香茶椀、底部重ね痕
66-4	土壇1257	17C前	陶器	椀	13.1	7.9	4.9	灰白	志野織部	瀬戸・美濃系	
66-5	土壇1257	17C前	陶器	皿	10.4	2.9	4.6	褐灰	灰	肥前系	
66-6	土壇1257	17C前	陶器	椀	11.9	7.0	4.8	灰褐	灰	肥前系	
66-7	土壇1257	17C前	陶器	壺	7.8	11.8	6.0	赤灰	鉄絵	肥前系	絵唐津
66-8	土壇1257	17C前	土師質	鉢	10.9	4.3	4.6	灰白		伏見・深草	おろし目付、内面に6本クシ目
66-9	土壇1485	17C前	陶器	壺			4.5	灰白		備前	底部にヘラ記号
66-10	土壇1485	17C前	陶器	皿	9.1	1.9	4.8	灰白	灰	瀬戸・美濃系	丸皿
66-11	土壇1485	17C前	陶器	椀	10.9	6.9	5.3	灰白	志野	瀬戸・美濃系	
66-12	土壇1485	17C前	陶器	鉢	10.0	5.5	5.6	灰白	黄瀬戸	瀬戸・美濃系	見込スタンプ、外面にヘラ描草花文
66-13	土壇1485	17C前	陶器	皿	10.9	2.2	5.3	灰白	灰	瀬戸・美濃系	折縁ソギ皿、見込スタンプ
66-14	土壇1418	17C前	磁器	合子蓋	4.6	1.5		灰白	緑	中国	華南系
66-15	土壇1418	17C前	磁器	皿	13.8	2.8	7.5	白	青花	中国	景德鎮系
66-16	土壇1418	17C前	陶器	香炉	15.1	5.7	4.6	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	
66-17	土壇1474	17C~18C前	磁器	皿	21.0	4.4	11.7	灰白	五彩	中国	漳州窯系
66-18	土壇698	18C~19C初	磁器	皿			10.9	白	青花	中国	景德鎮系
66-19	土壇1232	17C前	磁器	皿	25.5	5.0	13.1	灰白	青花	中国	漳州窯系
66-20	土壇1490	17C	磁器	小皿	6.4	1.1	3.2	白	瑠璃	中国	華南系
66-21	掘下げ		磁器	合子身	3.9	1.4	2.8	灰白	緑	中国	華南系
66-22	土壇376	18C後	陶器	長胴瓶	9.4			灰		ベトナム	
66-23	土壇1439	17C	陶器	長胴瓶	9.4			白+赤褐		ベトナム	
66-24	土壇1578	17C前	陶器	皿			5.4	灰白	灰	朝鮮	
66-25	礎石穴1839	17C	軟質施釉	椀	10.0	6.9	4.7	橙	透明+緑	京都か	
66-26	土壇1600	17C初まで	軟質施釉	椀	12.1	6.3	4.2	灰黄褐	白化粧+透明	京都か	
66-27	土壇1366	17C後	陶器	椀			4.8	灰白	錆絵	京都	「仁清」印
66-28	土壇1235	17C~18C初	陶器	平椀	14.0	4.3	4.9	灰白	錆絵	京都	「清閑寺」印
67-1	掘下げ		陶器	茶入	3.7	8.3	4.6	灰白	鉄	瀬戸・美濃系か	内面全釉
67-2	土壇435	18C~19C前	陶器	茶入			4.5	灰白	鉄	瀬戸・美濃系か	内面全釉
67-3	土壇1484	17C前	陶器	鉢	13.4	3.2	7.9	灰白	絵志野	瀬戸・美濃系	
67-4	土壇1314	17C前	陶器	鉢	26.8	6.6	16.4	灰白	灰	瀬戸・美濃系	
67-5	土壇1696	16C末~17C前	陶器	鉢	11.8	6.9	11.4	黒褐	灰	丹波	
67-6	土壇1863	桃山・江戸初	土師質	灰器	20.4			橙			
67-7	土壇1336	17C前	陶器	瓶	7.6			黄灰	褐	肥前系	
67-8	土壇1495	17C中	陶器	瓶	3.3	27.2	15.6	褐灰		備前	
67-9	土壇920	17C後~18C後	陶器	壺	17.4	27.4	13.2	褐灰		丹波	
67-10	土壇1565	16C末~17C初	陶器	筒型容器	23.8	39.4	18.4	灰赤+褐灰		備前	
67-11	土壇1232	17C前	陶器	盤	48.6	10.7	35.6	褐灰		丹波	

観察表21 その他遺構出土江戸時代中・後期の遺物一覧表 (図版68・69・129・130)

No	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
68-1	埋糞933	18C後	土師質	花塩壺蓋	最大7.0	1.0		灰白		伏見・深草系	「なんばんりう/七度やきしお」
68-2	土壇964	18C中	土師質	焼塩壺	6.4	9.7	5.2	橙		堺系	「堺本焼焼/吉右衛門」
68-3	土壇956	18C後	土師質	火入	7.6	9.5	7.5	灰白		伏見・深草系	「松花山」銘、内面黒色
68-4	土壇1616	18C前	軟質施釉	灯火具	8.7	2.5	5.2	明褐灰	黒		
68-5	土壇1616	18C前	土師質	灯火具	最大6.4	蓋込3.9	3.6	鈍い橙			表面に赤色顔料
68-6	土壇1616	18C前	軟質施釉	灯火具	最大4.6	6.4	2.8	淡赤橙	透明		
68-7	井戸523	19C後	土製品	組紐錘				橙		在地	
68-8	土壇1470	18C中	陶器	椀	9.2	6.7	4.8	明褐灰	白化粧錆絵染付	京都	「乾山」銘
68-9	土壇1094	18C前	陶器	椀	12.4	4.4	4.4	灰白	錆絵染付	京都	「寶山」銘
68-10	土壇866	19C前	陶器	椀	9.0			灰白	上絵	京都	磨椀「安永八年」銘

No	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
68-11	土壙919	18C~19C初	陶器	植木鉢	12.5	9.2	8.2	鈍い黄橙	鉄	丹波	焼成後穿孔
68-12	土壙611	18C末~19C	陶器	匣鉢	16.6	10.6	16.8	鈍い黄橙		信楽	ヘラ記号
68-13	土壙598	19C後	陶器	鉢	22.0	16.5	16.6	灰黄褐	灰	丹波	桶型鉢
68-14	土壙697	19C	陶器	花入	6.8	20.3	7.4	灰白	錆絵	瀬戸・美濃系	柳文
68-15	土壙308	19C前	土製品	泥面子	2.8	0.8		浅黄		伏見・深草	「ユ」字文
68-16	土壙308	19C前	土製品	泥面子	3.0	0.7		浅黄		伏見・深草	「桐」字文
68-17	土壙308	19C前	土製品	泥面子	2.9	0.9		浅黄橙		伏見・深草	雪輪文
68-18	土壙308	19C前	土製品	泥面子	2.8	1.0		鈍い橙		伏見・深草	巻物文
68-19	土壙332	19C中	土製品	銭形	8.5×3.2	1.1		浅黄橙		伏見・深草	
68-20	土壙577	19C	土師質	花塩壺蓋	最大8.7	1.3		橙		伏見・深草	
68-21	土壙577	19C	土師質	花塩壺	9.6	2.5	7.4	浅黄橙		伏見・深草	
68-22	土壙489	19C中	土師質	花塩壺蓋	6.8	0.6	4.4	浅黄		伏見・深草	表面に「のし」墨書
68-23	土壙798	18C~19C初	土師質	鉢	6.3	2.2	4.2	浅黄橙		伏見・深草	内外面墨書
68-24	土壙798	18C~19C初	土師質	焼塩壺蓋	最大6.9	1.7	下面6.8	橙		堺系	内外面墨書
68-25	土壙371	攪乱・19C代	土製品	象	6.5×5	10.3		灰白		伏見・深草	
68-26	土壙825	18C~19C初	軟質施釉	鉢	5.2	5.2	4.8	灰白	黄	伏見・深草	上下形合せ
68-27	掘下げ		軟質施釉	燭台		10.7		橙	緑・黒彩	京都	小判印「鷄山」銘
68-28	土壙482	19C	軟質施釉	椀			3.8	浅黄橙	透明	京都	高台内に「楽」の銘
68-29	土壙497	攪乱	軟質施釉	鉢	11.8	5.4	11.0	明褐	黒	京都	「楽」銘
68-30	井戸386	19C後	軟質施釉	涼炉	12.2	15.0	11.2	浅黄橙	緑	伏見・深草か	底部裏面に刻印「清山」
68-31	井戸386	19C後	軟質施釉	涼炉目皿	5.4	1.2	2.8	浅黄		伏見・深草か	
68-32	土壙400	19C~19C後	軟質施釉	人形	9.8	残6.2		灰白	緑・黒・黄彩	伏見・深草か	柿本人麻呂像
68-33	土壙841	19C前	軟質施釉	灯火具				鈍い橙	透明		壁掛式、上下型合わせ、襷付着
68-34	土壙449	19C	窯道具	ハマ	5.3	1.2	5.0	浅黄橙		京都か	
68-35	土壙822	18C後~19C初	窯道具	色見	1.6	2.3	3.5	灰白	錆絵染付	京都	底部糸切り
68-36	土壙1094		陶器	椀	10.5	5.9	3.8	灰白	錆絵	岩国	水草文、「岩国/多田」銘
69-1	溝39	19C後	磁器	椀	8.4	3.9	3.2	白	染付	瀬戸・美濃系	口紅
69-2	溝39	19C後	磁器	椀	7.6	3.3	3.0	白	染付	中国	景德鎮系
69-3	溝39	19C後	磁器	椀	8.8	3.8	3.0	白	染付	瀬戸・美濃系	
69-4	井戸108	19C	磁器	椀	8.0	4.0	3.2	白	上絵	中国	徳化窯系、型成形
69-5	土壙150	19C後	磁器	椀	6.5	4.3	2.7	白	染付		「玩品」銘煎茶椀
69-6	土壙771	19C後	磁器	椀	8.2	4.2	3.1	白	上絵	中国	徳化窯系、型成形
69-7	土蔵170	19C後	陶器	行平鍋				暗赤褐	鉄	京都	「音羽」銘
69-8	土壙102	19C後	磁器	小杯			2.6	白	錦書		薄手酒杯
69-9	井戸523	19C後	陶器	オロシ皿				明褐灰	鉄	京都	「寶山」銘
69-10	土壙349	19C後	陶器	急須				灰白		京都	「音羽」・「乾」銘
69-11	土壙407	19C後	磁器	皿	9.4×7	1.6		灰白	珉平	淡路	
69-12	土壙400	19C	磁器	皿		1.6		灰白	珉平	淡路	
69-13	土壙290	19C後	陶器	皿	9.5	1.8	5.9	淡赤橙	上絵	京都	「美山」銘
69-14	土蔵170	19C後	陶器	椀	11.0			灰白	錆絵	信楽	注連縄文
69-15	土壙1045	19C前	陶器	壺	1.6			灰白	岩塩	ヨーロッパ	
69-16	土壙807	19C後	磁器	皿				白	銅板転写	ヨーロッパ	
69-17	土壙416	19C後	磁器	皿				白	銅板転写	ヨーロッパ	
69-18	土壙150	19C後	磁器	皿				白	銅板転写	ヨーロッパ	
69-19	井戸73	19C後	陶器	皿	24.0	2.7	15.0	白	銅板転写	ヨーロッパ	輪花皿
69-20	掘下げ		磁器	椀	26.3	12.2	10.6	灰白	染付	肥前系	
69-21	胞衣壺676	19C	土師質	胞衣壺蓋	14.0	1.6	13.9	浅黄橙		伏見・深草	
69-22	胞衣壺676	19C	土師質	胞衣壺	12.0	6.4	12.6	浅黄橙		伏見・深草	
69-23	胞衣壺613	19C前	土師質	胞衣壺蓋	13.6	1.9	12.4	鈍い橙		伏見・深草	
69-24	胞衣壺613	19C前	土師質	胞衣壺	11.6	6.3	11.6	鈍い橙		伏見・深草	
69-25	胞衣壺320	19C	土師質	胞衣壺蓋	16.1	2.3	15.6	鈍い橙		伏見・深草	
69-26	胞衣壺320	19C	土師質	胞衣壺	13.9	7.2	14.6	鈍い橙		伏見・深草	
69-27	土壙772	19C	土師質	火入	9.5	19.1	16.4	絞胎		伏見・深草	内面に煤付着
69-28	土壙598	19C後	陶器	壺	5.5	25.0	6.3	暗赤褐		沖繩	壺屋焼
69-29	検出中		陶器	播鉢	26.4	12.1	15.0	明褐	鉄	丹波	
69-30	土壙344	19C後	磁器質	植木鉢	24.0	16.8	13.3	褐灰		京都	「帯山」銘
69-31	土壙808	19C	陶器	植木鉢	24.0	16.0	15.0	灰白	緑+鉄	瀬戸・美濃系	内面に鉄釉刷毛塗り

観察表22 平安時代から室町時代の軒丸瓦一覧表 (図版70・131・132)

No	形態・手法の特徴	色調・胎土	出土遺構・遺構年代	時代	産地・瓦窯	出土例(出典)
70-1	瓦当は複弁四葉蓮華文。中房は高く盛り上がり、蓮子は1+5。4つの蓮弁は盛り上がり、陰刻の子葉は大小3つに分かれる。間弁は大きな剣状である。外区には推定16個の珠文がある。一本造り、当裏面に布目が残る。直径約19cm。	灰白色・緻密	楊梅小路路面形成層11C?	平安中	山城	
70-2	瓦当は複弁四葉蓮華文。中房は欠損、複弁4弁で、間弁は撥形。界線と、珠文が巡る。一本造りで瓦当裏面に布目が残る。類例では直径17cm程度。	淡赤灰色・緻密	楊梅小路路面形成層11C中	平安中	山城	北野庵寺跡(文1-739)、 広隆寺跡(文1-763)、 深草寺跡(文1-923)
70-3	瓦当は複弁八葉蓮華文。中房は欠損。複弁8弁で、蓮弁は盛り上がり、子葉あり。間弁は撥形で一つおきに配する。外区には大粒の珠文が巡る。類例では、成形台による一本造り技法。瓦当部裏面布目で下半ケズリ、外周ヨコケズリ。類例に「栗」の中心飾りのものがある。	灰白色・緻密	楊梅小路路面形成層13C	平安中	山城 栗栖野瓦窯	幡枝瓦窯(文1-24)、 栗栖野瓦窯(文1-121)、 平安宮朝堂院跡(文3-54)、 豊楽院跡(文2-81)、 平安京左京二条二坊(文4)
70-4	瓦当は単弁二十葉蓮華文。平坦な中房で十字形とし字を配する。単弁で子葉なし。間弁は三角形。直径約14cm。	淡黄灰色・緻密	楊梅小路路面形成層11C後	平安後	丹波	白河街区跡(文1-565) ※亀岡市史
70-5	瓦当は複弁八葉蓮華文。中房は剥離。複弁は6弁で陰刻され、蓮弁は互いに接し、子葉は盛り上がる。外区は欠損。暗赤褐色の胎土ある。	暗赤褐色・緻密	集石3058 12C	平安後	播磨?	
70-6	瓦当は複弁八葉蓮華文。凸型中房で、蓮子は1+8?。周りに葉帯巡る。蓮弁は互いに接し、子葉はやや盛り上がる。瓦当範はB型。	灰白色・緻密	楊梅小路路面形成層中世	平安後	播磨?	六勝寺跡(文1-402・493)
70-7	瓦当は単弁十二葉蓮華文。凸型中房で、蓮子は1+5。単弁12弁で盛り上がる。間弁は三角形。外区はない。瓦当範はA型で、瓦当裏面ナデ、瓦当面にひび割れ多い。丸瓦凸面タタキ、凹面布目を接合部でタテナデする。直径13.5cm。	灰色・緻密	柱穴3416 11C	平安中	山城?	
70-8	瓦当は複弁六葉蓮華文。中房に左巻き2巴文を配する。複弁6弁で、蓮弁は互いに接する。子葉は盛り上がり、外区はない。瓦当部側面ヨコナデ、裏面ナデ。直径14.5cm。	淡黄灰色・緻密	土壇304 19C前	平安後	河内 向山瓦窯?	法勝寺跡(文3-180)、 法住寺殿跡(文5)、 平等院(文1-1169)
70-9	瓦当は単弁八葉蓮華文。中房は低く、蓮子は不鮮明。周りに葉帯が巡る。単弁8弁で、蓮弁の周りにも粗い葉帯様のものが巡る。直径約11.6cm。	灰白色・緻密	楊梅小路路面形成層中世	平安後	山城?	
70-10	瓦当は単弁八葉蓮華文。中房は低く、蓮子は不鮮明。単弁8弁で、中央が窪む。外区に唐草文が左巻きに巡る。瓦範はB型。直径約12cm。	灰白色・緻密	土壇1710 13C	平安後	山城?	尊勝寺跡(文6-102)
70-11	瓦当は単弁四葉蓮華文。単弁4葉で、子葉は剣形、弁間文も剣形を呈する。界線は蓮弁と同じく屈曲する。瓦当面裏面は指オサエ。直径約11cm。	灰白色・緻密	土壇2522 13C	平安後	山城?	
70-12	瓦当は複弁蓮華文。中房に蓮子。複弁4弁か。子葉は盛り上がる。間弁はY字形。直径約12cm。	灰黒色・緻密	検出中	平安後	山城 栗栖野瓦窯?	石清水八幡宮(文6-11)
70-13	瓦当は宝相華文。抽象化され、蓮弁は4個。弁は銀杏の葉状、弁間は楕円形。界線は弁に対応して弯曲。外区に珠文を密に配す。直径約12cm。	灰色・緻密	第3面掘下げ	平安後	山城 洛北産?	内裏跡(文7)、 鹿苑寺(金閣寺)(文8)、 広隆寺旧境内(文9)、 迎賓館(文10-93-9)
70-14	瓦当は複弁六葉蓮華文。中房は平坦で、蓮子は1+6。複弁6弁で、蓮弁と間弁は凸線。外区は珠文が12個巡る。周縁は瓦当面下部で削り落とされ、楕円形を呈する。範割れ傷が範全体の中央に縦に入る。瓦当部側面ヨコケズリ、裏面オサエ後下半ヨコケズリ。	灰白色・緻密	楊梅小路路面形成層12C	平安後	山城 栗栖野瓦窯	民部省跡(文2-218)、 迎賓館(文10-92-6)
70-15	瓦当は複弁八葉蓮華文。中房は平坦で、蓮子は1+6。複弁8弁で、蓮弁と間弁は凸線。外区は珠文が16個巡る。瓦当範はA型。瓦当部側面ナデ。裏面オサエ。直径約12cm。	灰白色	土壇3198 12C後	平安後	山城 栗栖野瓦窯	内裏跡・朝堂院跡(文2-215)
70-16	瓦当は抽象化された宝相華文。蓮子が1個。蓮弁は4弁。70-13と少し異なり小さな模様。弁は銀杏の葉状に、弁間は楕円形。界線は弁に対応して弯曲。外区に珠文を密に配す。瓦当範はA型で、瓦当上部外縁に指圧痕が残る。直径約12cm。	淡黄灰色・二次被熱で変色・緻密	土壇1087 17C後	平安後	山城 洛北産?	石清水八幡宮(文6-4)

No	形態・手法の特徴	色調・胎土	出土遺構・遺構年代	時代	産地・瓦窯	出土例(出典)
70-17	瓦当は複弁六葉蓮華文。凹型中房で、蓮子は1+4。蓮弁は上下二重で交互に配する。上は複弁6弁で子葉あり。下は単弁6弁で子葉あり。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合。直径約12cm。	灰色・緻密	土壇2250 13C~17C	平安後	山城	仁和寺境内(文1-778、文11)
70-18	瓦当は単弁六葉蓮華文。中房は凹型。蓮子は1つ。蓮弁と間弁は凸線。子葉あり。間弁はY字を呈する。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合。仁和寺、六勝寺から同文瓦出土。山城・栗栖野瓦窯産。直径約12.5cm。	灰白色・緻密	土壇1418 17C前	平安後	山城 栗栖野瓦窯	
70-19	瓦当は巴文。右巻き三巴文を配する。頭部は離れ、尾部は互いに接して、界線となる。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合。周縁は瓦当部下部で削り落とされ、楕円形を呈する。瓦当部側面ヨコケズリ、裏面指圧痕。直径約12.5cm。	灰白色・二次被熱で変色・緻密	溝3333 12C末	平安後	山城 栗栖野瓦窯	
70-20	瓦当は巴文。中心に珠文があり、左巻き三巴文を配する。尾は接しない。瓦当部側面下半オサエ後ナデ、裏面オサエ後ナデ。直径約11cm。	淡黄灰色・二次被熱で変色・緻密	第3面掘下げ 14C以降	平安後	山城 栗栖野瓦窯	
70-21	瓦当は巴文。右巻き三巴文を配する。頭部は小さく、尾は長くのび、互いに接しない。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合。瓦当部側面下半と裏面はオサエ後ナデ。直径11.5cm。	灰色・緻密	土壇1416 13C~17C	平安後	山城	
70-22	瓦当は巴文。右巻き三巴文を配する。尾が互いにつながり界線をなす。周りに16個の珠文が巡る。瓦当部裏面に丸瓦をあて、粘土を付加して接合。瓦当部側面と裏面はオサエ後ナデ。直径約11.5cm。	にぶい褐色・二次被熱で変色・緻密	土壇2801 11C後	平安後	山城?	
70-23	瓦当は巴文。右巻き三巴文を配する。頭部は離れ、尾部は接しないで長くのびる。尾部に范傷がある。瓦当部側面はナデ、瓦当部裏面はオサエ後ナデ。直径約10.5cm。	淡黄灰色・二次被熱で変色・緻密	石室1500 17C後	鎌倉	山城?	
70-24	瓦当は巴文。左巻き三巴文を配する。頭部は盛り上がり、尾は短く界線と接しない。18個の珠文が巡る。瓦当部側面はナデ、瓦当部裏面はケズリ後ナデ。直径約10.5cm。	淡黄灰色・二次被熱で変色・緻密	第3面掘下げ	鎌倉	山城?	
70-25	瓦当は複弁八葉蓮華文。複弁8弁は、凸線で描かれ、互いに接して界線となる。子葉は盛り上がる。珠文は12個が巡り、外側にもう一本の界線がある。瓦当部裏面に丸瓦をあて、粘土を付加して接合。直径約10.5cm。	黒灰色	楊梅小路 路面形成層 14C	鎌倉	山城?	

観察表23 平安時代から室町時代の軒平瓦一覧表 (図版71・132・133)

No	形態・手法の特徴	色調・胎土	出土遺構・遺構年代	時代	産地・瓦窯	出土例(出典)
71-1	瓦当は均整唐草文。中央に縦線を配し、中心飾りは対向C字、唐草文の主葉は大きく反転し、子葉は強く巻き込む。外区は珠文が巡る。	灰白色・緻密	土蔵1217 18C前	平安前		平城宮式6732 I
71-2	瓦当は均整唐草文。中心飾りは欠損しているが、左右に緩やかに3反転する唐草文を置く。外区には珠文を配する。	暗灰色・緻密	土壙3518 11C中	平安前 ～中	山城 幡枝瓦窯	大極殿跡・朝堂院跡・豊楽院跡(文2-372)
71-3	瓦当は均整唐草文。唐草は緩やかに反転し、先端は細かく枝分する。2本の界線の間に珠文はやや疎に配され、脇区に珠文がある。類例では、脇区に珠文のあるものは、「大伴」の中心飾がある。凹面に布目痕。曲線頸。タテケズリの後ヨコナデ。	灰白色・緻密	溝3250 11C中	平安前 ～中	山城	一条大路跡(文2-340)、 平安京左京四条一坊(文12- 図版26-T27)
71-4	瓦当は半截宝相華文。欠損して半截の宝相華文が1つ残るのみである。内外区圏線のみで周縁に珠文はない。曲線頸、平瓦凹面に布目、凸面は頸の先端まで粗い縄タタキ。類例には緑釉のものがある。	灰白色・緻密	溝3250 11C中	平安中	丹波 王子瓦窯	法成寺跡(文13)、 迎賓館(文10-96-1)
71-5	瓦当は唐草文。元々は対向C字形、「修」字の中心飾りで均整唐草文だったが、「修」字と唐草が極端に変形していた。頸は曲線頸で、瓦当面の高さは7.5cmある。	灰白色・緻密	土壙1870 14C?	平安中		内裏跡・蘭林坊跡で類似 瓦(文2-384・385)
71-6	瓦当は均整唐草文。中心飾りは欠損。類例は対向C字形で中心に小葉を配す。唐草文は複線で3転し、主葉・子葉は強く巻き込む。外区に小粒の珠文。曲線頸。瓦当部凹面ヨコケズリ、頸部凸面ヨコケズリ、裏面タテケズリ、平瓦部凸面タテケズリ、凹面布目。側面タテケズリ。	灰白色・緻密	楊梅小路 路面形成層 11C	平安中	山城 小野瓦窯	小野瓦窯(文1-209)
71-7	瓦当は均整唐草文。唐草は太く、直線的、左右から中央に向かう。飛雲文状を呈する。外区に珠文を配する。凹面に瓦当上縁まで布目痕、瓦当下面や側面はヘラケズリ。凸面に瓦当の唐草文のタタキ痕と指圧痕が顕著に残る。	灰白色・緻密	土壙3286 11C後	平安中	山城	三条西殿跡・東洞院大路 跡(文2-468)
71-8	瓦当は均整唐草文。C字背向の中心飾り。文様を左右に3転し、外区に小さな珠文が密に配す。両脇区は三角形に張り出す。凸面に縦方向の縄目タタキ。	灰白色・緻密	重機掘削	平安後	丹波 王子瓦窯	朝堂院跡(文2-420)
71-9	瓦当は偏行唐草文。唐草文は左から右へ偏行。主葉は連続して大きく反転、子葉は強く巻き込む。曲線頸。瓦当部成形は半折曲げ技法。瓦当部凹面布目と面取り、端部ヨコケズリ。頸部凸面ヨコケズリ、裏面ナデ、側面タテケズリ後にナデ。平瓦部凹面斜めの糸切り痕と布目、凸面ナデ、平瓦部凸面にヘラ記号「+」あり。	灰白色・緻密	土壙3332 16C	平安後	山城 栗栖野瓦窯	栗栖野瓦窯(文14-図26- 83)、迎賓館(文10-97-3)
71-10	瓦当は偏行唐草文。偏行唐草文71-9と同文。平瓦凸面にヘラ記号「三」。	灰色・緻密	楊梅小路 路面形成層 中世	平安後	山城 栗栖野瓦窯	同上
71-11	瓦当は偏行唐草文。唐草文は右から左へ偏行。主葉は連続し、緩やかに反転して忍冬文が派生。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部凹面は布目とヘラケズリ、端部ヨコケズリ。頸部凸面は平瓦凸面のタタキ模様が残り、裏面ヨコケズリ後ナデ、側面ケズリ後ナデ。平瓦部凹面に布目。別個体の平瓦凸面にヘラ記号「≠」。	灰色・緻密	整地層3366 11C	平安後	山城	
71-12	瓦当は唐草文。中心飾りは欠損。分厚い範の下半分を利用。唐草は主葉が大きく2回反転。子葉は強く巻き込む。瓦当下部で珠文は大きく密に巡る。瓦当部成形は包込み技法。段頸。瓦当部凹面はヨコナデ、頸部凸面ヨコケズリ後ナデ、裏面ナデ。平瓦凹面に布目、凸面ナデ。	灰色・緻密	土壙1745 13C	平安後	播磨?	
71-13	瓦当は海草状の線の細い唐草文。瓦当部成形は半折曲げ技法。頸部凸面はヨコナデ、裏面ナデ。平瓦凹面に糸切り痕、凸面ナデ。	灰白色・緻密	土壙1407 18C中	平安後	山城 栗栖野瓦窯	栗栖野瓦窯(文1-89)、 六角堂(文2-525)・ 三条西殿跡・東洞院大路 跡(文2-525)
71-14	瓦当は簡略化した唐草文。瓦当部成形は折り曲げ技法。曲線頸。瓦当部凹面布目と面取り、頸部凸面ヨコケズリ、裏面ヨコケズリ。平瓦凹面に布目、凸面ナデ。	灰白色・緻密	土壙1720 14C中	平安後	山城	

No.	形態・手法の特徴	色調・胎土	出土遺構・遺構年代	時代	産地・瓦窯	出土例(出典)
71-15	瓦当は雁巴文。雁行文と右巻3巴文を配する。瓦当部成形は折曲げ技法。瓦当部凹面布目、端部ヨコケズリ。顎部凸面ヨコナデ、裏面オサエ。平瓦凹面布目、凸面ナデ。平瓦部凸面に「≠」様のヘラ記号。	灰白色・緻密	柱穴2933 12C	平安後	山城 栗栖野瓦窯	栗栖野瓦窯(文1-106、文14-図27-110、文15-図版13-11)
71-16	瓦当は剣頭文。剣頭7以上で、放射状に配する。剣には鎬がなく、陰刻される。瓦当部成形は半折曲げ技法。顎部凸面はヨコケズリ後ヨコナデ、側面ヨコケズリ、裏面オサエ、平瓦凹面は布目とナデ、凸面ナデ、側面ケズリ。	灰白色・緻密	土壇1735 15C	平安後	山城	山城
71-17	瓦当は剣頭文。剣頭7以上、剣は垂直に配置する。瓦当部成形は半折曲げ技法。曲線顎。瓦当部凹面ナデ、凸面ヨコケズリとナデ、裏面ナデ。平瓦部凹面に縦方向の畳目状の圧痕が残る。	淡黄灰色 ・二次被熱で変色 ・緻密	溝2888 12C末	平安後	山城 栗栖野瓦窯	栗栖野瓦窯(文15-図23-27)
71-18	瓦当は剣頭文。剣頭13を放射状に配する。内外区を分ける界線があり、外区には小さな珠文を密に配す。瓦当部成形は、半折曲げ技法。顎部凸面はヨコケズリ、裏面に指圧痕。平瓦部凹面は布目、凸面は大きな指圧痕。	灰白色・緻密	土壇2801 11C後	～平安後	山城	平安宮内膳司跡(文2-559)
71-19	瓦当は斜格子文。内区を斜格子で埋め、各格子内部に縦長の珠文を置く。外区には小さな珠文を配する。瓦当部成形は半折曲げ技法。瓦当部凹面は布目とヘラケズリ、顎部凸面と側面・裏面はヨコケズリ。平瓦部凹面は布目、凸面は大きな指圧痕。	灰白色・緻密	楊梅小路路面形成層 12C末	平安後	山城	広隆寺・内裏(文2-554)、迎賓館(文10-98-8)
71-20	瓦当は剣頭文。剣頭文と左巻きの三巴文を配す。瓦当部成形は、半折曲げ技法。瓦当部凹面布目、顎部凸面ヨコケズリ・ナデ、裏面ヨコナデ、側面ヨコケズリ。	淡黄灰色 ・二次被熱で変色 ・緻密	土壇2313 17C前	鎌倉	山城?	

参考文献(観察表22・23)

※ 文○-の後に続く枝番号は掲載番号とする。

文1 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

文2 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1997年

文3 『板東善平収蔵品目録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年

文4 「左京二条二坊(2)」『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局 1982年 掲載番号4

文5 『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告 第13輯 (財)古代学協会 1984年

文6 『器瓦録想』伏見城研究会 2004年

文7 『平安京跡発掘調査概報』昭和62年度 京都市文化観光局 1988年

文8 『特別史跡特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年

文9 『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年

文10 『平安京左京北辺四坊-第1分冊(公家町形成前)-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年

文11 『仁和寺境内発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年

文12 「左京四条一坊」『平安京跡発掘調査報告』平安京調査会 1975年

文13 『丹波国と平安京-都を支えた篠瓦窯群-』第10回特別展示図録 亀岡市文化資料館 1994年

文14 『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』平成4年度 京都市文化観光局 1993年

文15 『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年

観察表24 江戸時代の軒丸瓦一覧表 (図版72・134)

No	種類	形態・手法の特徴	色調・胎土	出土遺構・ 遺構年代
72-1	棟丸瓦	瓦当は時計回り・右回りの三巴文。有周縁。瓦当面に金箔が施される。瓦当外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ+裏縁ナデ。さし部接合部にはキザミ目はない。外径5.8cm。	灰白色・緻密	土壌748 18C~19C初
72-2	棟丸瓦	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当外縁は面取りし、ナデ。瓦当裏面は指オサエ+ナデ+裏縁ナデ。さし部外面はタテナデ。外径7.8cm。	灰白色・緻密	土壌407 19C後
72-3	棟丸瓦	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当面にキラコ。瓦当外縁は瓦当裏面はナデ+裏縁ナデから接合部ナデに続く。さし部外面はタテナデ。外径5.8cm。	灰白色・緻密	土壌292 19C後
72-4	棟丸瓦	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当面にキラコ、周縁外側を面取り、外縁下半はナデ。瓦当裏面はナデ+裏縁ナデ。さし部外面はタテナデ、裏面は未調整。外径7.6cm。	灰白色・緻密	土壌1 19C後
72-5	棟丸瓦	瓦当は12葉二重菊花文、有周縁、粒状珠文、珠弁に子葉あり。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ。瓦当裏面はナデ+裏縁ナデ。外径6.4cm。	浅黄橙色・二次被熱で変色・緻密	土壌489 19C中
72-6	棟丸瓦	瓦当は菊花文、有周縁、ボタン状中房、10葉一重菊花文、主弁に子葉あり。瓦当面にキラコ、周縁外側を面取り、外縁下半ナデはさし部上面ナデに続く。瓦当裏面はナデ+裏縁ナデでさし部側縁ナデに続く。さし部外面と側縁はタテケズリ+タテナデ、裏面は未調整。外径8.0cm。	灰白色・緻密	検出中
72-7	棟丸瓦	瓦当は菊花文、有周縁、ボタン状中房、16葉一重菊花文。瓦当面にキラコ、周縁外側を面取り、外縁下半ナデはさし部外面ナデに続く。瓦当裏面はナデ+裏縁ナデでさし部側縁ナデに続く。さし部外面と側縁はタテナデ、裏面は未調整。外径8.9cm。	灰白色・緻密	土壌407 19C後
72-8	棟丸瓦	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。転用され、中房と花弁を打ち欠き、平らにし、周縁内を皿状にする。瓦当面にキラコ、瓦当外縁下半はナデ、裏面は裏縁ナデ。接合部にヨコのキザミ目。外径9.1cm。	灰白色・緻密	掘下げ 19C
72-9	棟丸瓦	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当裏面にキラコ、外縁下半はナデ、裏面はヨコナデの後、裏縁ナデ+接合部ナデ。外径8.9cm。	灰白色・緻密	土壌510 19C後
72-10	軒丸瓦	瓦当は、三巴文、反時計回りの左巻き。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、裏面ナデ、接合部にタテヨコのキザミ目。	灰白色・緻密	土壌365 19C前
72-11	軒丸瓦	瓦当面に文字文、「善」と読むものか。有周縁、瓦当面にキラコ、瓦当下半はナデ、裏面ナデ+裏縁ナデ。接合部にタテヨコのキザミ目。外径14.8cm。	灰白色・二次被熱で変色・緻密	土壌799 18C~19C初
72-12	軒丸瓦	瓦当は三巴文、時計回りの右巻きで高く盛り上がる。珠文は大きく、16個ある。瓦当面にキラコ、瓦当外縁下半はナデ、裏面はナデの後、裏縁ナデ。瓦当周縁外端を面取り、接合部には円周方向のキザミ目。外径15.2cm。	灰白色・緻密	土壌489 19C中
72-13	軒丸瓦	瓦当は三巴文、時計回りの右巻き。珠文は13個。瓦当面にキラコ、瓦当外縁下半ナデ、裏面はナデの後裏縁ナデ。丸瓦外面タテケズリ+タテナデ。丸瓦裏面布目痕。漆喰が瓦当裏面と丸瓦裏面に特に多く付着。外径13.5cm。	灰白色・緻密	土壌300 19C後
72-14	軒丸瓦	瓦当は三巴文、時計回りの右巻き。珠文は12個。瓦当面は銀化。瓦当外縁下半はナデ、裏面はナデの後裏縁ナデ。外径13.9cm。	灰白色・緻密	土壌822 18C後
72-15	軒丸瓦	瓦当は三巴文、時計回りの右巻きで、頭部は大きい。圏線がある。珠文は24個で、小さい。瓦当面にキラコ、瓦当外縁下半はナデ、裏面はナデの後、裏縁ナデ。瓦当周縁外端を面取り、接合部にタテヨコのキザミ目。外径13.7cm。	灰白色・緻密	井戸347 19C後~
72-16	軒丸瓦	瓦当は三巴文、時計回りの右巻きで、頭部は大きく高く盛り上がる。珠文は16個。瓦当面にキラコ、瓦当外縁下半はナデ、裏面はナデの後、裏縁ナデ。丸瓦外面はタテケズリ+タテナデ。丸瓦内面に布目痕。外径14.1cm。	灰白色・緻密	土壌979 18C末
72-17	軒丸瓦	瓦当は三巴文、時計回りの右巻きで、頭部は大きい。珠文は13個で大きい。瓦当面にキラコ、瓦当外縁下半はナデ、裏面はナデの後、裏縁ナデ。丸瓦外面はタテケズリ+タテナデ。瓦当周縁外縁を面取り。外径15.9cm。	灰白色・二次被熱で変色・緻密	土壌611 18~19C
72-18	軒丸瓦	瓦当は三巴文、時計回りの右巻きで、尾部は接して圏線となる。珠文は13個。瓦当面にキラコ、瓦当外縁下半はナデ、裏面はナデの後、裏縁ナデ。接合部にはタテヨコのキザミ目。外径15.7cm。	灰白色・緻密	土壌479 19C後
72-19	軒丸瓦	瓦当は三巴文、時計回りの右巻きで、尾部は接して圏線となる。珠文は13個。瓦当面にキラコ、瓦当外縁下半はナデ、裏面はナデの後、裏縁ナデ。瓦当周縁内端を指押さえて面取り、接合部にはタテヨコのキザミ目。外径15.9cm。	淡黄灰色・二次被熱で変色・緻密	土壌304 19C前

観察表25 江戸時代の軒平瓦・軒棧瓦一覧表 (図版73・135)

No.	種類	形態・手法の特徴	色調・胎土	出土遺構・ 遺構年代
73-1	軒平瓦	瓦当は凸型均整唐草文。中心飾りは一葉。瓦当面にキラコ、周縁の外側は面取り、顎部凸面と裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、裏面は未調整。	灰白色・緻密	土壙820 18C後～19C初
73-2	軒平瓦	瓦当は凹型均整唐草文。唐草文は雲文様にも見える。瓦当面にキラコ、顎部凸面と裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、裏面は未調整。	灰白色～にぶい 橙色・二次被熱で 変色・緻密	井戸210 19C後
73-3	軒平瓦	瓦当は凸型均整唐草文。瓦当顎部凸面と裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、裏面は未調整。	灰白色～にぶい 橙色・二次被熱で 変色・緻密	土壙329 19C前
73-4	軒平瓦	瓦当は凸型均整唐草文。瓦当面にキラコ、周縁の外側上面は面取り、顎部凸面と裏面はヨコナデ。瓦当面の第1と第2唐草の間に三角形の刻印が2個ある。	灰白色・緻密	土壙466 攪乱
73-5	軒棧瓦	小丸はなく、雀口のつく鎌軒棧瓦。平瓦当は、凸型均整唐草文、中心飾りは花文。瓦当面と平瓦外面にキラコ。瓦当周縁と顎裏面はヨコナデ。平瓦部外面はナデ、裏面未調整。	灰白色・緻密	土壙326 19C中
73-6	軒棧瓦	小丸はなく、雀口のつく鎌軒棧瓦。平瓦当は、凸型均整唐草文、中心飾りは花文。瓦当面にキラコ。瓦当周縁と顎裏面はヨコナデ。平瓦部外面はナデ、裏面は未調整。	灰黄色・二次被熱 で変色・緻密	井戸386 19C後
73-7	軒棧瓦	小丸はなく、雀口のつく鎌軒棧瓦。平瓦当は、凹型均整唐草文、中心飾りは73-6と同じ花文。唐草部分が凹型となっている。瓦当面にキラコ。瓦当周縁と顎裏面はヨコナデ。平瓦部外面はナデ、裏面は未調整。	灰白色・緻密	土壙403 19C後
73-8	軒棧瓦	唐草鎌角瓦。小丸はなく、雀口のつく軒棧瓦で屋根の角部分で使われる。平瓦当は、凸型均整唐草文、中心飾りは花文。瓦当面にキラコ。瓦当周縁の外側は面取り。平瓦部外面はナデ、裏面は未調整。外周はヨコナデ。ほぼ完形で、長さ約30cm、幅28.5cm。	灰白色・緻密	土壙1358 18C
73-9	軒棧瓦	丸付軒棧瓦。丸瓦当は反時計回りの左巻きの三巴文。珠文は12個。平瓦当は、凸型均整唐草文。瓦当周縁と裏面はヨコナデ、瓦当凸面はヨコナデ。	灰白色・緻密	土壙435 18C～19C前
73-10	軒棧瓦	丸付軒棧瓦。丸瓦当は時計回りの右巻きの三巴文。珠文は13個。平瓦当は、凸型均整唐草文、中心飾りは花文。瓦当周縁と裏面はヨコナデ、丸瓦凸面はタテナデ。	灰白色・緻密	土壙611 18C～19C
73-11	軒棧瓦	丸付き軒棧瓦の丸部で、無文。瓦当面にキラコ。丸瓦当周縁の外側を面取り、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ。棧瓦部との接合部にはキザミ目がある。	にぶい橙色・二次 被熱で変色・緻密	井戸108 19C
73-12	軒棧瓦	丸付き軒棧瓦の丸部で、反時計回りの左巻きの三巴文。瓦当面にキラコ。瓦当面と外縁・瓦当裏面はナデ。棧瓦部との接合部は上半はヨコ、下半は縦方向のキザミ目がある。	灰色～灰白色・ 緻密	井戸46 19C後～
73-13	軒棧瓦	万十一文字軒瓦で垂れの下部は直線である。丸瓦当は外区のない簡略化した反時計回りの左巻きの三巴文。丸瓦当周縁の外側を面取り。平瓦当は無紋。瓦当面にキラコ。外縁・平瓦裏面はナデ。棧瓦部との接合部は斜め方向のキザミ目がある。	灰白色・緻密	土壙150 19C後
73-14	軒棧瓦	丸付軒棧瓦。丸瓦当は時計回りの右巻きの三巴文。珠文はない。平瓦当は、凸型均整唐草文、中心飾りは花文。瓦当面にキラコ。瓦当周縁と裏面はヨコナデ、丸瓦凸面はタテケズリ。平瓦外面はヨコナデ、裏面は未調整。	灰白色・緻密	井戸255 19C後
73-15	軒棧瓦	巴付唐草切隅軒棧瓦で、屋根の角の部分に使用する。丸瓦当面と平瓦当面は45度傾く。丸瓦当は時計回りの右巻きの三巴文。珠文はない。平瓦当は、凸型均整唐草文、中心飾りは花文。瓦当周縁は面取り、周縁と裏面はヨコナデ、平瓦右端上面に縦線が入る。	灰色・緻密	土壙480 19C中

観察表26 江戸時代の道具瓦一覧表 (図版74・136)

No.	種類	形態・手法の特徴	色調・胎土	出土遺構・遺構年代
74-1	棟止瓦	棟の末端に使う棟止瓦。垂れには宝珠文が配され、垂れの下端は水平。瓦当面にキラコ。瓦頭部上端縁は面取り、各部調整はナデ。裏面は粗いナデ。	灰色・二次的被熱で変色・緻密	土壌611 18C~19C
74-2	一文字軒瓦	大型の軒瓦で、上部は剥離、垂れには、陰刻の唐草文が配される。軒瓦部分は水平で垂れの部分が厚いので、鬼台や獅子口などの一部とも考えられる。瓦当面にキラコ。瓦頭部下縁は面取り。上端と裏面上端の接合部はココキザミ。各部調整はナデ。	灰白色~灰色・緻密	井戸575 19C後
74-3	巴付熨斗丸止瓦	隅棟用に使うもので、瓦当面には巴文、丸瓦の端部には熨斗がつく。周縁外縁と熨斗端部は面取り。瓦当面にキラコ。外面はナデ、外縁はナデ、裏面は粗いナデ。瓦当近くの丸瓦裏面は一部打ち欠く。	淡黄灰色・二次的被熱で変色・緻密	井戸297 19C後
74-4	鬼瓦	雲形鬼瓦の足の部分。足は凸型で描かれ、雲は陰刻線で描かれる。瓦当面はハラケズリとナデ、瓦当周縁は面取り、側縁と裏縁はナデ、裏面は粗いナデ。	灰白色・二次的被熱で変色・緻密	検出中
74-5	板塀瓦	軒瓦部分が水平。垂れには単純化した唐草文がつく。瓦当面にキラコ。瓦当下面縁はナデ、平瓦上面と裏面は粗いナデ。	灰白色~灰色・緻密	井戸300 19C後
74-6	板塀瓦	軒平瓦の垂れは水平で単純化した唐草文がつく。瓦当面にキラコ。瓦当下面縁と側縁はナデ、平瓦中央部に釘穴。平瓦上面は粗いナデ、平瓦裏面はナデ。	灰色・二次的被熱で変色・緻密	井戸309 18C後
74-7	一文字軒瓦	軒平瓦の垂れの下端が直線の瓦。瓦当面は無文で、中央に四角形の圏線内に「治」を表す文字印。瓦当面にキラコ。瓦当周縁外端を面取り、瓦頭部外縁はナデ、平瓦部上面と側面はナデ、裏面未調整。	灰白色・二次的被熱で変色・緻密	土壌402 19C後
74-8	丸瓦	丸瓦凹面に、細長い内叩き痕が深く残る。丸瓦外縁の内・外端を広く面取り。凹面に布目、差し縫いは玉縁寄り。丸瓦凸面はハラケズリとナデ、玉縁は短い。	灰色・緻密	土壌304 19C前
74-9	経の巻菊巴鬼瓦	左側の経の巻上面に「文政」(1818~29年)と記すハラ書き文。「文政」以下の文字は欠損。また、右側の経の巻基部上面に「深草瓦師青山市良右工門」と記すハラ書き。鬼瓦の下半は欠損。大棟鬼瓦か切掘鬼瓦と思われる。経の巻瓦頭面の菊花文はボタン状中房、凸弁16葉一重菊で瓦当面にキラコ、左側の経の巻基部は欠損し分離。72-8のように再利用時に、右側の2つの菊花文の花弁盛り上がり部分を打ち欠く。丸瓦当部と平瓦部外面はココナデ、平瓦部裏面は粗いナデ。	灰白色~灰色・緻密	土壌407 19C中頃

観察表27 江戸時代の井戸椀瓦一覧表 (図版75・137)

No.	種類	形態・手法の特徴	色調・胎土	出土遺構・遺構年代
75-1	井戸椀瓦	平瓦の凸面に道具で凹印を、平瓦の円周方向に上から7+6+7と押印。道具は75-2と同じだが、先端部分の押しは0.3cmと浅く、道具の支柱は不鮮明。平瓦は幅25.5~26.0cm、長さ27.5cm、厚さ2.6~2.8cm。各部調整はナデ。刻印なし。	灰白色~灰色・緻密	井戸378 19C後
75-2	井戸椀瓦	平瓦の凸面に道具で凹印を、平瓦の円周方向に上から6+6+6と押す。先端部分で押しは0.6~0.9cmと深い。75-1と同じ印。平瓦は幅25.5cm、長さ27.0cm、厚さ3.0~3.3cm。各部調整はナデ。刻印なし。	灰白色~灰色・緻密	井戸378 19C後
75-3	井戸椀瓦	平瓦の凸面に道具で凹印を、平瓦の円周方向に上から6+7+4と押す。最深部分で1.2~1.7cmと深く押す。平瓦は幅24.5cm、厚さ3.0cm。焼成後、木口端を、焼成後、長さ22cmに打ち欠く。各部調整はナデ。刻印なし。	灰オリーブ色~オリーブ黒色・粗砂多い	井戸210 19C後
75-4	井戸椀瓦	平瓦の井戸椀瓦。凹面には75-5・6と同様に縦方向に多数の傷跡。凸面に75-1のような押印なし。焼成前に付けられた横方向のキザミ目がある。幅24.5cm、長さ27.7cm、厚さ3.5cm。各部調整はナデ。刻印なし。	灰白色~灰色・緻密	井戸210 19C後
75-5	井戸椀瓦	四角形の圏線内に「右」を表す文字印。平瓦の木口に中央付近に凹面を上にして押す。凸面に75-1のような押印なし。井戸内面に当たる凹面には75-4・6と同様の縦方向に多数の傷跡。幅24.7~25.0cm、長さ29.3cm、厚さ3.0~3.2cm。各部調整はナデ。	灰白色~灰色・緻密	井戸132 19C中
75-6	井戸椀瓦	平瓦の井戸椀瓦。凹面には縦方向に75-4・5と同様の傷跡がある。凸面に75-1のような押印なし。焼成後、縦・横ともに打ち欠く。幅23.0cm、長さ21.5cm、厚さ3.5cm。各部調整はナデ。刻印なし。	灰白色~オリーブ黒色・緻密	井戸210 19C後

観察表28 江戸時代の刻印瓦一覧表 (図版76・138)

No.	種 類	形態・手法の特徴	色調・胎土	出土遺構・ 遺構年代
76-1	井戸椀瓦	四角形の圏線内に「右」を表す文字印。平瓦の木口に中央付近に凹面を上にして押す。井戸内より4枚出土。	灰白色～灰色・ 緻密	井戸132 19C中
76-2	井戸椀瓦	四角形の圏線内に「右」を表す文字印。平瓦の木口に中央付近に凹面を上にして押す。	灰白色～オリーブ 黒色・緻密	井戸132 19C中
76-3	井戸椀瓦	四角形の圏線内に「右」を表す文字印。平瓦の木口に中央付近に凹面を上にして押す。井戸内より4枚出土。	灰色～灰オリーブ・ 緻密	井戸132 19C中
76-4	井戸椀瓦	四角形の圏線内に「治」を表す文字印。平瓦の木口に中央付近に凹面を上にして押す。	灰白色～オリーブ 褐色・緻密	井戸210 19C後
76-5	井戸椀瓦	四角形の圏線内に「平」を表す文字印。平瓦の木口に中央付近に凹面を上にして押す。	灰白色～灰色・ 緻密	井戸73 19C以降
76-6	平瓦か棧瓦	長方形の圏線内に「…くさ …右衛門」と記す人名印。瓦の木口中央に押す。文字の上半を欠く。	灰白色～灰色・ 緻密	土壙407 19C後
76-7	棧袖瓦か 平袖瓦	長方形の圏線内に「ふかくさ九郎右衛門」の人名印。瓦の木口右端に押す。	灰白色～灰色・ 緻密	攪乱
(74-7)	一文字軒瓦	四角形の圏線内に「治」の文字印。垂れの中央に押す。棧瓦葺の破風に使う。その他に幕末の井戸や棧瓦・軒棧瓦から9個の「治」印が出土。	浅黄色・二次的 被熱で変色・緻 密	土壙402 19C後
76-8	丸瓦	丸瓦の凸面に「寛文十庚戌年製」(1670年)と記す年号印。凸面は縦方向にヘラ削り。丸瓦凹面に布目とコピキB(鉄線切り)の横方向の線が強く残る。17世紀初頭以降の技法といわれており、年号・遺構年代と整合する。	灰白色～灰色・ 緻密	石室1500 17C後
76-9	鬼瓦	楕円形の圏線の中に「勅」もしくは「勘」などを表す文字印。瓦当体部側面に押す。	灰白色・二次的 被熱で変色・緻 密	井戸108 19C
76-10	軒平瓦	長方形の圏線内に縦書きで「大ふつ□□」との文字印。無紋の軒平瓦の左端に押す。	灰白色～灰色・ 緻密	表採
76-11	軒棧瓦	四角形の圏線内に「治」を表す文字印。平瓦部分の瓦当左側に押す。	灰白色・緻密	井戸108 19C
76-12	軒平角瓦か 軒棧角瓦	円形の圏線内に「+」字の記号印。瓦当面右の周縁に押す。	灰白色～灰色・ 二次的被熱で変 色・緻密	埋甕715 19C前
76-13	軒棧瓦か 軒平瓦	四角形の圏線内に「寺」のような文字印。瓦当面右の周縁に押す。	灰白色～暗灰色 ・緻密	土壙323 19C中
76-14	軒平角瓦か 軒棧角瓦	小さな正三角形の印刻を4個組み、大きな正三角形を作る。瓦当面右の周縁に押す。	灰白色～暗灰色 ・緻密	土壙402 19C後
76-15	軒平瓦か 軒棧瓦	四角形の圏線内に「+」の記号印。瓦当面右の周縁に押す。土壙292・46・42、埋甕715などの棧瓦なども押される。	灰白色～暗灰色 ・緻密	井戸46 19C後～
76-16	軒平瓦か 軒棧瓦	凸線の山笠に「三」を表す文字印。瓦当面左下に表す。	灰白色・二次的 被熱で変色・緻 密	漆喰36 19C後
76-17	軒棧瓦	円形の圏線内に「V」字形を表す記号印。瓦当面左の周縁に押す。その他に土壙494・690・784・466より4個出土。	灰白色～暗灰色 ・緻密	土壙489 19C中

観察表29 錢貨一覧表 (図版77・78・139・140)

No.	種類	初鑄年代	法量(mm)			重量(g)	年号	出土遺構・層	遺構年代	備考
			外径	孔径	厚さ					
77-1	開元通寶	621	24.95	6.65	1.40	3.35	唐、武徳4年	土壙1122	18C前	
77-2	至道元寶	995	24.60	6.15	1.50	2.76	北宋、至道年間	土壙1549	17C前	
77-3	咸平元寶	998	24.20	5.90	1.55	3.35	北宋、咸平元年	土壙1277	17C前	
77-4	景德元寶	1004	25.45	6.20	1.65	2.94	北宋、慶徳元年	土壙1487	17C前	
77-5	景德元寶	1004	24.45	6.35	1.75	3.04	北宋、慶徳元年	石室1500	17C後	
77-6	祥符通寶	1008	22.45	6.30	0.95	2.12	北宋、大中祥符2年	土壙1336	17C前	
77-7	祥符通寶	1008	22.90	6.55	1.20	1.95	北宋、大中祥符2年	井戸2300	17C前~後	
77-8	天聖元寶	1023	23.75	6.75	1.30	2.08	北宋、天聖元年	土壙1440	17C初	
77-9	景祐元寶	1034	24.65	7.10	1.75	3.12	北宋、景祐元年	土壙1609	17C前	
77-10	皇宋通寶	1039	23.80	6.80	1.15	2.78	北宋、宋元2年	土壙1336	17C前	
77-11	皇宋通寶	1039	25.60	6.85	1.55	3.21	北宋、宋元2年	集石1735	15C	
77-12	皇宋通寶	1039	24.55	7.15	1.30	3.98	北宋、宋元2年	井戸2542	16C	
77-13	至和通寶	1054	24.85	6.70	1.20	2.67	北宋、至和元年	掘下げ		
77-14	嘉祐通寶	1056	23.60	6.55	1.55	3.45	北宋、嘉祐年間	土壙1336	17C前	
77-15	治平元寶	1064	24.20	6.15	1.25	3.47	北宋、治平年間	土壙1277	17C前	
77-16	熙寧元寶	1068	23.65	6.35	1.50	3.56	北宋、熙寧元年	土壙1418	17C前	
77-17	元豐通寶	1078	23.00	6.60	1.05	2.14	北宋、元豐元年	土壙1171	18C後	
77-18	元豐通寶	1078	25.20	6.65	1.80	3.41	北宋、元豐元年	土壙3024	15C前	
77-19	元祐通寶	1086	24.65	6.05	1.35	2.63	北宋、元祐元年	土壙511	19C中	
77-20	元祐通寶	1086	25.00	6.50	1.70	4.33	北宋、元祐元年	井戸2300	17C前~後	
77-21	紹聖元寶	1094	24.50	5.05	1.50	4.05	北宋、紹聖元年	土壙224	19C	
77-22	元符通寶	1098	24.00	6.35	1.35	2.67	北宋、元符元年	土壙1487	17C前	
77-23	大觀通寶	1107	24.85	5.50	2.15	3.31	北宋、大觀元年	井戸1370	18C後	
77-24	政和通寶	1111	24.15	5.75	1.50	3.55	北宋、政和元年	土壙1358	18C	
77-25	政和通寶	1111	23.75	6.80	1.15	2.91	北宋、政和元年	土壙1510	16C末~17C初	
77-26	淳熙元寶	1174	24.75	6.60	1.85	3.79	南宋、淳熙元年	埋力×133	19C	
77-27	洪武通寶	1368	23.45	5.80	1.45	2.97	明、洪武元年	土壙1605	16C末~17C初	
77-28	洪武通寶	1368	22.35	5.55	1.50	2.48	明、洪武元年	土壙1577	17C前	
77-29	永樂通寶	1408	24.90	5.60	1.15	2.58	明、永樂6年	土壙1277	17C前	
77-30	宣徳通寶	1433	25.50	4.85	1.90	3.88	明、宣徳8年	掘下げ		
77-31	無文錢		22.85	7.00	1.60	2.45		掘下げ		
77-32	無文錢		23.65	6.40	1.85	2.30		土壙1689	16C末~17C初	
77-33	無文錢(線刻)		26.90	5.40	1.35	2.49		土壙1105	18C後	
78-1	富寿神寶	818	23.20	6.40	1.60	2.29	弘仁9年	楊梅小路路面	11C中	
78-2	寛平大寶	890	19.60	4.45	1.60	1.74	寛平2年	小穴2817	13C	
78-3	乂元人寶	958	20.75	4.90	1.65	2.57	天徳2年	楊梅小路路面	11C	
78-4	文久永寶	1863	27.55	6.90	1.60	3.83	文久3年	検出中		
78-5	寶永通寶	1708	37.50	8.90	1.40	8.80	宝永5年	土壙577	19C	
78-6	天保通寶	1835	長50.00 短29.85	7.75	3.20	18.43	天保6年	土壙771	19C後	
78-7	天保通寶	1835	長49.45 短33.40	7.80	3.95	22.17	天保6年	土壙771	19C後	
78-8	キセル錢		長24.95 短23.75	6.20	5.60	8.50		土壙885	18C後	
78-9	キセル錢		18.40	5.90	3.70	2.58		土壙1108	18C中	
78-10	寛永通寶(波)		27.90	6.15	1.50	4.23		検出中		
78-11	寛永通寶(文)		25.25	5.85	1.50	3.45		井戸352		
78-12	寛永通寶(文)		25.00	5.80	1.30	3.21		土壙365	19C前まで	
78-13	寛永通寶		24.20	5.85	1.35	3.41		土壙262	19C	古寛永か?
78-14	寛永通寶		24.60	6.10	1.15	3.21		土壙365	19C前まで	古寛永か?
78-15	寛永通寶		25.15	5.70	1.00	2.62		土壙1234	17C~18C前	古寛永か?
78-16	寛永通寶		19.65	6.35	1.70	2.19		土壙248	19C後	
78-17	寛永通寶		19.20	6.00	1.05	1.46		土壙479	19C後	
78-18	寛永通寶		23.80	6.10	1.15	2.94		土壙344	19C後	
78-19	寛永通寶		23.40	6.20	1.50	2.48		土壙403	19C後	
78-20	寛永通寶		24.50	5.75	1.25	3.11		土壙376	18C後	
78-21	寛永通寶		25.80	5.95	1.45	3.70		土壙365	19C前まで	
78-22	寛永通寶		23.10	6.60	1.30	2.38		土壙466		

観察表30 金属製品一覧表 (図版79・80・141～144)

No.	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構・層	遺構年代
79-1	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部を持ち、断面方形の体部が延びる。	土壇1122	18C前
79-2	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部を持ち、断面方形の体部が延びる。	土壇1122	18C前
79-3	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部を持ち、断面方形の体部が延びる。	土壇1122	18C前
79-4	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部を持ち、断面方形の体部が延びる。	土壇1122	18C前
79-5	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部を持ち、断面方形の体部が延びる。	土壇1122	18C前
79-6	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部を持ち、断面方形の体部が延びる。	土壇1122	18C前
79-7	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部を持ち、断面方形の体部が延びる。	土壇1122	18C前
79-8	鎌先	鉄	茎の部分は欠損している。	井戸132	19C中
79-9	鍬	鉄	一本の茎から3本の鍬先に分かれる。	土壇1027	17C前
79-10	火打金	鉄	櫛形で、把手の部分は残存していない。	土壇400	19C～19C後
79-11	火打金	鉄	櫛形で、把手の部分は残存していない。	土壇1027	17C中
79-12	鏝	鉄	断面長方形の棒状品の先をL字状に曲げ、先端を尖らしている。	土壇342	
79-13	留め金	鉄	引戸などに使用する留め金。	土壇292	19C後
79-14	丸環	鉄	引戸などに使用する環。	掘下げ	
79-15	鑿	鉄	ほぼ全長が残る。	土壇771	19C後
79-16	灯明皿?	鉄	皿状の口縁部に板状の突起が付き、底部には高台状のリングが回る。鋳造。	土壇1277	17C前
79-17	鏝	鉄	隅丸方形の鉄板にL字状の金具を取り付けたもの。	土壇890	18C後
79-18	やっこ	鉄	先端部の挟む部分が扁平ではない。	検出中	
79-19	杓子	銅	板状の柄と杓の部分を溶接して接合する。	土壇1027	17C中
79-20	杓子	銅	板状の柄と杓の部分を溶接して接合する。	土壇808	19C
79-21	杓子	銅	板状の柄と杓の部分を溶接して接合する。	土壇1122	18C前
79-22	釘	銅	断面四角形の棒状品の頭部を、叩いて延ばしている。	土壇1122	18C前
79-23	釘	銅	断面四角形の棒状品の頭部を、叩いて延ばしている。	土壇466	
79-24	火箸	銅?	頭部を円環状にした火箸で、先細りの四角形断面を持つ。	土壇1122	18C後～末
79-25	匙	真鍮?	扁平な棒状品の一端を叩いて、小判状の皿に成形している。	井戸12	19C
79-26	匙	銅?	扁平な棒状品の一端を叩いて、小判状の皿に成形している。	掘下げ	
79-27	目皿	銅?	薄い円板状品。4角形と3角形を透かし状に抜いたもの。	土壇1094	18C前
79-28	十能	銅?	平たく延ばした皿状部と円筒の把手を差し込む部分からなる。	土壇1122	18C前
79-29	十能	銅?	柄との接合には鉄釘と木部が残っている。	小穴1504	18C後
79-30	灯明皿	銅?	2枚の皿状品が錆付いて、重なった状態。	土壇1232	17C前
80-1	髪飾り	真鍮?	頭部に耳搔きが付く、円形の飾板が付く二股の簪。飾板は許葬草文。	土壇1234	17C～18C前
80-2	髪飾り	銅?	頭部に耳搔きが付く、円形の飾板が付く二股の簪。飾板は不明文様。	土壇466	19C後
80-3	髪飾り	真鍮?	菱形の細文が胴部から脚部にかけて彫られている。	溝13	19C後
80-4	髪飾り	鉄	1本足で飾板がある製品。	掘下げ	
80-5	髪飾り	真鍮?	菱形の細文が胴部から脚部にかけて彫られている。	土壇266	19C
80-6	耳搔き	銅?	細い板状品を捻って螺旋状にしたもの。	土壇1234	17C～18C前
80-7	耳搔き	銅?	細い板状品の一端を叩いて耳搔き状に加工した製品。	土壇889	18C後
80-8	火箸	銅?	頭部は球形。体部は6角形である。	土壇1234	17C～18C前
80-9	火箸	真鍮?	頭部は球形。体部は円形である。	土壇376	18C後
80-10	火箸	銅?	頭部は球形。体部は円形である。	土壇889	18C後
80-11	火箸	銅?	頭部は球形。体部は円形である。	土壇1234	17C～18C前
80-12	掛金具	真鍮?	釣針状の掛金具。	土壇1122	18C前
80-13	掛金具	真鍮?	釣針状の掛金具。3個の巴文が彫られている。	土壇1122	18C前
80-14	掛金具	真鍮?	細い針金を束ねて鎖状にし、一方に小さい掛金具を取り付けた製品。	土壇1122	18C前
80-15	ミニチュア刀	銅?	刃の部分の断面は板状で刃は付けられていない。	土壇716	18C～19C前
80-16	分銅	銅?	隅丸直方体の一端に小さな円環状のツマミを付ける。	土壇283	19C中
80-17	鐘	?	紡錘形に作られた鐘。鋳造。	土壇496	19C
80-18	煙管	?	雁首と吸口と羅字が一体化した2つの部分からなる煙管。羅字部分には菊花文が巡る。	土壇1416	13C～17C
80-19	煙管	真鍮?	雁首。6角形で、肩付きの形態。	掘下げ	
80-20	煙管	真鍮?	雁首。	土壇1122	18C前
80-21	煙管	真鍮?	吸口。6角形で、肩付きの形態。	土壇292	18C前
80-22	煙管	真鍮?	吸口。	土壇1122	18C前
80-23	煙管	真鍮?	吸口。	土壇1122	18C前
80-24	灯芯押え	銅?	細長い板状品を円形に曲げ、一端を上延ばす。	土壇826	18C後～19C初
80-25	灯芯押え	銅?	細長い板状品を円形に曲げ、一端を上延ばす。上部を螺旋状に捻る。	土壇837	18C～19C初
80-26	灯芯押え	銅?	細長い板状品を円形に曲げ、一端を上延ばす。上部を螺旋状に捻る。	土壇511	19C中
80-27	引手金具	銅?	一本の棒状品から成形され、両端は叩いて太く作られている。	土壇400	19C～19C後

No.	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構・層	遺構年代
80-28	引手金具	銅?	一本の棒状品から成形され、両端は叩いて太く作られている。本体に取り付ける鉤や座金具が付く。	土壙300	19C後
80-29	引手金具	銅?	一本の棒状品から成形され、両端は叩いて太く作られている。本体に取り付ける鉤や座金具が付く。	土壙577	19C
80-30	燭台	銅?	円板形の素焼陶器の中央に、断面四角形の釘状品を貫通して、陶片に接する位置に四角形の座金を取り付けた製品。	土壙1122	18C前
80-31	挟	銅?	先端をL字に曲げた、ピンセット状の製品。	土壙861	18C後～19C初
80-32	八双金具	銅?	魚々子地状の細かい格子地に唐草文を施す。	土壙1122	18C前
80-33	襖引手金具	銅?	円板状の底板と3重構造で透かしの入った側板からなる。	溝230	19C後
80-34	飾り金具	銅?	一枚の薄板から動物の形に切り出し、断面をレンズ状に叩き出して立体感を持たした製品。	土壙304	19C前
80-35	筭	真鍮?	魚々子地に菱文の文様を彫る。	検出中	
80-36	小柄	銅?	内部に鉄製の中茎が残るが、刀身は欠落している。七曜亀甲文。	土壙1256	17C前
80-37	小柄	銅?	内部に鉄製の中茎が残るが、刀身は欠落している。柄巻を模した文様。	土壙997	18C中
80-38	切羽	銅?	側面に付けられていた細かい刻み目が一部に残る。	土壙906	18C後
80-39	目貫	銅?	鹿と紅葉をレリーフ状に表現。	掘下げ	
80-40	目貫	銅?	鹿と紅葉をレリーフ状に表現。	掘下げ	
80-41	留め金具	銅?	2本の足はV字状に曲げられている。	土壙1105	18C後
80-42	紐状金具	銅?	5弁の花形を2枚上下に重ねて球形にし、中心に細い棒状金具が貫通する。	土壙1086	18C
80-43	飾り金具	?	2重の円筒状で、棒状の調度に取り付ける金具。	土壙1027	17C前
80-44	和鏡	?	直径約9cmに復元される。2羽の鶏文が残る。	土壙885	18C後

観察表31 鑄造関係遺物一覧表 (図版81～84・145～148)

No.	種類	出土遺構・層	遺構年代	備考
81-1	炉蓋	土壙270	19C後	半円形。裏面と下面は熱のため黒褐色に変色し、所々に容着した緑灰色の鈹滓が付着。
81-2	炉蓋	土間650	18C～19C初	方形。中央部に約3.2cmの孔。
81-3	炉	土壙611	18C末～19C	孔を規則的に穿つた製品。方形板状。
81-4	炉	土壙611	18C末～19C	孔を規則的に穿つた製品。楕円形の箱状。
81-5	炉	土壙304	19C前	孔を規則的に穿つた製品。長方形。
81-6	フイゴ羽口	土壙274	19C	短軸の羽口。
81-7	フイゴ羽口	土壙274	19C	短軸の羽口。
82-1	埴塙蓋	土壙403	19C後	表面は溶融しガラス質の光沢がある。中央の孔の内側に緑錆が付着する。
82-2	埴塙栓	土壙403	19C後	茸状。表面は強く溶融。
82-3	埴塙栓	土壙403	19C後	茸状。表面は強く溶融。
82-4	埴塙栓	土壙403	19C後	茸状。表面は強く溶融。
82-5	埴塙内部の磁器	土壙489	19C中	肥前磁器の碗を埴塙の芯に転用したもの。
82-6	埴塙内部の陶器	土壙727	18C～19C前	京・信楽系陶器の碗を埴塙の芯に転用したもの。
82-7	埴塙	土壙326	19C中	
82-8	埴塙	炉295	19C前	
82-9	埴塙内部の陶器	井戸105	19C後	外面はロクロ目を強く残している。底部に「新平」の線刻文字。
82-10	埴塙内部の陶器	土壙400	19C～19C後	外面はロクロ目を強く残している。
82-11	埴塙	土壙826	18C後～19C初	内壁に土師皿。
82-12	埴塙	井戸352	攪乱	焜炉に転用。
82-13	埴塙	土壙270	19C後	
82-14	埴塙	土壙610	19C後	植木鉢に転用。
82-15	埴塙	土壙610	19C後	
82-16	埴塙	炉316	19C	底部に銅残る。
83-1	鑄型	土壙1122	18C前	筒形容器の外型。片口。
83-2	鑄型	土壙1122	18C前	鉢(鑿子)形容器の外型。
83-3	鑄型	土壙1122	18C前	鉢(鑿子)形容器の外型。
83-4	鑄型	土壙1122	18C前	鉢(鑿子)形容器の外型。
83-5	鑄型	土壙1122	18C前	蓋の外型。
83-6	鑄型	土壙1122	18C前	蓋の内型。
83-7	鑄型	土壙1122	18C前	蓋の外型。
83-8	鑄型	土壙1122	18C前	蓋の内型。
83-9	鑄型	土壙300	19C後	鉢(鑿子)形容器の外型。
83-10	鑄型	土壙822	18C後～19C初	真土の痕跡が無い。

観察表32 石製品一覧表 (図版85~87・149~156、図35)

No.	種類	計測値 (cm)			重量(g)	材質	出土遺構・層	遺構年代	備考
		長さ	幅	高さ					
85-1~4	基石							※ 観察表33参照	
85-5	紡錘車	直径2.8		0.9	11	滑石	土壙1094	19C後	底部を削り貫く。
85-6	紡錘車	直径3.9		2.0	38	滑石	土壙885	18C後	底部を削り貫く。外面に線刻文様がある。
85-7	滑石加工品	6.3	2.4	2.0	45	滑石	土壙1463	14C	滑石製羽釜の口縁部を加工し、各面に文様を彫り込む。
85-8	文鎮	(9.3)	1.8	(0.9)	29	頁岩~粘板岩	土壙811	18C~19C初	表面に菊水文様を彫り込む。
85-9~10	垢擦石								※ 観察表35参照
85-11~13	火打石								※ 観察表36参照
85-14	箱物	(5.4)	(3.35)	1.6	19	珪岩	土壙478	19C後	墨痕が各面に付着する。側面に花卉状の文様を彫り込む。熱を受ける？
85-15~16	温石								※ 観察表34参照
85-17	硯	(16.8)	6.0	(1.4)	175	頁岩~粘板岩	土壙611	18C末~19C	裏面に梅の花卉を線刻。
85-18	硯	15.3	5.7	1.6	169	頁岩~粘板岩	土壙489	19C中	装飾をもつ形状。海側の頭部に梅の花と毛彫りで文様を線刻。
85-19	硯	(6.9)	3.2	0.75	18	泥質ホルンフェルス	土壙569	19C	裏面に「出海文 高カ嶋石中村庄右衛門」と線刻。
85-20	硯	8.8	4.2	1.1	75	頁岩~粘板岩	土壙868	18C後	二連硯。陸部は平坦であるが、中央の間仕切りは磨り減る。
85-21	硯	7.9	3.8	0.7	40	泥質ホルンフェルス	土壙1122	18C前	表裏面とも墨痕付着。裏面に「上村七工門」と線刻。
85-22	硯	13.1	6.9	1.8	274	頁岩~粘板岩	土壙1122	18C前	陸部は浅く凹む。縁は大半が欠損。
85-23	硯	15.25	9.1	2.8	487	頁岩~粘板岩	掘下げ		表面に朱の痕跡。裏側は線を残し削り取る。縁は上端面が凹む。
85-24	硯	18.3	7.6	2.55	499	頁岩~粘板岩	土壙708	18C~19C初	陸部中央は大きく凹む。裏面に「高嶋青石」「本口高嶋虎班石」「高口石」と線刻。
85-25	硯	17.9	7.4	2.9	524	頁岩~粘板岩	掘下げ		表面に墨痕付着。裏面に「火」「谷口」と線刻。
85-26	硯	(16.9)	9.2	2.9	798	頁岩~粘板岩	土壙248	19C後	海部の端面を平坦に加工する。裏面に「本高嶋上石」と線刻。熱を受ける？
86-1	砥石	(22.6)	10.4	(10.9)	4120	砂質ホルンフェルス	土壙344	19C後	被熱で赤く変色する。
86-2	砥石	(18.7)	8.2	1.0	332	珪質頁岩~珪質粘板岩	掘下げ		
86-3	砥石	22.5	(7.0)	8.2	1992	頁岩~粘板岩	土壙225	19C後	
86-4	砥石	16.0	5.6	1.7	257	珪質頁岩~珪質粘板岩	土壙349	19C後	赤く変色する。
86-5	砥石	20.5	9.2	2.3	694	珪質頁岩~珪質粘板岩	土壙1122	18C前	
86-6	砥石	(12.5)	(12.6)	1.9	454	砂岩	土壙782	19C	表面4本、裏面6本の溝状の使用痕。
86-7	砥石	(9.1)	6.1	(1.5)	122	珪質頁岩~珪質粘板岩	土壙592	19C	3本の溝状の使用痕。赤く変色する。
86-8	砥石	(11.6)	7.6	1.6	236	珪質頁岩~珪質粘板岩	土壙822	18C後~19C初	4つの面に布が張ってある。
86-9	砥石	14.0	6.9	5.5	770	砂質ホルンフェルス	土壙807	19C後	
86-10	羽釜	口径17.8	最大径20.8	器高7.4	655	滑石	井戸2680	13C初	
86-11	羽釜	口径28.0	最大径33.6	器高(12.5)	1425	滑石	土壙2867	13C前	※ 観察表34参照
86-12	鍋	口径18.0		器高7.1	772	滑石	井戸2345	12C末~13C初	
87-1	茶臼(上)	(20.4)	(18.1)	12.0	6300	砂岩	土壙357	19C前	直径21cm
87-2	粉挽臼(下)	(31.3)	(16.8)	11.1	7480	花崗岩	土壙19	19C	直径34cm
87-3	石臼(下)	(28.3)	(14.7)	9.6	7480	花崗岩	土壙344	19C後	直径30cm
87-4	石臼(下)	(27.0)	(14.7)	7.8	5160	花崗岩	土壙489	19C中	直径29cm
87-5	石臼	(37.1)	(28.1)	22.6	23480	砂岩	井戸1644	16C末~17C初	直径42cm
87-6	宝篋印塔	25.0	25.1	17.5	16780	花崗岩	土壙708	18C~19C初	笠部。
87-7	五輪塔	23.1	22.7	15.4	12000	花崗岩	土壙248	19C後	笠石。
87-8	石塔			16.1	3100	花崗岩	土壙524	19C中	宝珠径11.2cm、受花径12.3cm。
87-9	石塔			(14.9)	2820	花崗岩	土壙1407	18C中	宝珠径12.0cm、受花径11.5cm。
87-10	手水鉢	内径26.0	最大径51.2	器高(18.2)	28740	花崗岩	土壙243	19C	下半部欠損。
87-11	焜炉	29.1	24.5	(16.1)	8480	礫岩?	井戸287	19C後	上半部欠損。
87-12	火入	23.8	18.9	14.4	3540	凝灰岩(笏谷石)	土壙1232	17C前	内面底部にノミ痕。

No.	種類	計測値 (cm)			重量(g)	材 質	出土遺構・層	遺構年代	備 考
		長さ	幅	高さ					
87-13	漬物石	直径 27.6		15.3	19580	花崗岩	土壌10	19C後?	完存。
149-1~6	基石								※ 観察表33参照
149-7~23	火打石								※ 観察表36参照
149-24	玉製品	直径 1.47			3.11	メノウ?	土壌248	19C後	
150-1~17	垢擦石								※ 観察表35参照
151-1~19	温石								※ 観察表34参照
152-1	碇	11.8	5.3	1.2	118	頁岩~粘板岩	掘下げ		裏面に人物戯画を線刻。
152-2	碇	(17.5)	(11.2)	1.5	450	頁岩~粘板岩	土壌489	19C中	裏面に「江州虎班石」と線刻。
152-3	碇	19.6	9.1	3.2	954	流紋岩?	土壌624	18C~19C初	海側の縁の上面に「あか志ま本石」と線刻。
図35-1	碇	18.1	7.4	2.6	642	頁岩~粘板岩	土壌385	19C中	裏面に「荒井氏」「□山氏」「青山一カ」と線刻。
図35-2	碇	18.5	7.6	2.5	494	頁岩~粘板岩	検出中		裏面に「笹本」「天天」を線刻。
図35-3	碇	(2.0)	6.1	1.0	27	泥質ホルンフェルス	掘下げ		海側の縁の上面に蟹と樹木、青海波文を陽刻。
図35-4	碇	(5.3)	6.6	1.0	59	頁岩~粘板岩	土壌1354	17C後	円形の文様を線刻するがノミ跡残る。

観察表33 基石一覧表 (図版85・149)

No.	計測値 (cm)			重量 (g)	材 質	出土遺構・層	遺構年代	備 考
	長径	短径	厚さ					
85-1	2.48	2.37	0.68	6.063	泥質ホルンフェルス	井戸343	19C後	周縁を打ち欠く。
85-2	2.24	2.16	0.63	5.228	泥質ホルンフェルス	掘下げ		
85-3	2.16	2.15	0.53	4.161	泥質ホルンフェルス	掘下げ		
85-4	2.40	2.07	0.59	4.590	泥質ホルンフェルス	土壌1232	17C前	楕円形。
149-1	2.17	2.16	0.70	4.43	泥質ホルンフェルス	土壌365	19C前まで	
149-2	2.18	2.14	0.40	2.461	泥質ホルンフェルス	井戸722	19C	片面は剥離している。
149-3	2.15	2.14	0.56	3.751	泥質ホルンフェルス	土壌1072	18C前	
149-4	2.19	2.17	0.43	3.434	泥質ホルンフェルス	土壌2794	17C前	
149-5	2.18	2.16	0.53	3.829	泥質ホルンフェルス	掘下げ		片面の一部が剥離。
149-6	2.08	2.08	0.45	3.110	泥質ホルンフェルス	掘下げ		

観察表34 温石一覧表 (図版85・86・151)

No.	転用した部位	重量 (g)	材 質	出土遺構・層	遺構年代	備 考
85-15	口縁部	196	滑石	土壌1336	17C前	滑石製羽釜を転用。完形品。穿孔1。
85-16		219	砂質ホルンフェルス	土壌861	18C後~19C初	完形品。穿孔1。
86-11	口縁部~底部	1425	滑石	土壌2867	13C前	側面を研磨する。
151-1		118	滑石	土壌402	19C後	完形品。未成品。穿孔は片面のみ。
151-2	口縁部	100	滑石	土壌1461	17C中	滑石製羽釜を転用。穿孔あり。
151-3	底部	31	滑石	土壌1666B	17C前?	滑石製羽釜を転用。
151-4	体部下半	154	滑石	土壌1695	16C末~17C初	滑石製羽釜を転用。長さ11.5cm。
151-5	体部下半?	53	滑石	土壌1700	17C?	滑石製羽釜を転用。穿孔あり。
151-6	口縁部	154	滑石	小穴1746	13C	滑石製羽釜を転用。タガ残存。未成品。幅6.0cm。
151-7	口縁部	376	滑石	柱穴2186	12C	滑石製羽釜を転用。完形品。長さ10.3cm、幅9.0cm。
151-8	口縁部	137	滑石	井戸2290	16C?	滑石製羽釜を転用。幅7.1cm。
151-9	口縁部	86	滑石	井戸2680	13C初	滑石製羽釜を転用。タガ跡残る。
151-10	口縁部	174	滑石	集石2678	15C	滑石製羽釜を転用。
151-11	口縁部	38	滑石	土壌2781	12C	滑石製羽釜を転用。
151-12	口縁部	135	滑石	土壌3213	13C後	滑石製羽釜を転用。タガ残存。側面を研磨。未成品。
151-13	口縁部	25	滑石	土壌3308	16C末~17C初	滑石製羽釜を転用。穿孔に銅線が付属。長さ3.7cm。
151-14	口縁部	143	滑石	掘下げ		滑石製羽釜を転用。幅8.7cm。穿孔1。
151-15	底部	115	滑石	検出中		滑石製羽釜を転用。
151-16	底部	55	滑石	重機掘削	15C以降	滑石製羽釜を転用。穿孔?
151-17	体部下半	42	滑石	検出中		滑石製羽釜を転用。
151-18	口縁部	52	滑石	検出中		滑石製羽釜を転用。タガ残存。未成品。幅3.4cm。
151-19	口縁部	70	滑石	検出中		滑石製羽釜を転用。タガ跡残る。

観察表35 垢擦石一覧表 (図版85・150)

出土遺構・層	遺構年代	個数	重量(g)	材質	備考
土壙208	19C後以降	1	34	軽石	一部欠損。150-8
土壙326	19C中	1	14	軽石	完存。150-2
土壙346	19C中	1	31	軽石	破損品。
土壙808下層	19C	1	38	軽石	完存。150-3
土壙810	18C~19C初	1	18	軽石	ほぼ完存。150-4
土壙889	18C後	6	134 (13、15、17、18、31、40)	軽石	
土壙1027	17C前	1	33	軽石	完存。150-7
土壙1094	18C前	8	246 (13、23、27、31、38、41、46、27)	軽石	85-10、150-14・17
土壙1248	17C後	1	41	軽石	完存。150-6
瓦組1263	17C前?	1	104	軽石	完存。穿孔2。1孔は貫通。150-16
土壙1280	17C後	11	283 (13、13、15、17、18、20、25、32、34、38、58)	軽石	150-9~12
土壙1310	17C後	1	48	軽石	完存。棒状。150-13
土壙1328	17C後	1	17	軽石	一部欠損。
土壙1671	18C中	1	28	軽石	完存。85-9
柱穴2953	12C前	1	10	軽石	完存。150-1
井戸3120枠内	11C後	1	17	軽石	完存。150-5
掘下げ		1	33	軽石	一部欠損。
検出中		1	63	軽石	完存。棒状。150-15

観察表36 火打石一覧表 (図版85・149)

出土遺構・層	遺構年代	個数	重量(g)	材質	備考
溝505	19C	3	9 (2、2、5)	チャート	
土壙598	19C後	2	5 (2、3)	チャート	
土壙611	18C末~19C	1	3	チャート	
土壙682	19C後	1	5	チャート	
土壙746	19C後	1	15	チャート	
土壙771	19C後	1	15	チャート	
土壙780	19C中	1	3	チャート	
土壙784	18C後~19C初	2	11 (5、6)	チャート	
土壙790	18C後	1	18	チャート	自然石?
土壙799	18C~19C初	1	30	チャート	
土壙807	19C後	7	99 (9、9、11、11、15、19、25)	チャート	85-13
土壙808	19C	18	365 (137、30、27、24、19、14、14、14、13、12、11、10、10、10、8、5、4、3)	チャート	原石面残存。打ち欠きあり。85-11、149-7~23
土壙820	18C後~19C初	3	22 (11、7、4)	チャート	
土壙825	18C~19C初	1	6	チャート	
土壙868	18C後	1	10	チャート	
土壙919	18C~19C初	8	111 (34、31、15、10、8、7、4、2)	チャート	原石面残存。
土壙922	18C後	1	12	チャート	原石面残存。
土壙942	18C後	1	8	チャート	
土壙971	18C前	1	4	チャート	
土壙974	18C後	1	7	チャート	
土壙1087	17C後	1	17	チャート	原石面残存。
土壙1122	18C前	1	61	チャート	原石面残存。自然石?
土壙1260	18C後	1	24	チャート	
土壙1317	18C前	1	4	チャート	
土壙1335	18C後	1	4	チャート	
掘下げ		1	8	チャート	原石面残存。
掘下げ		1	10	チャート	
掘下げ		1	16	チャート	
掘下げ		3	12 (5、4、3)	チャート	原石面残存。
掘下げ		1	12	チャート	
掘下げ		1	53	チャート	打ち欠きあり。85-12
掘下げ		2	9 (5、4)	チャート	原石面残存。
検出中		1	4	チャート	
検出中		1	3	チャート	

観察表37 骨角製品一覧表 (図版88・155・157・158)

No.	種類	材質	計測値 (cm)			出土遺構・層	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ			
88-1	櫛払	骨	(5.05)	2.55	0.15	土壌1549	17C前	
88-2	櫛払	骨	(4.35)	1.35	0.3	土壌42	19C 攪乱	
88-3	櫛払	骨	(5.6)	1.05	0.3	土壌1451	17C末	
88-4	簪	骨	(9.15)	0.6	0.3	土壌748	18C~19C初	
88-5	簪	骨	(8.1)	0.55	0.2	掘下げ		
88-6	簪	骨	(9.15)	0.4	0.3	土壌869	18C後	
88-7	簪	骨	10.2	0.5	0.4	土壌497	19C初 攪乱	
88-8	簪	骨	(10.45)	0.35	0.25	土壌399	19C後	
88-9	簪	角	11.65	0.8	0.12	土壌1248	17C?	
88-10	簪	骨	(10.5)	0.8	0.25	土壌866	19C前	
88-11	櫛	不明	2.5	(5.6)	0.4	掘下げ		
88-12	櫛	骨	3.0	(7.1)	0.4	土壌729	18C~19C前	
88-13	双六駒	骨		径2.3	1.1	土壌466	攪乱	
88-14	双六駒	骨		径2.3	0.8	掘下げ		
88-15	拍板	骨	9.05	2.2	0.25	土壌1122	18C前	
88-16		骨		径3.05	3.0	土壌1094	18C前	未製品。
88-17		骨		径2.4	0.55	土壌1094	18C前	未製品。
88-18	棹秤	骨	9.45	径0.45		土壌771	19C後	目盛は3列。
88-19	棹秤	骨	(14.45)	径0.45		掘下げ		目盛は3列。
88-20	棹秤	骨	18.65	径0.45		土壌771	19C後	目盛は1列のみ。
88-21		角	(4.75)	3.2	1.4	土壌425	19C中	
88-22	篋	骨	13.0	1.55	0.3	土壌630	18C~19C初	
88-23	匙か	骨	18.25	1.3	0.4	土壌926	18C~19C初	
88-24		角	(6.6)	(6.3)	1.7	土壌1094	18C前	鹿角の端材。
88-25		角	(7.0)	(5.8)	3.8	土壌1094	18C前	鹿角の端材。
88-26		角	(5.3)	径1.1		土壌1094	18C前	鹿角の端材。
88-27		角	(8.1)		1.3	土壌1094	18C前	鹿角の端材。
88-28		角	(10.95)		2.8	土壌1094	18C前	鹿角の端材。
88-29		角	(9.25)		1.8	土壌1094	18C前	鹿角の端材。
88-30		角	(11.9)		0.5	土壌1094	18C前	鹿角の端材。
88-31		角	(12.4)		0.8	土壌1094	18C前	鹿角の端材。
88-32		骨	9.25		1.35	土壌1094	18C前	骨の端材。

観察表38 ガラス製品一覧表 (図版88・155・157)

No.	種類	計測値 (cm)				出土遺構・層	遺構年代	備考
		長さ	径	重量 (g)	比重			
88-33	簪	(3.4)	0.35	0.651	2.43	土壌419	18C末~19C前	アルカリ。青色。中国製か。
88-34	簪	(4.5)	0.45	1.972	3.58	掘下げ		鉛。青紫色。
88-35	簪	(9.9)	0.55	4.598	3.71	土壌690	19C後	鉛。透明。
88-36	ワインボトル	残存高2.5	底部径10.0	12.545	2.55	土壌1480	17C前	アルカリ。緑色。ヨーロッパ製。

観察表39 壁土一覧表 (図版138)

出土遺構・層	遺構年代	個数	重量(g)	備 考
溝122	19C後	1片	82	表面残る。
小穴617	18C～19C初	3片	39	表面残る。白い化粧土残る。
土壇635	18C～19C初	4片	157	表面？
土壇1277	17C前	10片	369	表面残る。
土壇1694	15C	2片	19	表面残る。138-1
小穴1725	？	1片	2	表面残る。厚さ0.9cm。
土壇1749	15C後	1片	111	厚さ4cmが最大。木舞残る。138-2
土壇1813	？	1片	12	表面なし。
土壇1882	14C～15C	30片	272	化粧土が残るもの多い。厚さ4.2cmが最大。隅部あり。3片以上。木舞残る。
土壇1889	15C前	2片	11	厚さ1.4cmが最大。木舞残る。138-3
土壇1913	14C	5片	48	厚さ3.1cm。表面残る。138-4
土壇2060	14C	1片	8	厚さ1.4cmが最大。還元化している。
土壇2078	14C？	2片	22	表面なし。
土壇2165	14C	5片	111	厚さ3.5cmが最大。表面？
土壇2239	14C	1片	10	表面なし。
柱穴2274	13C	3片	21	厚さ1.2cm。
土壇2321	13C	1片	7	焼土(壁土か？)
柱穴2514	13C	1片	39	木舞か？138-5
土壇2662	13C	1片	52	厚さ3.8cmが最大。138-6
井戸2680	13C初	1片	17	表面なし。
土壇2716	14C	1片	28	木舞残る。138-7
土壇2722	14C	1片	18	表面？
土壇2768	15C	1片	50	表面なし。
小穴2808	13C	1片	20	厚さ1.6cm。
柱穴2827	12C	4片	16	柱痕跡内より出土。
小穴2907	12C	2片	21	厚さ1.4cm。表面なし。
柱穴2913	12C	5片	10	表面残る。
土壇2992	？	16片	142	被熱が弱く十分硬化していない。
柱穴3034	12C？	1片	17	表面なし。
柱穴3243	15C	1片	8	2.2cm×2.0cm。白い化粧土残る。138-8
小穴3436	12C末	2片	11	厚さ2.0cm。表面？
土壇3471	13C中	1片	10	厚さ1.2cm。
井戸3497	11C中	4片	141	スサが入らず、建物の壁土ではない。138-9
楊梅小路路面層	11C後主体	1片	39	4.0cm×2.4cm。表面と木舞残る。138-10

版 图

凡 例

- 1 遺構実測図は、空中写真測量による平面図と断面図をセットとし、縮尺1：200で第6面から第1面の順に見開きで示した。
- 2 遺構は、後の時代のものをグレートーンの下地とし、その上に一部色分けで示した。
- 3 遺構実測図の年代区分と実年代・色分けの関係は以下である。

第6面	平安京前		=黒
第5面	平安時代	10世紀代	=青
	平安時代後期	11世紀代	=赤
		12世紀代	=黒
第4面	鎌倉時代	13世紀代	=赤
	室町時代	14世紀代	=黒
		15世紀代～16世紀前半	=青
第3面	桃山時代	16世紀末～17世紀初頭	=赤
	江戸時代前期	17世紀中頃～後半	=黒
第2面	江戸時代中期	18世紀代	=黒
第1面	江戸時代後期	19世紀代（第2面検出）	=赤
		19世紀代（第1面検出）	=黒

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうろくじょうさんぼうごちょうあと							
書名	平安京左京六条三坊五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-8							
編著者名	丸川義広・能芝 勉・尾藤徳行・卜田健司							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 ろくじょうさんぼう 六条三坊 ごちょうあと 五町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ようばいしんまちひがしいる 楊梅新町東入 かみやなぎちょう 上柳町224	26100		34度 56分 17秒	135度 45分 37秒	2004年9月 7日～2005 年7月8日	2250m ²	中学校建 設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
平安京左京 六条三坊 五町跡	都城跡	縄文時代 ～古墳時代	流路		縄文土器、石器、弥生土器、 土師器、須恵器			
		平安時代	道路、溝、井戸、埋納、 土壙、落込、埋甕、柱 穴		土師器、須恵器、灰釉陶器、 白色土器、緑釉陶器、焼締陶 器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、 銭貨、石製品、土製品、壁土			
		鎌倉時代 ～室町時代	道路、甕群、溝、井戸、 集石、埋甕、埋納、土 壙、塀、柵		土師器、須恵器、白色土器、 施釉陶器、焼締陶器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦、銭貨、石製 品、壁土			
		桃山時代～ 江戸時代前期	門、建物、土蔵、井戸、 石室、集石、埋甕、埋 納、土壙、瓦組		土師器、土師質土器、施釉陶 器、焼締陶器、瓦質土器、輸 入陶磁器、瓦、銭貨、石製品、 壁土			
		江戸時代中期 ～後期	石垣、礎石列、路地、 瓦列、礎石建物、漆喰 列、路面、土蔵、穴蔵、 溝、漆喰槽、井戸、集 石、埋甕、胞衣壺、炉、 竈、瓦組、土壙		土師器、土師質土器、軟質施 釉陶器、瓦質土器、磁器、陶 器、窯道具、瓦、井戸瓦、銭 貨、金属製品、鑄造関係、石 製品、骨角製品、ガラス製品、 壁土			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8
平安京左京六条三坊五町跡

発行日 2005年12月28日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961